

カンピオーネ！  
びの魔王

縁結

黒米田んぼ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

テンプレに近い感じで転生した高橋司郎（たかはししろう）（無自覚）は神殺しへとなった。

これは転生神殺しとなった少年と彼を取り巻く人々の物語である。

\*このssはご都合主義、オリ主などが含まれています。

気に食わない、好かない方はプラウザの戻るを押してください。

# 目次

## 第一章 雷劍神死闘編

8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話	0話
52	46	41	33	28	18	15	7	2

第二章 日輪の御子降臨——武具など要  
らぬ真の英雄は目で殺す!!

19話	18話	17話	16話	15話	14話	13話	12話	11話	10話	9話
120	114	106	97	91	87	82	78	71	65	58

第三章 白蛇神伝説  
財宝は投げ捨てる物  
ではない。

3  
1  
話

3  
0  
話

2  
9  
話

2  
8  
話

2  
7  
話

2  
6  
話

2  
5  
話

2  
4  
話

2  
3  
話

2  
2  
話

第四章宴の時間。  
魔王狂乱

2  
1  
話

2  
0  
話

207

199

194

189

174

166

158

153

148

143

134

127

4  
3  
話

4  
2  
話

4  
1  
話

4  
0  
話

3  
9  
話

第五章過去と未来を繋ぐ妖精郷

3  
8  
話

3  
7  
話

3  
6  
話

3  
5  
話

3  
4  
話

3  
3  
話

3  
2  
話

318

313

303

294

287

280

273

258

244

235

226

217

5 5 5 5 5 5 5 4 4 4 4 4 4  
6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5 4  
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話

439 431 422 411 399 387 376 368 356 347 341 335 328

5 5 5  
9 8 7  
話 話 話

462 455 448

第六章 高橋司郎の国造り





# 第一章 雷劍神死闘編

## 0話

始めまして皆様私めの名前は高橋司郎（たかはししろう）と言う。

早速で悪いが俺には二つの秘密がある。

一つは前世の記憶持ちといわれる転生者と言うこと。

そして二つ目なんだが神様殺しちゃいました・・・現在進行形で

何故そんな事になったのかはダイジェストで簡単に説明しよう。

まず事の発端は俺が春休みにばあさん家へ行くことになったから、おばさんはじいさんが死じまつてから畑仕事が大変とかがあり、そのため俺に白羽の矢が立ったわけだ。

だから東京からはるか遠く島根までやってきたと言う事になっちゃたわけだ。

別段つらくは無かったよ。小遣いくれるし。

まあそんな事がありそれを2、3日続いたのだが・・・しばらく晴れているのに雷がなる出雲大社一帯がしばらく入れなくなるなどの怪奇事件が立て続けに起きたのだ。

当時俺にはこの世界がどんな世界かまだ気づいていなかったんだそして気づいた時にはまさに時すでに遅し。



ばあさんの家には落ちぶれていたが陰術師の家柄で俺自身も少しだけ、ばあさんから教えてもらったんだ。

ばあさんの息子つまりは俺の新しい親父は呪力を溜め込めない人間らしく、そのため家のばあさんは孫である俺を可愛がってくれた。

まあそんなことは今はどうでもいい重要な事じゃない、で続きなんだがな家の家宝ともいえる物が一つある。

それは生太刀（いくだち）と呼ばれる大国主（オオクニヌシ）がスサノオから貰った復活の力を持つ神具だ。

剣としても使えるがしかしその本質は死者を復活させるための剣だ。

もっとも復活の力は人間がやるとそのままくたばるらしいけど。

それは後になって使うけどとりあえずこれについてはこの辺で。

その後家からしばらく離れたところをうろついていたのだがそこである神さまとであつちやつたんだ。

神様の名前は大国主、そう先ほど話した剣を使っていた神様その人だ。

どうも他の神様と戦っていたようだから割と弱っていたらしけどその時の俺には対策が無くて会つてもすぐに逃げた。

そしたらなああの神様うちにやって来た。

どうも家にあつた生太刀が欲しいらしいけど、あげたらどうするのかと聞くと、この国を壊して新しい国を作り直すって言い出したんだぞ。

でそんな事を言われたらあげる訳にはいかないから劍持つて逃げたんだがあの神様速くつて直ぐに追いついてしまった。おまけに後ろは壁だから逃げられない。

だから俺はここで賭けに出た。

「大国主・そんなに欲しいなら奪つてみるよ！あんた軍神なんだろう矛とかどうとか呼ばれていたくせに術ばかりじゃやないか？矛出してかかつてこいよ！」

と挑発するとあの神様矛出して突撃してきたんだよ。

全力でかわそうとするけど遅くつてそのままどてつ腹にグサリつて、正直痛かつたのだろうけど今は痛がつている場合じゃないって思いながら矛の柄の部分をつんで、そのまま大国主の奴の首から腹に掛けて切り裂いてやった。

……で今に至ると。

「くつくつく、あははは、わっはっははあ、まさかこんな賭けに負けるとはな、思いもよらなかつたぞ小僧」

隣には現代にはあきらかに場違いな大昔の服を着込んでいる50ぐらいの男がいる。

見れば鍛え抜かれた体をしているが、首から腹まで日本刀のような鋭い物で切り裂か

れている。

「ははは、いやねノーコメントでだって、今は血がどんどん流れているしあんたに刺された所が痛いんだよ。」

それを見る者はまだ若くこれからさらに大人へと成長していくのだろうか？ 黒髪短髪の 何処にでもいる少年だ。しかし、その目は年相応ではなかった。

「ふふふ、オオクニヌシ様ったらそんなに面白いのですか？」

ふと気づくと女性の声が聞こえてきた・・・この声って。

「当たり前ではないか始まりの女、我らは神ぞ・・・貴様の子でもない人の子に敗れるなぞありえんからな」

「そう、ほんの一握りも満たない可能性で掴んだ力それがこれでももの、大体の神様は答えますのよ——有り得ないって」

「ふむ、ならばこの小僧はその可能性を掴んだ訳か、なるほど奇妙な縁だ」

あんたら楽しそうだな。

「さあ、皆様！この子に祝福と憎悪を与えて頂戴！この島に生れ落ちしこの時代6人目の神殺しに！若くして魔王となり地上を君臨する運命を得たこの子に、聖なる言霊を捧げて頂戴!!」

ははは、そうかここはカンピオーネ！の世界か、てかドニや護堂の先輩いや義兄って

訳か俺は。

「良いだろう！小僧お主にこの国を譲つてやる！好きに使え！そして戦い続けろ！お主には数奇の縁と運命が見える！多くの人と出会い恋、戦いを重ねる！故に楽しみ！この奇妙な人生を！」

そして神様は少し句切ると再びこう言った。

「まずは私が先ほど戦つていた神、建御雷神（タケミカヅチ）がこの近くにいる、奴を倒せ！その力を証明しろ！——始まりの女パンドラよ！奴に伝えろ、私は敗れた、次は貴様が斬られると」

おい物騒な事を言うなつてかここ最近の雷はその神様が原因か？

「分かりました・・・とう言うより神様使いが悪くありませんオオクニヌシ様？」  
「まあ、良いでは無いかそれ位無礼講と言うものだぞ・・・では小僧さらばだ！」

はあ、面倒な事になった・・・まあ良いか殺ればいいし。

## 1 話

そして、俺は神殺しに至った。

「そうね、良くやったわシロウ、あなたはホント良くやったわよ」

俺の目の前にいるのは全てのカンピオーネの義母「パンドラ」だ。

「まあ、ぶっちゃけほとんど博打でしたから、自分でも良く勝てたと思いますよ」

「そりやそうよ、こうなる事はほんとにたまにあるか無いかだからね」

「あ、やっぱり」

良くもまああんな馬鹿やらかしたものだ俺、馬鹿は死ななきや直らないは俺には当てはまらなかつたんだな。

「あと、あなたの権能もやっぱり結構変わっているわ」

「そりやあ、どんな風に？」

「そこまでは教えたらつまらないでしょ？」

「ちえ、けちけちしないで言ってくれよ」

あれって特徴的なので縁結びと医療関連なんだよなあ。

「文句を言わない！男の子でしょ？」

はいはい分かりましたよ。

「まあ、やってやりますよ、野垂れ死になんて死んでもごめんなんで」

「そのいきよ義息子がんばるのは義母さん嬉しいわ」

「ははは、そうですか」

「そろそろ、終わりね残念だわ新しい子なのに」

「そうなのかー」

「あ、でもここで話した事は向こうではほとんど覚えていないわ」

そう言えばそんな事もあったな。

原作でも幾つかは覚えていないこともあったからな。

「じゃあねーシロウ、タケミカツチなんてぶっ殺してやりなさい!」

「ぶっ殺すって物騒な」

・・・そして俺は夢から覚めた。

その後は大変だった。

目が覚めたら多くのスーツ姿の男達に囲まれて何事かと思つたらどうもオオクニヌシの事について調べていたらこの近くに強力な呪力が出現したから調査するためにやって来たらしい。

それで俺はその発信源の直ぐそばにいたために詳しく取調べるために連行されたが、俺が神殺しと分かるど打つて変わつて人を祭り上げるようにするのが少し苛立つた。

そして現在俺はここで大人しく待機、他の人達はこの地に出現したもう一柱の方を探している。

ドンドンドン、ドアをノックする音が聞こえる・・・来たか。

「どうぞで」

「失礼します」

入ってきたのは長い黒髪の巫女だった。少し緊張しているのか可愛らしい顔が勿体無く感じる。

「あー、そう緊張しないでそんな風にぶるつちまつたら話もできねえ。別段王様感覚に浸りたくは無いからさ、だからさあ普通に話して良いよOK?」

ちよつと間違っている気がするがまあ何だこういうのも大事だと思ふからね。

「あ・・・はい、ごめんなさい」

大人しげな子だなあ今じゃあほとんど絶滅しているらしいからなあ。

「あ、そう言えば一応分かつているだろうけど自己紹介しようか、俺は高橋司郎だ」

「・・・そうですね、分かりました。東屋早苗（あずまやさなえ）です」

・・・ふむふむなるほどなるほどいい名前だ、名前付けたのは昔の人かな？

「なるほどねえで、東屋さん何のようかな？」

「あつ、はい、其れなんですが」

少し、モジモジした感じで口を開く。

「王の相手をしろと言われまして」

・・・えっ？

「・・・いや何故？」

「いえ私たち呪術士がすべきなのは王への忠誠のみですので、この身覚悟はできています」

「・・・はあ」

こりやヒデエ、完全に恐怖の大魔王様になっていやがる。・・・仕方が無いか。

「あのさあ、俺は別にそんな事は望んじゃあ居ないんだ、だから別に変な気にならなくて良いよ」

「・・・そうですか」

ホツとしたように何よりだ。

「一応奴の今居場所は現在進行形で調べているのか？」

「そうですね、今私達巫女の仕事は終わり残りは調査を重視した調査員が居場所を調べています」



「・・・て事はもしかして奴は分かりにくい場所に住んでいるってこと?」  
「そうなります」

「・・・しかしまあ、ほとんど仕事が終わったとは言え良くもまあ姫巫女に魔王の相手させるなあ、其処の所どうよ」

「あ、あははは、そ、そうですね」

おい声震えているぞ。

(言えない、私が魔王である高橋さんを正史編纂委員会に引き込むための「餌」だという事を)

・・・少し前。

「・・・私が魔王との話し相手になれど?」

出雲大社の事務所の中で私、東屋早苗は上司と話をしていた。

「そう、この国で生まれた新しい魔王である高橋王の話し相手になって来なさい」

20代後半の女性である上司は何処か呆れた声で話す。

「知つてのとうり、この国で神殺しになった者は誰も居ないとされている、だからこそお偉いさんは女で釣れと判断したのよ」

「・・・女で釣れって」

「まさにそのとうりなのよ、お偉いさんは魔王は若い子何だから女の子で釣れと言う事だよ」

「・・・昔っばいですね」

「今も昔も英雄をうまく釣るやり方は変わらないよ」

「だから魔王と同じ年で呪術や霊視が一番強い、早苗あんたが行くのよ」

「・・・そうですか、・・・これもお勤めですね」

「・・・まあ、相手はそんなにこつちには入っていない奴らしいから比較的マシな性格なんじゃないだろうと思うからさあ、堕とすも堕とされるのも私は構わないのよ」

「堕とすって何ですか！堕とすって！」

「愛人になって来いって事さ、まあがんばってきなさい、アンタみたいな奴は恋も碌に出来ないからさ、頑張ってきたな」

・・・何て言われて来たのは酷いものだと思おう。

何ですか愛人って！愛人って！私は娼婦か何かですか！

そう思いながら高橋王の元へやって来て数分。

話して分かったのは高橋王は上司の言うとうり比較的大人しい方で特に王様っぽくないし、話も豊富で色々な事を比較的話しやすい方でこうして見ると普通にこんな方が

夫ならなあと思う。

顔は普通に居そうな顔だったし。

プルルルルル、プルルルル

「ん？」

「あ、すみません電話です」

「そう、なら出て」

「はい、……もしもし」

……

「高橋さん」

「うん？」

「タケミカツチの居場所が分かりました」

……来たか。

「OK、案内してくれ」

ふと、気づいた事がある。

俺は今非常にわくわくしている。

それは俺達カンピオーネの宿敵である「鋼」との戦いなのかそれとも別の理由なのか

それは誰にも分からない。

これから戦いが始まる。

これから始まる戦いは比喩ではない神話の具現  
さあ、始めよう、俺の神話を

## 2話

車に乗り俺達とはある山奥へとやって来た。

「……か？」

「はい、この山から膨大の呪力が溢れているのがお分かりでしょうか？」

東屋が答える。

「……確かにこの山から溢れる膨大な呪力をハッキリと認識できる。」

「……おまけに体の調子がおかしい。」

悪いって感じじゃないむしろその逆、体の調子がすこぶる良い。具体的にはハイテンションの上に絶好調、今ならどんな事も出来る気がする。

これが神殺しになった際になる神様が近くにいと体が強引に戦闘態勢になる体質か。

だから分かるここにタケミカツチがいる。

「ありがとう、……から先は俺一人で良い」

俺は車から生太刀を取り出す。オオグニヌシ相手でも効いたんだ、神様相手でも傷は与えられるのだと。

タケミカヅチはカツグチがイザナギの持つ十束の剣によつて切り殺された時剣に付いた血から生まれたとされる。カツグチは言わば火を神格化したものだ、カツグチが切り殺された時生まれた神々はそれは鉄剣を作る工程に関係される神格が多く、奴もまたその一柱だ。

またタケミカヅチは剣と雷を結びつける剣神、そして最も信仰された土地は当時東征の重要地域であつたためおそらく奴は「鋼」の軍神だ。俺達カンピオーネの宿敵「鋼」生まれたばかりのひよつこの俺に勝てるのか?と思う俺もいる。

だが俺の中には、そ・れ・が・ど・う・し・た・?と考える俺がいる。

それにまだオオクニヌシの権能について何も分かつていない。この戦いで全部を把握出来るのではないのか?と考えている。何よりオオクニヌシの遺言以前にアストラル界に隠居しない神様なんて災害その物だ。

「お一人で行かれるおつもりですか?」

「・・・まあな、そもそもこれは俺の問題でもあるんだ。そつちには迷惑かけたのかも知れないしな」

「しかし——「あのな」」

付いていこうするのを静かに諭す。

「俺と言う例外が居てもだ、まつろわぬ神は歩く災害その物なんだ人間が台風に勝てる

なんて話はいえぬ。俺ですら万分の一らしいだから、それを相手に真正面に挑めるのは俺達神殺しだけだ」

「分かりました」

ようやく分かってくれたか。

「ですが一つ高橋さん、我俣をさせてください」

そう言うと数枚の折鶴が握られていた。

「私達は式紙で見守らせてもらいます。もしもの時は……」

「ありがとう、それ位は頼みたい所だベタだが水落なんて事があつたら頼むよ」

「分かりました。高橋さん、後武運を」

「ああ、行って来るよ」

これから命を賭ける死戦なのに、ちよつと散歩するような気持ちで彼は戦場へと向かった。

## 3話

「・・・よう、タケミカツチで、合っているかな？」

暫く歩いていると雷鳴鳴り響く雨雲の下に一人の男がいた。

——年は30ちよいといった所か。オオグニヌシと同じく古代っぽい服装をしており少し鎧っぽい物を着込んでいる。

腰には一振りの剣、・・・あれが国譲り際に使った十握の剣なのか布都御霊の剣なのか、それは俺には分からない。

「ああ、確かに合っているぞ」

年相応の声で男は言う。

「改めて名を名乗ろう！我が名は建御雷神なり！始まりの女から聞いているぞ！オオグニヌシを殺し、神殺しとなった貴様はもはや私の敵だ！故に——分かるな!？」

「・・・ああ、分かるよ。ここで雌雄を決すか？」

「然り、然り、然り!!何より貴様の存在は私が許さん！ここで我が雷によつて死ぬがよい神殺し!!」

言うが早いかタケミカツチは雷撃を放った。



「あぶねえ！『雷よ逸れろ』」

そう言うのと雷は逸れ近くの木に当たった。

「やるな！今のは呪い（まじない）か!？」

「答える必要は無い」

とつさに言つた言葉は何だったのかはもう分かつた。

これがオオグニヌシから篡奪した権能。——すなわち呪いの権能だ。

雨、風これらは農業神の側面を持つ奴にとつて当たり前の事だ。

今のは雷避けとでも言えば良いのか？だが、それだけしか出来ないのではないとハツキリと理解できる。

「・・・不意打ち上等つてかあ?」

軍神何だから正々堂々やれよ。

「ふん！隙を作る貴様が悪い！まさか、我が雷撃を防いだけだいい気になつたのではない?」

「ああ！当たり前だ！『我は国生みの王、我が禁厭は森羅万象に轟くと知れ!』」

聖句を唱え生太刀を構える。

『風よ集まれ！己が身を集めあい我が敵を穿つ槍となり貫き、削り倒せ!』

唱えると次第に風が集まり一つの竜巻となる。

「雷神の我に風で挑もうとするか、笑止！」

言うが早いか即座に雷撃を竜巻にぶつける。

二つは拮抗しているが段々こつちが押している。

「・・・本当にそれだけとは思うな！」

竜巻に使っていた呪力を体の強化の方へ移し。

「セイ！」

すぐさま接近し上段の構えからそのまま下へ抜刀。

「甘いわ！」

相手も流石に馬鹿ではない、すぐさま腰に添えてあつた剣を抜きこつちに合わせる。

「チツ、流石にそこまで甘くは無いか」

「然り然り然り！この程度温くて欠伸が出るわ！」

「ああ、そうかい、でもなここからが本番だ、これでも幼小中と剣を嗜んでいるんだこのまま終わらないんだよ！」

斬！ 斬！ 斬！

さまざまな方向に生太刀を振るう、対するタケミカツチも合わせ同じように剣を振るう。

「セイ！」

左斜め上へと切り込む。これも受け止める。

「なるほど、やれるだけはあると言う事か、だが！この程度では我が首は届かんぞ！」

・・・確かに奴に反撃の隙を与えていないだけに俺は上達しているのだろう、・・・だが其処までだ。まさにここが限界、上限なのかも知れない。しかし、これがスポーツとしての試合ではなく、命を奪い合う決闘何だと。

『風よ、我を空へ運べ！』

すぐさま呪いの聖句を唱え俺は空を翔けた。

「おおーこれは」

空なんて飛行機でしか行けない領域、でも俺は生身で空を飛んだ。

「はは、コリヤ良い、まだ慣れていないけど気持ちがいい」

転生して、今まで色々な事をしてきた。前世はあまり勉強出来ていなかったから頑張ったし、転生したから物語の主人公気分もあったから、小さい頃から仲の良い子の家が剣道道場だったから、其処で剣術を磨いたし、今の親父の家が落ちぶれているが神具のある術氏の家だから魔術も頑張った、落ちこぼれても良いこんな今が正直楽しかった。

実際はオオグニヌシに挑む事なんて止めると本能の鐘は鳴り捲くっていたし、実際は

命のやり取り何て冗談ごめんだった。

……こっちは平穩が一番何だよ、てめえらみたいな化け物何て知るか失せろ、こっちにくんな、誘うおうとするな！

——ああ、まったく、どうしてこうなった？

「ハハハッ、アハハハハ」

——まったくこんな時なのに何故か乾いた笑いが出てくる。

——こんな未知望んだのは俺なんだろう？なのに、いざ直面すると嫌がるわ、逃げようとするのを止めてくるし、——ああ、そうか。

「——俺は迷っていたんだな」

濃い中二病は常人には重すぎたんだな、こんな未知はお断り何だと。

——だが今はその思考は放棄しよう、今は奴（タケミカツチ）を打倒しよう。悩むなど終わってからも遅くは無い！

「悪いな、律儀に待ってもらって」

「構わん」

「そうか」

なら。

「死（い）ね」

『摩擦を持つて熱風となれ鋼を溶かす熱を持つて!』

風が大地を擦る―

擦る大地に熱が灯る―

熱と共に混ざり合いここに灼熱の竜巻が光臨する。

「オオオツ、その様な真似をするか神殺し!」「鋼」である我に!」

「鋼の弱点は火つてなあ!」

この竜巻でこんがりウエルダンになつちまえええええええ!!

「甘いわあ!」「我が剣よ、輝ける光で我らが敵をまつろわせろ!」

タケミカツチの持つている剣には膨大な呪力が蓄えられる。やはり布都御霊の剣か。

こつちの呪力を抑えようとしている。

「オオオオオオ!!」

突つ込んでくる。ならば

『を結べ』

そう、眩き

「ハアアアアア!!」

こつちもだ歯をくしばれ俺エエ!

カキン!カキン!

再び劍の打ち合いを俺たちは始めた。

面！面！面！

・・・やっぱりダメだ、相手は神格幾らこつちの身体能力がほぼ互角でも劍の実力は相手が一上だ。流石に劍神、劍で相手は無理だ。

——ならどうする？呪術は今使えない、手も使うか？——いや余計悪手だ。相手はすもうの開祖神、原初のすもうで叩きのめされるだけだ。

——何時まで技だけで戦うのだ？

——何故？

——技は確かに大事なのかも知れない。だがそれだけで劍神に挑めると？

——それじゃダメだ。こつちは小手先だけが取り柄では無理だろう？

——いい例が居るではないか。——無理なわけではない明鏡止水と言う物があるじゃないか？

——ああ、そうだ——意識を集中しろ——心に雑念を無くせ。

その時タケミカツチは司郎の劍を持つ腕がダラりとぶら下がった。

（愚か者が、取った！）

「あ——見えた」

「——水の一滴」

この時どちらが愚かだったのかどちらだったのだろうか。

ズバツ！

「ぐつアアアアアア。神殺し貴様ああああ！」

タケミカツチの右手が切り落とされ。その手に持っていた神剣は落ちていった。

「人間を舐めたのがいけなかつたな神様」

ああ、ようやく打ち込めたこの一打ち。

——これであれが効く。

剣を掲げる。

『我が領土は冥界、汝が主の名によって門を開けよ』

聖句を唱えると大地はひび割れ冥府の門が開く。

「なっ！まさか貴様！……くっ！体が引つ張られる！」

「ああ、アンタに打ち込んだ時に結んでおいたのさこいつ（冥界の門）にな」

『冥府の門とこの剣に触れた者を結べ』

これは縁結びの呪いを使うための聖句だ。

オオクニヌシは縁結びの神としてここ島根では有名だ。

その理由は多くの女神と子を作った神様だ。

そんな神格はこの世にはたくさんいる。ギリシヤ神話のゼウスなどが有名だ。

これは良くあることであるとして、今使っているのはそれらから昇華された縁結びの呪術だ。これは相手を物と物、人と人を結び付ける呪いだ。

そして今タケミカツチを引きずり込もうとする冥府の門は国譲りの逸話から出来た権能だ。

オオクニヌシは自らが作り上げた国を明け渡す時、天に届くほどの宮殿を作れと言った。

これで死した自分の威厳を留めて置く事ができたという訳だ。

・・・そしてそれらの発端はタケミカツチの大本、天津神だ。

オオクニヌシの権能、大凡は把握した。これはオオクニヌシの呪術神の特性を模した権能だ。

奴の一番有名な逸話は因幡の白兔、そこから医療神の神格を持っており。

奴は兄弟である八十神に二度殺されそして逃げた迫害からの蘇生、死後の霊界の主権神などからによる権能だと。

「因果応報だな、そのままあの世にいけ」

もはやタケミカツチに勝ち目は無い俺の冥府の門は吸引力は無くても縁結びの呪い



はそれを補う。そしてそれを突破できる神劍は奴から離れている。

「良いだろう神殺し、我が力をくれてやる、今よりも強くなれ！そして我が復活した暁には今度こそその首を切り落としてやる！」

「ああ、やってやるさ」

そう約束するとタケミカツチは冥府の門に落ちその命を絶った。

## 第二章日輪の御子降臨——武具など要らぬ真の英雄は 目で殺す!!

### 4話

「起きてお兄ちゃん!朝だよ!起きてお兄ちゃ「うるさい」

ポツチと目覚まし時計を止める。一年前に友人からもらった物だ。・・・いつもの事だがアイツは何処でこんな物を手に入れてくるんだ?

「はあ、面倒な」

うちは家族の付き合いがどちらかと言うと薄い家庭だ。

別に冷め切っている訳じゃない、俺の両親はどちらも出張の多いサラリーマンで中学頃から盆正月しかゆっくり話す機会が無い環境だ。

最もこっちは転生者、基本的な生活は普通に出来るしこの三年間料理のレパートリーが増えた。気楽でいいしな。

最もこれが出張を増やした原因なのはお察しのとうり。

一人寂しくポツチ飯はいつもの事、悪くはないむしろ気遣いが無くてよく友人の避難

先になっている。

今日の朝食は焼いたベーコンとスクランブルエッグだ。

焼いたパンに乗せ思いつきり噛り付く。

こんがり焼かれたベーコンがジューシーで良い。ふんわり甘い卵が良い！

「パンが旨い！」

空気も旨い！

「うん、一人でネタに走っても意味は無いな・・・行くか」

前日に準備を済ませている。魔王と言っても本業は学生、勉強である。

学校は老後前の最後の自由時間と言うしな、楽しんでいくか。

「でも暑ごと」

少し関係ない話であるが俺の通う学校は小中高一貫勿論飛び入り参加はあるが。

現在俺は自分のクラスである1年B組みの自分の机で伸びていた。

オオクニヌシ、タケミカツチの死闘から4ヶ月、今は7月つまり夏真っ盛りではあるが生憎身の回りの温度操作が出来ていないこの4ヶ月神様はおろか神獣すらばったり無くなった。

気楽で良いと言えば良いのだがこうも長い期間神様関連に引つかからなければこう  
権能の発展も掌握も思うがままにやれない。

「もっともトラブルがあるかと言えばそうじゃないけどな」

振り向く、そこには黒髪の少女が居る。

「どっ、どうかしましたか!?何か変な目で見てどうしたのですか高橋さん!」

東屋早苗、4ヶ月前タケミカツチとの死闘の際に仲良くなつた子だ。

あの後とつとと実家に戻りその後は何も無かつたのだが、高等部一年生の始業式に転校して来ており唯一の知り合いである俺に良くくっついて居たため俺は恨み（男子）を買われている。

別段この子にどやかく言う気はない。

転生者と言う存在であるが前世は17、現在魂年齢33歳と言っても肉体に魂が引つ張られているため終四四八の用に精神年齢同年代よりかは大人である事は紛れも無い事実であるが別に同年代の子を好きに思うし、実際の所恋愛もしたいしもつと青春したい事もある。

勿論彼女も同じだ。普通に可愛いし、巫女服で分からなかったが制服などで分かったのだがその胸は豊満であつた。中々だと思う。

ただ、原作カンピオーネを見ている性か何か裏がある気がする。

連中はこつちを祭り上げる腹で居るのはこつちから見ても良く分かる。

何時上層部たとえば四家の連中が変な事を企んでいないか分からない生憎とこつちはペドフェリアの趣味はない。

そろそろこつちがどんな王様なのかはつきりしておく必要があるのだと知っているけど具体的にどうするのかまだ決まっていない。

同日とある寺。

其処は日天を仏とする寺であった。

そんな寺に太陽から真つ直ぐに飛んでゆく物体があった。

それは戦車それも大昔の馬が引く戦車であった。

戦車が寺に着いたとき乗っていたであろう一人の男が降りた。

ここに人が居たら間違いなくインド人と答えるだろう、だが今は住職も居ない。もぬけの空であった。

だからであろうか、後にまつろわぬ神が降臨したのだと知るのが遅くなったと。

「ふむ、体の調子は問題ないようだ。顕現はしつかり出来たようだ」

男は何とでもないようにそう呟くと

「ほう、この国にも神殺しの気配を感じるぞ・・・面白い！」

彼は誇り高き英雄しかしそのまつろわぬ性は恐ろしいまでに武人として突きと通っていた。

「神殺しと武を競い合う。良いだろうこれも一興、他の神々と争うのも良いが我らと神殺しは古より争う者！ならば神殺しの首を得るのはオレとしても本望！」

「正々同道かつての様な姦計が無い一騎打ちになる事を我が父に祈ろう！」

黄金の鎧を翻し再び戦車に乗りその地をさる。

神殺しとまつろわぬ神が対峙する時は近い。

## 5 話

「シツ、ムン、ハア！」

振るう、振るう俺は劍を振るう。

手に持つのは4ヶ月前タケミカツチから篡奪した神劍「布都御靈（ふつのみたま）」だ。奴を倒して暫くして左腕から声が聞こえてきた。

最初はここの所の疲れかと思っていたが原作でも天叢雲劍が喋っていたようにこの腕に奴の持っていた神劍が居るのでは無いかと考え試した結果当たっていた。

この劍の権能は今も分からないがとある話を元にした権能を持つて居るのでは無いかと考えた。

神武東征にて神武天皇が熊野の地で熊もしくは毒氣によつて全軍だけではなく神武自身が氣を失うもしくは土氣が失つていく話があった。しかしタケミカツチが自分の劍を渡せば言いと言い劍を渡した。

その劍は熊野に住む熊、毒氣を切り伏せる、払うという逸話だ。

ここで出てきた熊もしくは毒氣は熊野の土着の神などではないかと説がある。

それらを含めておそらくではあるが征服を信仰の要とする軍神を象徴するのではな

いかと俺は考えている。

戦に勝った者こそがその地の支配者、これはありとあらゆる世界歴史の真実。

即ち王政の将として祭り上げる剣こそが布都御霊の剣だと。

実際に奴は俺の術を弱らせる等をした弱体化の権能を持っていた。

ただし、これだけがコイツの逸話だけではない。そもそもコイツは雷神の剣、他にも持つている可能性がある。

それを確かめる・・・よりも今コイツを振っているのは自分の体に合わせる。もしくはコイツの力を確かめる事である。

元より俺は元々剣を嗜む人間だ。これをするのは所謂自分の趣味でもある。続ける事が大事なのだ。

そんな事を考えていたからだろうか。

「ね・・・ねえ、司郎それ何？」

・・・コイツが近くにいる事に気づけなかったのが。

嫌な顔で振り向くと其処には茶髪のショートの子がいた。

清水亜衣（しみずあい）今俺が居る道場の子で昔からの幼馴染。

昔から男勝りで見栄っ張りな奴で俺と夕暮れまで遊び歩いた仲だ。



因みに見た感じ胸ない、本人曰く、もむくらいはあると言っているがそんな機会があるかは正直不明だ。

ここ清水流神舞剣術と言う元は茨城の神社の家系で剣舞を実践的な剣術として改良されたものが江戸の頃にここにやって来てその子孫がコイツとなる。

剣神に捧げる舞として二組で行いその舞は戦いを思わせる物だったらしく、その剣は意外なほどに実践的だ。

いや、本当によくもまあこんなマネができるなと思うよ神に捧げるものだったと子供の頃聞かされ実際にやって見ても本当に元は踊りなのかと思う物だ。

だが実際にコイツが舞って見せた時元は本当に踊りだったから綺麗だった。

こういったものは何処にもあるのだなと思っている。正直今思うと実に都合の良い所だったのは俺の秘密だ。

祖母から魔術を習い始めてここで剣を磨く。ガキの頃からお世話になったこの場所は転生して状況がハッキリ分かってきた当時のガキの頃は中二病真つ盛りでついに俺にもこんな機会が！と意気込んだら、神殺しのカンピオーネと言う命のやり取りを行う戦士になった。

間違いなく碌でもない人生だ。戦場でのたれ死ぬEND一直線笑えねえな。

「ちよっと、何一人で黄昏っているの、ってか速い！何処でそんなに素早くなったの」

「はははあ！悔しかったらベルサイユまでいらつしやあーいwww」

「何でベルサイユなの、とうとう頭がおかしくなったの良いわ！お姉さんが病院に連れて行ってあげる！」

「はははあ！正常だったの、ってか、おない同士だろが俺らよお！はははあ！」

その後メチャクチャ追い掛け回された。

「はあ、ねえ司郎あんた何か私に隠していない？」

学校の昼休み亜衣は即座に俺の席にやって来て切り出した。

間休みの時間は全て先手を取って逃げ出したのだがどうやら爪が甘かったようだ。

「隠している事か・・・有りすぎて売り出したいほどだ」

「じゃあ全部話しちやいなさい！・・・もしかして春にやって来た東屋さんと恋人だったとか、昨日持っていた剣って本物の真剣で何処かの博物館からかっぱらって来たとか  
！」

「・・・東屋の事は言うな！回り見る嫉妬の視線が尺に触る。あとかっぱらってきたか、・・・確かに神様からかっぱらってきた俺。」

「全部にノーコメントで」

「キリキリ吐けこの犯罪者！」

「泥棒も何もしてねえよ、刑事かお前は」

・・・しかたがな。

「あ、時間だ。席に着いたほうがいいぞ」

「え！ホント？」

と振り向く。くつくくくつ、掛かったな。

「嘘だよじゃあなあ」

軽やかに逃げさる。カンピオーネに脚力でかなう者か。

「あーしまった逃げられた。あのヤロオー、逃がすか！捕まえて人間サンドバックにしてやる!!」

「ふふふ、相変わらずだな明智君」

まんまと逃げ延びましたは学校の二階、この学校のちよつとした名物少しであるが広々としたスペース、夏はちよつとした避暑地としてコアな方がたむろしている場所。

周りを見ると暢気にタバコ吹かしている教師。男3人、友情と共に弁当を噛み締める奴ら。ここはそんな場所だ。

「よう、亜衣の奴からは逃れたようだな」

「ん?・・・何だ四季か。お前こそどうしたんだ。こんな所で」

振り返って見たら中学からの付き合い新条四季（しんじょうしき）同じ三流魔術師で偶然見つけたお仲間である魔術師の俺とはこれでもそれなりの付き合いだ。

何度か呪術の対戦を何度もやって競った間柄だがもう二度と対戦はしないだろう。

「まあなあ、お前が何時の間にかカンピオーネになって随分と先遅らされている気分だしな、まったくどうやったらなれるのかねえ?」

・・・コイツは。

「馬鹿もほどほどにしておけ、まったくそんなことじゃあ何時死ぬか分からないぞ・・・頼むから寿命で逝ってくれ」

「へいへい、優しい魔王様からの有難いお言葉どうも・・・つしつかしなあ  
ん?何だそんなにジロジロ見て。

「いいなあ、俺もなりてえよ。なあどつか適当な神様紹介してくれよ」

「・・・神具も無い奴が挑んだ所で死ぬに決まっているだろうが」

まったくコイツと居ると調子が狂う。

「じゃあそんな物があ「見つけた!」・・・見つかつたな」

「・・・ゲエ関羽!」

「何で三国時代の武将なのよ!・・・まあ良いわ、捕まえて竹刀でボコボコにしてやるわ

「！」

「ははは、何にそのラノベ系暴力女子は洒落にならん。」

「おい、まて暴力系は流行らないぞ！」

「えつ、そう、そう、流行らない、．．．つて違う！これは羨、スポーツよ！」

「えつ、何その発想、オセロツトかお前は！」

「これは拷問ではないスポーツだ。何てねえよ！」

「ちつ、かくなる上はここから飛び降りて．．．」

「そう、考えようとした矢先だった。」

ドス

．．．ツ！

「んなあ！」

「えええ！」

俺達の近くに飛んで刺さったのは矢だった。

よく弓道部が使う矢よりも一回り大きい。

慌てて飛んできた方向を見ても誰もいない。

「．．．これ何か付いているよ」

「なに?・・・どれどれ」

付いていたのは紙だった。

「矢文?古風な。どれどれ」

「うわ、何これ見たことが無い」

・・・書いてあるのは異国の文字、巫衣が言うのも領けるしかしカンピオーネの能力の一つがこれの意味を教えてください。

「《敬愛なる神殺し殿、この度は貴殿との武勇を競いたいがため多少の遊びをした気に入っていただけただろうか?》・・・神殺し。っ!」

「おい、まさか」

ああ、間違いないぞ四季。

「これはお、暑ッ!」

手に持っていた手紙は燃え次第に無くなっていった。

・・・畜生戦線布告ってか?・・・まったく。

「手の込んだ真似を・・・面白い」

その時彼の顔は決闘を楽しむ勝負師の顔であった。

## 6 話

その後は大変だった。何しろ矢文が飛んできてそれが火を付けても無いのに燃え出したのだ。これが騒ぎにならないはずは無い。

運良く逃げ延びた俺たちはここは一先ず隠れていようと考え暫く隠れていた。

・・・もつとも授業は比較的問題無く進み放課後までキンクリだ。

「しっかし何処の神様かが分からないのが少し厄介だな」

あの後東屋にあの場所を霊視してもらったがそれが太陽を司るモノらしいとの事だ。

「太陽ねえ」

太陽で矢か。候補だけでも4柱思いつくんだけどなあ。

「・・・もつともその内二柱いや下手すれば三柱共に俺じやあ手に負えない物になつてくるぞ」

そう思い校門をで家に一直線に帰ろうとした、その時だ。

「見つけたぞ神殺し」

「ッー！」

振り向く。そこに、それは居た。

肌の色や髪の色的にインドの国の人間だろう。

俺がその英雄（神）の名前を聞いて思い浮かべる姿よりも体がガツシリしているが見てしまった。

その男の着ている金色の鎧を。

さて、ここで少し話す事がある。太陽で矢、つまり弓を扱う神格はまず、有名所で二つ。

一つ目はアポロン。あの狼爺の主戦力である権能だ。あの爺は狼の軍勢や人狼になっっているが基本有名なのは弓だ。例えば、アキレウスはアポロンが直接自分で、もしくはパリスにアポロンが弓の加護を与えてバリスタで射死だ。どちらも弓に分類される逸話だ。ありえなくは無い。それに300年も経っているんだ。何時現れても不思議ではないが、それなら日本にやって来るのは普通可笑しい、セイゼイ、ギリシャ方面ぐらいだ。それにもし偶然原作のアテナみたいな理由で日本にやって来ても俺じゃなくそのままあの爺に殴りこみに行くはずだ。

もう一つは天照大神。これが厄介な神様の一つだ。



コイツはスサノオが自分の領土にやって来た時武装していた。その時弓を持っていたらしい。

では厄介なのは何故か？と思うだろうが、そもそもタケミカヅチはアマテラス側の神であり下手をすればペルセウスがウルスラグナの力を使えなくしたような事もできる可能性がある。

同じようにオオクニヌシもだ。オオクニヌシはかなり短縮した一言で言えば負けてしまった古代の神であつた。ということだ。どちらも相性が悪すぎる。

さて、では残り二柱は何なのか？と疑問に思うだろう。正直アマテラスもアポロンも厄介だがもつと俺から見れば厄介極まり無い神格がいる。

その二つは親子であり親はここ（日本）では日天と呼ばれているからやって来て思議ではない。

日本では一部を除けばマイナーな存在であるが俺はその真名を知っている。

「一応聞こうか？」

「・・・何だ？」

「お前はスーリヤか？それともカルナか？」

正直当って欲しくは無かった。

「然り、そのとうりだ神殺し。改めて名乗ろう。我が名はカルナ太陽神スーリヤの子である」

ああ、当って欲しくなかったその真名。・・・ちくしょう。

「神殺し。先のメッセージを分かっているなら分かるであろう?」

ああ、分かっているさ。

「戦をしよう。互いの命を賭けた武の競い合いを」

・・・逃げたところでコイツが何をする事で碌でもない事が起きるのはよく分かっている。

・・・だが。

「良いだろう、だが一つ。場所を変えよう。ここじゃあ(人的に)狭いからもつと開けた場所に行かないか?」

「・・・ふむ、良いだろう死に場所を選ぶが良い神殺し。そこに貴様の墓を作つてやる」

「ははっ、まさか、そこはお前の墓だよカルナ。俺の新しい力になれ」

「そうして俺たちは歩き始めた。目指すは昔良く行った山ここなら誰も邪魔には入らないだろう。」

「・・・あいつ、あんな不審者と一緒に居るって・・・うん、どう考えてもおかしいよね  
もしかしたら今までの謎解けるかもしれない。・・・ふふふ、今日こそアンの化けの  
皮剥がしてやるんだから!!」

・・・何故か二人に気づかれずに尾行している一人の少女が居た。

## 7話

今更だが俺たちの住む街。雲集町はN県にある大きな街だ。

雲集とは雲のように人が集まる事を指すもので、その名のとうりで人が多く集まっている街で人が多ければ多いほど発展するそれが現代社会の真実だ。

・・・まあ何を言いたいのかと言うと。

(誰も気にもとめない?)

昔懐かしい場所であるこの山だが昔と比べて少し人の手が入っていたためもつと奥に行く事になった。

ここまで来るのに何故か誰も俺たちに反応しない。

俺だけならいい。しかし、インドの英霊カルナは生まれながら持っている決して壊れない不滅の黄金の鎧を着ている。どう見ても不審者だ。110待ったなしの格好なのにこれは可笑しい。

(気配でも消しているのだろうか?)

もしそうなら奴は相当な達人なのだろう弓の腕と鎧そして意思が奴の怖いところだが他にもあるのだろうか?どちらにしよ警戒はしておこう。

「すまないなこれでようやくお前をあの世に送れる」

「そうか、言いたいことはそれだけか？」

「ああ、だから」

「ああ、そうだな」

小さいことに気にしては意味が無いだから。

「いざ尋常に、勝負しようかあ!!」

ここに神殺しと英雄の戦が始まった。

「・・・な、何これ、あいつこつ、こんなことつて」

二人を追跡した彼女の目に映るのは普段彼女が思う常識とは程遠いものであった。

黄金の鎧を着込んだ男が矢を引くと全て砂となった。矢の持つ熱は回りの温度を遥かに超えていた。それも一つや二つではない百を超えるものであった。

それを前にしてなを健全とし一振りの剣を抱え男に特攻する少年・・・彼女の良く知る彼はそれを物ともせず落としていった。

「昔からあんたの事知っているつもりだったけど・・・」

一体何処でこんな異常事態に足を突っ込んだのだろうか？そう思う亜衣であった。

(つち、ランサーの時の奴しか知らなかったが流石にやるな)

一つ一つの矢は全てが異常なほどの熱量を持っておりこれで地熱発電が出来るのではないのかと思えてくるほどだ。

しかし、降り注ぐ矢を彼は相棒である神剣で落とす落とす。これではジリ貧だ。

「ならこれでどうだ! 『風よ集え! 竜巻となれ!』」

風の渦が集い幾つもの風の渦が纏まり大きな竜巻となっていく。

「ほう! それで俺の矢の進路を防ぐ気か? その程度では無駄だぞ 「当たり前だ!」」  
出来上がった竜巻と共に突っ込む俺即座に風除けの術をかけ距離を詰める。

ガキイン!! 当りはした、・・・しかし。

「ちい! 硬い! 『ぼうつとしていいる場合か?』 はっ!」

ドガア蹴りを入れられ飛ばされる俺。

「があッ!、つちっ畜生やつぱりテメエ相手では一番脅威なのは鎧か」

「ふむ、確かに我が父の鎧は戦いを少し無料にする事がしばしばあるがその程度でまいるほどではないだろう?」

「当たり前だ! 行くぞ布都御霊! 『我は雷撃を表す剣如何なる物も我に切り裂けぬ物無

しー!』」

聖句を唱え手に持つ布都御霊はその表面がバチバチと音を立てていた。

一瞬カルナはしかめつ面をしたやはり雷は嫌いか。

「なるほど雷神の剣が良いだろう我が鎧に何処まで匹敵するか見ものだ。

確かにそれは面白そうだがしかし、俺の狙いは鎧じゃない。そのむき出しの首だ。

あの鎧は神々ですら破壊は不可能に近いと言われているしかし生身は別だ。

インドラは子供のために変装し鎧を奪い取った。この時カルナは自らの手で鎧を引っぱがしたのだ。皮膚に張り付く鎧を小刀、ナイフで取り外しそれを見てインドラは一撃しか使えぬが当れば必殺の槍を与えた。

そう、鎧さえかわせば良いんだそのむき出しの皮膚に剣をつき立てればあの世の門だって効く可能性が出てくる。今やっても不死鳥の如く飛んで逃げたりチャリオットで飛ばれるのがオチだ。

だから。

「ウオオオオオオオオ」

振るう振るう。振れば雷の斬撃が舞う。それでまずは遠距離戦だ。

しかし、それをカルナは鎧で受け止めるだけだ。・・・まったく効いていない。

「ふん、神剣の権能を使ってもこの程度か？それでは失望するぞ神殺し」

そりゃ失礼、何せこれの性能はまだ調べていてね！

「斬撃が無理なら雷だ！『雲よ集まれ雨となれ』」

雨よ降らせそれに呪力を入れる。

「ツ！」

・・・ん？何だ微かに奴の顔が歪んだぞ。

「『刃に切られれば雷に当ると思え。雷に当れば刃に切られると思え。』布都御霊！あれに雷を落とせ！」

『了解！』

ならば試しに呪力を高め雷を落とす。

「つち！『我を運ぶ駿馬よ暗き空を照らしたたまえ』」

唱えると多くの七つの馬がやって来て空を晴らした。

しまった、だが奴の不死性は分かってきた。

「・・・見事だ」

「何？」

「手探りとはいえ少々遊びすぎたようだ」

そう言ううと奴は一本の矢を取り出した。光輝く矢だ。

（ツ！）



第六感の警告が鳴り響くこの矢。危険過ぎる。

(先手を・・・無理だ離れている迎撃・・・これも無理だ)

「手向けとしれ神殺し『父よ天高き我が父よ全てを生かす光を与える我が父よ。今宵はその光を持つて怨敵を焼き尽くす死を与えたまえ』」

「ッ、うわああああ」

走る走る走る逃げろあれに当たたらまた。

(死ぬ、もう嫌だあんな物はもう)

オオクニヌシの時と打つて変わつて逃げ出す司郎。これから放たれる矢はそれを余りにも越える物だったのだ。

「逃げ場など無いぞ神殺し！『盟約は来たり今こそ、その光で幕を閉じよう！』」

「うおおおおおお」

小規模の嵐を起こしても矢は止まらない防壁を作つても障子の様に破れていく。

ドギヤアアアアン。矢が直撃し一体は焼け野原へとなつてしまった。

この時一本の剣が飛んできたことは誰も知らない。

## 8話

「んっ、あれ何とも無い？」

記憶が正しければ俺はカルナの矢をくらってそのまま。

「崖辺りに落ちていったんだっけ？・・・でもなあ」

恐らくあれは最後の王が使っていたスーリヤの矢を限界まで高めた物だろうくらえば死ぬだろうインド神話の神々はとんでもない超兵器を扱うあれもその一つだろう。

なのに何故何とも無い？

嘗て死を体験した自分にはその恐怖が心の奥底に染み付いているならばあの感覚＋想像を絶句する火傷を体験するはずだ。何故？

「説明しよう！」

「へっ？」

振り返ると見覚えある姿。

「ドーモ、パンドラサン」

「いや、何でカタカナ？」

「ちよつとした悪ふざけですよ・・・それであなたが居るって事はまさか」

「そうよ、あなたは死んだのよ。おお、シロウ死んでしまうとは情けない！」

・・・原作でもこんな事を言っていたな。

「でも良かったわねえ。死者蘇生の神具持っていてじゃなかったらそのまま死んでいたよ」

「いやそもそもここに居る時点で死んでいるのでは・・・もしかして生太刀？」

「正解!!」

ピンポンピンポンとクラッカーが飛び交う。・・・カオスだ。

「でも流石に次あれをくらったら今度こそゲームオーバーだから気よ付けなさい。それと」

一呼吸置いて。

「あの鎧は確かにあなたの考えているとうりの物よあなたはあれの対策の為に編み出している術式確かに効くでしょうけどその前にやられるわ。だからもう一つあれば良いの」

「その何かは？」

「教えないわ。自分で考えてね。・・・でもそうねえ。一つ言うわ。前の戦いを思い出しなさい。助言はそれだけよ」

「それだけ？」

「それだけよ。あともう直ぐ覚めるから頑張つて！義母さん応援しているから！」  
そうして視界が暗転してきた夢から目覚める時が来たのだ。

目が覚めると馴染みの顔が見えた。

「・・・何でここに居るんだ、亜衣？」

居るとしたら東屋だと思っていただけにコイツの存在は予想外だった。

ふと、辺りを見回す。どうやら川落ちして流されたらしい自分で言うが運が良いな  
俺。

「なっ、何つてあんた随分前から調子が可笑しかったしさつきだつて知らない男と殺し  
合っていたじゃん！」

「っち、流石に馬鹿ではないって事かこれでも年はとつたつもりなんだけどなあ。」

「分かったよ俺の負けだ」

「これ以上は隠しても意味が無い。」

「話せば長いようで短いようだけだな」

カンピオーネの事まつろわぬ神の事などのこの4ヶ月を説明した。

「・・・あんた、昔から変わっていたけど更に輪をかけて変わっていたよね」

「・・・言つてろ」

そう、コイツは俺の秘密を多く知っている。即ち。

「前世の記憶持ち何て馬鹿げた人間何てね。体は子供頭脳は大人じゃないのよね」

「・・・耳が痛いな」

そう、余りにも間抜けなミスを犯しコイツに俺が転生者と言う事実を教えてしまったのだ。

・・・ああ、今思い出しただけでも悔やむ。我ながら馬鹿だったなあと。あと傷薬が染みる。・・・これでもオオクニヌシの権能使つて即効性の霊薬に作り変えたんだけどなあ染みる。

(それで、どうする主?)

脳から直接声が届いてくる。

(布都御霊か、どうするもこうするも完治したら直ぐに奴を倒す)

(ほう、それは己(おれ)にとつても喜ばしい)

・・・どうやら『鋼』の神剣考える事はどいつもこいつも同じらしい。

(だが、問題はあの鎧だ。あれをどうにかする方法は編み出したがやる前にこつちがやられる)

(であろうな、では己を使うしかないではどうする?)

・・・コイツの言いたいことは分かった。だが。  
(制御できるのか?)

(戦闘中では無理だな。呪力はともかく集中力の問題だ。この四ヶ月ひたすら己を振り続けていても、始めて別のことに応用するのは無謀も良いところだろう。一人では無理だ)

「・・・無理か」

「・・・無理つて?」

「・・・奴を・・・カルナを倒す作戦さプランは出来ているんだ」

「じゃあ、やれば良いじゃん」

「・・・人手が足りない、俺一人では無理なんだ」

ははは、こりゃ酷いな一人では俺に勝ち目があるかが無いとは。

・・・こんな相手でも他の神殺しは成し遂げるのだろう。

まったく、つくづく俺は神様に愛されていないらしい。もし俺の転生が神様転生なら状況によつてはその神様相手に戦って権能ごとその命を篡奪してやりたいのに。

「・・・そう、一人じゃあ無理なんだね」

「ああ、一人じゃあな」

今すぐ降りて他の人間にも手を借りよう。さいやくあの『猿』を餌にして中国の魔王

に強力を・・・

「私じゃあだめ？」

・・・何？

「ツ、おい、お前まさか」

そう、言おうとした瞬間。

「私と司郎でアイツをやっつけようよ」

## 9話

「・・・本気で言っているのか？」

「当たり前じゃない、今更何言っているのよ？」

「・・・死ぬかもしれないんだぞ、相手をただのチンピラとは格が違い過ぎるんだぞ！相手はまつろわぬカルナ、インド神話、マハーカールアに出てきた太陽神を父とする半神半人の英雄だぞ！たとえ敗れ去る英雄であっても俺には勝算が低いんだぞ！このまま逃げて家で大人しくしているのが一番良いんだぞ」

「その時司郎はどうするの？」

「奴の狙いは俺だけだ。命を懸けて挑むしかない」

「・・・だったら、それで死んだらどうするのよ！あんた、それ（死）を誰よりも恐がっているくせに」

ははは、耳が痛い話だ。

「・・・もう、当に覚悟出来ているんだ。あの時剣を取って神殺しを果たした時からもう、後戻りの出来ない一方通行の道に足を踏み出したんだ」

そうだ、俺だって平和主義者だ。人間日々を平穩で行き、時々ちよつと小さな刺激だ



けで人には十分なんだ。だから、こんなの絶対可笑しいよ。としか言えないんだよ。

だって、カンピオーネだぜ、カンピオーネ。他人の生活を平然と壊す馬鹿の集まりだ。原作でもまだ、ましな奴は居たが解決しようとは疾走してその過程で結局は破壊活動を引き起こす愚か者の集まりだ。

だから歩むんだ。この身にある二つの権能でそしてこれからも増える権能で来るべき時（原作）に備えないといけない。だから……

「だから、だからなの？ 私は置いてゆくって、……どうしてよ」

亜衣はそう言うのと体を近づけてきた。

「どうして、いつもいつも私を置いてけぼりにして、何時になったらあの時のお返しをすれば良いのよー！」

「?……あの時?」

はて、覚えが無い?

「……幼稚園の頃私さ、練習用の竹刀持ち出して公園で練習していた時があったよね」  
「ああ」

思い出した。コイツは幼稚園の頃一人で練習していたんだった。それで

「当時威張っていた年長組みの奴らがお前の竹刀奪ったりしてそれでお前を叩いていたな」

「・・・そうよ、それを見て誰も助けなかった。・・・アンタを除いて」

「まあ、精神年齢なら俺の方が上だったからな当時」

いやー、あの時は若かった。自分よりも上のガキ相手に大人気なく金的とか余所見とか死んだふりとかカエルパンチかましたりして。最後にガゼルでKOしたのは良いのだがその後過剰防衛で今世の親父に水一杯入ったバケツ持たされて一日中反省させられていたのが懐かしいわ。

「ホント、馬鹿は死ななきや直らないは間違いだつたわね」

「ああ、本当にな。今じゃあ神殺しだよ。笑っちゃうね」

「あの時さ、アンタの背中何歳よりも上に見えた気がするのよ」

「そりやな」

俺は比較するなら夢の中でも成長していた聖四四八と同じぐらいだからな。たぶん、精神年齢同じぐらいじゃないかな。

「今、アンタが想像している人物よりも5歳ぐらい年下の気がするよ私には」

「言ってくれるねこの野郎「私は女ですう」痛てて、抓るな抓るな」

「・・・はあ、本当に良いんだな」

「今更」

「死ぬかも知れないんだぞ」

「上等よ」

「分かったお手上げだ。おい、布都御霊」

（呼んだか王？）

「お前、俺の勘が正しければ奴を抑える事が出来るだろう？」

（然り、敵をまろうわす事が出来なくて何が『鋼』か。しかしな）

「しかし？」

（お主では集中力が足りない。より正確に言えばお前自身が実効すればそのまま案山子だぞ。まだ己を掌握仕切っていない証明だ）

「つち、言ってくれるね。どうすれば良い？」

（そんな物自分で考えろやり方何ぞ自分で幾らでもある事を知っているだろう？）

（何？）

何故と思うと。ふと頭の中にこんな事が閃いた。

俺の最初に倒した神様はタケミカツチだがそれは神殺しになって初めての事だ。

俺にとつて最も最初に倒した神様はオオクニヌシだ。オオクニヌシは何で有名だ？

縁結び。そう、縁を結ぶ事で有名だ。

もっぱら使うのは農業神でもある嵐の権能、呪いだ。では縁結びではどうなのか？

タケミカヅチの時俺は冥界の祭祀の権能と共に生太刀に縁結びの呪いをかけた。それによって磁石の様な力を発揮した。

もしかしたら他にも使えるのではないのか？と考えるのが普通だ。

人の出会い、恋の縁そして。

(契約とかそれらの縁・・・どちらかというと言いのような物も作れるのではないのか？)

そう思い。瞬時に術式を組み込んでみたのだが・・・

「・・・だめだ。だめだ。だめだあー」

「どっ、どうしたの!?!」

「いやさあ、奴の戦いのためにはどうしても布都御霊を誰かに使ってもらえないんだ、その為の術式も出来上がった」

「・・・ならそれで良いじゃん。私にかけても良いよ」

「・・・発動条件、経口摂取」

「え、もう一度」

「この術式には相手の体に俺の呪力をゆっくり入れて馴染ませるんだがその為には経口摂取、つまりキスして呪力を口移して俺と相手の縁(ライン)を作るって事なんだ」

「うっ、嘘でしょ」

「……それしか出来なかった。それに俺はもはや人類上は人間でもこの身は人間じゃない。そして神具、ましては俺の使っている神剣の類は人間の身では余りにも大きすぎる。これを保護する術式だからこれしかない」

ははは、まったく何処の『少年』の化身ですかあーだよまったく。

「……それでも良いなら。……頼めるか?」

ごめんな、ホントこういうった類は大体はキスでしか無理なのかねえ

「いいわよ、責任取りなさいよね司郎!」

「ははは、がんばるよ」

そう言い俺は亜衣にキスをした。

「っ」

「我慢しろ」

悪いな、初めてがこんな奴で、まあキスだけだから我慢してくれ。

軽く唇を重ねるとそこから直ぐに深く唇を重ねた。

そこに呪力を流し込む。深く、深く、体に呪力を流し込みそこに権能で作り上げた術を流し込む。

(ああ、ようやく理解出来た気がする)

オオクニヌシの権能それは呪術神の側面を基本としそこから農業神の嵐の呪術。医

学神としての霊葉生成。冥界の主にして司祭の力。縁を結ぶ縁結びの神様。

まだまだ掌握しきっていない部分があるがそれはこれから確かめれば良い。

「我と契約する者よ、我と縁を結びその身に我が力を与えよう」

それは縁者となる者えの聖句。

「それは鋼の剣であり雷神を表す剣なり、祖が名は布都御霊」

今より彼が預ける物をその身に叩き込む。

唾液と共に呪力を送り込むそこに教授の術を送り込む。

愛剣の姿を脳内にハッキリと理解させその力を使えるように縁を結ぶ。

(さしずめ俺流の神懸りって所かな)

権能を使い常人では全力は愚か振るえるはずが無い神剣をある程度制限されているが使用できるこの。縁結びの権能を使いカルナを倒す算段がついた。

## 10話

「待ちかねたぞ。神殺し」

「よう、お望み道理に来てやったぜ」

どうゆうことか先ほど戦っていた場所からほとんど動いていなかった。

「そうだな、やはりこの手で心臓を抉り出すか頭を矢で打ちぬかぬ限り勝ちとは言い難い」

「来ると分かっていたんだな」

「生きていればやって来ると俺には分かっている。それが俺達の宿命だ」

「・・・決着を着けるまで何度でもか」

「そうだ、それこそ俺の望んだ道だ」

「・・・そうかい、けどな少々脱線させてもうぜ」

カルナは警戒してか一歩下がる、そして呪力を高めている。

「古より、太陽は命を現す物であった」

「太陽は東から西へと回っていき沈み再び東から浮かんでくる」

「そう言ったものを見て古代の人々の多くは太陽神は東から西へ船、または馬に乗って生の朝。死の夜を回る物だと考えられていた。黄昏とは魔の時間とされていた事もあり闇の時間だ」

北欧神話の神々の黄昏『ラグナログ』とは神々の繁栄が終わるとされているための黄昏なのだろう。

「エジプト神話のラーがその典型であり多くの太陽神は東から西へと回っていった」

「逆に太陽は命を育む光だけではなく。時には命を奪う死神でもあった」

「中東辺りでは褒める時「君は太陽の様だ」ではなく「月の様だ」と言うのが良い。それだけでも砂漠地帯の人間が太陽をどう思っているかが分かる」

「現代でも熱中症と呼ばれる水分不足による事故で死者が出る事があるからこそ太陽は生と死両方を扱う物である。その特性か太陽神の中には大地の女神と密接の関係を持つ物がある。大地の聖獣である狼を神獣とするアポロン。そして、『蛇』の側面があったとされるアマテラスなどな」

「我ら太陽神の存在の経歴を明かすか神殺し」

「ああ、要するにお前の鎧は用はそう言った物なんだろう？生と死を繰り返す、つまり不死性だ。《鋼》や《蛇》では無いが太陽神はそう言った不死性を持つ」

「ふむ、確かにそう言ったものがあるのは否定しないしかし、それがどうした神殺し。そ



れでは何も届かぬぞ」

「ああ、ウルスラグナじゃあ、あるまいしなどう考えても言うだけ無駄だろうな」  
本當ならな。

「ん?・・・っ!」

「気づいたか? やっぱり時間稼ぎにはならないか」

「貴様! これを狙って」

「ああ、そうだまだ完成していないがこのままではあんたの自慢の鎧が脆くなるぞカルナ」

頭上には光すら届かないような雨雲が敷き詰められている。

「つつ! おのれこんな雨雲晴らし「させないよ」 っ!」

ふと見ると神殺しから少し離れた所に一人の少女が居た。

カルナはこの少女が離れて尾行していたのは知っていたがあえて放置した、それが今の今までになつてあだになる事を知らなかった。

『剣はここにありこの輝きを見て我らに仇名す者万物全てまつろわせろ!!』

少女が持つ剣。それがカルナの呪力を少しずつ抑えているのが見て取れる。

「っ軍神、それも《鋼》か!」

「ああ、そうだよ」

「悪いけどもう少し付き合ってもうぜ、そしてまた太陽神は天空神などの天候、即ち嵐や雷の力を持つ者に敗れる。してやられる所がある」

「俺達の国の神話ではスサノオはうけいに勝った後アマテラスの領地を荒らし暴れ回った。

これに困り恐れたアマテラスは引きこもり地上では太陽が消えた。これは日食とも嵐と考えられている」

「お前も同じだカルナイや太陽神スーリヤ」

「つ、我が名をそこで呼ぶか」

「ああ、お前達親子は似た最後を遂げている」

「息子カルナは自分の子供であるアルジュナを勝たてさしたい為にインドラがバラモン僧に変えて訪れたこの時カルナは父である太陽を礼拝する習慣でありこの時バラモン僧が施しを求めたらそれを与えなければならぬという守らなければいけない誓いを逆手に取りお前の自慢の鎧を頂戴した。．．．もつともこの時インドラはカルナの高潔さに罪悪感を覚え代わりに一発限りの一撃必殺の槍を与えた」

「そして、最後の戦いであるクルクシェートラの戦いではおまえ自身がかつて修行していた時、師であるパラシユラーマは身分を偽った事に腹を立て絶体絶命の時奥義を忘れる呪いをかけ、またバラモンの牛を殺し戦車が倒れた時持ち上げる事が出来ないという

呪いをうけた。これによってお前は戦車を動かせる事ができずアルジュナに頭を矢で射ぬかれて死んだ」

「またスーリヤもインドラとの戦いで戦車を使えなくなり頭を矢で射抜かれて死んだ」

「俺の恥辱を穿り返すかつくづく度し難いな貴様ら神殺し！」

「ああ、お前は死後スーリヤと一体となった事そして親子そろって同じ死因であり殺した相手も雷神であるインドラとその子アルジュナだという事もありお前達は同一の存在だと言う事だ！」

『神話を連ね解き明かしここに盟約を重ねよう、風よ吹け雨よ降れ雷よ落ちろここに太陽を隠し落としまつろわせろ!!』

「これが秘策、言葉と祈りをこめた太陽の光すら通さん大嵐の権能だ。これでお前の鎧を突破しやすくなっただろう？」

「くく、ふふ、はははははは。なるほど確かになるほど確かにこれでは我が父の鎧とて本来の力をかなり落とされてるが」

「それがどうした神殺し。まだ勝ち目が無いと言う訳ではないこのままでも俺は勝てるのではないか？」

「ああ、これで対等だ」

そう言うと俺は亜衣に近づく。

「悪いな正直きついかな」

「きついね、ホントこのまま倒れそう」

「悪い、一応問題は無いようにして置くから下がってくれ」

「了解」

「悪いなこれで」

嵐の中の決戦良いシチュエーションじゃないか風情があるな。

「ああ、これで」

「最終ラウンドだ!!」

## 11話

「ツアアアアアアアア!!」

掛け声合わせて一線神剣をカルナに振り下ろす。

「甘いー!」

しかし、相手は歴戦の戦士すぐさま腕で受け流す。

「つちいっ!」

そして直ぐに矢を放とうとする。

「うお!」

すぐさまマトリックスの様に避ける。

「・・・流石にこの距離では当るか」

頬には一筋の血。掠ったのだ。

「謙虚になる必要は無いぞ神殺し」

そう言い腕を見せる。僅かながら血が出ている。

「これで条件は真に互角となったって訳か」

「然り、これで我らの戦いは始まった訳だ」

「はは、そうかい。なら、しっかり貰うぜその命と権能」  
剣を構え走り出す。

「そうだな、その命を我が糧とさせて貰うぞ神殺し」

矢を番え矢を俺に向けてくる。

シユン

矢が俺に向かって飛んでくる。

カン

それを剣で弾く。

撃つ弾く撃つ弾く撃つ弾く。先の戦いでも繰り返して行う。

「ウオオオオオオオオ!!」

「シヤアアアアアア!!」

これぞ正に神話の具現。カルナが撃つ矢は日輪の加護を持ち光輝く矢となり襲う。  
対する司郎もまた布都御霊の呪力を上げ電撃を纏わせそれを弾く。

(さて、どう攻略するか。風は呼べないオオクニヌシの権能は今嵐となっているからこれ以上操作する事が出来ない。俺ですら走るのがキツイ)

(奴はこの嵐の中で正確に俺へと矢を飛ばしている。さすがはカルナと言った所か)

(正直、布都御霊を召喚して持っているだけでキツイ。他のを使う事は出来ない)

(・・・はは、そうだなそんな事は別にどうでも良いか)

「このまま押し切る!!」

「ッ!」

防御を削って距離を取る。足に軽く刺さる?脇に刺さる?危ない所だけ避ければ良い!  
い!

「弾く数を減らして攻撃に転じるだ。やはり貴様ら神殺しは狂っているぞ!!」

「はっ、それが基本の勇者(馬鹿)の集まりだろ?それぐらい俺が良く分かっているわ!」  
これがどんなに愚かな事かは俺自身が分かっているんだよ。俺の手足に矢が何本も刺さる熱く突き刺さり痛い。正直逃げ出したい。でもな。

ブスリ、布都御霊がカルナの胸に突き刺さる。オオクニヌシの権能で鎧の本質を削り  
ようやく突き刺さった。

「グツガアアアアアアア」

絶叫、しかしそのままカルナは蹴りを入れてくる。

「グフ」

「はあはあ」

「おのれ、神殺しい!!」

空中から常人じゃない呪力を秘めた黄金の矢が召喚される。

「させるか馬鹿！」

前とは違い今回は冷静に行動出来る。即座に布都御霊を投擲し矢を弾く。

「なっ！」

「オマケだ！」

召喚した生太刀で鎧を突き刺す。

「ふん！この位で「倍プッシュユだ!!」

軽く刺さるが即座に飛び蹴りを生太刀に打ち込む。

「ガハッ！」

「ははは、これでタフ差はほぼ修正されたって事だ」

生太刀は体に軽く傷を付けるだけだが布都御霊なら話は別だ。

「なるほど、確かにこれでは互角か」

そう言う到着している鎧が変化している。

「っ！」

即座に理解した。鎧が解けているのだ。呪力となり形を形成しているのだ。

(・・・まさか)

「くくく、そう言えばまだ名を聞いていなかったなこれを出す以上是非とも聞きたいの



だ」

「……高橋司郎だ」

「……そうかそうか覚えておこう」

鎧が消え生身の体が露になる。そして、一本の槍。

それを俺は知っている。

「そうか、鎧と槍の伝承を利用したのか」

原作でも他の神々からの物を利用していた奴がいた。

必殺の槍。ヒンドゥー教の雷神インドラが戦争で息子を勝たすために策略によってカルナから鎧を貰い受けたがその高潔さにインドラは兜を脱ぎ一発限りの槍を与えた。これは文字道理一発限りの一撃必殺の槍なのだ。

「然り、これを出させる事はお前を認めた証拠でもある。だからこそこれで最後にしよう」

槍を構える。それだけで恐ろしいほどの呪力が感じられる。喰らえば間違いなくジ・エンド。次が無い。

奴は完全に認めたのだ。高橋司郎と言う神殺しを打倒するために自らの恥辱である槍を使用しようとしているのだ。

「そうだな、これでお仕舞いにしたいな」

俺もまた「速やかに閉じろ」と念じ風の権能を放棄する。そのまま布都御霊に呪力を込める。・・・正直そろそろ限界だ。

『神々の王の慈悲を知れ、この槍は全てを灰燼にする神罰と知れ』

『我は雷撃を表す剣如何なる物も我に切り裂ける物無し!』

・・・時間が止まったような気分だった。

俺達は互いに相手の出方を伺っていた何時どのように攻めるか。これはそういったものだ。

気分は西部劇のガンマン。・・・たまらない。

聖句は唱えた後は。

(この男倒す)

ただ、それだけだった。

「・・・はあっ!!」

瞬間、二人は獲物を構え突撃した。

「はあああああああ!!」

片方は居合いの形からの一線。

「うおおおおお!!」

もう片方は突撃の姿勢から一撃。

「っ！」

交差する二人テレビでは良くある事だ。

そして。

「がはっ」

膝を着く俺、そして。

「・・・見事だ」

ゆっくり、頭と胴体が分離してゆくカルナ。

「俺の力を手にし、さらなぬ高みに目指せ。期待しよう神殺し」

——良い死合だった。

そう言い、まつろわぬカルナはこの世から姿を消した。

「・・・ああ、俺もだ憧れていた大英雄に会えて戦えたのが」

そう言い俺も意識を失った。

## 1 2 話

「友人が病院送りになるって面白いなwww」

「俺への熱い死体蹴りは止める。四季ぶつ飛ばすぞ」

オツス、オラシロウ今病院に放り込まれています。これから毎日病院で栄養食を食べるはめになったぜ。

「よく言いますよもうすぐ完治しようとしているのに」

ははは、悪いねえ東屋。いやぁ便利だねえカンピの体って。

「もう、病院に運ばれてきた時は15の火傷と腕の骨五本。足の骨4本の大怪我ですよ。おまけに内臓もやられているんですよ。体を大事にしてください！」

「確かにな本当なら全治5ヶ月ぐらい？」

「そんなで済むわけありませんよ！」

「そもそも、何で必殺の槍を喰らって死んでないんだ？」

「ああ、それね。あの時大嵐の権能を止めて雷避けの禁曆（まじない）でどうにかしたんだ。もっとも完全に止められなくてな、おかげで内臓がなあ」

「なるほど、雷神の槍だから効いたんですね」

「まったくこりや人間だと無謀なのは本当だったんだな。昔と言いま今回と言いま。こりや本気でお前が化け物だと思つちまつたぞ。ほんと」

「お前なあ、俺は普段は常識人なんだぞ」

「常識？」

「お前らなあ・・・はあ」

そう、黄昏ていると。

「司郎、見舞いに来たよ」

「おつ、亜衣じゃないか」

「あ、四季アンタも来ていたんだ」

「・・・やれやれ、また増えた」

「・・・えつと、亜衣さん、何でしょうあなたの体から変な気配をするのですが」

「ああ、それな、ちよつとあつて」

・・・神殺し説明中・・・神殺し説明中・・・神殺し説明中。

「なるほど、つまり亜衣さんは司郎さんの加護を受け入れて神剣を使える事が出来るんですね」

「さすがに全力を出せないけどね」

「ふむふむ、そこは噂の神懸りの少女と似ていますね。しいて違いを挙げれば権能と巫女の能力と言ったところですか」

「後の権能の元の神ぐらいか」

「ですね」

「・・・そうですねやっぱり改めて自己紹介した方が良いでしょうね」

「ええ、そうですね」

「改めまして正史編纂委員会、西の媛巫女。東屋早苗です。カンピオーネ高橋司郎の補佐としてここに居ます」

「コイツの幼馴染でコイツの相棒？の清水亜衣よ宜しく」

「宜しく」

互いに手を握る。絵になる。

「あ、思い出しました」

「「？」」

「今回の被害総額何ですけどね」

「・・・へ、ひ、被害？」

「はい、今回高橋さんが呼んだ嵐が原因で起こした事故が数回。近くの川が氾濫。あと

二人の戦闘で山が少しハゲちゃっていますね。近くで見たら分かりますよ」

「……」

「総額2000万ぐらいでしょう。か幸運にも死者は0でも重症が数人ですね。ここで入院している人が居ますね。……他にも色々ありますね。これでお上は大騒ぎですよ」

「……お前ら（カンピオーネ）が魔王と呼ばれるのが分かったな」

「そうね四季」

「僕は悪くない」

## 第三章白蛇神伝説 財宝は投げ捨てる物ではない。

### 13話

遙か時代——

カンピオーネ、神殺しと呼ばれる存在はその名のとうりジヨブチェンジになる条件は極めてシビアだ。

一人も生まれる事が無かった時期もあり。また5、7人一気に生まれる時期もあった。

そんな大昔にして逝かれた時代。まだ白き人々がこの大陸に訪れる昔のほんの小さなお話。

一人の男が居た。

男はとある部族の族長であつた。

男はとある戦の最中、光臨した神を倒した。

男はその力に酔い。殺戮を繰り返した。

男は殺した。沢山、沢山、沢山。多くの人と神を殺した。



そして男はその多くの人を自らの力のために生贄とした。

特に子供を生贄とした。戦い奪い取った子。10歳前半の子。5歳ぐらいの子。生まれたばかりの赤子。

そして自らの子ですら生贄とした。

多くの者は絶望した。彼らは自らの神の為に生贄を与える事は承知の上であったが自分達がその生贄になる事は御免だった。

多くの者が悲しんだ。自分の親。大切な人。仲の良い友人。自分の子。多くの者が悲しみと絶望そして憎悪に包まれた。

しかし、男は強かった。当たり前だ。男は神を倒した魔王なのだ。

男は自らの天下が永遠に続くと思っていた。

しかし、男の天下がそう長く続くはずが無かった。

魔王が存在する限りそれを打倒する勇者もまた居た。

勇者は異国の男だった。

勇者は一本の剣を持ち。放浪の旅をしていた。

勇者は魔王の話聞き魔王を打倒しよう決意した。

魔王は激怒した。

魔王は少し前『蛇』の神と戦い。その力を手にする事は出来なかったが変わりに神の血族。従属神である女神を手にいれていた。

勇者の弟が魔王の戦利品を殺したのだ。

魔王は女神を戮り陵辱し、自身と女神の子供を生贖とし自分の力を更なる上へとしようとしていたために勇者達を皆殺しにしようとした。

しかし、勇者は恐ろしく強く魔王は手も足も出せなかった。

そして、勇者の放った一撃は魔王の体を破壊した。

そして、勇者は自身が連れていた者達を引きつれ新たな旅に出かけた。

現代——

彼女、東屋早苗は悩んでいた。

(はあ、どうしたら良いんでしょうか?)

理由は彼女の現在の仕事相手にあった。

高橋司郎。この日本でおそらく初めての神殺し。彼女の仕事は彼をこの国に補佐し、

留めるのだ。

少し前のまつろわぬカルナとの戦いで彼がまさに魔王なのだと言った日本中の呪術師達は、その現実を突きつけられた。

その為何としても高橋司郎を手籠めにしろと自身の上司から命令された。

・・・しかし。

(補佐の相手は亜衣さんで良い気がしている。彼自身元は三流術師だから一応呪術師や媛巫女でどうか役に立っているのが背一杯)

(タケミカツチの時に霊視が来たけど余り役に立てなかった。注意したから避けられたのかもしれないでもそれでは殆ど役に立っていない。意識されていないと思う)

・・・もし、高橋司郎がこの事を聞けばこう言うだろう。

「媛巫女の存在は俺にとっても有難い。何せ霊視で神の情報調べて相手の詳しい情報が手に入るの少し有難い。もっともウルスラグナの『戦士』を持っていないからどちらかと言うと未来予知の方が有難いんだよなあ」

(私に取って本格的に異性として接する人だからやっぱ。あの人は私にとってどんな風に思っているんでしょう?)

もっともその事を知らない彼女にとつてその気持ちを知るかどうかはまた別の話である。

「私って役に立っているの？」

彼女はそのまま朝まで考え続けるハメになった。

## 14話

「・・・えっと」

「おーい、そっち焼けだぞ」

「おつ、きたきたカルビいただき」

「あつ、つてめえそれは俺のだ返せ四季！」

「はんっ！だめだなそりやもう胃袋の中だぜ！」

「・・・ちえ、おつ、ホルモン出来た」

ツンツン（あの清水さん）

（ん？何東屋さん？）

（何で私達焼肉屋何て来ているんですか？）

（ああ、それね。アイツ（司郎）さあ、たまにホームシックな気分になって知り合い集めて飲み食いしたりするのよ。もちろん、アイツのおごりで）

（そういえば高橋さんって神殺しになる前はフリーで働いていたって書かれていたからそれで？）

(それは分からない。元々アイツの親それなりに生活費置いてゆくからそれでやりくりしていると思うアイツ何だかんだでそうゆうの上手いのよ)

(なるほど、ではご両親は)

(結構帰ってないわ)

(なるほどそれで)

.....

いや、小声で話しているようだけど、聞こえているからな

やれやれ、女は三人いればと言うが二人でも十分話すな。

・・・はあ、ホームシックねえ、まあ大体有っている。

俺は未だに前世の両親に執着している。

と言ってもヤンデレや親バカじゃない。一言で言えば別れの挨拶をしたいんだ。

一応前世では兄弟とかは居たけど自分の子供が先立たれるってさ、嫌にならない？子供居ないけどそれだけは分かる。だからよ。

死んだ俺を今でも思ってくれているのでは？あれから16年以上経っているが元の世界ではそんなに時間が経っていないのでは？とも考えている。

腹を痛めて俺を産んで育ててくれた母さん。働いて俺を学校に行かせてた父さん。

二人には感謝しきれないしどうしてもお礼が言いたい。

絶対に合えないし会う事が出来ない方が高い。幻想だ。だからこそ価値がある。

どうしても一言言いたい。

「ありがとう、俺は元気でやっている」と。

もつとも、常人では到底不可能な領域であろう。やれるなら太極でもやるしかないだろう。

・・・今の親も大切だ。何せ生まれて間もない頃転生して直ぐだったから死んだときの恐怖で顔が引きつっていたり。他の子よりも二足も速く話すようになった時回りが不安していたが眉一つ変えず俺を育ててくれた。だから今の両親にも感謝しているしもし今の両親が何かあった時。俺はソイツを恨むだろう。俺自身フリー時代は恨みを作らない用に使っていたが神殺しとなった今だと様々な理由で家の親が狙われる。もし悪意のある奴が両親に何かしようとしたらその時は――

雷撃で手足を黒焦げになるほど浴びせそのまま達磨にしてやりじつくり脱水症状にしながら焼いたり竜巻の中に放りこんでやるなどの拷問をしてソイツに生きている事を後悔させてやる。

「おっと、焼けた。食べよう」

味噌タレに焼きたての肉を付けて白飯に包んで。うまああいい。



## 15話

「ふあゝゝゝ眠いですよ先輩」

「眠いなど言うなもうすぐ朝だ。それで交代すれば言い」

「はは、やれやれ若い人だからそうなりますよ」

「いやいや、アンタだつて十分若いでしょう」

「私は良いんです。慣れてるんで」

ここは雲集市の博物館。

展示物を監視する警備委員Aはバイトでクリスマスのための金をここで稼いでいた。

しかし、初めての深夜勤務、現代若者であるAはもう体力の限界であった。

対する警備委員Bはこの業界にそれなりに長く勤めているためこの程度の勤務はもう慣れていた。

そして、こここの展示物にはそこまで価値こそほとんど無いが呪具が数個あるため派遣された『民』の術師Cもまた学生の頃からそれなりにこのような仕事をこなしていた為  
に夜勤は慣れていた」

「良いですよねえ先輩は家に帰ったら奥さんと娘さんでしたっけまだ幼稚園に通う」

「ああ、あいつらのためならこの程度どうともない。お前はまだ若い。その内出会いがあるさ」

「そうですよね！よっしゃあ！後2時間頑張りたくありません」

「しかたないなまったく。おい、湯沸かしてくれコーヒー飲むぞ」

「はい、わかりました」

「はあ、まったく近頃の若いのはなあ」

そう、話しながら3人の警備委員は監視を続けていると。

「ん？あれ、二人ともちよつと」

「んだ、どうしたんだ？」

「どうしました？」

画面を覗き込むとそこには展示されている部屋に人影があった。

「侵入者か？お前は見張っている何かあったら本社に連絡しろ」

「はい！分かりました」

「行くぞ！」

「ええ」

B Cは走り出した。向かう先は人影の見えた部屋だ」

タッタッタッタ

走る走る走る

ガラツ。ドアを開ける。

「ッ！」

ライトを照らし辺りを探ろうとしたその時。

「あら、見つかつてしまいましたか。フッフ、これはいけない」

女がいた。それも時代が百数年前にタイムスリップしたような衣装を着て。

まるで冥府の底のような黒髪を幾つかの飾りで包み。

絹のような白い肌と魅力的な肢体を布で最低限度を隠すようなその姿はギリシヤの

トーガを思い浮かべる。

手には羽のような蛇が付いている杖を持つそれはまるで映画などで出てくるジャン

グルの現地民族のジャーマン。

術師であるCは気づいた。この女は呪術師だと。

「動くな！貴様手を上げろ！」

Aは女に銃を向けた。

同じくCもまた銃を女に向けた。

「あらあら、大の大人が物騒な物を持って危ないではないですか」

くすりと笑うその笑みは男を惑わせる娼婦のようであった。

「先輩、急いで本社に連絡を」

「んなあ！そんな事言われなくてもなあ」

「早く！この女普通じゃ・・・」

「ええ、そうよ私は普通じゃない貴方でもね」

そう言ううと女は杖を振った。

ズサツ、そんな音がした。

「ツ、ガハツ」

「先輩！」

「あらあら、術師ともあろうものがただの人に庇われるなんて情つさけ無いですわよ」

「っ、貴様ああ」

素早くCは印を結ぶ。

『オン・シユリ・マリ・ママリ・シユリ・ソワカ！』

鳥枢摩明王の真言を唱え小規模の破魔の炎を浴びせようとするが。

「フフフ、ダメね」

それは瞬く間にかき消されてしまった。

「ツ！なつならもう一度『オン・シユリ・マリ』「遅いわ」ハツ！」

腰に備えていた警棒を構えるドン、と衝撃が来た。

「くうあつ」

「無様ね。やっぱり人間はこれぐらいよね」

そう言うのと女は一つの展示品を手取る。

「ハッ！」

それは神具価値こそほとんど無い為に今回の展示に持ってこられたがまさか持ち去られるとは思わなかった。

「貴様！」

「さようなら」

そう言うのと女は姿を消した。

「二人とも！大丈夫でしたかって先輩！大丈夫ですか」

ハッと気づくとBは大量の血が出ていた。

「不味い急いで救急車を」

「はい！」

二人は今回の事を本社に報告（魔術の事は揉み消された）し大規模な犯罪組織が関わっているのではとお茶の間のネタとなった。

「なるほどね、それで俺に何をして欲しいんですかねえ？」

雲集市のとある会議室。そこにいる少年は日本に初めて現れた神殺し高橋司郎である。

「そうですね、今回の事件が国外の呪術師によるものだと言うことは分かっているのですがその、具体的な事がまだ分かっていないから一応らしいです」

質問に答えるのは正史編纂委員会に所属する媛巫女の一人東屋早苗。その他数人の職員。

「・・・神具か、まあ俺みたいな騒ぎを起こしたくない人種は平和ボケしないように騒動がやって来るんだな」

「・・・カルナの時大騒ぎにした張本人が何を言っているんですか」

「まあ、それはこれ、これはそれって事で、それにな」

「？何ですかその含みある言い方」

「いやな、そもそも連中（神々、カンピオーネ）の力ってさ明らかに戦略核兵器みたいな物じゃないだから被害何て気にするのが無駄だと思うぞ」

「それでも気よつけてください」

「分かっている。暴虐不尽の魔王扱いは勘弁だ」

笑いながら司郎は部屋を去った。

## 16話

まつろわぬカルナから数ヶ月季節は冬。クリスマス、お正月大規模なイベントがもう直ぐ訪れようとするため多くの企業がその為の準備を始めようとしているそんな時期のあるとある日。

「意外とでかいな」

「まあ、それなりに名があるらしいからね」

「確かに、この位なら有り得ますね」

「お前ならこのぐらい作れるんじゃないか？」

「そんなの作る気ねえよ、威張る気は無いんだからな」

目の前には大きな門。

勿論上流階級の人間が住むような物ほどではないがそれでも中流階級の面々は度肝を抜いた。

・・・事の始まりは学校

「・・・専門家の家に行こう？」

「そう」

話を受けその次の日学校を終えた放課後にて亜衣から雲集市に居る考古学の教授の家に行く話が上がった。

「中学部の子でね、考古学の教授の子が居るんだけど最近の事件で恐くなったから相談に乗ってあげてねだったら一回見て見ようって考えた訳。」

「……それはどちらかと言うと警察の仕事じゃないか？」

「……そうよね。まあ良いんじゃない。人は人、警察は警察」

「まあ、それはそれでありがたいな」

「ありがたい？」

「もしも、当りならそれを餌にして誘き出す」

「そして、大惨事を引き起こすのね」

「おい、それだけはねえよ」

俺は草薙じゃないんだぞ。

「じゃあ、行くで決まりだね」

「ああ、ただ。良いのか？お前だけだと思っただが」

「ええ、問題は無いわ。まあ、多いのは逆にダメでしょうけど」

「まあな」



野郎何人も連れて行くのは警察待ったなしだ。

「じゃあ、何時もの4人で良いか」

「分かったそれで良いわね向こうにも言っておくわ」

「さて、チャイムも鳴らして入って良いようだし行くとしますか」

「そうですね」

俺達は門を潜り家の中に入った。

ふむ、見たところ何処にでもある古い家にも見えるな中々らしきがある。

「あつ、こんにちは清水先輩」

「こんにちは今日は宜しくね」

やつてきたのは俺らより1、2歳年下の子だ。震えるような小動物さが良い印象を持つ。

「.....」

「あつ、すみません先輩方」

「ちよつと、司郎に四季そんな目で睨みすぎよ、恐がるじゃない」

「悪い悪いちよつと面白そうだったからな、つい」

「まあ、良いじゃないか少しな」

「はあ、まったく。ああ、御免なさいこの馬鹿二人は高橋司郎、新条四季。司郎の方はそれなりに知っているわね」

「はい、中学部では先輩と同じく剣道部で活躍していたと聞いています。あと新条先輩と同じくサボリクセがあるとか」

「まあ、あつたな。あと、剣道もう止めたんだよな」

原作でもそうだがカンピオーネになってから剣道部には顔を出す気が無かった。この体はあまりにも公平さが無かった。もつとも先輩からの再入部を何度も言われたが全部断った。

・・・全力を十分出せずに戦うのはつまらないしな。

「どうしたの?」

「いや、何でも」

「そう、あ、後この子は東屋早苗。春に転校してきた子よ」

「あつ、そうですか宜しくお願ひします」

「はい、こんにちは皆さん、私は相川亜紀と申します」

「OKよろしく相川さん」

俺はしつかりとした挨拶をした。

「はい!宜しくお願ひします先輩方!」

「それで、どこに問題の品があるんだ？」

「ああ、確かに危険視するって事はそう思うようなブツがあるって事だ」

「はい、確かに「亜紀、お客様が来たのかい」

「おや―声のする方を見ると一人の男性が立っていた。どこにでも居る優しそうな中年だ。」

「こんにちは皆さん亜紀の父です」

「こんにちは」

挨拶をして要件を伝える。

「娘さんに言われて一応見に来た？って感じでここに来ました」

「ははは、ニュースのせいですな分かっていきますよ、まったくあの子は」

「いえいえ、父親思いの娘さんで良かったと思いますよ。まあ、私もそんな事をするのは場違いだとは思いますが」

「猫かぶってるな」「猫かぶっていますね」「猫かぶっているわ」お前ら即座に反応するのは止めるそのぐらいの礼儀は知ってて当然だろ。

「まあ、少なくともここに襲われそうなブツがあるから娘さんは心配で仕方が無いんでしょう。一応自分達が軽く見て回って安全を確認させてもらいます」

「ああ、そうだねもつとも警官ごっこはしなくても良いんですけどね」

「まあ、本来は警察の仕事ですよ。うちの幼馴染、後輩思いなので仕方なくです―それに」

「それに？」

「私も気になるんですよ考古学なら私も多少は興味があるんですよ、是非とも見せて下さい」

「ほう、それは良かった。因みにどの当りに」

「どうこうじゃないですがやっぱりロマンでしょうか昔の時代を連想させる遺物は興味が尽きません」

「本当はそれで神様とか出てこないかなあ―って考えてそうだけだな」

・・・とりあえず四季の足を踏んで話を続ける。

「ふむ、ならそれもありかもしれない良いでしょう着いて来てきなさいせつかく来てもらったのに何もしないで帰らせるのは無粋だろう」

「では、お言葉に甘えて」

スタスタスタ、廊下を歩く俺達暫くすると多きな扉が見えた。

「へーこりやでかい」

「何分こういった物は一度整理するまで大変なんだよ、だから一度に大量の物を置けるスペースが必要なんだよ」

ふむ、なるほど。

「もつともつい最近に整理して多くを別の場所に移しているんだけどね」

「ありや、それでは骨折り損のくたびれもうけではないですか」

「まあ、そういつた事ですとはいえ良い物は多いです賊がやって来るのは仕方が無いんですよ。随分前に当時調べていた金貨を少し盗まれてしまつてその事もあり防犯システムは万全ですがね」

扉を開ける。中には先の言葉道理に少ないがしつかりと保存されている様々な古代の遺物が置いてあつた。

(・・・ふむ、呪術的な物はほとんど無いか。まあ当たり前かSan値が減りそうだからな)

そう思い回りを見渡すと一つの物に興味を持った。

「すみません、あれは何ですか」

「ああ、それかい。少し前に手に入れたものでね。今鑑定品として保管しているんだよ」  
気になったものは石仮面。もつとも血で吸血鬼になるような代物じゃないのが残念だった。

これにはそれなりの呪力が蓄えられているもつともそれが溢れたりするような物ではないのが幸いだ。

「・・・見たところ儀式などに使う祭具と見ましたが」

「だろうねえ、おそらく祭祀や族長が儀式のために使ったのだろう」

「でしようね」

ツンツン

(ん?どうした東屋?)

(これ、急いで保管した方が良いのでないですか?)

(やっぱりか)

(見たところ安全ですから急がずに回収した方が良いでしょうそれに、)

(それに?)

(これには何かいやな気配がします。また辛い何か・・・)

・・・確かに本来人間には手が出せない存在がこういった物だ。昔から触らぬ神に祟り無し。関わらないのが一番だろう。

古来ファンタジーでこういった物に必要以上に踏み込んで死んだ愚か者は測りしれない。

「相川さん、少しよろしいですか」

そう言った矢先だった。

「あらあら、良いものが揃っていると思ったら神殺しがこんな所に居るなんて」

「「ッ！」」

振り返るとそこには女が立っていた。

「なっ、君は何時の間に！」

女は良く似ていた。

そう、報告書に書いてあった泥棒犯に。

「デメエか！」

俺達は戦闘態勢に取ろうとしたその時。

ドガッ

「ガハッ」

「司郎！」「高橋さん！」

俺は何かに吹き飛ばされた。

## 17話

「ツチーしてやられた」

流石にすぐさま来るとは思つて居なかつた。

そもそも、ここを襲う何て分からないんだからまったく。

「ついでないな、まったく」

どこぞの幻想殺しじゃあるまいし。

俺を吹き飛ばしたのは大きな蛇だ。

「神獣か、てことはあれが呼んだってことか」

なんだ？あの女、神獣を呼び出す何て普通じゃないぞ。

「神祖か落ちぶれた神格か、どちらにしる危険極まりないな」

この国には魔王殺しの『最後の王』に竜蛇殺しの『猿』がいる。どちらも《鋼》の神格だ。

前者はそう簡単に出てこないからともかく、後者は不味い。二次三次の大惨事を引き起こす可能性が高い。あの『猿』は出てきたらこんどは中国の魔王がやってくる。

「じゃあ、さっさと終わらせないといけんよなあ」



生太刀を呼び出し構える。

「急いでるんだ。どかないと切り殺すぞ」

そして俺は神獣に挑む。

「情報が正しいなら、まさか！あれが例の」

「司郎！ツまさか！」

「いえ、あんな程度で死ぬほどじゃありません、そもそもアレがあるのに死ぬ事が有り得ますか？」

「うっ、確かに」

ここに本人が居たら「俺はゴ〇ブリか何かか！」と怒るだろうが現在彼は居ない。

「で、どうする。このまま逃がしてくれるのは無理だろうな」

目の前の女は明らかに常識を逸脱している。人間じゃない昔と同じだ。

「つたく、アイツはほんと面白い事を運んでくるよあ！」

服に手を突っ込む。俺もまた得物を取り出す。

「オラア！」

取り出したのは大型拳銃だ。呪力によって強化された弾丸が女に飛ぶ。

「フッフ、そんな物通用する訳がありますか」

ガキインツ弾丸は空中で障壁に当たった。

「チツ！」

ドン、ドン、ドン。再び発射された弾丸はまた障壁によって防がれる。

「ツチイ！これは本当に人間かよ一流でも多少は効くつてのに」

「相手は普通じゃないつて事ですか」

「フッフ、厄介な相手は暫くはここまでこれない」

「ツ！一体何なんだ君達はいきなり物騒な物を持ち出してそれに」

「フッフ、おだまり」

そう言うと女は杖を振るった。

ビュン

まるで鞭を振るったような音がした。

ズサツ

血が出る。その量は明らかに普通じゃないぐらい飛ぶ。

素人でも分かる致死量だ。

「あつ、ああ、ああああお父さんあああん！」

「落ち着いてください。今手当てします。二人とも時間を！」

「ツチ！分かってらあ！」

「ええ、分かっているわよ！」

「切り倒してあげるわ！」

「吹きどびなあ！」

神剣を構え女に飛び込む亜衣、そしてそれを支援する四季の凶。普通の魔術師なら決して突破出来ない。

しかし。

ドガッ

「クウツ」

「清水！」

「問題ないわ・・・これは」

「うへえ、きしよいな」

女と間を挟んだのは巨大な大蛇。オオアナコンダを思っただろう。しかし、その身に持つ呪力は高い。

「魔獣クラスですか、行けますか？」

「分からん」

「こっちも」

「分かりました。『結』」

見ると彼女は自分と周りに見えない壁が出来上がる。

「結界ね」

「ええ、このぐらい嗜みですよ、術師としてです」

「やれやれ、あのトンキチ女まさか、こんな時にやって来るとはなあ」

「確かにそもそも来るとは思っていなかったから不意打ちも言い所だよねえ」

「そりやそうだ、来るなんてありえないとは思っていたから当たり前だろ」

「ですね、おそらくあれじゃないですか？」

「ああ、さつき司郎が見ていたのが目的じゃなえ？」

「確かに他のとは違って呪力がかかなりある呪術具です。でもここまで大胆にやりますか？」

「まあな、可笑しいな何か事情でもあるって腹だろいうな。さて、あの野郎早く来いっつの」

絶えず弾丸を飛ばし反撃をする。しかし、障壁が邪魔をする。

「くそ、やばいぞ。おい清水。早くあれ（障壁）を神剣で切り裂いてくれよ」

「むちや、言わないで、それにあんな大蛇無理よ！」

「つち、ワンマンサイドゲーはクソゲーだけどそこん所どおよお！」

クライ、クライ、クライ、クライ、クライ。銃弾が曲を歌う。その曲は戦場にて奏でられる死の魔曲と呼べる物だが。

『シャアー』

大蛇には障壁にはまさに傷一つ作れなかった。

「ハアッ！」

神剣を大蛇に振るう。その剣は大蛇をバターの用に切り裂く事も出来る。・・・しかし。

「っ、早ツアツ」

「清水さん！」

周りこまれ突き飛ばされたのだ。彼女とて剣術家そこらのチンピラでは手も足も出せない。しかし、彼女が相手しているのは魔物の領域に入った大蛇。その反応速度、動きの早さは現実世界の何よりも逸脱していた。

何より彼女はこの世界に入ってまだ、数ヶ月、呪術、呪術戦の鍛錬は怠ってはいないが実践はほとんどしていないのだ。

経験の差。これが彼女には足りなかったのだ。まだ、彼女にはこの世界はあまりにも未熟だったのだ。

「ッ、清水さん！こっちに」

「分かった」

「フッフ、どうやら無意味な事が分かったようね」

「そんな事はありません！『ノウマクサンマンダバザラダンカン』」

札を女に飛ばす。

『カーン！』

使う真言は不動明王の真言。そこに大規模な火柱が吹雪く。

「フッフ、先の人よりも面白いですけど残念ながら遊んであげる時間が無いのよね、だから」

消えなさい。そう言つて特大呪力が中を舞う。

「「ッ!!」」

三人は絶句する。これは間違い無く死ぬ。自分達はこのまま死ぬんじゃないのかと思つてしまった。

「あつ、ああ」

「嘘、まだ死にたく無い」

「死にさらしなさい」

呪力が渦を巻き竜巻となる。

—— ゆっくりだった。そこにいた人全員がそんな気分落ちいた。

まるでスローモーション。ゆっくり、ゆっくり、竜巻が近づいてきた。

——そして

「待てよ」

そういう声でした。

竜巻が何かとぶつかる。そして、消えていった。

「あつ、ああ」

「つたく、遅いぜ馬鹿」

「悪い皆」

彼は振り返る。そして、再び女の前に向く。

「あんた、覚悟している人だよな？」

そう言って神殺し、高橋司郎は光り輝く黄金の鎧を着こなして対面した。

## 18話

「流石に神獣程度では齒が立ちませんでしたか」

「は、あんな駄菓子にもならない。つてか無視すんな」

俺は女を見る。アイドルすら尻尾を巻くほどの美貌にジャングルで祭祀やってそんな服装をしていた。

報告書道理の女だなと思った。・・・そして

(翼の有る蛇?)

女の手を持つ杖には翼のある蛇の彫刻が付いている。

(こりやあ、まじで厄介な相手が裏に居るぞ)

「・・・ジロジロ見るのはマナー違反よ神殺し」

「はは、そりや失礼。でもさあ他人の家に土足どころか強盗にまで入っているあんたに言われる筋合いは無いな」

「貴方が言ったでしょう。人間なんて駄菓子にすらならない。人なんて私達にとつて取るに足らない存在なのよ」

「まあ、そんな考えばっかりして人間を見下しているから俺という奴にエンカウトし



てしまったからなお疲れ様と言ってやるよ」

馬鹿にするようにそれでいて哀れむように言う。

「……ですが、注意力が足りないようですよ神殺し」

「？一瞬何だど？と思ってしまったが」

「危ない高橋さん!!後ろ」

振り向くと後ろには巨大な大蛇が大口を開けていた。

——そして

ガブ そう表現してしまうような風に見えた。

「あつ、ああ」

「おい、し、司郎」

——そう、高橋司郎が大蛇に頭から齧られたのだ。

「たつ、高橋さああん！」

「はっ、はははははははは油断大敵ですわ神殺しあつさりこの国に置ける最大の難関がこ  
うもあつさり、フフフ、兄様の宿敵であるアレを倒したスミスはこんな哀れな死に様を  
晒しませんわよ」

高笑いをする女それもそうだ。この身はおろか嘗ての自分ではとても神殺しに相手

して勝てる相手ではない事を良く知っている身だからこそこの間抜けざまが狂おしいほど愉快で仕方がないのだ。

「マミったってかおいいい、生憎とエピメテウスの落とし子になった覚えはあるがQBと契約した覚えはまったくくないぞ」

「「へっ?」」

見ると大蛇は齧りついているがそのくせ飲み込めても無い。

「あつ、まつろわぬカルナ様から篡奪した黄金の鎧ですね」

「E x a c t l y ! ! (そのとおりでございます)」

瞬時に呪力を開放し大蛇を内側から焼く。

まつろわぬカルナから篡奪した高橋司郎第三の権能それは黄金の鎧。しかしスーリヤと同一とされるカルナはスーリヤの特性であるその身が高熱を発する体と同じくするため。

「ナウ マク サ マンダ ボダナン・アニチャ ヤ ソワカ!!」

叫ぶ言葉は日天の真言にして鎧を召喚、強化する聖句である。

邪悪を焼く日輪の炎に焼かれ大蛇は干からび干物の用になってしまった。

「忌々しい神殺し! 貴方達と言う人種はいつもいつも私達のじゃまをするというのですか!」

「はっ、神祖風情がほざくんじやなえよこの国にはなあ核弾頭級の面倒が居るんだ。自分の平穩を得るためなら例え地獄の底でも這い上がって切り倒してやるんだって心に決めているんだよオオオオ!!」

声を高らかに上げる。そして手を掲げる。

「来い！布都御霊」

今現在別の持ち主の手にある《鋼》の神劍『布都御霊』それを司郎は呼んだのだ。

「チツ、《鋼》の軍神から篡奪した神劍ですな」

「そのとうりだ。亜衣の奴は少々手に余らせているが俺は違う」

刃を見せる鋭く鋭利な刃はまさに雷と剣に関わりを持つタケミカツチの神劍『布都御霊』その物である。

「アンタの魔術もペットも紙に等しいんだよ！」

「っ！風よ！」

女は魔風を召喚しぶつける。

——しかし

「はっ、何なんだ今のは？風か？フーフー響かせているならこの俺にファンファーレを鳴らしている方が似合っているぞオオオオオ!!」

まさに不死身！有る意味不老不死！神格の権能！魔王の名に相応しいなあ！

「くつ、これ以上どうこうする必要はありません！撤退しないと」  
「逃がすかよお！」

布都御霊を女に振り上げ切りつけようとした瞬間――

「風よー！」

無意味だった。がその魔術が後ろに向かつていなかったの話だが

「ツ、間に合ええええ」

瞬時に風を呼び出し相殺する。

「・・・逃げたか」

振り向くと女の姿が無かった。

「ごめん司郎私が弱くて」

「いや良いよほんと来るとは思えなかったからな」

「そもそも、奴が狙っていた獲物も取られているぜ」

「うわ、コレってやばくない？」

「まあな、もつとも」

逃げすかと思っっているのかよ？

「我に縁持つ従者達よ、今こそ我が元に参上し我が敵を殲滅せよ！」

使い魔召喚禁厭の言霊を唱え。使い魔を召喚する。

「・・・また蛇かあ」

「まあな、大物主と同一化されている神格だしな」

召喚されたのは蛇や鼠などのオオクニヌシに縁のある神獣や大地に関係する神獣なのだから仕方ない。

「さて、・・・あれ、東屋は」

周りを見渡すと東屋は一人女がいた場所に座って何かを呟いていた。

「金星を司る蛇神自らを焼く事によつて新たに新生する者」

ふと足元を見やる。見ると熱帯に生息していそうな鳥の羽があった。

「こりやあたりかねえ」

ため息をつく。——ほんと不幸だ。

## 19話

「——と言う訳だ。理解は出来たか？」

現在俺達は病院にいる。もちろんこちら側のだが。

現在俺は今回の状況を彼女——相川亜紀さんに色々と話しているんだが。

「えっと、つまりこの世界には魔術や神様が居て訳ありの術具が家にあるって事ですか？」

「そうそう、まあ現実逃避は程ほどにしておくのと良いよ。パンクしちゃあいけないし。かと言って逃げすぎると後悔するような出来事も当然ありえるんだよ」

——しかしながら何だ？何処か怯えているように見えるのは気のせいか？

「あつ、あのお」

「どうした？」

「ここはしつかりと原因を突き止めなければ今後の俺の活動に邪魔にならないようにしないとな。俺は悪い魔王じゃないよ。良い魔王なんだから。」

「映画だとかこう言つたものを知つてしまうと記憶を消されたり殺されたり監視されるような事は無いのでしょうか？」

あつ、そうゆう事ね。

「メイン・イン・ブラックみたいに記憶消したり、騙して悪いが仕事なんになつて後ろから刺す何て何も知らないならそう思っているよなあ」

「おつ、お願いです何でもしますからそれだけは止めて下さいお願いします！」

「ん？今なんでもするって「止めなさい」アツハイ」

「ごめんね、コイツ（司郎）はネタを見つけると直ぐに付け上がるから気よつけておいた方が良いのよ」

まったく、それぐらい良いじゃないかまったくブツブツ・・・

「まあ、キジも鳴かずに撃たれまいっていうからそれで良いのよ」

「そつ、そうですか。分かりました。気をつけます」

「そうそうそれで良いんだよ知つても奥に入らなければ良い話しだしな」

「分かりました先輩方」

「おう、じゃあ今日はゆっくり休め」

「そうね、相川さんさようなら」

「さて、一応儀式は始まっているだろうから気をつけて行くぞ」

既にあの女の位置は使い魔が特定している俺達は儀式場に向かっていた。

——場所は雲集市から北に5キロ先にあるウンシユウスカイウエアールと言うそばえ立つビルだ。

普段は展示物などを飾る建物なのだが・・・

「今日にて閉店って事にはなるな・・・物理的に」

「ですよね絶対壊れますよね出てくる神様だと」

「つてかお前が壊しそうだけだなw」

「草を生やすな草を・・・まあ、確かにあのビル切り倒してやろうかとも思ったんだが絶対意味が無いってかあの女が生きていたらそれこそ意味が無い」

また別の場所で儀式をやるだけだからなここで根元を断つ。

「でも何であんなに高い所で儀式を行おうとしているんだらう?」

「元々まつろわぬ神は神話をなぞる事でやって来るんですよ」

「そして、奴がやろうとしてるのは主の死と復活と言った所だ。だからあそこなんだよ長年様々な展示物を置いていたあそこが」

宝物庫みたいな感覚があるって事だ。

「・・・まあ、名前自体はある程度は知っているけどどういった神格なのかはそこまで知らないよな」



有名なようでマイナーっぽいなあ。

「そもそも高橋さんが詳しくすぎるんですよよ一般呪術師だったのにどうしてそんなに知っているんですか？」

「一時期（前世）神話にはまってなそれからだよ」

理由はまあお察しください。あの時期（14歳）は前世も今世も高ぶってしまつてね。  
「着きました」

運転手が着いた事を知らせる。雲集市に住む呪術師の一人らしい。

「ありがとう、とりあえずここら辺一帯の避難は一通り済んだ？」

「もう少しと言つたところですよ」

「分かつた。とりあえず早い所あなたも逃げてください危険ですから」

「分かりました王よ。私個人としても巻き込まれたくはありませんので大急ぎで逃げさせてもらいます」

「賢明だと思いますよそれでは」

「ええ、それでは」

車が遠ざかってゆく。

頭上を見上げる。時間はいよいよもって夕暮れ時。

「さて、行くとするか」

踏み込むとした——瞬間。

——ビュン。風が唸る。

「吹雪け！」

飛んできた魔風を超える暴風で迎える。

「ああ、儀式はほとんど終えたのかケツアルペトラトル？」

「その名を呼ばれるのは随分と久しぶりですね——ええ、もつとも後は時間の問題  
あと少しで兄様は帰ってこられる」

「そう、ならまだ時間があるって事か」

「ええ、だから——」

「ああ、だから——」

「ここから一步も遠さない」

「通させてもらう」

——そう言う女、ケツアルペトラトルは変化をし始めた。

成人女性の中では高い背だがその背は大きく巨大化し。

手はカラフルな翼に変化し。

綺麗な足は重なり巨大な尾になる。

男を魅了する顔と体は蛇となる。

そう、神祖達は蛇神になる事で嘗てのまつろわぬ神に戻る事が出来る。

「まあ、アンタは後ちよつとの命せめてもの情けとしてダンスを一つ踊つてやりたいが」

「——死ね神殺し!!」

巨大な翼の生えた蛇が突撃してくる。本来人間なら死の一字しか得られないだろう。

・・・そう、ただの人間なら。

ザスツ、そんな音が聞こえる。

「あつ、ああ」

「——時間が押ししているんだ。先に進ませてもらおうよ」

相手が人外なら彼もまたその領域にいたる者。すれ違いさまに神剣で切り落としたのだ。

「あつ、兄様・・・」

「レスト・イン・ピース。ケツアルペトラトル出来れば違う出会いで会いたかったよ」

ハツハツハツ。俺は大急ぎで階段を上がる。ふざけた事にエレベーターが動いていなかった。——おまけに

「膨大な呪力！つちい、こごうなりや空だ！」

窓をどかし、呪力を込め空に翔ける。  
体が浮かび中を舞う。

更の上へ上へ空を舞う。

最上階に到達すると既に終わっていた。

燃え盛る周囲は紛れも無く火事。

多くの物が燃える中一人男が居た。

容姿は黒髪の白人それがケツアルペトラトルと似ている格好をしていた。

「彼女は敗れたか神殺し」

「ああ、そうだよケツアルコアトル」

俺はソイツの真名を言った。

「ふむ、既に我が真名を知っているかでは名乗ろう」

「我が名はケツアルコアトル。創造神にして太陽神貴殿ら人間に光を与える曙の明朝」

男、ケツアルコアトルが自らの名前を説いている時、ケツアルコアトルの頭上には膨大な呪力が集まっていた。

「神殺しよ復活の祝いだ貴殿の命を貰う」

## 20話

「故に滅びろ神殺し、光よ我が元に集い敵を討つ槍となれ」

集まった呪力は光となり巨大な槍へと変貌していった。

「んなあー！」

即座にカルナの鎧を装着し俺は槍を凌ぐ。

「ブハッ、いきなり大技ブツパはねえぞ！集え風よ！」

——瞬時俺は竜巻を作り出し奴に叩き込む。

「貴殿に言われたくは無いがな。火よ我が元に集え」

竜巻は火の障壁に遮られたが相殺まで持ちこたえた。

「ほう、これはこれは中々」

「チイ、やつぱり金星の神格つて事か」

ケツアルコアトルは元々、水と大地の蛇神の神格だ。そこから人間に文明の火を与えるプロメテウス、同じく人間に光を与えた大天使ルシフェルと同じ文明英雄の神格だ。

「金星は豊穰神の星だからな」

アフロディーテ、イシユタル、フレイヤ。大地に恵みを与える豊穰神の神格は多くが

金星に相当する。光輝く、その姿は太陽と同じく恵みをもたらすと思われたのだろう。「そういや思ったんだけどさあ何でアンタの妹神祖とかになつてるの？何か理由があつたんじやないか？」

「ああ、それが古代の時私が嘗ての地に降臨した時当時の神殺しに滅ぼされかけた時に私の命と引き換えに召喚した従属神だ。もつとも神殺しに捕まりあの男に殺されたのだが、長かつたようやく自分の使命を取り戻してくれたよ」

「ひでえ兄な事、まだ酒に酔つてんのかよ」

「酔っているか、確かに我は酔っているまつろわぬ酔いにな、貴殿も戦に酔っているのだろう神殺し」

「生憎、酔っているのは別の奴だ俺は酔う気が無くてな」

「嘘はいかんぞこの国では嘘吐きは舌を抜かれると聞くではその舌を切り取つてやろう」

——瞬間、ケツアルコアトルの姿が消えた。

「ツ、うおおお!!」

即座に神剣を構え、防御姿勢を取つた瞬間恐ろしいほどの衝撃が走つた。

目の前にはケツアルコアトルが居た。しかも、手には片手で握れる斧が握られていた。

「トマホークか！」

「そうだ、人間に火を与え。農業神である我は錬鉄も少しながら使えるその鎧の隙間を狙ったのだが勘は良いのだな」

「お生憎様でね、アンタ神速使えるのか？」

「風の神格だからな。反応出来る貴殿が異常なのだ」

「うるせえよ、ナウ マク サ マンダ ボダナン・アニ チャ ヤ ソワカー！」

鎧の呪力を注ぎ奴をこんがりウエルダンにしてやんよ。

「おっと、危ない」

逃げていく。

(・・・っち、以外に手ごわいな奴。最後の王クラスの化物なカルナに勝てたからこの程度と思ったが流石にアステカ神話の中でも有名な神格の1柱と言いた所か)

少なくとも今の奴は神速、火炎、錬鉄の権能を使って来た。恐らくは水も風も思いのままだろう。

「まあ、こーういった場合やる事は何時も一つだよな！」

呪力を高め手に持つ相棒を振るう。

「切り裂け、布都御霊!!」

振るえば雷撃の斬撃となり相手を打つ。

「ほう、その『鋼』雷を撃つか、もっともこの程度かわせないとも」

「まあ、神の足に勝てる気はしないけどさあ。潰せる手段が無いってわけじゃないのよ  
これはあくまでも距離を取らせるためなんだよ。」

「剣はここにありこの輝きを見て我らに仇名す者万物全てまつろわせろ！」

（王よ今こそ全てを征服する《鋼》の軍神の力見せ付けてやろうじゃないか！）

「ああ」

手にはありとあらゆる呪力を押さえ込み相棒がいる。ただの神速じゃあね。

既に神速は解除されその姿が見える。

「クツ、神殺しいいイ」

—— 瞬時。頭上から炎の雨が降りそいだ。

「無駄無駄ア！この鎧に碎けぬ物無し！」

まだ、日没じゃないあと少しだ奴を刺せばお仕舞いだ。

「ウオオオオ」

斬！—— 瞬時にトマホークで防御しようとしたがコチラが速かったのだからかケ  
ツアルコアトルをきりさいた。

「………やったか？」



それはフラグだと思ってしまったのがいけなかったのだろうか？

『なるほど、若造だと思っていた』

「ツ！」

ケツアルコアトルの体に変化していた。

——手は熱帯に住むような鳥の翼に

——足は重なり巨大な尻尾に

——体は鳥のような毛が付いているが長く巨大なものとなり

——その顔は正しく蛇であった。

「んなあ！かつ、怪獣かよー」

『フッフ、驚く事ではない我が身は蛇神このような姿になるのは当たり前であろう』

ケツアルコアトルは全長30メートル以上はある。もはやカンピオーネよりもウル

トOマンが必要な怪獣へと変貌していた。

『気づいたぞ貴殿の鎧は太陽に大きく支えられているのだろうか？出なければその強大な

防御力を低コストですんでいるのはそれであろう？』

「・・・気づいたのか」

『それだけやれば気づくものだ。もっともそれを分かるのは人間では霊視を持つものぐ

らいだろうか、故にだ』

ポツリ、音がした。

『雨を呼びその力を削ぐのが一興だろう、貴殿は太陽の力を借りることで僅かな呪力ですんでいるのだから』

「つち、なら此処でテメエをうつ」

（王よ急いで鎧を解け。太陽が無くなったことで供給源が王のみとなっているぞ）

「くつ、ああ」

いきなり来たからやばくなっているのかよ。もつと早く掌握しないと急にガス欠はキツイ。

『なるほど掌握仕切っていないのかそれは残念だがこれで終わりだ!!』

「はっ、これで仕舞い？馬鹿抜かせその程度想定範囲内ガハッ」

手には鋭い羽毛が刺さっていた。

（はっ、速い！）

「貴殿は空を舞うようなのでな貼り付けにさせてもらうぞ」

今俺は右手左足を崩れ崩壊寸前のビルに食い込んでいた。

「くつ、ああ」

ケツアルコアトルの口には膨大な呪力が蓄えられている属性は水。

「クツ、ウオオオオオオオ」

水を通すのは雷というか迎撃出来そうなのがこれしかない。

『さらばだ神殺し!』

濁流のような水量をレーザーのように発射され、対する俺も雷を砲撃の用に飛ばす。

・・・が

「うっ、クウウウウー!」

押されていく原因は傷と急激な呪力の低下だ。

「あ」

俺が次に目にしたのは巨大な津波のようなレーザーが飛び込んできた。

——そして俺は意識を手放した。

## 21話

—— 走る走る走る。彼の居る所へ。

—— 空が雨雲に覆われた時少女は一箇所に走っていた。

「ここにへんですね」

—— 少女、東屋早苗は自身の媛巫女としての勘を信じてここに来た。

彼女の持つ媛巫女の力は靈視のみ。しかしながらその的中率は50と高い。

—— そして。

「見つけた！」

彼女自身呪術師としてのレベルは高く。神殺しである彼の呪力は既に式である折鶴が見つけていた。

「高橋さん！起きてください」

彼の元に駆け寄る。——しかしながらその顔は青ざめており胸には彼の愛刀の一つ生太刀が突き刺さっていた。

「—— 死んでいる。．．いえ、これは蘇る前だと事前知っています。だから．．」  
生太刀は人を蘇生させる神具だと資料に書かれている。

「でも、あくまでも死亡から瀕死に戻るだけ、だからその為には治療を……効かない」  
カンピオーネには対魔力が付いている。故にそれを突破してカンピオーネに魔術、呪術を使用するには一つ。経口摂取、つまりキスである。

——少し前。

「すみませんね高橋さんでも」

「良いよ東屋、俺自身も知り合いと飯を食べるのは楽しいからな」

「でも私はそんなに付き合いがある訳では無いと思えますが」

「そうかな、俺にはこっち（呪術）には友人は四季しか居なかつたからな」

「——でも」

「もしかしたらな、亜衣や四季もそうだがお前もそうかもしれないな」

「？何がですか」

「最後に看取る奴さ」

「まっってください。それって私達が貴方より早死にするって言うんですか！」

「いや、俺が見取られる方だよ」

「へ？」

何を言っているんですか。それじゃあまるで。

「俺達は命知らずの馬鹿たれどもだ。確かに普通の人間よりも長生きだ。バルカンや中国の魔王は2、300年生きているって話しだしな」

けどな。と区切る。

「俺は早死に思う。持つても100年ぐらいしか生きれない気がするんだよ」

「・・・」

「——いや、もしかしたら4、5年後に切り殺されるかも知れない」

うまく立ち回らなければ間違いなく最後の王。ラーマにやられるからな。俺にとつても原作が始まる前である今は大切な準備期間なんだ。

「・・・どうして」

「ん?」

「どうして高橋さんは自分の命を軽く見るのですか、死ぬのが恐くないのですか!」

「・・・怖いよ、恐ろしいよ。けどさあ」

空を見る。

「それが人間なんだ。何時か死ぬ。だからこそ今を大切に生きるんだ。だからこそ俺は誰よりも生きしぶとく生きていく」

顔を見る。

「だからこそ、これから生きていく仲間達つて事で4人つて訳」  
まあ、それだけじゃないけどなど言う。

「貴方をこんな風に死なせない」

このままでは復活する途中で倒れてしまうだろう。もしかしたら呪力を必要以上使っているかも知れない。だからこそ今私に出来る最善をする。

自己満足でも良い偽善でも良い。——だから。

「負けたか」

変なものだ一度は絶望に沈んだ死も三度目では陳腐になってしまうのが。

「はあ、変に冷静ねシロウ」

「まあね。パンドラ義母さん」

「やつ、やった。やつと息子が素直になってくれた！」

「一応、復活していますよね」

「・・・人（神）がせっかくないい気になっているのに酷くない？」

「上げて落とすですよ」

「うう、やっぱり私と旦那の子っていつも変。まあ良いわケツアルコアトル様は見かけとは違ってシロウの予想道理弱っているわ《鋼》の神剣を手に入れて良かったね！あ、そうそう」

「？」

「どうも誰か治療術を使っているから回復に必要な呪力を節約できるから頑張つて来なさいー」

「ちよつと待つて、誰が治療術を使っているの？教えて義母さん、義母さんアアアン」

——意識が起き上がる。

「——ウグツ、ブハツ。あ、ああ東屋！何で」

「いつ今あつた事を話すぞ。ケツアルコアトルにやられてパンドラから攻略のアドバイスを聞いて目が覚めたと思つたら東屋が俺にキスをしていた。何が起こつたのさっぱり分からない。」

教授とか『少年』の化身じゃあ断じてないもつと何かの感じがしたぜ。

「あつ、あのどうしましたいきなり顔を真っ赤にして変な事を口ずさんで？」

「あつ、ああ、うん。そのアレだ。状況についていけなかっただけだ。見つけてくれたん



「だろ？」

「はい、それで急いで治療をしよう」と

「あつ、あのさあ。こう、なんて言うかさあ。俺達カンピオーネのAランク対魔力突破方法を知っているのはさて置き。何で回復魔法使ってるの？俺自身が霊薬用意すれば……」

「……少しでも呪力を抑えて戦ってもらいたかったんです。それに」

「それに？」

「役に立ちたいですよ。羅刹の君で、私の友人である貴方を支えたいです。……もっともこんな事では出来ないけど」

「……いや、感謝している。ありがとう」

立つ。こんな事までしてもらったらもう、後には引けられないし、男が廢る。

「じゃあ、行つてくる巻き込まれないように離れてくれ東屋」

「……早苗で良いです」

「えつ、」

「私達仲間ですよね……司郎さん」

「ああ、まったくんでもない伏兵だよ早苗はじゃあ行つてくる」

足を蹴る。それだけで空に飛べる。

——もしも、これを見るものがいたらニンジャとでも勘違いするだろう。

「——言つてらっしゃいませ王」

主の帰りを待つ従者の様に彼女はその場を離れる。

「何時でも行けるな布都御霊？」

（元より何時でも行けるぞ！）

やれやれ、まったく、《鋼》の神剣どもはドイツもコイツも脳筋が。

「まあ、やることやるしかないしな！」

「我が身に縁を持つ大地よここに敵を討つために手を貸したまえ！」

農業神は天候だけではない。大地を操り、実りをもたらしてこそその神格なのだ。

「撃て！」

使うのは崩れ落ちたビルの残骸。ビルもまた元はコンクリートつまりは土だと。――

——最もこちらはあまり使ってない上。ほぼ呪力も無いため槍のような鉄棒に再形成し、発射した。

『ガハッ』

「よう、止めを刺したと思つたか？残念！生きています」  
上空にいるケツアルコアトルを少しすぎる。

『生きていたか神殺し、やはり貴行らは生きしぶとい。故に跡形も無く消し去るしかないようだな』

「まあな、でもそれは同じだ。もつとも、雨雲を呼んだのは間違いだぜ！」

俺は布都御霊を投擲する。

「我が刃は雷、天を轟かせ神の裁きをここに振れ雷イ！」

雨雲に入り込んだ布都御霊は雷を降らす。

『私の呼んだ雨雲を利用するとは、貴様らは泥棒のような連中だな』

「うるせえよ、さつきは良くもやってくれたなお返した。布都御霊！思う存分暴れろ！」

(了解)

『雷で自由に動きが取れん』

「そこだあ！」

空を飛び。ケツアルコアトルの体に召喚した生太刀を突き刺す。

「結べ縁結び！」

即座に縁結びの呪いを施す。これで準備完了だ。

『舐めるな、神殺し！』

音速の羽が飛び出す。

「おっと、吹雪け風よ！」

竜巻を召喚し即席の盾にする。

「無駄だ！ 貴様はチェスや将棋で言うところのチェックメイトに嵌つたのだとなあ！ 我が領土は冥界、汝が主の名によって門を開けよ！」

事前に用意していた冥府の門を召喚させる。さつき門との縁を結んである。

『これは冥府の門！ クツ、引きずり込まれる』

「終わりだ」

手をかざす。相棒が特大の雷を落とすための狙いとして。

「レスト・イン・ピース。二度と会いたく無いなアンタとは。撃て」

特大の雷がケツアルコアトルを撃つ。

「曙の明朝は天から落ちるものなのかねえ？」

創造神ともうたわれた蛇神の最後は皮肉にも同じく人類に文明をもたらした大天使と同じく天から墜落し冥府の門に落ちていった。

## 第四章宴の時間。魔王狂乱

## 22話

「清水流神舞劍術一式！」

ブン——劍が振るわれる、狙うは胴。一直線に飛んでくる。

「甘い」

バシイ、劍で防がれ。

「清水流神舞劍術三式！」

ビシイ、頭上一線、反撃される。

「くぎゆう」

一撃を打ち込まれ、打たれた側。清水亜衣は劍道場の床に倒れていた。

「まあ、この程度か」

「うう、この一年頑張ったのにいい」

「あつ、あはは、とりあえず痛み止めです」

「ありがとう早苗ちゃん。ああ、痛い。司郎、本気で打ち込まないでよお」

「本気で稽古つけてくれ言ったのは何処のドイツだ。言っておくが殺さない程度には手

を抜いたんだぞ」

「ははは、お前も鬼だな司郎。個人的に言えばこれで一端の呪術師にはたどり着いたんじゃないね？」

「まあな。布都御霊を追加すれば2流程度なら余裕に行けるだろうけどまあ、頑張り次第だしな。基本は身体強化中心で体術当りを一緒に習得してみるかな。他の呪術を覚えるのも良いけどそちらは早苗とやってくれ」

原作の何だっけ経功？だっけああいった物は俺も欲しくなる。

まつろわぬケツアルコアトル討伐から数ヶ月。年を越え現在は6月。同時に俺はカンプイオーネ2年目を迎えた。

——現在俺が篡奪した権能は合計4つ。内3つはほとんど把握できた。もつとも、もう少し発展できそうな所があるが。

——では4つめは？と考える所だが霊視によるとどうもこちらは原作のウルスラグナなどと同じく複数型らしい。

詳しくは良く分からなかったが特定の状況下というより特定の量の何か？を差し出すらしい。

「——どう、どうしたの司郎？」

「ん、ああ、すまん」

「権能の事で悩んでいるのかよ？」

「まあな、やっぱり思うようにいかないものだなと思つてな」

「すみません流石にここまで来るとやっぱり実践でやるしか」

「いいよ、ここまでくるとやっぱり人間には理解するには難しいつて事だ」

「まあ、いいじゃねえかこんな事で落ち込んでいようなら修学旅行を楽しめないうぜ」

——修学旅行。おそらく学生生活で文化祭などを超えるもつとも熱いイベントだと思ふ。何故なら修学旅行は3年に一度。小学生、中学生、高校生の一度しか訪れない。俺達高校生にとつてはもつとも大切な時間だ。——もちろん異論は認める。これは個人の問題だからだ。

今年はおーストリアらしい、あの爺の居るバルカンに近いから正直やだがまあ、初心者マークを外したばかりの俺ではまだ見向きをしないだろう。

——しかし何だ。はて？何か大切な事を忘れていいる気がする。何だっけ？なにせ原作は線分まではうる覚えなんだよな。まあ、最後の王の真名を覚えているのが一番の行幸だろう。

「ともかく、学園生活最後の修学旅行だ精一杯楽しもうじゃないか！」

「おー」

「……おっ、おー」

「はい、声小さい、もう一度お」

——この後散々早苗で遊んだ（イタズラ的に）

——しかしながら高橋司郎は気づいていなかった。

最後の修学旅行。それは前世を持つ彼ですら待ちどうしいものであり。高校を卒業すれば二度と味わう事の無い事であり。何より本格的に戦いの渦に巻き込まれる事を知っている。

——もしも彼が国外の事を調べたら嫌がおうでも修学旅行の行き先を変えていただろう。

——何故なら。

（あつ、そう言えば7人目が現れたって言うのを忘れていました。……まあ良いですよね、行き先はイタリアじゃないのですし）

——7人目のカンピオーネ。サルバトーレ・ドニが現れた。——そして、彼が現れた時期はとある食い意地の張った老害がとある儀式を行おうとする事を。

——そう、ジークフリート招聘儀式が行われる事を高橋司郎はすっかり忘れて



いた事を。

## 23話

「やって来ました。オーストリア！」

「はいはい、亜衣騒がない騒がない」

「何でよ、アンタだつて楽しみじゃないの？」

「まあな、海外何て久しぶりだしな」

「そう、まあ良いわ」

——オーストリア、面積は約83, 870 kmと北海道と似た大きさらしい。公用語はドイツ語。首都、ウィーン。

通貨はユーロ、ヨーロッパの連合共和制国家。それがこの国だ。

文化はかつては教科書に載っているような有名な作曲家、音楽家を輩出している。そこから辺を調べるのも面白そうだ。

他にも世界文化遺産が多くあるからそこから辺も目を向けてみたい所だ。

「大体このぐらいかなパソコンで調べた所は」

「説明乙」

「良いじゃないか四季、調べたい物じゃないか！自由時間もあるしさあ！」

「まあ、そうですね。旅行するならやっぱり現地について調べたいと思います」  
「物分りの良い友人を持つて私は幸福です。さて、最初は・・・」

「はあ、はあ、はあ、クツまだ追つてきますね！」

「おい、娘ちゃん、そつちに逃げる！」

「くつ！申し訳ありません！」

—— ああ、もう。やっぱり無理だったのででしょうか？

こんな所で無様に——やるせませんよ。

自身の不運を恨んでいる金髪の少女は自身を追っている黒い狼から逃げるために更なる術を行使し走り去る。

「でよー司郎さんや」

「何だ？」

現在俺達は男組みと女組みと分かれている。

四季と他に2人ほど一緒に付いている。

「お前さあ、あの2人とどちらと付き合っているわけ？」

「……黙秘権を主張する」

「裁判長！コイツはクセー！ゲロ以下の匂いがプンプンするぜー!!」

「止めんか……さて、被告人言い残す事はあるかね？」

「何でいきなり過程すつ飛ばして処刑に到っているんですかねえ？」

「ははは、さてどうするよお司郎？」

「テメエも悪乗りをするな馬鹿……ん？」

「……おい、司郎」

「……なつ、なあ、おつお前らさつき」

「ああ、叫び、いや雄たけびか？」

「犬か何かなあ」

「だとしても空き巣のような感じとは違う。これは」

少し離れたところに呪力の気配。呪術師としての勘が訴える。これは呪術的な何か  
が居ると。

「おつ、オイ！司郎！四季！」

「お前らはホテルに戻れ！行くぞ四季！」

「はいよ」

「オイ！畜生！までよ!!」

四人は走り出す。

「ガハッ、もう、駄目ですかね」

足に負つた怪我ではもう歩けない。流石にただの狼ならいざ知らずこの狼はとあるカンピーネの権能『貪る郡狼』人間が勝てるかと問われるとまず、無理である。

一匹ならいざしらず、大勢では同じくカンピーオーネしか無理であろう。

（御免なさい皆。お父様、今からお母様の所へ行きます。・・・いえ、もしかしたら私もゾンビの仲間入りなのかもしれませんね）

そうなつたら嫌だな。もはやそんな事ぐらいしか考えなかつた。

狼が大きな口を開ける。今にもその体を食べてしまう——その瞬間。

「吹雪け」

突如目の見えない「何か」が狼の首を切り落とす。

「・・・え？」

周囲を見渡す。そこには

「おい、司郎ありや」

「ああ、面倒がやって来た」

6人目カンピーオーネ高橋司郎が手に空気の渦を作りだし『貪る郡狼』達をにらめつけ

て  
いた。

## 24話

「・・・さて、あいつらはどうするかなあ」

目の前には5、6匹の狼。呪力も感じる、間違えない神獣だ。

側には同い年だろうか、スタイルの良い金髪の少女だ。

王道な展開には男にとって気分の良いのだろうが目の前にいる狼に渋い顔をする。

(絶対あれだよなあ・・・まあ、せっかくの縁だし、少し付き合ってやるか)

「ハイ！ワンちゃん。カモーン！一緒にじゃれあおうぜえ(物理)」

(ツ、不味いです！このままだと死んでしまいます！あの男多少出来るようですが相手は)

明らかに挑発したようすに顔色を青くしている少女。

「おい、2人とも危ないんじゃないか？狼なんて」

「だ、そうだけど実際の所どうだ？司郎？」

「大丈夫だ、問題ない」

神は言っているここで死ぬ定めではない。

「ウオオオオ——ン」

雄たけびお上げ狼が一匹向かってくる。

「ヒイツ」

「おつ、俺の側に近寄るナアアアア」

「ハハッ、何ディアボロやってんだよ。まあ、ビビっても仕方が無いよなあ。もつとも、この程度生太刀で十分だがなあ！」

召喚した生太刀で狼に切りかかる。

狼もまた大きな口を開け俺を喰らおうとする。

(遅い)

交差する寸前一步踏み出し刀身を前に突き出し突きの構えで進路上に回避不可能な障害物を用意する。

ズシヤッ、皮膚を頭蓋骨を突き破り顔を貫通する。

「うげ」

「きよ、今日の料理食えるのかなあ」

「肉や魚を避ければ良いんじゃないやねえ」

「そりや、そうだな」

四季もまた拳銃を召喚し、まだ動かないでいる狼の頭に狙いをつける。

バーン、引き金を引き呪術に刻まれた薬莢から火薬を爆発させその衝撃で飛び出す玉



は狼の頭へと正確に到達していく……はずだった。

「！」

野生の本能とも言うべきか、放たれた弾丸を持ち前の脚力でかわそうとするが……反応が遅かったのだろか、脇腹に弾丸は吸い込まれていった。

「ツチイ！ 当たったと思っただけだなあ」

「気にするなそもそも俺の勘が正しければアレの親玉はそんな物（銃）じゃあ、文字道理豆鉄砲だ。だが、これは集団で叩き潰す物だ。距離を取って、一体一でやればあっさりやれる……多分」

「オイオイオイ、そりや何だよ。んじやあ。まあ、あれか？ アレは端末か何かって事か？」

「そうだな、もし、親玉が「奴」なら、冗談抜きで勝てない、塩の柱になるか……ゾンビの……仲間入りだ……」

「何だよ、歯切れが悪いじゃねえか……つと、あぶねえ！ 本気で距離を取らんなあ、オラッ！」

「そう言うこと、遅い！ 風よ！」

危なげなく回避する四季に対し、司郎はさらりとかわし風をかまいたちのように鋭くし首を切り倒す。

「ちよつと、面倒だし、終わらせるか。——大地よ我に縁を繋げ」

そう言うところ司郎はこの地の霊脈に縁を繋ぎ大地を操る禁厭を発動させる。

「それ、ストーンエツジだ！」

発動させた術式に連動し、残った狼達が立っていた大地が一瞬の間に鋭いランスのように突き立った。

「うわあ、磔じゃねえか」

「ハハハ、ドミネ・クオ・バティス、何処へ行かれるのですか。お前は磔刑だ！つてなあ」  
笑う最中少女は一連の騒動の中氣づいていた。

（ツ、この膨大な呪力。風、大地を操る。まさか）

「ふつ、不束者でありますが、御身に問いたいのですがよろしいでしょうか？」

「どうぞ、後敬語なんて使わなくて良いよ」

「そうですか・・・ゴホン。では貴方はカンピオーネなのですか？」

「ああ、一年前になつた高橋司郎だ」

「ツ！やつ、やつぱり」

「そんな風に怖がらなくて良いんだが・・・まあ、いいやもう諦めよう」

——そんな事は大事な事じゃない重要じゃないからな。

「——それはそうとお嬢さん」

優雅に剣を鞘に戻し顔を覗き込んでこう言った。

「何で爺さんの猟犬に追いかけられていたのかな？」

## 25話

狼の群れを潰した後襲われた少女アリサ・アウトテオという名前らしい。

で、どうしてこうなったのか理由を聞くと案の定ヴォバンの爺が関わっていた。

「どうやら俺たちは原作のジークフリート招来のイベントに関わってしまったようだorz。」

そして案の定、この子は儀式に巻き込まれた仲間を助けに行こうとし途中で見つかり途中同じ目的で一緒にいた術師たちとはぐれて現在に至るらしい。

「その勇気や良し……と言いたいところだが良くもまあ塩の柱にやらんで良かったと思  
うよ、お嬢さん」

「……」

「こうやって神様ばかり相手しているとアイツ等はどんなに巫山戯ているのか分かる  
んだよで、それを相手してしかも倒してその力を篡奪している馬鹿が俺達なんだよ……  
まあ、そんな事を今更言っても仕方ないけどさ」「……貴方は「ん」？」

「貴方だったらどうするのですか高橋司郎！神殺しの名を持つ貴方ならあのヴォバン公  
爵を相手に容易く相手を出来るのでしょうか。けれど私だって自分を偽るほど大人では

ないのですよ！」

少女Ⅱアリサは目の前にいる魔王Ⅱ司郎に吠える。——理解しているこれは持つものへの嫉妬だ。

「私は『黄昏の十字結社』の大騎士で魔女の位を持っています。総帥候補の一人にだって挙げられる程の実力者です。．．．それでも、それでもこんなに私は弱いのですかええ、そうでしょう。まつろわぬ神を打倒し神殺しとなった貴方なら私なんてちっぽけな一人の女の子でしょう」

——確かに彼女と自分どちらが成功率が上かと聞かれたら誰もが自分を指すだろう。

いつもの自分なら彼女を泣き止めさせ救出作戦を作り実行に移すのだが．．．  
(こんな行動して原作にどれだけ響くんだろうな)

そう、そこである。

彼がこうやって生きている世界の法則、人物は生前彼が愛用していたラノベ、カンピオーネ！の世界とまるつきり一緒なのだ。

．．．当然ながらも、このまま原作の道を大きく外れ全く違った世界観に変わって彼自身の生きていく難易度がどれだけ上がるのかは未知数だ。

他の作品とは違ってこのラスボスの存在である最後の王は主人公の持つとある権

能のようなものがなければ太刀打ち出来ても完全に倒すことが出来ないのだ。下手なオリ主が突っ込んだところで歴代の神殺しの末路を追うだけである。

——その為彼には強くなってもらいたい・・・勿論先にウルスラグナを倒したいのだが。

——しかしだ、此処で本来六人目のカンピオーネであるサルバトーレ・ドニの強化イベントを邪魔してそこから俺自身の死亡フラグを加速させるのだけは何としても阻止したい。

「とりあえず落ち着いてくれ俺だって「プロロロ」・・・すまない電話だ」

着信は早苗? 何で

「はい、高橋です「高橋さん! 私です早苗です!」

お、おう。いきなり声を荒げてどうしたんだ。

「大変です。現地の術師に襲われて今亜衣さんが持ちこたえていますがつりあえず来てください!」

「・・・分かった」

電話を切り周りを見る。

「おい、司郎」

「悪い、言いたい事が色々あるけど直ぐにいけないとな、四季後頼む」

「え、ちよつと何をキヤツ」

「悪い、ごめんけど今急いでいるんでな、風よ我を運べ」

アリサをお姫様だつこの形で抱き抱え権能を発動させ空を飛ぶ。

「……おい、空飛んでるぞアイツ」

「……まあ、お前からこれから俺達の裏とも付き合うかどうかは、お前らの自由だけどなとりあえずアイツの呪力を辿つて来るからついてくるならついてこい」

「すみません、その緊急事体のようですけど何処へゆくのですか？」

「待て、結べ縁結び」

次に縁結びの禁厭を発動させる。これで繋いだアイツ等の所へ引き寄せるようになる。

「まあ、恐らく同じ理由なんだろうなと思って一緒に行くんだよ」

「だから何処なんですかあああ」

「……どうしてこうなったんだろう？」

私達の修学旅行は通訳を付けて観光の場所に行く感じで私達女子組は次の場所へ向かおうとしたその時だった。

いつの間にか人氣が無く次の瞬間早苗ちゃんクラスほどの呪力が私達を襲った。

私も布都御魂を召喚して迎撃しているんだけど……

「ナウマクサマンダボダナンインダラヤソワカ！」

投擲された帝釈天の札が印と真言によって雷撃を飛ばす。

「イヤー！」

その雷撃に怯んだ瞬間清水亜衣が神剣を手に取り突撃する。

「舐めるなあ小娘え！」

襲撃者の一人が剣を抜き放つ大型の両刀剣だ。

「甘い！」

神剣で受け止めそこから払い流す。

「ハア！」

すぐさま鋭い突きが襲撃者を襲うが襲撃者もまた実力者だ。

「危ない、小娘だ」

襲撃者は突きを交わし後ろへ下がる。

「この娘何て実力だ。しかし」

「！亜衣さん左」

東屋早苗が声を荒げる。



「ちよつと、ヤバイ！」

蹴るように短い跳躍をし早苗達固まっている所へやって来る槍を持った男が突撃しているのだ。

「クツ、ハア！」

槍を受け止めそのまま縦へ一線――

ガキイン――錬鉄術を使い盾へと鍛え直した槍が神剣を受け止める。

「ナウマクサマンダボダナンインダラヤソワカ！」

続けざまに再び帝釈天の札と印、真言が雷撃を呼び起こす。

「もう、嫌、休みたい！」

・・・確かに嫌ですね大騎士クラス？でしょうかかなりの手練が一人二人、後はどうとなるのですがどのように行動すればいいか

「・・・無関係の子も居るのに」

「全くです。でも、時間だけは稼がないとないと」

後数分もすれば高橋さんが駆けつけます。――だから

「そうね、――だから」

「やるしかないんだ!! (です!!)」

「一気に焼きます、亜衣さん離れて！ノウマクサラバタタギヤテイビヤクサラバポツケ

イビヤクサラバタタラタセンダマカロシヤダケンギヤキギヤキサラバビギナンンタラ  
タカンマン！」

不動明王の火天咒を唱える。燃え盛る炎となり敵を滅ぼす。

「これならどうですか！」

元来妖しなどに使う真言なのだが相手が多い。

「やった？」

・・・亜衣さん、確かそれってフラグと言うのでは？

「・・・ええい、クソツ！何て餓鬼共だ物見雄山気分のお客だと思っていたら此処まで  
厄介とは」

「——まだいるね」

「——ええ。まだ」

「チイ、公爵への貢物と思えば此処までとは腹立たしい」

「そもそもあれは神具ではないか！それを持っているあの女は何だ！」

「あれには魔女や巫女の気配が無いとはずだ」

——当たり前よ私の場合権能で可能とさせているんだから。

「数を増やせ！先ほど6人目がこの街に來ていると通達があつた。これで儀式の事を知  
られて公爵に何かあれば、俺達の首が物理的に飛ぶぞ！」

——私達、高橋さんの愛人のような者ですからそもそも詰んでいきます。

「ええい、突撃だ突撃！速い事あの二人を回収して「させないよ」何だうわらば！」

「!!何が起こったのだ」

「分らないいきなりアイツが壁に叩きつけられてガハッ」

「!今度は地面から拳だと・・・まさか」

全員が振り向く視線の先には膨大なプレッシャーが漂っている。

「一おつ、触るな危険、竜の逆鱗」

呪力のタンクのようなそれが語る。

「2あつ、狙うな危険、パラオの財宝」

ゆっくりと風を纏ってそれはやって来る。

「3いつ突くな危険俺の日常」

何故か手には左手には古刀を右手には何故か金髪の少女を連れ。

「お前らは触れてはいけない一線を超えた。その罰を今ア此処でエ味合うがイイワアア」

——あえて言わせてもらおう酷いと

逃げる敵を風で吹き飛ばし、逃げる敵を土を固めてぶつけ、やりたい放題だったと

## 26話

「なるほどな、流石に警戒ぐらいはしているんだな」

結局、俺はこの件に首を突っ込む事にした。流石に身内に手を出されたら叩きのめす以外に道が無かったのだ。

「使い魔に見張りが四方八方にゾロゾロといやがるぞ」

「だよなあ、俺がオーストリアに入国している事は既にバレているんだ。あの爺なら当然横取りを警戒するし、同時に釣られてホイホイやって来たネギと鍋を背負った鴨の扱いはなんだろうな俺」

・・・正直あの爺とやり合いたくない。実力ではなくとある権能とだ。

「まあな、・・・おつ、依頼人の登場だけ司郎」

「戻ったかアリサ、それでどうだ。他の連中は」

「ええ、かなり減つてもう諦めかけた所を王の参戦に士気を高めていますわ」

・・・コイツも少しずつだけ素に戻っているのかね、お転婆お嬢さんなのかね。

「なるほどね。さて、皆が揃った所でそろそろ突入と行きましようか」

作戦はシンプルに俺一人が突貫し引っ掻き回して良いタイミグで回収撤退だ。

一番良いのは上手い具合にドニにバトンを渡せばいいだけの話だが生憎とそうは間屋が卸さないだろう。

「誘導ぐらいな」

原作がどうこうじゃない結局救わないは目覚めも悪いし誇れるものでもない。

勇気とやけくそは違う。思い、そして剣を振るいそして勝利する。それをしっかり理解して挑むのだ。

——ふと空を見る。

空は狼爺が儀式をするためか風が吹き荒れる。・・・まるで嵐の前触れだ。

「——ああ、死ぬには良い夜だ」

・・・ボソリとそんな事を言ってしまう。こんな夜だからだろうか俄然活力が溢れる。

「・・・やめてくれよダチが死ぬ何て目覚めが悪いぜ」

・・・昔、人が病院に担ぎ込まれたことを笑ったやつが言うセリフじゃないぞ四季。

「・・・ありがとよ、言っておくがなこの言葉を言うのは別に自殺願望が有る訳じゃない」

——死んでいい日なんてない。ましてや俺達はまだ輝かしい未来が待っている

若人だ。

「二人には何かあった時のための連絡係に徹してくれと言っているが一応行こうとしたら止めろよ」

「……やっぱ、一人で行くのか」

「……当たり前だろう。あの爺に挑む勇者（馬鹿）は俺一人で良いんだ。俺一人だな」  
「……そうかよ、もう一度言わせてもらおうぞ。死ぬなよ司郎」

「バカ野郎、俺を誰だと思ってる」

生太刀を腰に付け流れ者の雰囲気を纏ったまま俺は戦場へと駆け出す。

「——我、夜戦に突入する」

そのセリフが似合うのは魔王じゃなくて艦むすだろうになど一人でツツコミを入れつつ駆け出す。

—— いったい俺は何がしたいんだらうな。

一人の騎士が呟く。男は儀式場を守る門番の役割をしている。

これから行われるのは最厄を神の形にしてこの地に召喚する儀式だ。

—— 当然ながらその代償は大きく間違ひなく死者が出る。

このような最厄を阻止するのもまた呪術師としての義務でもあるのだ。

「俺達はクズだよなあ」

付き合ひの長い友人に愚痴る。……残念ながら俺達はこれしか出来ない。

「……そうだよなあ、けどよ、あのヴォバン公爵に挑めるか？」

「無理だよなあ。絶対に死ぬ」

「ああ、絶対にな」

——そんな事を言っているせいなのか。「それ」はやって来た。

「あー、すみません道どいてもらえないでしょうか？」

「ッ！」

やって来たのは黒髪の少年だった。顔付きも合わせていわゆるジャパニーズハイスクールだろうか学生服を着込んでいる。

しかし、腰に備え付けている物は誰がどう見ても凶器だと分かる剣だ。鞘に収まっているが訳70cmの業物だろう。

「……申し訳ありませんが当城は現在入場禁止となっております。お引取りを」

……何故、年が幾つとも離れてそんな少年にそんな敬語を使わないといけないんだ。少なくとも俺達は警備兵とかじゃないのに。

「へえ、そうなんですか」

返してくる言葉に連呼されるように少年からは巫山戯たような呪力を形作っている。

「……なあ、もしかしてさ」

「……6人目のカンピオーネがこの国にやって来ていると聞いていますが、もしかしますか御身なのでしょうか？」

そう、友人が聞くと少年は少し、不満そうな顔をしながら

「別に敬語をしなくても良いですよ俺にはこの先に用があります。お仕事お疲れ様でした後はかえって結構です」

「・・・」

二人は少し悩んだ結果。

「ありがたきお言葉をありがとうございます。私達はこのまま立ち去りますが何か必要なことがありますでしょうか？」

導き出した答えは下がる。少なくとも目の前にいる怪物に挑むほど自分たちは愚かではない。何よりこちらの方が目覚めが良い。他力本願ではあるが。

「いえ、後の事は俺に任せてくださいビールでも飲んでリラックスしてください」

そう言つて6人目のカンピオーネ高橋司郎は二人の大騎士の横を通りすぎる。

「・・・帰るか」

「・・・そうだな、一応結社に報告しておくか」

「・・・だな、俺達以外にも不満の多い奴らが多いだろうしとつとと帰ろうぜ」

人狼と羅刹の喧嘩、いや戦争が始まるんだ。巻き込まれるなんてゴメンだ。と二人は去つていった。



——突入した俺を待ち構えていたのは先ほど見張りをしていた者と同じくそれなりの実力のある騎士や魔術師が待ち受けていた。

——が、俺はカンピオーネ、ハッキリ言つて何処ぞの冷蔵庫風に言えば数匹の蟻が恐竜に勝てるものかと騎士の振りかざす武器は掠りもせず魔術師の魔術も俺の限定的の対魔力Aランクによつて通らないから文字道理蚊に刺されるほどにも感じないのだ。

「悪いけど吹き飛んでもらうぜ！」

即座強風を操作し、敵を殲滅する……もつとも、殺してはいないんだが。

もはや強行突破しかないと悟り足を進める。途中同じようにやつて来るが同じように強風を作り出し叩きつける。

——早く、早く、思いが馳せる。俺が今持つている権能達が五月蠅い。

——特に意思をはつきりと持つている布都御魂が五月蠅い早く己を抜け己で切れ、敵をまつろわせろと。

——自己視聴が激しい奴らだ。そんなに使われたいならもうすぐ使つてやるから待つてろ。俺は儀式場を探し出しそこへ向かう。

「……があああの男の部屋なのね！」

・・・何を言っているんだ俺。まあ、いいや

目的の儀式場は此処なのだろう漂う呪力は計り知れないし霧のようにこの部屋から漂ってくる。

「行くか」

腰から生太刀を抜き扉をXの字で切りつける。

そのままヤクザキックで扉を蹴破りダイナミックエントリーを行う。

・・・突然の出来事に何か反応を示すと思いきや残念ながら誰もそれを咎める者がいない。

周りを見る。まつろわぬ神招来の儀式には3つの用意が必要だ。

まず、一つにまつろわぬ神を現世にやつて来させるための橋渡しを行いそして一番負担を掛ける役割を持つ巫女、魔女。の血を引くもの

今回の人柱御一行は儀式の影響かトランス状態で意識が飛んでいるようだ。

次にそもそもまつろわぬ神は神話、または物語をベースとするため儀式にもまたそれに沿った神話、物語を用意する執拗がある。

例えば日本神話なら天照、須佐之男、月詠の三柱を呼ぶ際イザナギを主役とし、この三柱を生み出すために主役に汚し、それを清める。つまり神話、物語をなぞる事だ。

今回ならジークフリードを呼ぶためにニールンゲンの歌をなぞる事だ。

最後に祭祀、恐らくこちらも相当負担をするだろうがあれ相手ではなんともないだろう。

神を呼ぶために恐ろしい程の狂気を持ち出すそれこそ狂信者のたぐいだろう。

・・・よく、十字教は聖四文字を召喚していないと思ってしまう。今ならさせておき昔ならそのぐらい普通にやっつてのけてしまいそうではなるのだが。

・・・そして今回の祭祀の狂人の分類は戦闘狂まだ見ぬ強者を倒したい暴食の魔王。祭祀の役割をしている老人が俺を見る。その目は獲物を見つけた狩人の目だ。

「誰かね、君は」

分かっている答えを求め最古の魔王は最新の魔王に問いかける。

## 27話

「——高橋司郎、一年前に神殺しになったアンタの後輩だよ」

・・・こんな先輩はいらねえな。勿論他の奴らもイラナイんだがね。

この儀式の祭祀にしてこの騒ぎの現況。

——サーシャ・デヤンスタール・ヴォバン。現在生きている7人のカンピオーネの中で最年長のこの男を見れば、整えられた髪にしっかりとしたスーツ姿。一線を引退した燻し銀のご隠居だろう、だが某黒王子から言わせれば「知識ぶった野蠻人」300年近く生きたせいも、まつろわぬ神すら嫌がるほどの強さを持つている上。食欲と闘争欲しかないと同類に言われる程の戦闘狂であり今回の一軒もまた暇を持って余した為に起こした一軒だ。

「ほう、確かに一年前に誕生したと噂は聞いているが、若いな。・・・いや、思えば私が王になったのも君と同じくらい頃だったか」

愉快そうに、獲物（高橋司郎）を見つけた狼男（ヴォバン）はゆっくりと呪力を練りながら近づいてくる。

「へえ、随分と若い頃なんだな爺さん」

逆に俺は生太刀を床に付け跡を付けるように下がっていく。

「一つだけ聞こう。君は何しに此処へ来た？」

ヴオバンは台を降り俺を睨みつける。同時に強力な呪力がゆつくりとヴオバンから溢れている。

「簡単なことだ。俺はこの儀式を止める」

ゆつくりと、それでいて早く儀式を実行している巫女、魔女の一団を覆うように円を描く。

「……随分と変な顔をするなアンタ」

「私の獲物を横取りすると思っていたからな」

「確かに鋼の英雄、ジークフリード、俺だつて戦いたいさ、けどな」

円を描き終えヴオバンと正面に立ち剣を向ける。

「此処までやってまで戦う価値がないんだよ。俺の主義は専守防衛。出てきたらお帰り願うだけさ、そこに楽しみを見いだせるかどうかは相手次第だけどな——一つだけ、言わせてもらうぞ」

「アンタの事なんざこれっぽっちも思っちゃいないがよ、——見過ごすのは後味悪いんだよだから、首をおいていけヴオバン！」

瞬時に全呪力を開放するこうなるのは儀式について事前にある程度知っているからこそするべき行動は決まっている。

「我は国生みの王、我が禁厭は森羅万象に轟くと知れ！」

オオクニヌシの聖句を言い次の行動を行う。

「我、古より大地の精を従えし神王、汝らが古より我を崇める者なれば我が命を受け入れよ」

新たな聖句が俺に新たな可能性を教えてくれる。

「汝らに命ず、我に力を与えよ与えよ大地の精よ我に力を与え給え」

大地の精から膨大な呪力を頂戴する新たなオオクニヌシの権能の発展を感じる。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前」

即座に九字切りを行う。流れる用な手つきで網目模様を描かれている。

「幽界より来りし荒ぶる荒神の影より彼女らを守り給え、払いたまえ急急奴律令!!」

続けざまに事前に持ち込んでいた札をバラまく。札は五つに別れ星の形を作りセーマンを描く。

フワン、不思議な音と共に少女達に透明な壁が出来上がる。

「これで、もしも、が起ころうが問題が無い。さあ、喧嘩の時間だ。爺!!」

——時間は突入前に遡る。

「——と、言うわけで儀式を止めようと思う」

「いえ、それは可笑しいです」

ハツハツハ、最近ツツコミが良くなつてくるよ早苗くん俺もボケる立場から見て楽しいよ。

「いえ、流石に怖いんです。相手が相手なんですから、まずは慎重に行動をですね……」  
「……えつとき、何でそんなに皆悩んでいるの？」

……そう言えば亜衣のやつには他のカンピオーネの事はまだ教えていなかったな。

「ああ、それなんだけどな」

「相手がヴオバン公爵だからなんだよ」

「？」

あつ、テメエ四季先に言うんじやねえ。

「サーシャ・デヤンスタール・ヴオバン。司郎さん含む7人のカンピオーネの一人で最年長の方で約300歳だと聞いております」

……最近アグレッツシブすぎやしませんか早苗さん。

「巨大な人狼となり、地を砕き、嵐を呼び業火を操る文字道理の魔王。私達がイメージす

るカンピオーネ像を作り出した原因でもあります」

「……まさにザ・暴君だからなあ爺。」

「……ええ、つとだな話変えて良いか」

「……ゴホン、とりあえずやる事が分かっているから何が一番のハッピーエンドに至る選択なのかをまずは調べないといけないんだ」

皆領く、当たり前だろう。相手はまつろわぬ神とほとんど同じものだから、対策せずに突っ込んだらあつという間に14へ行けからのバットエンド一直線。

「……正直腹が立つ。これもヴォバンって奴の仕業なんだ……やめよう不毛だ。」

「えつと、すみませんアリサさんでしたね、今回の儀式について詳しく分かるものがありましたら教えてもらえないでしょうか？」

「そうですね、それもそうですねMs. 早苗。確かにこの儀式正直言いますと……」  
 (……さっぱりわからん)

流石に専門外だ。元々魔法剣士目指していたけど結界とか儀式とか必要最低限しかやってないんだよな。

「——高橋さん、聞いていますか！」

「はい、聞いております。サー」



「はあ、．．．何かやろうとしているお顔をしていますが、何をなさるおつもりなのか？」

「最初に俺が突撃して、陽動する。でアリサ率いる連中が救出を行う。でお前らは後方支援な」

「は（い）？」

「ぶっちゃけ、死にゆく準備何て知り合いにやらせるか、一部除いて使える奴（肉盾）が居るんだ。せいぜい頑張ってもらおうかなあ、っと考えている」

「貴方はどうするのですか？」

．．．ああ、そこは言うよな。

「奴を抑えるさ、その間に儀式を調べる解除するはそちらに任せる事で構わないよな」

「．．．」

理にかなっている確かにそれが現実では最良だろう。．．．しかし

「．．．司郎、アンタやつぱり今日は可笑しいよ」

「．．．」

分かつている。これは高橋司郎のやり方じゃない。この男はそうゆうやり方をやらない。

「本当のお前なら単独で潜入してひっそりと儀式を潰し、そのあとは堂々とした態度で

相手を煽りまくって、逃げ回る。頃合を見てに救出。これがお前の「本来の」やり方だろ？」

なのに、と手を横にして肩をすくめる。

「お前は儀式について何も言っていないし何か乱暴に言っているけどよ、お前が真つ先に潰すのは間違いなく元凶ではなく儀式を潰しに行く奴だ。

……まったくもってそのとうりだ。昔ならともかく今は世界に7人しか居ない「神殺しの魔王」の一人。本来囷をやるにしても「本来の俺」は真つ先に潰すのは「元凶」ではなく「儀式」なのだ。

……だが。

(それが果たして最善の未来なのか?とゆうことだ)

サイは既に投げられた。あの日。一年前。婆さん家の物置で俺のこの世界の今後を決めるサイが。

そこから先は間違いなくシユレディングアの猫。ある程度融通が効くはずだ……しかしだ。

手はまだ先だ。本人(主人公)が嫌がるなら俺が先に貰えば良い。あの一人と一柱もそちらの方が良いんだろうな。

しかし、それは今回とは少し違う。

一手次第で原作のヴォバンの行動理由が俺に変わる事だつて十分ある。

原作の行動も随分違う。古代編が消える。一つの街が衰退するかもしれない。

「……ああ、まったく。どこまで世界は俺に試練を用意したがるんだ。何処かで甘粕の奴がニヤニヤ笑っているんじゃないだろうな。」

「……ああ、今回はどうしようもないほどに自分を抑圧している。もつとやりようがあるのにそれを選択しない。間違いなく今の俺は間違いなくおかしい。ああ、分かっているよ」

もうこの際だある程度はいくらでも付きやつてやるさその上で俺は生きて帰るんだからな

「文句のあるやつは言っていないぞ。俺はそこまでいかれていない人の話ぐらい聞く良い子だ。好きに言えこれは俺のポリシーだ」

「「「「……」」」」

「だがな、これだけは言わせてもらおうお前らが何をしよう構わない。儀式が中止になったら多分俺は悲しむよ。ああ、何処かで戦闘狂の俺が疼いて疼いて仕方がないんだ。けどな俺の都合で誰かが悲しむだけは絶対に！俺が許さない！何よりも俺が！そんなのまるで」

まつろわぬ神と同じじゃないか。

「だからこそ、お願いします付き合ってください!!この俺のちっぽけな我が儘聞いてくれないか!」

俺は頭を下げる。ああ、本当にだらしねえ神殺しだ!

「——顔を上げてくれませんか、……羅刹王が頭を下げるのはいけないと思いません」

……早苗

「そうだよ、たまに考え事をしていたからこれもその一つ何でしょ?昔から変なことで悩むのが司郎の悪い癖なんだよ」

……亜衣お前まで。

「——だ、そうだが?」

「——分かっていようお前ら。けどな、今やる事はさつき言った同じだがな、一つ思うんだがな」

一息ついた後。

「何であれ儀式自体は下手な事をすると何が起こるかは分からないとは思わないか?」

「……確かに、まつろわぬ神を招来させる儀式、途中で『何か』が起きてしまった場合それは予想がつきませんわ」

「そのとうり、じゃあアリサ俺が下手な真似が出来ない事は分かっているようだけどな、

勿論大丈夫な状態なら遠慮なくやってくれそれに關しては全力でやるつもりだ」

これに關してはもう頑張るしかないんだらうな。まあ、俺だつてカンピオーネの一人困難ぐらい潰す気しかないがな。

「だからこそ、俺もある程度暴れられるように場を整えないといけないと思う」

「場？」

「そうだ、場だよ亜衣。そうそうに戦場を変えるとは言えやつぱり戦場にはなると思うんだ。儀式にしろ、何らかの被害を儀式に参加している子達を守るための防衛：まあ、要は結界なんだけどな」

「——分かつていますけど高橋さん羅刹王二人の激突に耐えられるものなんて出来るとは思えないのですが？」

「ああ、だからこそ『ココ』を使うんだよ」

と、足で地面を突く。

「地脈ですか」

「ああ、俺なら行ける」

オオクニヌシは地に通ずる神格それをうまく使えるはずだ。

「・・・ならそれを今からやろうじゃないか」

「うん、ソウダネ。ハヤクヤロウカ」

「——あのお、司郎？」

「おい、こつち見ろよ」

「すごい脂汗ですわ。……もしかして」

「………つけ、結界術何てほとんど使えない」

「はあ、つてお前ら呆れないでくれよ。結界術なんて俺の家にはほとんど無いんだよ。人払いぐらいしかないんだよ。」

「………暴発したいんですか高橋さん」

「………馬鹿だろお前」

「………たまに馬鹿をやるからね」

「おつ、お前らアアア、畜生ツ！反論出来ねえ!!」

「……高橋王は民に優しいと聞きますが手綱はしっかりと握った方が良いと思います」

「うん、程々が必要なんだと思う」

「タダね、アリス君そこまで軽いのはコイツら（四季、亜衣）だけだよ。」

「……まあ、間違いなくコイツに結界術を『教授』をやるしかないよな」

「そう、なりますね」

「「………」」

「………早苗」

と言ひ早苗を抱き寄せる。

「は、」

それにあつさりと受け入れる。

「ツ!!」

一瞬、アリスは驚くが気を正す。

「………とりあえずお前ら離れろ」

思わずとんでもないやり方をやつたと思つたが逆に恥ずかしい。ので生太刀を振り回して野次馬を蹴散らす。

「………はあ、まるでガキだ」

こんなの一度や二度じゃやないのにこんな場所や雰囲気は初めてだからだろうか。

「じゃあ、頼めるか？」

人間ノリに生きるものだ。でもなきや、中々の大きいものが体に当たつて心臓が激しく脈動している。のに一つのこと以外に行動ができない。

「……構いません。先は色々と言いましたが、私は貴方の物であり羅刹王の従者の一人としてこの身は貴方に捧げます」

「そうかい」

そう言うが早いか俺は早苗の唇に吸い付くようにキスをした。

「あつ」

そのまま舌を絡ませ、そのまま一度放す。

「んっ」

すぐさま、今度は浅く口づけをする。

キスをする度に知恵が頭の中に入っていく。

——深く、深く、ゆっくりと己が欲する知恵を少女から教えられる。

——深く、深く、脳内に整理し、術式を編み出す。

「——ああ、本当ならこんな場所や雰囲気じゃなくてもっと、良い場所や雰囲気が欲しいんだがなあ」

「——でしたら、これが終わったらどうでしょうか？」

「——ああ、その時は頼む」

——少しだけ、この力がありがたく感じた。

「……で、お前ら、出歯亀とは命知らずだとは思ったがまさか此処まで覚悟があるとは思わなかったなあ」



・・・とその茂みに声を掛ける。

「あつ、やつぱりバレたか」

「カンピオーネの気配感知を舐めるな」

「ゴボン、ゴボン。殺意が魔風へと変換され、小規模の台風が形成される。」

「あつ、あああ」

アリサお前もかビビっているのは是非も無いよね。マジで

「お前ら、素っ裸でヴォバンに放り出すぞ」

「止めて下さい死んでしまいます」

——はあ、空気読めよお前ら。

「・・・まあ、その方が良いよな」

こんな化物を慕ってくれる何てな。

空を見上げる。曇り空は俺の心の闇を表しているような空だ。

・・・だけど。この空が晴れ、朝日が地上を照らすのだと。

「よし、四季、行くぞ。アリサ、集まったメンバーに俺が突入して10分してから来い。」

生太刀！

俺のすぐ隣に生太刀が突き刺さる。

生太刀を手に取り向かおうとするが・・・

「司郎」

「ん？」

と振り向くと。

「んっ」

——一瞬時が止まるかと思った。

「……………えっ！」

「ハハッ、やつぱお前に付いていると楽しい事ばかりしかないな」

浅くも深く、亜衣は俺にディーブキスをしてきた。

亜衣テメエこんな手を

「へへ、キスしちやった」

「やめろ、俺をうっかりで殺す気か」

……………ああ、まったく馬鹿女どもが最高だよ！

そして、時間を巻き戻す。

## 28話

「これで、もしも、が起ころうが問題が無い。さあ、喧嘩の時間だ。爺!!」

そう言い放ち、俺は生太刀をヴオバンに投擲する。

「ふんー!」

しかし、その一撃は強風によって明後日の方向に飛び近くにあつた鎧を破壊する。

「まあ、そうだよな」

布都御魂を手に持ちそのまま上段切りを行う。

「いい太刀筋だ。私に挑むぐらいはあるな——だが」

そう、言うのが早いのか出てきたのが早いのかは分からないがヴオバンの足元から20、30匹現れた。

(まだ、自分から攻めてこないか)

まだ、様子見って事か。．．．まさか、舐めていないよな。

「冗談もほどほどにしろよ爺さん。儀式を忘れるほどの興奮を与えてやるからな、高血圧で倒れるなよオ!」

カマイタチを形成し、やってきた狼の体を二つに分ける。

「ほう、風か。なら私もそうさせてもらおう」

「ビュン、そう聞こえる。」

「治まれ」

あつさりと来るであろう強風をそよ風へと弱体化させる。

「豊穰、それだけではないな我が従僕が見たぞ。東洋の古き主神か！それも呪術神！」

「ああ、そうだよ。で遊びはそれで良いのか？」

さつきから遊んでいる感じがしてちよつと腹が立つてくるぞ。

「この程度で俺を殺せると思っていたのか？笑わせるなよ爺さん」

「こんなんで？こんなもので？俺を殺す？・・・ギヤグのつもりだよな。」

「来いよ、夜はまだ始まって間もないんだぜ。お楽しみはこれからだ。かかって来い。」

「Harry! Harry! Harry!!」

言いながら溜め込んだ呪力を雷撃に変換し、横薙ぎに放つ。

『良いだろう、せいぜい私を楽しませてくれよ少年！』

ミチミチと服が千切れるような音がする——瞬間。

『さあ、コングはなった！ラウンドーだ!!』

巨大な人狼現在の場所が場所なのか15メートルと本来よりかは小さい・・・もつとも十分巨体だが。

少女——アリサが儀式場にやって来たのはまさにこのタイミングだった。

カンピオーネ高橋司郎、掴みどころの無い奇妙な矛盾を抱えた男……それが少女の現在の評価だった。

神殺しの覇者の名を知らながら時に傲慢に時に謙虚にカツコつけのナルシストのように振舞えば力の無い凡人のように頭を下げる姿勢が何処か引つかかっていた。

——無論、彼の力を凶り違えてなどいなかった圧倒的な力を持ちここに来るまでボロボロの魔術師や騎士しか見ていないのは文字道理彼が圧倒的な実力者

——嘗てカンピオーネのと言う呼び名が無かった時代にヴォバン公爵が呼ばれていた異名……マスター・オブ・メイガスその名に恥じなかった。

現在、彼が放った雷撃も並みの魔術師ではどうしようも無かった。……だが

雷撃が体毛に弾かれる。

……あれをあつさり彼女以外にもこの一連に驚きを隠せない者も多い。

——その上でも言うべきなのだろうか？さらなる光景が彼女達は更なる追いつきを掛ける。

——ビュウ、ビュウ、ビュウ……風が吹き荒れる。

——ザア、ザア、ザア、ザア耳を澄ませば雨が屋根を強く打ち付ける。

まるで嵐、いや間違はなくこれはヴォバン公爵の権能疾風怒濤（シユトルム・ウント・ドラंक）の嵐の権能だろう。

——ああ、確かにこれでは勝てない。

人は神と魔王の前では跪くしかないそれを理解したのだ。

——しかしなお、この光景を前に悠然と立っていた。

高橋司郎。東洋の古き呪術神を倒しその座へ至った『6人目』はその姿を見てもなお。不動の顔でヴォバンを睨みつけていた。

この程度では届かないと？この程度では届かないと？

「はっ、ほざけよりユケリオス（狼人間）……前から気に入らなかつたんだ」

布都御魂を肩に担ぐように構える。——まるで、自分を一つの矢のように体を丸めて。

「人の命を紙の用に吐き捨てて奴隷の様にこき使い続けるその性格、その権能こつちに  
来てからそれがはつきりと苛立っているんだ」

幻想（フィクション）が現実（リアル）になった瞬間。彼の中のこの男への怒りがあ

ふれている。

——死は一度きり、この世で誰よりも命の重みを理解しているからこそ今を愛しているのだから。

——それはとても永遠の刹那と呼ばれた男とは似ているようでまったく似ていない男、世界に取り残された哀れな迷い人。

——だからこそ、彼は……今を生きるのだと

「を——け」故に貴様はもう要らんここから先は新しい者達の時代だ。

「——を置いてけ」あえていれればいい、飢えていれれば良いのだとそれを知らぬ哀れな老狼よ  
「首を——を置いていけえ！ ヴオバンアアンツツ!!」

——その首を両断するために身体強化を行い一瞬で距離を積みめようとするが

「ツ！」

呪力の塊が近づいてくる。間違いなく強風の権能だ。

——不意に何かが頭に浮かんだ。

「我は四台元素を司る竜なり、強風を贅とし、我に疾風の羽を与えたまえ！」

——瞬間、……俺の体が軽くなった。

## 29話

並の術師10人以上の呪力が溜まった突風が突然と消えた。

ドンと直後に鈍く響く音が部屋に響く。

それに遅れて舞い散る砂埃。そこに司郎は居ない。

「フン」

突然と消えた司郎の行方を匂いで嗅ぎつけたのかヴォバンは後ろを向く。

『神速の権能を持っているようだがコントロールもまともに出来ていないとは舐めてくれる』

「煩え、こちとらこの権能使ったのが今日で初めてなんだ——だがな」

パラパラと砂埃が晴れ、神速の操縦に失敗し、衝撃で壁にクレーターを作った司郎が立ち上がった。

「男子3日会わざればって奴だこんなの秒も要らねえ！」

軽くステップを踏みながら再び神速を発動させ人狼となったヴォバンに迫る。

『ふん……こんなノロマを捉えられないと思ってるのか！』

常人では捉えてれないスピードではあるが先程に比べればかなりゆっくりしており



ヴォバンからすれば狙ってくださいと言っているようなものであった。

……だがしかし、言葉とは裏腹にヴォバンは強靱な狼人間になった自身の腕では無く距離をとり雷撃で迎え撃った。

300年を生きる老魔王。捉えられる速度であつても油断すれば命ごと持つていかない相手であつた為にそこは冷静だつた。

轟！轟！轟！間髪入れずに叩き込まれる雷撃だが、司郎は神速で交わしていく。

そのままあと二歩で断ち切れる距離まで近づいた。……だが、それは相手も同じだった。流石既存する中で最古の魔王、司郎の周りを取り囲むように雷撃が八つ放たれ包围する。

——ツ!!)

5発目まで軽やかに交わすが6発目、7、8から迫る速度に緩急をつけられ獵犬のように迫ってくる上、ヴォバンは更にデカイのを放つ気だ。

——仕掛けるか)

神殺しのスペックでも時間をかけてモノにする神速を司郎は前世の記憶にあるあるモノを脳内で想像して対処する事にした。

——前世で何度か乗ったことのあるミッション車をイメージして対処しようとした。

当然イメージを優先するのでクラッチを踏むように遅くなってしまいがそれも予定通り。

速度が下がるのを利用し、狙いをつけ剣を握った右手を奥に左手を伸ばし剣先につけて牙突の構えに入る。

「——六ギア！」

神速の全速力で突撃する。雷撃は呪力を固めて対処する。

全身を焼けるような痛みで若干痛い。・・・

「何とでもなるはずだ!!」

神剣から放たれる雷撃と神速が混じって出来た閃光が狼王に突き刺さる。

『ウオオオオオオ!!』

受け止めきれずその大きな巨体ごと壁に突っ込み次々と破壊していく。

「——打つて無しね」

二匹の化け物がバトルフィールドを変えて行ったのを見ながらアリスはため息をついた。

(自信もあつた命だつて賭ける覚悟もあつた。・・・でも)

それでも『魔王』の称号を持つ化け物達に比べれば匙でしか無かった。

事前に対策していた狼用の術を物量で押されて追い込まれ偶然通りかかった司郎に助けられ。

公爵に立ち向かえるのは同格の神殺しであるため作戦のほとんどを彼がまとめ、向かうまでの道中でさえ殆ど一人で叩きのめした。

自分に与えられた役割は二つ彼が作った儀式の反動を相殺する結界の死守、儀式が終わり次第囚われた子達を外に待機している所まで誘導するだけ。

実の所結界の死守は司郎が出来るだけどうにかしており、公爵もまた司郎を下した後待ち構えている本命のために巫女達を攻撃出来ないためアリサはただ目の前の怪獣バトルを前にタダっ立っているだけなのだ。

——そして。

「あくあ、やっぱりやってるよ」

「！」

場違いなほののんとした声が儀式上に響く。

「どうしようかな神様が出てくるまで待つか、向こうに行くのも楽しそうだなあ」

神が降臨する間近の修羅場で今日の昼ごはんはどうしようかを悩むような顔をしている背中に剣を背負った金髪の青年。

本来の6人目の神殺しであるサルバトーレ・ドニが、参戦したのだ。

## 30話

「——ゲホゲホつ、ああ、畜生。もう神速使えねえ。……あの爺さん何処……ッア!? ……クソツ、あのジジイ油断ねえ」

「当たり前だ。王の戦いとは一瞬の間でさえ致命傷と思え」

激突から仕切りはなしヴォバンの気配を探ろうとした瞬間砂煙から死臭の漂う騎士が斬りかかってきた。

即座に対応し風を起こし視界を確保する。

周囲を確認しヴォバンの居場所を把握する。

ヴォバンは司郎の約三十歩ほど離れている。普通に歩けば問題無いがヤツの前にはヤツの犠牲者の群れでいっぱいだった。

「このクソジジイ」

転生者であり未だに死んだ時の記憶が残っている司郎にとつて一、二番目に腹が立つ光景である。

「だがな」

今度はコツチが脅かしてやる番だ。精々ギックリ腰ならぬかビビっているがいい。

(亜衣、これから布都を空に飛ばしてチャンスを狙う足掛かりにするデカイのが来たら  
吸収しろ)

(分かった気をつけて)

縁を元にしたパイプを通して亜衣に指示を飛ばせて布都御魂を空に飛ばす。

「何をやる気だ」

警戒するヴォオバンは従僕達を突撃させるが……判断を間違えたな。

「幽冥主宰大神の名において汝ら死者。現世に来る事はからず——」

召喚した生太刀に呪力が纏う。

「——冥府に還れ。……成仏しろ、破アアアアツツツ!!!」

漆黒の呪力を纏った生太刀を縦に一閃する。

「なんだと!?!」

振り下ろされた生太刀の放つ除霊の禁厭によって死せる従僕達は一斉に成仏して  
いった。

「はっ、出てきた奴ら全員成仏しているじゃ無いか。しかも、禁厭を食らった瞬間一斉に  
アンタの首輪を引き千切ろうとしていたから簡単に成仏したじゃないか人望ねえなア  
ンタ……もつとも殺されて奴隷のようにこき使っていれば仕方ないなオイ」

「……なるほど、貴様が最初に倒した神は魔術の神、その神の幾つもの権能を術に

落とし込む権能。このヴオバンにも似た権能はあるがあくまでも篡奪して發揮する権能。その一つである冥界の神の権能を術に使用して従僕達の呪縛を外したな」

「正解だよ爺さん。神が振るう権能と誰もが使える禁厭、力の差は歴然だが」

生太刀を納刀して呪力を刀に込める。

「させると思ふな！」

何かを仕掛けるのは明白でありヴオバンは狼達をけしかける。

「ふっ、ほっ、はっ」

狼達は即座に距離を詰め鋭い爪を振りかざすが司郎は軽やかにステップを踏んで躲けていく。

(早苗、始めるぞ。手順はさつき説明したよな)

(分かりましたが、・・・そ、その、だ、大丈夫なのですか?)

(問題無い『材料』と防衛は任せるぞ)

(・・・分かりました。ご健闘を)

「誰にもを言っているのやら」

そう思いながら司郎は呪力を貯め終えた生太刀の柄を握る手に力を更に込めながら居合いの構えに入る。

「——さあ、始めよう。鎌鼬十三線！」

生太刀を引き抜き高めた呪力をコンクリートさえ切り裂く鎌鼬に変え縦横無尽に叩き込む。

突撃していた狼が壁共々バラバラになり構成していた呪力が空気へと散っていく。

「チツ」

一方、ヴォバンは呪力を固めて鎌鼬を逸らしている。

鎌鼬が司郎達のいる部屋をズタボロにしその上の階にも被害が及び上の階の瓦礫や家具が神殺し達に降り注ぐ。

ヴォバンは権能ではたき落とし。

司郎は風を巧みに操りヴォバンに飛ばしていく。

当然ヴォバンはそれもまた叩き落としてゆく。

一つ、二つ、三つ。前から後ろから一つ横からと瓦礫という瓦礫をヴォバンに飛ばしていく。

(紛れているな)

たかだか瓦礫程度で神殺しを殺すには難しい。当然決めてになるものが必要だ。

神速は恐らく使い切った。他の権能は恐らく今は使えない。残るのら接近戦による斬撃だけだ。

当然そのために距離を詰めようとしている。



砂煙に紛れる。

散らばる瓦礫を素早く移動する。

権能によつては土の中に潜つて攻撃するなど様々だ。

・・・そして。

ガタ。

「そこか」

払い除けるような手で物音と殺気で満ちた場所に狼を放つ。

大方デカイ瓦礫の裏に隠れて風で瓦礫ごと自分を飛ばして距離を詰めるきなのだと  
ヴォバンは思った。

ただの魔術師なら体が保たないだろうが神殺しなら容易く出来るだろう。

「むっ？」

しかし、予想肉を割くような音も切り裂かれる音もしない。代わりにカランと壊れた  
甲冑がバラけるだけであつた。

主無き甲冑には僅かに靈魂のカケラがあつた。

「囃か」

なんて事は無いのだろうただ呪縛から解放された屍人の魂を幾つか捕まえて甲冑に  
付与して瓦礫と共に飛ばす。ひと昔前の神風戦法のようなものだろう。

「ならばヤツは何処だ？」

当然これを利用して仕掛けてくるに違いない。

しかし、煙を吹き飛ばしても司郎は何処に居らず。自慢の狼の鼻も切り落とされた上の階から降ってくる雨に匂いをかき消されてしまった。

自信の持つ嵐の権能のせいで首を絞められるのは滑稽であった。

「むー」

咄嗟にヴォバンは左に避ける。老王がいた場所には大きな瓦礫が落ちてきた。

何故今になって落ちてきた？・・・そう考えれば直ぐに答えが出てきた。

「上かー」

はっとヴォバンは空を見上げた。

———そう、司郎は空からヴォバンを強襲するつもりだった。

初めに二人がいる階からその上の階まで壊せるように切り込みを入れる。

落ちてくる瓦礫と共に其処らの瓦礫を飛ばしていつてヴォバンの視界を奪い。

一斉成仏させた瞬間。従僕の中で一番元気のあった魂を回収し、一矢報いれるかもしれないと取引を持ちかけ近くにあった甲冑に魂を定着。瓦礫にくっ付けて飛ばして陽

動にした。

その後、早苗が上空に飛ばした瓦礫と共に自分も瓦礫を体に引っ付け空に飛ぶ。

沢山の瓦礫の山が岩雪崩と化してヴォバンに襲いかかる。

「ジャ〇ロー降下作戦開始だ」

風で瓦礫を集めたので時間が掛かったが爺さんに接触まで後3秒・・・なのだが。

「それで不意をついたと思ってるのか小僧！」

「チッ！だけどな頭でも打つてろ」

恐ろしいほどのジャンプ力を発揮してコッチに近づいてくるヴォバンの犬共。

だが、ともに落ちている瓦礫達を誘導して連中にぶつけてやる。

鳥と違って狼は一直線。

ちよつと瓦礫に呪力を纏わせれば最低限の時間を稼げる。

奴らは何処その超獣よろしくしっかり元を絶つてやらないと何が起こるか分かったものじゃない。

・・・が、コンマ単位の戦いではこれで十分。

ついでに雷を飛ばしてきたが布都御魂が避雷針になる。

俺が何で剣を飛ばしたのか分かったようだがもう遅い。

漆黒の呪力を纏った生太刀が老王の体を捉える。

## 31話

肉の裂ける音が聞こえる。誰かが刃で体を裂いたのだ。

その音にアリサは思わず最悪の未来を予想してしまった。

奇襲が失敗してあの鋭い爪で切り裂かれた司郎を想像してしまった。

砂煙が晴れば司郎が向こう側の壁を切り裂いたため様子はよく見えた。

……砂煙が晴れる。

「嘘」

「へえ、凄いな先輩ってのは」

隣にいる金髪の軽い男が目の前の光景に目を疑う。

「やってくれたな小僧」

「はっ、何言ってやがる自分から引きちぎったクセに」

半分無くなっている片腕を抑えるヴォバン。

アリサ達欧州を軸に活動する魔術師にとって天災、災害と揶揄される大魔王であった

ヴォバン公爵。

会話を聞くに自分から切ったのだらうがそれでもその状況まで追い込めるのはまず奇跡と言えるものなのだ。

「ああ」

なんて言う強さなんていう凄さ。正に『王』——ああ、なんて。

——妬ましい。

黒い感情が一瞬走る。

「ほんと、しづといよアンタ」

咄嗟に腕で防御した上、死の禁厭を切られた場所を切り外す事で回避した。

今までの神なら縁結びからの冥府落として仕留められるが今回はそうもいかない……  
 と言うか間違はなく気づかされて今回のように腕を切り外すのだらうが……

「こう言う思いつきりの良さってのも大事なのかな」

いくら復活の権能と従僕の中に魔女がいるとはいえ腕を切り離すなんて真似は簡単に出来ない覚悟カングマリすぎだ。

「まあ、良いや、何度でも追い詰めてやるだけだ」

生太刀を構え切り込む隙を見極める……その時だった。

「ッ!？」

「へえ、これも避けるんだ」

「チッ、このタイミングかよー」

咄嗟に感じた恐怖の予感にカルナの鎧を右手だけ顕現させ防ぐ。

司郎の眼前には黄金の籠手に阻まれる銀色に輝く腕と剣。

司郎とそう歳の変わらぬ金髪の青年がイキイキとした目で司郎を見つめている。

とうとう来たのだ。……あの剣バカが。

本来の6人目サルバトーレ・ドニ。主人公の悪友にしてアニメでの騒動の九割は関わっている超ド級の問題児。

もつとも、アメリカの魔王以外大体騒動を起こすし事件が起これば常識人などいないのだ。

「チイツ、おおおおッツ!!」

必要以上鎧を展開したくないのだ。呪力も使うしリソースも食う。

なので剣の向きをずらし、その方向へドニの体を突き飛ばす。

ジークフリートの権能を持っていない今のドニはあっさりと勢いのままつまづく。

「うわああああ!!」

更に残った瓦礫を纏めてドニにぶつけとく。大したダメージも残せないが俺が欲しいのは行動のための時間だ。

既にヴォバンの腕が生え始めている。二人の化け物に相手どれる気がしない。

・・・・故に。

(亜衣！出番だ！)

(分かった！お願い布都御魂！)

今尚大荒れの嵐の空、ヴォバンの権能、疾風怒濤の支配を布都御魂が制圧する。

神速を発動させた時に感じた気配、今、嵐が司郎の支配領域となったからこそ発動出来る権能がある。

「数多の命を繋ぐ水を捧げ、此処に来たれ、翼を持つ蛇よ！」

——瞬間。雨雲に覆われた空が一瞬で晴れ星々が顔を出す。

それと同時に巨大なナニカが現れる。

推定25メートルぐらいの竜型の神獣は南米のカラフルな鳥のような体毛と翼を持ち頭は恐竜のようであった。

司郎は心の中で宝玉獣を七種類、墓地に送ったっけ？とかんがえてしまったのは内緒である。

「薙ぎ払え！」



竜は水ブレスを3人の神殺しに放ってくる。

「おわつ、ちよ待て……ゴラア!!何ご主人に向かって攻撃してるんじゃない」  
キョトンとしやがってこの魔猪め被害の方はともかく誤射は洒落にならない。

「あの爺さんを狙え！」

司令を出すと竜はヴオバンに襲いかかる。

翼から羽を飛ばしたり長い尻尾で鞭のように叩きつけている。

『厄介な眷属を呼びよつて、良いだろうその程度でこのヴオバンをやれると思つているのか!』

三十メートルの人狼になったヴオバンが竜に襲いかかっている。アレなら十分持てば良いだろうアポロン蛇殺しだし。

「——だから俺は……チイツ！」

死の気配に気付き左に避ける。

「へへっ」

目の前にいる剣バカを対応していこう。

「—————本当は神様と戦うつもりだったんだけど……こんなに楽しい事になるとは思わなかったよ」

「生憎と俺は目的はハッキリしているんでな儀式もそろそろ終盤。出てきた神様やるから俺は帰らせてもらいたいんだが」

「釣れないなあ、これがツンデレって奴？何て言うんだっけ？えっと」

「言いながら構えるな。逃がす気は無いか」

布都御魂を呼び戻し生太刀を納刀する。

だらりと剣を持った腕を自由にさせながら距離を詰めて襲いかかって来る。

「チィッ！」

向かって来る魔剣を神剣で弾く。

弾く、弾く、弾く、弾く、呪力差さえどうにかすればカルナの鎧でさえ叩つ斬られる

ドニの権能。

故に神経を尖らせて剣の腹を叩いて剣先を自分の体から離すのが精一杯だった。

剣の腕は向こうが上、その上、初めて使った権能が厄介な化け物を抑えている上その被害を巫女達に行かないように大国主の禁厭で抑えてないといけないため2、5種類ぐらゐの権能を現在進行形で使つてるため反動で頭痛がしている。

「布都御魂！呪力を増やしてやるからもつと強度を上げろ！叩つ斬られるぞ!!」

『異論はない！この戦い剣神として負けられんわ!!』

迫り来る剣を弾き。そのままカウンターを叩き込む。

「最高だよ先輩！名前何って言うんだっけ？僕はドニートトって呼んで良いよ」  
 「誰が言うかバカ！・・・コッチはそれどころじゃ無いんだよ!!」

ジークフリートの権能無くてもサルバトーレ・ドニは十分強く。剣に纏った電撃も意に变えさず千字手になりかけた・・・その時。

「!!」

『とうとう来たか』

鋭い爪で首を飛ばされ崩れ落ちていく蛇を尻目にヴォバンは呟く。同時にドニと司郎も気づいた。アドレナリンが過剰分泌していくような高揚感。まつろわぬ神が降臨する。儀式が終わろうとしているのだ。

巫女達がニーベルングンの歌を寿ぎ。用意されていた触媒に呪力が満ちていく。

「んっ」

同時に何故か完全に消えない蛇の首にも呪力が満ちていく。

『くっくく、どうやらついでも現れるようだな』

「・・・マジかよ」

まさか自分の眷属がまつろわぬ神の触媒になるとはと思った。

蛇の首が消え呪力の塊から漆黒のドラゴンが姿を表した。

3、40メートルはあろうか巨大四足歩行の形をし、巨大な蝙蝠の翼は正しくドラゴ

ン。

普通に考えればファブニールだろうか、．．．問題はそこでは無い。

招来の儀は巫女達の負担が半端では無く実際原作では多くの巫女、魔女は精神、術師として大きくダメージを負い再起不能にされたと描写されている。

当然介入する以上そこをどうにかするために結界術を貼った。

既にファブニールの招来でポロポロだが保険は既に貼っている。

「繫げ、縁結び」

結界から外に用意してもらった紙で出来た身代わり人形が被害を受ける。

術式が切り替わると同時に一人の戦士が現れる。ジークフリートだ。

「これで終わりだ。．．．アリサ！意識が戻った子から道を教えて．．．」

そう、アリサに話しかけた——その瞬間。

「私が過ごした時は黄金のようなひと時でした」

「!?」

ワルキューレ  
死 神は身構えていないときに来るものなのだ。

「けれど。．．．ああ、血濡れたその体を抱きしめて私は泣き叫んだ」

アリサと共に巫女たちは再び儀式を始まる。

招かれた神は既に二体、保険も既に限界だった。

「悲しみと怒りを胸に私は剣と槍を携え全てを毆殺する」

「……糞！お前まで引つ張られるなこのバカ！」

先に現れた二柱を考えれば来るのは恐らく一柱。これ以上来ないだろうが流石にこのままじゃあダメだ。

「悪い2人とも」

早苗と亜衣のラインを断ち切り生太刀を結界の中に投げる。

「紡げ縁結び!!」

手持ちどころにかなる手段がないなら。

「俺自身を身代わりにする」

儀式による負担を身代わり人形から俺に向かわせる――。



「――つ、いきなり切るなんて」

「――はい、でも」



## 32話

——ありがとう、お陰であの人に会えるわ。

「ツ！」

意識が混濁するのを必死に振り払いアリスは目を覚ます。

「——今の声は」

神殺しの三つ巴の戦いを見ながらいつでも避難を行えるように準備し、現れた二柱のまつろわぬ神を確認した瞬間彼女の意識は声が聞こえた瞬間途切れた。

そして状況を確認するために周りを見ようとしたり瞬間それを見た。

美しい顔立ちで鳥の羽を刺し黒いパールを全体にかけた兜を被った女性。

時代錯誤なプレートアーマーが何処か似合い巨大な槍と禍々しいオーラを纏った剣を腰に下げている。

極め付けは背中に生える白鳥の翼が目の前にいる女神が何者なのかを分からせた。

——否、まつろわぬジークフリートに引つ張られる女神なぞ一柱しかないない。

「まつろわぬブリュンヒルデー！」

ブリュンヒルデ、またはブリュンヒルド、北欧の竜殺しの英雄シグルドの妻であった主神オーディンの娘であり戦乙女の一人である。

二人は出会い結ばれたが色々あり別れ、二人は別々の男女と夫婦となりその後悲劇的な最後を二人は迎えた。

この神話が国を越えのちのジークフリートが主役となるニーベルングンの歌へと変わるのだ。

そのためおそらく此度降臨した彼女はもう一つの側面も持っている。

英雄を終わらせる死神だけでは無くその後英雄が無くなった後の悲劇、復讐劇の一面。

——即ち、ジークフリートの妻、クリームヒルトの一面も持っている。

全てを終わらす舞台の幕、機械仕掛けの神。

それがかの女神、ブリュンヒルデ・クリームヒルト。この狂ったニーベルングンの歌を終わらす死神である。

「——ッ!?!」

状況もそうだがアリスサに向かって礼をするのはこの顕現には彼女の血筋が影響しているのだろう。

——アリスサ・アウトテオの所属する黄昏の十字結社は北欧、古のバイ



キングが源流であつた。

恐ろしい海賊であつたが彼らは優れた航海技術を持つ航海者でもあつた故にキリストの騎士達とも交流があり時代と共に混ざり合い結果現在の黄昏の十字結社が出来上がった。

故にキリスト、シャルルマーニュ、アーサー王などのヨーロッパで盛んだつたものよりもアリサには北欧の魔術、それも地母神フレイヤなどに仕える魔女の血筋が強く出ていた、

故に北欧の魔術、特にワルキューレに高い適正があり。それによりこうしてブリュンヒルデに目をつけられたのだ。

「……つ、……うう、……」

穏やかな貴婦人のような微笑みだがそれ以上に体から溢れる凄まじい死のプレッシャー。

心臓を鷲掴みされたような重圧と恐怖で動かない体はまるで死刑執行前の死刑囚のような錯覚だ。

「……た、……た、高橋司郎……」

この状況を打開出来る存在である神殺しの名を呼ぶ。

———  
されど

「……高橋司郎?」

名前を呼んでも俯いたまま、突っ立っている。

もう一度声をかけようとした——その時。

「ア」

「……え」

「アアアアア、」

高橋司郎の体が膨張した。

170cmより高めの身長が5メートルほどの巨大となっていき着ていた服が弾け飛ぶ。

腕や脚も身長と同じく大きくなり丸太のように太くなっていく。

それに伴い体からカラフルな羽が生えていき背中から翼竜のような翼が生えて来る。

そして恐るべき大魔王さえ不敵な笑みを浮かべられた顔は前に伸びティラノサウルスのような恐竜の顔に変わっていった。

南米の鳥のような羽毛を生やした。恐竜と二足歩行のドラゴンのようやカメラの竜人に高橋司郎は変わっていった。

「な、な、……何で」

——結論から言えば権能の暴走である。

曰くケツアルコアトルは人身御供をやめさせた際宿敵テスカトリポカによって呪いの酒を騙されて飲み暴走してしまい自身の妹と肉体関係を結びアステカの地を追われたと言われている。

儀式の影響を一人で受け止めたせいで理性が飛び神殺しの生存本能がケツアルコアトルの権能を暴走させたのだ。

それによりケツアルコアトルの権能の化身と言うべきものが高橋司郎の体に乗っ取り生存本能と闘争本能でケツアルコアトルの権能だけを行使する化け物になってしまったのだ。

未だ制御出来ていない権能を持つゆえになのかそれともそれが神殺しのサガなのかは誰にもわからぬが。

「ひいっ!?!」

誰かの悲鳴が聞こえる。

儀式が終わり正気に戻った者達からすれば目の前に異形の化け物が唸り声を上げているのだ。

恐怖を感じずにはいられないのだ。

「ふん、興醒めだ。狂いおって。もう良い儀式も終わった死ぬ小僧」



翼を上へ広げ羽の隙間から風を噴き出してくる。

「空へ飛ぶ気ですか」

ブリュンヒルデが咄くと同時に竜体が浮かび空へ飛翔する。

「グオオオオオオツツツツツ!!」

フアブニールは翼を広げ司郎を追いかけるために飛翔する。

「——まっ、」

その光景に呆気にとられ空に羽ばたく二体の竜によつて天井が完全に崩壊し、瓦礫がアリサに降り注ぐ。

「——ッ!」

死ぬ。そうアリサ・アウツテオは思った。

——頭上に落ちる瓦礫が何かの攻撃によつて砕かれた事によつて事なきを得たが。

得たが。

「——誰?」

そう思った瞬間。

「——早く逃げろ——!!死ぬぞ!!」

「——あ、貴方は」

一瞬だが覚えがあった。この儀式場の見張りをしていた呪術師だ。

「何故、ヴォバン公爵の方が？」

「何を言ってるやがる！儀式は終わってまつろわぬ神が顕現しただろうが！もう公爵はこの子達に興味なんかねえよ！」

「あの日本人の魔王様、あんなに若いのにあのヴォバン公爵に挑んでお前さん達を助ける？・・・ために身代わりになったんだぞ」

「遠くで使い魔越しに見てたがよこれじゃあ恥ずかしくって戻れる場所も無いんだよ！」

「急げ！他の魔王とまつろわぬ神が続きを始めやがった！こつちだ！」

ヴォバン配下の男が来た道を示す。

「わ、分かりました。皆さん、彼方に」

日本人の少女があの一番に声を上げて他の巫女達を先導する。

「急げ！動ける者は体が動けない者に手を貸してやってくれ！」

状況を理解し、儀式に着ていた服から青い服に着替えた銀髪の少女も避難に遅れていてる子を支えている。

「私は」

悔しさを握りしめながらアリサは行くてを邪魔する瓦礫や障害を蹴散らしながら避

難を手伝った。

## 33話

「出てきたぞ！」

「急げ！この雨の上、やつれていている子がいるぞ！」

「よく頑張った！もうすぐ帰れるぞ」

瓦礫を払い抜き脱出したアリサ達。

事前に脱出した子達を保護するために集められた別働隊が手厚く保護する。

敵も味方も無い。ここからが自分達の仕事だと彼らは一生懸命に行動している。

それを複雑な気持ちで見ているアリサ。

彼らに混ざり手助けをしても良かった。捕まっていた仲間に会いに行っても良かった。

でも出来なかった。アリサ・アウツテオの中にあるナニカ。それが彼女を迷わせていた。

「私は何を」



「……見つけた。アリサちゃん！」

すれば良いんだろう？と悩んでいたアリサに亜衣と早苗が駆けつける。

「二人共」

「司郎は？司郎はまだあそこにいるの？アイツ私たちのラインを切っちゃって」

「彼は」

空に指を指す。

「何で空に——まさか」

「——ッ、やはりあの時見えた幻視は」

亜衣と早苗は空を見る。

ヴオバン公爵の権能で大嵐の上時刻は夜、先の見えない黒い夜空で激突する二体の

竜。

「ヤアアアアアアアアア!!」

嵐の夜ではとても見えにくい10メートルサイズの黒竜。ファブニール。

「」

逆にこの夜空には不釣り合いなカラフルの体毛をした5メートルサイズの竜と恐竜

が混ざり合ったナニカに変貌した高橋司郎。

何処かに飛び去りたい司郎とそれを打ち落としたいファブニール。

嵐の夜での飛行戦は背中を取り合うドッグファイトへと発展していった。

フアブニールが司郎に向けて火炎弾を放つが司郎は右へ左へ交わしていき羽を機雷のようにばら撒き爆破させていく。

空は目にも止まらぬスピードで空を切り裂き、火炎と爆発が飛び交う戦場と化していた。

「ね、ねえ、．．．もしかしてだけど。ーああのドラゴンの一つって」  
「ええ、どうしてこうなったのかは私にも分かりませんが．．．彼は高橋司郎は正気を失ってあのような姿に」

「そんな」  
衝撃の事実には膝つく亜衣。

「実は私たちはあの二体が出てくる前に大国主の権能で司郎さんと魔術的なラインを繋げていたのですがそれを司郎さんが一方的に切ってしまったので、何かあったのですか？」

真剣な目でアリサを見つめる早苗。

「二つ聞いて良い？」

「なんですか？」

「貴方達が用意したあの紙人形って要するにスケープゴートの類で間違いない？」

「ええ、身代わり人形の一種ですが」

「もう一つ高橋司郎の第一の権能って他の術に介入できる能力もあるの?」

「そう言っていましたか……もしかして」

「——これが私の目の前に突き刺さっていたのと一瞬、私たちに降り注ぐオドロドロしい光のようなものを彼が庇ったようなビジョンが見えたの」

「言いながら生太刀を二人に渡す。」

「……司郎」

「雷鳴轟く空を見上げてる亜衣。」

「」

「ヤアアア!!」

「少女達の心配を余所に化け物になってしまった司郎とファブニールの空中戦は続く。」

「逃げ切れ無いと判断した司郎の本能はファブニールを撃退するために三十枚程の剛

鉄の羽を作り出しミサイルの用に飛ばしていく。」

それに対応するために再び自信の皮膚を硬化させ羽を受け止める。

しかし、顔付近に飛んできた羽は爆発し、ファブニールの視界を塞ぐ。

煙に乗じて神速タックルをファブニールの腹に叩き込む。

「グゴオオオツ」

効果があつたのか唸り声を上げるファブニールに体を捻りドラゴンテールを再び腹に叩き込む。

「だか?」  
 ファブニールは腕で尻尾を受け止め口から紫のブレスを放つ。

「!」

咄嗟に距離を取ろうとしたがブレスに当たってしまい。更にはファブニールが放つたブレスは毒ブレスであり。司郎の竜体はファブニールの毒が体を蝕む。

「シヤアアア!!」

速度が上がらない司郎を追い討ちするためにファブニールはその鋭い爪で肩羽を切り裂く。

翼を切り裂かれ落ちていく司郎に更に追い討ちをかけるために火球ブレスを五発叩き込む。

「」

翼をもがれ、かつてケツアルコアトルを冥界に叩き落とした司郎は今度は自分が空から地面に叩き落とされた。

「」

「……ねえ、もう一つ良いかしら?」

墜落する司郎を見たアリサは二人に話しかける。

「何？」

急いで司郎の元に向かいたい亜衣だが、何処か覚悟を決めたかのような気配に真摯に向き合う。

「貴方達はその・・・怖くないの？」

「それはどのような？」

聞き返す早苗にアリサは答えた。

「神殺しの戦いは文字通り神話の戦い。そう聞いていたけど正直いまいちピンとこなかったの・・・彼の戦いを見る前は」

「・・・」

「平気で物を吹き飛ばし、一流の術師数人分の一撃をシャブみたいに放つそんな戦場に私たち人間のできることは少ないの」

「だからもう一度言うの・・・そんな命が幾つかあっても足りない戦いにどうして身を投じれるの？・・・怖く・・・無いの？」

「・・・司郎つてさ、見た目よりも繊細なんだよね」

語り始める亜衣。それは別世界に迷い込んでしまった男の話。

「太々しいけど何かに必死にならないと生きていけないらしくてね、そんな調子で神様に喧嘩売って勝っちゃったらしいの」

国津神の最高神である大国主と戦い高橋司郎はそうやって勝ってカンピオーネになった。

「でもね、弓を持った神様に負けて、ボロボロでお腹に剣が突き刺さっていた姿を見て私、ゾツとしたの」

「それは」

「———そんな司郎を見て司郎が戦いから逃げられないのなら。せめてやれることはやりたい。それが、私の理由なの」

「———正直、まだ悩んでいる事が沢山あります」

巫衣の話の聞き早苗もまた自分の思いを述べる。

「初めは上の指示だったんですよ。でも、一緒にいて一年ほどですけどこの人のために自分が出る事はやるって決めたんです。もし、組織と司郎さん、どっちを取るかわれたら迷わず司郎さんを選びます」

「—————呆れた。つて言うより納得したわ。そんな風に神殺しの周りには人が集

まるって理解したわ」

「何が？」

「女神フレイヤよ戦少女に白鳥の羽衣を与えたたまえ」

「ちよっーーーーー」

「ーーーーーお先に行かせてもらおうわよ」

聞き返す亜衣を尻目に飛翔の術を使い飛び去るアリサ。

「ちよつと、何なのよあいつ」

「……行きましょう。恐らく行き先は同じなはずです」

「……うん、心配だからね」

少女達は動き出す。大切な人の元へ。

神殺しの周りには多くの人や組織が集まる。

今回の元凶であるヴォバン公爵も多くの信奉者があり。聞くところによれば孫娘を今回の儀式に差し出した。アリサ達からすれば狂人としか言えない人間もいる。

どうしてそんなに神殺し達に心酔するのか疑問に思う時もあった。

自分達より優れているのは知っているがあそこまで良い物なのかと考えていた。

その考えは先の戦いで変わった。

災害の如き苛烈さの攻撃を物ともせず欧州一の大魔王の片腕を奪った  
高橋司郎。

そんな彼の背中を見て思ってしまった一つの感情。

一度はそれを否定しようと思った。

だが、自分も仲間たちも助けられておめおめと自分だけ帰れるのか。

「借りは返します。私は黄昏の十字結社の騎士。勇者の隣に立つ戦少女よ！」

白鳥の翼を羽ばたかせアリサ・アウツテオは己が認めた神殺しへと飛翔するのだ。



## 34話

「——いた」

墜落し、地面に横倒れる竜体の司郎。

白鳥の翼を解きアリサはゆっくりと近づく。

「っ、何で匂いなの」

竜体は並の術師なら間違いなく死亡しているレベルの毒が体を蝕み腐食している。

それでもその目は死んでおらず何かを探している。

「っ……」

眼前にいる異形への恐怖がアリサの心を覆う。

「私が、やらなくちゃ」

異形に成り果てた者を元に戻せる者は禍払いのようなく一部に巫女ぐらいしかない。  
ない。

アリサにはそのような特異な才能は無い。……だが。

「正気にさえ戻せれば」

今回のケースはまつろわぬ神召喚の儀にて参加していた巫女や魔女にかかったであ

ろう影響を肩代わりして発狂した本人が持つ権能が暴走して起きたのが今の司郎だ。

正氣に戻せば権能を制御して元に戻るのでは無いか？

成功率は五分五分失敗すれば命は無い無謀な賭け。

「つ、やってみせるのよ」

おそろおそろと近づくアリサ。

毒でボロボロ、敵意も見せてないとは言え正氣を失った異形の姿の神殺し。

これに恐怖を持たない人間はまず居ない。

「——狂氣に堕ちた聖騎士よ」

恐怖を握りしめて勇氣を奮い立たせて狂氣払いの呪文を唱え始める。

「友が月より見つけし汝の正氣を入れし小瓶を飲み干し」

曰く北欧の北風が勇敢で恐れ知らずのバイキングを生み出したと言う。

「目を覚ましたまえ——」

異形の唇に自身の唇を重ねる。

——重い——重い。

体が重油に浸かっているかのように重く体が動かない。

脳も血管が塞がっているんじゃないかと思うかのように思考が回らない。

常人ならそのまま目を閉じて楽になろうとするだろうこの状況。

それでも彼は這いあがろうと体に指令を飛ばしていた。

——何でそんなに這いあがろうとするの？

——分からない。

意識を手放せばきつと楽になれば良いのだろう。そうすることで何もかもが不要になる。

——けれど彼にはその選択肢が無かった。

哀れだと誰かは言うのかもしれない。もう良いだろうと言うものもいるかもしれない。

でも、彼は諦めなかった。

それは何故か？・・・答えにすれば単純な事だ。

——負けたく無い。

子供の様な負けず嫌い。呆れるものも多いだろう。

だが、事神々と神殺しの戦いにおいてそれは必須不可欠。

神々と神殺しの戦いに置いてもっとも重要なのは武器や権能では無い。

己の目的を貫く意志に他ない。

例え天地、運命さえも敵に回しても己の目的を達成する。

それが神々と神殺しの強さ。

——ッ！

だからこそ。何も見えない暗闇の中を照らす光を待つことが出来た。

その光の中から一羽の白鳥が飛んできた。

わずかに回らなかつた頭が回る様になって来た。そう感じた司郎は脳内に浮かんできた脱皮する蛇の絵を書いた石版のような物を頭に浮かべた。

「ツ、熱い!？」

熱を感じ思わず離れるアリサ。

竜体は見る見るうちに燃え広がり金色の灰が竜体を包む。

「っ、・・・このビジョンは」

アリサの脳内に浮かぶビジョン。魔女としての霊感が目の前の現象を教えてくれる。

曰くケツアルコアトルがテスカトリポカによつて追放された時ケツアルコアトルは自らを宮殿と財宝ごと焼きその灰は美しい鳥となつて金星に飛んでいったとされている。

そして一の葦の年に復活するとされている。

——そして、ケツアルコアトルは16世紀ごろのメキシコで使われた古典ナワトル語にて羽毛ある蛇を意味する。

古来より蛇は再生と死の象徴。

蛇であるケツアルコアトルが持つ再生の権能。

それが、高橋司郎がまつろわぬケツアルコアトルから篡奪した権能の三つ目。

自信と大量の呪力を捧げて体を再構築する能力なのだ。

「——ツ、まだ頭がクラクラする」

燃え盛る炎の中。体を再構築したせいなのか、それとも異形の化け物に変身したから

なのを着ていた服が無かったので炎で周りが見えない内に術を使い動きやすい格好に着替える。

「・・・ようアリサ。悪いな。カッコ悪い姿晒した上唇まで貫つて」

「——ツ、気づいていたって言うの!？」

「いや、術をかけられた感じがして目が覚めたら近くにお前しか居なかったから」

「・・・うう」

顔を赤くして明後日にそっぽ巻く。

「クク、可愛い奴」

そう言いながら司郎は生太刀を召喚する。

「——行くの?」

「——ああ、放つてはおけないからな」

視線の先には三柱のまつろわぬ神と二人の神殺しが繰り広げる戦場遠くからも分かった。

「やらなきや更に被害が増える。昔の消化作業と同じだ燃える前にあらかた壊して被害を減らす。まつろわぬ神々は早急に現世に立ち去ってもら——」

突然司郎は苦しみ始め地面に膝をつけてしまう。

「ツ、そんな体なの!？」

アリサの言葉通り司郎は五体こそ万全だが、呪力は三分の一にも満たなく。疲労もかなり溜まっている。

「まあな、俺たち神殺しは納得するまで何処までも進み続ける。腹はもう括っているんだ。なあなあで終わらないのが分かっているんだ。大惨事に気づけず自分のケツを拭こうとしない奴じゃないんだよ俺は」

どこまでも突き進むもうとする理由を聞いたアリサは頷いた。

「分かった。．．．．目を閉じて」

それに頷いた司郎は目を閉じる。アリサは司郎が目を閉じたのを確認し司郎の顔を手で掴んで自分の顔も近づける。

「んっ」

自分と司郎の唇を重ねキスをする。先程とは打って変わり躊躇なく行う。

離してはまた重ねる。まるで母鳥が子供に餌を与えるかのように何度も繰り返ししていく。

キスを重ねる度にアリサから呪力が流れていく。

同時に司郎は気づいた。ただ呪力を補給するためだけじゃないと。

自分の体の中に流れていくアリサの呪力の中にはおそらくバフ系列の術が混じっている。

「んっ!？」

ではお返しにと言わんばかりに今度は司郎がキスをする。

「んんんっくくく!？」

唇を重ねるだけでは終わらない。アリサの口に舌を入れ舌と舌を重ねるディープリキスをし、アリサから呪力とその力をも取り込む。

更に大國主の権能による加護を流し込む。

この一件が終わった後問題があつたとしても後で止めておけば良い。

「っ、……この変態!」

「ぶへらっ!？」

流石にやりすぎたのか息を吸うために唇を離したら呪力の籠った平手打ちをくらった。

頑丈で普通の人間が殴れば逆に怪我をする神殺しの体でも呪力が籠った平手打ちは多少堪える。

「……悪い。ちよつと調子に乗りすぎた」

「分かつたなら良いわよ」

今なお降り頻る嵐の夜。今出来る事は殆どやり終えた。

そろそろ早苗と亜衣が到着するだろう。



歌劇はいよいよクライマックス。この狂ったニーベルンゲンの歌もいよいよ終局へと移っていく。



邪竜ファブニールの業火が戦場を真つ赤に焼き焦がす。

不幸中の幸いなのは空は大雨の嵐なのでたちまち鎮火する事だろう。

この戦場に味方など居ない。

ニーベルンゲンの歌において殺し、殺された竜殺しと邪竜。二人の神殺しは言わずもがな、竜殺しの伴侶でもあつたブリュンヒルデでさえ自身の業である英雄殺しに突き動かされている。

隙を見せれば死あるのみの大乱闘とかしていた。

——して、この大乱闘に飛翔する者がいた。

「戻ったか小僧」

飛翔する者。戦少女の白鳥の翼の術を使って飛んでいるアリサ・アウツテオと高橋司郎の二人だ。それに気づき不敵な笑みを浮かべるヴォバン。

「へへっ、やつぱりタダじゃ終わらないよね。もっと、暑い夜を過ごそうじゃないか！」  
気色の悪い事を言いながら司郎に斬りかかろうとするドニに対して。

「お前は後！」

このクレイジーサイコホモめと呆れながらアリサと離れ迫ってくるドニに対して獲物を取り出し飛んでくる魔剣の腹を叩き逸らす。

「そんなあ、つれない事を言わないでよ。君と僕の仲でじゃないか」

続けて今まで戦ってきた軍神、英雄神に並ぶほどの剣技が司郎に迫る。

「待っても出来ないのかこの馬鹿！それにお前とは会って一時間も経ってないじゃねえか！」

へきへきしながらドニの剣を捌き続ける。

「そんな事は無いよ。ほら君の国には戦う事で生まれる愛——ゲホアツ！」

「——愛じゃなくて友情だ！後、俺はそんなケは無い！」

ドニの言葉に司郎は思わずツツコミとして魔剣を大きく弾かせ蹴りをかます。

「つれないなあ、コレがジャパニーズツンデレって奴なのかな・・・そう言えば剣変えたんだ」

「・・・悪いかちよつと野暮用でな」

ドニの言う通り司郎が今武器として使っているのは一振りの日本刀。

力もろくに無い、只人だった頃に司郎が愛用していた一振り。

司郎とてこんな戦場に使用する機会があったとはと驚いていた。

「——ッ、クソおッ！」

「我らが居るのに神殺し同士で殺し合いとはな呆れてものも言えないな」

「ジークフリート!!」

邪竜、戦乙女、魔王の猛攻を潜り抜け竜殺しの英雄神が司郎に迫る。

魔劍バルムンクによる縦一線の一撃が迫る。マツハにも迫るほどの速度で振るわれる鉄塊の如き魔劍の一撃は魔術師軍団をあつという間に全滅させるであろう暴走した司郎の竜体の羽飛ばしさえも平然とする邪竜の体をバターののように両断するだろう。

猛烈な殺気を感じ咄嗟に刀で受け止めようとしたが大国主の権能で強化したものであれただの日本刀では受け止められず先端がへし折られ魔劍は司郎の肩に深く刺さる。

「ツ、があツツツ!!・・・だ、・・・だが!地面よ、開け!」

苦痛に耐えながら大地に干渉する禁厭を使い地割れを引き起こす。

「——ツツツ、うおりやああああ!!」

「ツ、この俺を——!」

そして同時に切られた方とは逆の腕でジークフリートの首を掴み、片足を絡ませる。

鋼の体のジークフリートはまるで人の形をした重い鉄の柱か何かのようであり。鉄骨のような首と足のバランスを崩すために筋力強化や風の禁厭で補強し崩れる地面も利用して足払いする。

「わっわっ、わあああああ——!」

同じく近くにいたドニも地割れに巻き込まれ地面の奥深くに落ちていく。

「ツ、——神殺し!!」

「ハハツ、悪いな大英雄。そこでそのバカと殺しあつてろ。お互い生きてたらケリを

つけようしやないか！」

自由落下になつた瞬間。飛んできたアリサの手を取り司郎は地割れから脱出する。

「悪い助かつた」

「ほんと無茶をする」

感謝を述べる司郎。それに呆れるアリサ。

「よく生きていた小僧それではなくては張り合いも無い」

残つた二柱を牽制しながらヴオバンは司郎を睨みつける。

「・・・お互いな、元氣の良い爺さんだなアンタ」

へし折れた日本刀を構える。

「グウウウウ・・・」

「フフフツ」

同じように邪竜と戦乙女も眼前にいる三つの脅威の動きを警戒している。

「——ツ、分かつてたけど・・・とんでもない場違いね」

相棒である司郎以外誰もアリサに意識を向けようとしなない。

象が蟻を気にしようとしなないように神クラスの存在達からすれば人間としてはそれなりに出来るが神獣一頭もろくに倒せない彼女は路上の蟻に過ぎない。

「——我が妹達よ、恐れ知らずの勇士達をヴアルハラへと誘いなさい」

最初に動いたのはブリュンヒルデークリームヒルト、ワルクユーレ達を呼び出し合計4人のワルクユーレは司郎とアリサに襲い掛かる。

「ッ、・・・チイツ！」

分断され3体のワルクユーレに囲まれた司郎。

「……………」

白いローブを被りアイドル顔負けの美貌をしているが無機質で何を考えてるか分からないその眼は眼前の神殺しを冥府へと誘わんと槍と盾を構え三方向から別々に時間差をつけて迫る。

並の術師ならまず死ぬ詰みの状況だが司郎は神殺し、下級神獣クラスではまず殺せない。

シールドバツシユを仕掛けたワルクユーレに対して風の籠手を作り受け流し、隙だらけの後頭部にストレートトを叩き込んだ。

「……………」  
ワルクユーレは後頭部を殴られ意識を失い倒れ伏した。

「……………!?!」

ストレートトを叩き込んだ隙を狙い続く2体目のワルクユーレが槍を縦に振り翳し司郎の頭を叩き割ろうとしたが司郎はそれを見抜きカウンターと言わんばかりに雷撃と

肉体強化の禁厭で強化し肘鉄が二体目のワルキューレの腹に突き刺さり倒れる。

その光景を見て距離をとって攻撃しようとしたのか三体目のワルキューレは幾つものルーン文字が刻まれた槍を投擲しようとしていた。

「させるかよ—— 結べ縁結び」

本能で気づき刀を三体目のワルキューレに投擲し鎧の一部に当たった瞬間倒れているワルキューレに足で蹴り縁を結ばせる。

「!？」

見えない糸に引つ張られるかのように倒れているワルキューレに三体目はぶつかる。

「痺れろ！」

雷撃の禁厭が籠った札を取り出し3体のワルキューレ達に叩き込む。

疾風怒濤クラスの雷撃には下級神獣レベルのワルキューレ達には耐えられずあっさりと消滅する。

「ツ、・・・はあああつっ！」

「!」



槍と槍が激突し鉄の擦れる音が響く。

司郎と分断されワルキューレと戦っているアリサ。

神殺しであれば取るに足らない相手であるがその実力は大騎士を上回る存在だ。

「ツ！」

縦、横と長槍が迫ってくるのをアリサもまた自信の槍で防いでいく。

「目を覚ました私に待っていたのは燃えるような出会いでした」

ワルキューレの猛攻を受け止めながらアリサは詠唱する。

「——尊き方の炎さえも貴方の心は揺れなかった。燃え盛る業火を前にしても意に返さず駿馬を走らせ飛び越えた」

初めて会った時胸にあったのは嫉妬だった。

二人の出会いには儀式場に忍び込みヴォバン配下の狼に追われ逃げていた際のこと。

ヴォバンの狼は有名だが一頭一頭は実力さえ有れば問題なく倒すことができアリサもまた実力もあり対策も充分用意していた。

だが、あまりにも数が多く対応しきれないから逃げたのだ。

「——嗚呼、強く逞しく勇氣ある貴方。貴方を見た瞬間私の頭はいつも貴方のことを考えてしまう」

それを何だ。大騎士レベルが尻尾を巻いて逃げる状態を片手間で片付けて欧州一の

大魔王の片腕を奪う真似が何人できると言うのか。

「——巨人も邪竜でさえも貴方は恐れず勝利するでしょう」

——「——ただと同時にその光景に見張っていた。」

その強さ、己を犠牲にできる心の強さ。

それはアリサ・アウツテオという一人の少女にとつてとても眩しく惹かれた。

「——この胸にある思いを胸に私は貴方と幾つもの戦場へと繰り出そう」

——「故に認めよう。一人の術師としてかそれとも女としてかはまだ分からないけ

ど

「——死が二人を分つまで。私は貴方と添い遂げよう」

アリサ・アウツテオは高橋司郎に惚れていると。

最後の一節を唱え自身の服装と槍に術を纏わせる。

頭には兜がつき服装は白鳥の羽衣と鎖帷子に様変わり槍を持つアリサの姿は神話に伝えられるワルキューレそのものだった。

自身を含めて男性一人にかけて初めて発動する神をも傷つける彼女の所属する黄昏の十字結社を始めとする北欧の一部の実力のある術師だけが会得出来る奥義が完成したのだ。

「ハアアアアアッ!!」

完成したことでアリサのステータスは大きく上がり力のままに槍を振るう。

「!?」

ワルキューレにとって目の前にいる人間の力が急激に上がり対応するのに若干遅れてしまい防戦一方になってしまう。

「!?」

そして、一瞬の間をつきワルキューレの持つ槍を下からかち上げ槍を天高く飛ばす。

「トネリコより作られし魔槍はいかなる敵をも外さず命を奪う槍なり!!」

武器を失った僅かな隙も見逃さず魔槍グングニルの魔術を乗せた槍を投擲する。

胸に槍が突き刺さったことで最後のワルキューレもまたその姿を消滅させた。

「はあはあ、……ふう……」

強敵を打ち倒した事への高揚感からか自然と息が荒くなってしまう。

「——心配は無用だったかな?」

「え、ええ、あの程度なら」

「そりや良かった」

やってきた司郎の言葉に返答するアリサ。何気ないやりとりだが落ち着き払い興奮はすれど周りが見えないほどではなく恐れもしっかりと握りしめていると感じ問題ないようだと司郎は思った。

「——流石にやりますね。神殺しだけならともかくそちらの子も戦士としての  
 実力は確かなようです」

「——ブリュンヒルデ・クリームヒルト」

司郎とアリサの前にやって来たブリュンヒルデ・クリームヒルト、アリサやワル  
 キューレ達が持つどの槍も巨大な大槍を携えてやってきた。

「否定はしません。私は英雄シグルドの妻であるブリュンヒルデであり英雄ジークフ  
 リートの妻であるクリームヒルトでもある。どちらを重きに置くかはともかく今の私  
 にはブリュンヒルデの方がしつくり来るのです。ですのでブリュンヒルデと読んで欲  
 しいですね。・・・ああ」

大槍を構えてまつろわぬ戦乙女は眼前にいる二人の戦士を見つめる。

「お二人は紛れもない勇士。故に父オーデインの住まうヴァルハラに相応しい存在」

ブリュンヒルデから溢れ出す呪力。それに合わせるかのように黒い煙のように立ち  
 昇るプレツシャーと殺意が合わさり漆黒のオーラを纏っているかのような錯覚を覚え  
 させる。

「お二人をヴァルハラに送って差し上げます。父オーデインもお喜びになるでしょう」

「・・・っ、・・・うう」

戦わなければ死ぬ。それなのに眼前にいるブリュンヒルデの覇気にアリサの槍を持

つ手が僅かに震える。濃密な死の気配に怯えない人間は少ない。

神獣クラスと神霊クラスではプレッシャーのレベルが遥かに違う。

——だが。

「悪いがな。俺もこいつもそんな地獄行く気がないんでな。他をあたれ」

折れた刀で牽制しながらアリサの肩を軽く叩き落ち着かさせる。

「——え？」

落ち着くことは出来たが同時にアリサは疑問に思った。

——何故かヴァルハラ送ると言った瞬間。何故急にそんなに敵意を向けているのだろうか？相手の本質を知っているはずならそんなものと捉えて仕舞えばいいのに何故そんなに敵意を向けているのだろうか？

「——理由を聞いても？」

思わず聞いてくるブリュンヒルデ。

「死は一度きり。誰だつて死ぬ怖さを抱えて生きている。でも、それは一回しか無い。一度死ねばもう二度と死なない。死の恐怖に怯えずにすむ。・・・記憶を持つて二度目の人生をやる羽目にならなければ」

それは二度目の人生をやる羽目になった男の本音。理不尽に奪われ理不尽に生かされた二度目の人生。

「――北歐神話の死の世界の一つヴァルハラ。戦死した人間。あんた達ワルキューレやオーディンに殺されたりした人間達が行き着く場所。朝はラグナロクに備えるために訓練と言う名の殺し合いをし続け夜になれば復活する。逆に夜は朝の戦いの疲れを癒すためにワルキューレ達を愛でる。確かに人によつては楽しいのかもしれないがな。俺はごめんだ」

「――そうですか。それは残念ですね。……ですが私には関係ありません」  
 納得しても止めることは出来ない。彼女は女神にして死神。戦士たちをヴァルハラに連れて行く戦乙女。優れた戦士を前に後ろを向く事は出来ないのだ。

「――悪い。余計な事を言つたか？」

「……いえ、俄然やる気が出たので」

「……そうかい。――行くぞ」

「――ええ！」

「来なさい勇ましい勇士たちよ!!」

司郎もアリサも武器を改めて構え眼前にいるまつろわぬ神迫る。

新たな演者を啜えこの狂ったニーベルンゲンの歌もいよいよ佳境に入っていくのだ。

「幸魂奇魂守給幸給」  
さきみたましままもりたまえさきはえたまえ

まつろわぬ神三柱と3人の神殺しがぶつかる戦場から少し離れた所で早苗と亜衣はいた。

何故か地面に突き刺さっている布都御魂を前に早苗は祝詞を唱え亜衣は生太刀を握り舞を捧げていた。

突き刺さっている神剣もまた何も語らない。大地の力を吸収しながら己が必要な時を待ち続ける。

全ては自らの愛する神殺しに勝利を手にするため二人の少女は己のすべきことを遂行する。

## 36話

「フフフツ、アハハハハツ!!」

「ツ、——ちいつ!・・・ったく・・・このおつ、・・・チイツ、重い」

戦闘が始まり戦況はブリュンヒルデ側が優勢だった。

司郎は現在先の復活の際膨大な呪力を失い現在三割ぐらいしか残量は無い。

更に愛刀の生太刀と布都御魂は諸事情で離れており人間時代に使っていた名無しの刀を使っているがいかんせんただの刀。力を込めなければ役に立たない上ジークフリートとの戦いにて先端が折られている。

そのためリーチが通常より短く。かつ突きなどの技が威力が下がる。

「——ツ!?!」

「フフフツ、惜しかったですね」

その隙を突いて振り下ろされたアリサの槍もまたあつさりとかわされる。

「ツ、——ハアアアアツ!」

続けて槍を振るう。それをブリュンヒルデは易々と躲していく。

「いただきますね」



振り終えた隙を逃さない戦乙女では無く英雄殺しの槍がアリサに迫る。

「させるか！」

刀を払い槍をはたき落とす。

「流石ですな神殺し」

ドロリとした視線を更に司郎に注いでくる。

「どうしてです？」

英雄殺しの槍が迫る。

「何がだ」

迫る一撃を躲し、返刀と言わんばかりに叩き込む。

「どうしてそんなに生にしがみつきますか？」

お返しと言わんばかりに更に英雄殺しの槍を一撃、二撃、三撃、四撃五撃六撃七撃八

撃九十——当たれば吹き飛ぶ一撃を次々と繰り出して行く。

「生きたいと思うのは当たり前だろう」

司郎はそれを次々と受け流して行く。

「なら何故あんな事を言うのですか？」

「何のことか？」

大ぶりの一撃に対して司郎は距離を取りブリュンヒルデもまた距離を取る。

「死は一度きりと言うのであれば……何故死人である貴方がこうして生きているのですか？」

「……何の事を言っているのですか？」

何を言っているんだこの女、そう思うアリサ。……だが。

「フフフツ、私分かるんです。戦乙女としての本能でしようか。分かるんです貴方の魂少しヘルの香りがします冥界神の権能を持つのでしようがそれ以上に香る死者の匂い。……貴方は神殺しになる前に何処かで一度死んでいるのでしよう」

「……それがどうした」

「——えっ」

その言葉を『高橋司郎』は吐き捨てるように肯定した。

「——理不尽に死んで気付けば赤ん坊で一から別人で生きるしか無い。最近風に言えば転生もの主人公みたいな状況になっちゃったんだよ俺は」

ハハハツ、と乾いた笑いをする司郎。

「——だから俺は死にたく無いんだよ。死人が歩いてる？それがどうした。俺は今、生きている。心臓もしっかり動いている。ならそれでいいじゃ無いか。……何より真剣勝負の真つ最中だろう。冷たい北風の中必死に生きて戦ったバイキング達を狩ったように俺の命を奪いに来いよ」

「———そうですね。冷たいミズガルズで人間達は必死に生きていきました。そしてそんな彼らを私たちはヴァルハラに連れて行くために殺してきました。———では改めて」

「———ああ、改めて」

互いに獲物を構え。

「———ぶちのめしてやる」

「———殺して差し上げます」

頭上から互いの体を砕こうとしがみつきながら落下してくるヴォバンとファブニールを合図に戦乙女と神殺しは再び動く。

「避雷針」

大国主の呪力が籠った札を何枚か投げる。

轟！轟！轟！ヴォバンによって嵐になっている空模様。

当然雷も自然と鳴りヴォバンもまた敵を撃つために何度も落としている。

それを誘導する札がブリュンヒルデの移動を阻害する。

「そー！ー」

「ッー！」

動きが鈍くなったブリュンヒルデに向けてアリサが魔槍を投擲しブリュンヒルデの

片足に槍が刺さる。

「でかしたアリサ！」

動きが止まったのを狙って司郎は死の呪力を纏った刀をブリュンヒルデに叩き込む。

「——舐めないでください」

炎のルーンを展開しブリュンヒルデは司郎の突撃を妨害する。

「ツ、……うおっ！……しまった！」

炎から豪速の槍が飛んでくるが司郎は死の気配を直感で感じ刀を横に構え盾にする……だが、その反動で刀はどうとう限界になり破壊される。

「終わりです神殺し、ヴァルハラへと行きなさい」

ブリュンヒルデは剣を取り出し白鳥の翼で飛翔し動揺している司郎を笠懸で斬り伏せよう迫る。

「ツ、——」

アリサは斬り殺される司郎の未来が浮かんでしまい目を伏せる。

「——あつ」

「——なつ」

目を開いたアリサ、そこには斬り殺される司郎はなかった。

「——くっ、間に合ったか」

ブリュンヒルデの剣を布都御魂で受け止めあと一步の所で命を救ったのだ。

「まだそんな武器を持っていましたか・・・ですが」

ブリュンヒルデは両腕に筋力強化のルーンを展開させ剛腕に身を任せて司郎の頭を叩き切ろうとする。

「鳴り響け布都御魂！」

『応！』

「ッ!？」

布都御魂の刀身から雷が発生し感電する前にブリュンヒルデは素早く離れた。

「セイッ」

布都御魂を素早く振り雷の斬撃を飛ばす。

「トールのルーンよ」

雷神トールのルーンを書きブリュンヒルデは雷の斬撃への耐性を強める。

「風よ」

追い風を発生させ速度をを上げブリュンヒルデに迫り布都御魂を叩き込む。

「ッ！」

ブリュンヒルデは魔槍で布都御魂を受け止める。布都御魂から流れる電流とトールのルーンが相殺され拮抗したその光景は先程と逆の立場になる。

「シッ」

布都御魂の握る手を緩め片手を離し拮抗していた姿勢を崩しそれによる僅かな隙に離した片手に生太刀を握り眼前の敵の横腹に一撃を叩き込む。

「ッ、——やりますね。それでこそ神殺し」

間一髪だったのだろうか僅かに鎧から出る血をルーンで止めながらブリュンヒルデは司郎を賞賛する。

「ですが分かりません先ほどまで疲弊していたはずですが……まさか、いえ、間違いないです。……神殺し、その剣に大地の力が注がれているのを感じました一体何を？」

「さあな、自分の頭で考えてみろよ」

ブリュンヒルデの推測は正しく復活の権能を使い呪力を使いすぎて残った呪力では魔王二人とまつろわぬ神三柱相手にジリ貧なのは分かっていたため司郎は呪力を回復させるしかなかった。

そのためのヒントは原作でペルセウスが現れた経緯にあった。

原作でペルセウスが現れたのはドニが龍脈と繋がった神具を叩き切ったせいなのだ。

司郎が最初に倒した神大国主は豊穰の神、大地の神でもある。

再び魔術的繋がりを早苗、亜衣に繋ぎ大国主の権能の一部を二人に使えるようにし龍

脈を布都御魂に繋げる儀式をさせ司郎とアリサはこれ以上戦火が拡大しないように戦場に向かった。

「鳴り響け！」

——そして、この地の龍脈に繋がった布都御魂を通して司郎は権能を行使する。

龍脈から流れる大地の力は鋼の軍神である布都御魂には相性最高であり豊穰の神である大国主もまた存分に扱える。

軍神の神剣から幾つもの雷球が放たれブリュンヒルデに迫る。

「舐めないで下さい！」

ブリュンヒルデは白鳥の翼を広げ雷球から逃げながらルーンで叩き落としていく。

「——高橋司郎！」

「——ッ！ 結べ縁結び」

追撃しようとした瞬間アリサの声が聞こえたと同時にヤバい気配が頭によりぎり縁結び（物理）で今いる場所から距離を取る。

その一秒後、空から業火が降り注いだ。当たれば上手に焼けましたーと某狩りゲーの肉の用になるかもしれないほどにはヤバいものだろう。

周りを見ればヴォオバンのジジイが人狼の姿で着地したのを見た。方向からして空中

にいたジジイに向けて放ったのだらうかどちらにせよ気の休まる場所はないと言う事だ。

「やれやれ参っちゃうなこりゃ」

見ればブリュンヒルデが幾つものワルキューレを召喚して突撃準備を完了している。ファブニールも今度は俺に狙いを付け始めたようだ。呪力が幾らか回復し、天敵である鋼の神剣を持つていれば蛇殺しのアポロン並には危険視されるだろう。

「やってみせるさ、どんな地獄だって生き延びてやる」

相棒を構え眼前の二柱に対応する為に集中をしカウンターを叩き込もうと待ち構える。

——だがその緊張は膨大な光によって掻き消された。

「なっ」

「えっ?」

ドニとジークフリートが落ちた地面から放たれた莫大な呪力を持つ光が地上を薙ぎ払い空へ飛んでいく。



「グガアアアアアアアア!!?」

「嗚呼、貴方——」

光はファブニールとブリュンヒルデを飲み込みその存在を消し去る。

——財宝を溜め込む王道ドラゴンの代表でもあるファブニール。英雄殺しの悲劇の代表である戦乙女ブリュンヒルデ。クリムヒルトは突然の事になすすべなくその姿を世界から消え去る。

「まさか」

啞然としながら状況を見て恐らく自分で落としたドニとジークフリートが地下で激突。最後にジークフリートがバルムンクを放ちドニと相打ちその余波であの二柱が吹き飛んだ。

当然犯人がドニであるのも考えられるがそれは色んな意味で考えたくないので放置する。

「あつけないものだな」

まつろわぬ神がいなくなつた事でアドレナリンが下がっていったのを感じ始めるがまだ危険な辻斬りと狼ジジイがいる危険地帯なのを思い出し移動しようと呪力を練り始めた——その時。

「なっ」

先程までヴォバンの権能によつて嵐の夜になつていたはずの空がみるみるうちに変わつていき始めた。

雨を降らせた雲はどんどん晴れていき代わりに出てくる星の光は瞬く間にかき消されて行く。

神殺しとまつろわぬ神の戦場を今照らすのは何もかもを焼き尽くさんが如く君臨する炎の星がそこにあつた。

「――散々邪魔が入りジークフリートもどの神も満足に食い足りなかつたが」

炎の星が最古の魔王を照らす。

「元より人生というのは思いもよらない事など良くあるものではある。少なくとも貴様らのような若い神殺しが乱入してきた時点で碌な事にならないのは分かつてた。このようなものでも多少の無聊は紛らわされる・・・だが」

現存一人目の神殺しが現存6人目の神殺しを睨みつける。

「このヴォバンが何一つ成してないというのも何だと思つた。せつかくだ小僧、この戦いの勝ち負けでも決めようじゃないか」

原作において国を焼き滅ぼすともうたわれた炎の砲撃権能『劫火の断罪者』をヴォバンは司郎に向けて放とうとしている。

あれをどうにかして生き延びれば勝ちと言うシンプルな勝負だ。

「冗談じゃないそんな義理があるか！」

逃げようと風を起こそうとするが。

「なっ、ちよつと、・・・離して！」

「アリサ！　くっくっ、このクソジジイ！」

瞬く間に鎖が現れアリサの体を拘束する。先程までの戦鬪で疲弊した上に神にも抗える術も既に解除されその上反動もあつて抵抗が出来なくなつていた。

既に劫火の断罪者は発射体制を整えており下手に動けばモロに食らうかアリサを切り捨てなければいけないほどには追い詰められていた。

「どうする。お前の騎士を捨てれば助かるかもしれないぞ」

「そうよ早く逃げなさいよ！　私の事は良いから」

流石は最古参の魔王、司郎が勝負に乗りたがるよう的確に言葉を選んで放ってくる。

同じようにアリサもまた足手まといはもう要らないと言わんばかりに自分を切り捨てようと進言する。

——だが。

「ふざけるなお前を置いていけるかよ」

「馬鹿！　あんなのどうにもならないわよここまで頑張つたなら」

「——なあ、アリサ。人生は一度きりだ」

「……へ？」

「死んだら次があるか分からないし次があっても今までの関係は殆ど消える」

神剣を構え龍脈から大地の力を吸い取る。

「……ここでお前を見捨てたら俺は一生後悔する。助けられなかったって、この手にはそんな後悔をしなくても良い力を持っているならすれば良い。……後悔は死んでからでも間に合う。だから見ていろアリサ・アウツテオ、俺の戦いを後世に伝えるこれがカンピオーネ、高橋司郎だ。いくぞ布都御魂、ここ一番の大舞台だ気張れ!!」

「応とも！行くぞ王、我が刃は炎も星も切り裂いてくれるわ!」

由良由良止、布留部」

大地の力を操りながら司郎は神楽を舞う。

「……曰く、この一児をもって我が麗しき妹に替えたらかな、すなわち頭辺に腹這い脚辺に腹這いて泣きいさち悲しびたまう」

その詠唱は司郎もよく知るとあるゲームの詠唱、ただ一振りの刃でありたいと願った男の祈りそのもの。

「……その涙落ちて神となる、これすなわち畝丘の樹下にます神なり。……ついに佩かせる十握剣を抜き放ち軻遇突智を斬りて三段に成すや、これ各々神と成る。

劍の刃より滴る血これ天安河辺にある五百個盤石我が祖なり」

カルナの鎧では司郎はともかくアリサは守れない。故に布都御魂と大地の力を融合させ最高の一撃を放とうとする。

「——謡え、詠え、斬神の神楽、他に願うものなど何も無い。未通女等之、袖振山乃、水垣之、久時従憶寸吾者」

——さあ、この歌劇に終焉を。

「八重垣・左土神・蛇之籠正。神代三劍、もって統べる石上の鎌風、諸余怨敵皆悉摧滅」  
布都御魂を鞘に戻し切るものを改めて確認する。

「——太極、神咒神威 経津主・布都御魂剣！」

抜刀し上段の姿勢で大きく振りかぶり刀身から殲滅の雷が放たれ同時にヴォバンもまた劫火の断罪者を放つ。赤と白の二つの殲滅の力がぶつかり合い大気を震わす。

「——司郎！」

「——司郎さん！」

大国主にやって繋いだラインから亜衣と早苗の声が聞こえてきた。

司郎を支えるために早苗は大国主の権能による龍脈の制御を亜衣は布都御魂の制御に手を貸す。

「——大いなる戦乙女の愛は竜殺しの英雄をさらに偉大にさせる——足手ま

「といが何もしない訳にはいかないのよ！」

更にアリサもまた繋いだ大国主のラインを通して強化の術をかける。

『——ツツツ、まだまだア!!』

度重なる膨大なエネルギーを受け止め続けた布都御魂もまたヒビが入り光が漏れ始める。だが、徐々に押し返しているために戦いを命とする『鋼』の神剣もまた魂を震わせているのだ。

「うおおおおおおおおつ——チエストオオオオオオオツ!!」

莫大なエネルギーを再び注ぎ劫火の断罪者を押し返す。

———殲滅の稲妻が炎の星を消しとばしこの歌劇に終焉の幕が下ろされたのだ。

## 37話

「げほっ、げほっ、……生きてる」

意識が飛んだのかは分からないが埃が鼻に入り咳き込んだ事でアリサは目を覚ました。

周りを見れば戦いによって破壊されもはや廃墟よりも酷いナニカと化した元儀式場。ただでさえまっろわぬ神々と神殺しの激闘によってボロボロなのにダメ押し最後の二人の神殺しの町一つ吹き飛ばすほどの権能の激突によってチリ一つ残らないような有り様となっていた。

「全く、呑気なものね」

高橋司郎は直ぐそばにいて寝転がっていた。

全てを使い果たしたのかそれともタダの馬鹿か安堵の笑みを浮かべながら寝ていた。今なら勝てるかもしれないと言う考えがアリサの心の中をよぎるが直ぐに碌なことにならないだろうとその考えは心の中から捨てた。

「ふふっ」

それが強者に屈しないようになったからなのか、それともあれだけの激戦を制して

まだ危険があるかもしれない場所で呑気に寝ている彼を驚かしてやりたいと思う悪戯心かもしれない。

「大した男だこの状況で寝ているとは。もつとも、それぐらいの胆力が無ければ神殺しなどつとまらん

「ッ！」

声のする方向に顔を向けるとそこにはヴォバン公爵がそこにいた。

槍を構え戦闘体制を整えたが。

「辞めよ。私は戦う気はない」

「なっ」

一体それはどう言う事なのだろうかあの戦闘狂で有名なヴォバン公爵がもう戦わないなどと。

「変だと思つたかね。だが、貴様の主はこのヴォバンとの最後の勝負に勝ち見事貴様を守つただろう。この時点で小僧の勝ちだ。このヴォバン、決着のついた勝ち負けにこれ以上論を繰り広げる気はない。貴様の主に伝える——認めようこの戦い貴様の勝ちだ」

——啞然とした。



子供の頃から術師としての英才教育を受けているアリサにとつて欧州の裏社会に君臨する大魔王であるヴォバン公爵があることか大きく年の離れた少年に負けを認めたとなどは信じられなかった。

「俺じゃない」

「へ？」

「氣配に気づいたのか司郎は起き上がりヴォバンに言い放った。

「勝ったのは俺だけじゃない俺たちだ。アリサが俺を正氣に戻したからこそこの場に立てたしきつきの戦いでも仲間が助けがあったから勝てたんだ。もう一度言うぞ、勝ったのは俺じゃない。俺たちだ。負けを認めるならそこも認めるサーシャ・デヤンスタール・ヴォバン！」

「……良いだろう。デヤンスタール・ヴォバンの名にかけて宣言してやろう。貴様らに勝利をくれてやろうこの勝負貴様らの勝ちだ!!」

一瞬口澱んだがヴォバンは受け入れ改めて負けを認めた。

「小僧！高橋司郎よ、これより貴様はこのヴォバンの終生の敵となった。更に強くなりこのヴォバンが全力で狩るに値する敵となれ、さらばだ！」

殺意の籠った邪眼で睨みながらヴォバンは突風と共に姿を去った。

「——あくあ、終わっちゃった」

「・・・よう後輩ロツククライミングお疲れ」

崖から登ってきたサルバトーレ・ドニが司郎に近づくと、

「せつかくここまで登ってきたのに爺さんも誰も居ないなんて寂しいな、・・・そうだ！

「もう一戦やろうぜならお断りだ」すごい！なんで分かったの!？」

「バトルジャンキーの考える事なんか分かるわ！これ以上戦えるか！もう一度谷底に落とすぞ!!」

司郎の呪力はもうカス程にも残っておらずもしドニが襲ってきたら迷わず地面を操作してドニを奈落に落とすなりなんなりして逃げるだろう。

「行くんだ」

「ああ、これ以上お前と近くにいと休めそうにないし先生方に迷惑かけかねないしな」

制服を術で取り出してまとい生太刀を杖にして歩き始める。

「そう言えばさ、何で助けたの?」

「何が?」

「何で儀式に乱入なんかしたの?儀式の途中であれやこれややってあの爺さん相手に挑んで危うくともんでもない事になりそうだったじゃん。そんな事するよりも終わってから乱入すれば神様達と戦えるしさ、どうしてそうしなかったの?」

「はあ！」

何言つてんだこの野郎そう思つたアリサだったが。

「気に食わないからだ」

司郎は迷わずそう答えた。

「何それ？」

「覚えておけよ後輩、俺たち神殺しは世界中の暴君、独裁者も真つ青のロクデナシだがそれでも自分だけは曲げられない。裏切らないんだ。例え死ぬとしても自分のルールを貫く。お前だつて似たような他人から見ても異常のような考えで神殺しになつたんだろ  
う？」

「ふうん、そうなんだ——だつたら」

「そうだよ——だから」

「——ヌアダの剣よ、僕に力を！」

「——逃げる！結べ縁結び！！」

「へっ？——あああつつつ！！」

「——あれ？あそこで飛んでいるのって……きあつ、し、司郎何が起こつたの

!?って、また走り出した!」

「頭のおかしいキ○ガイが追いかけてきているんだ!逃げるんだヨオ〜!どけえ、瓦礫い!」

「え、え、あの人からも神の権能を使っているから噂の7人目!」

「ああ、もう、どうとにもなれ!早苗ちゃん行くわよ司郎が遠くに行っちゃう」

「あつ、はい!まだ待ってください司郎さん!」

「なつ、何で私まで走っているのよ!」

「嫌ならこの先の曲がり角で左に逃げろ俺はこのままあの馬鹿を張り切ってからホテルに戻る。これでお前との縁も終わりってわけだ」

「.....」

走り続ける司郎を見ながらアリサ・アウツテオはふと思う。

恐るべき魔狼王相手に立ち向かい。

戦乙女の槍にも恐れず剣を振るい。

業火を前にしても逃げず押し返した。

何だこの男はまるで神話の英雄じゃないか。

「.....ふっ」

そんな英雄に惚れた男を支え勝利に貢献する。そう考えれば何て楽しい人生になる

だろう。

これでも北欧の魔術結社の大騎士、素晴らしい戦士に異性が集まるのも理解がある。

（———そう思わない。私の勇者、高橋司郎？）

昇り出し追いかけつけっこしている彼らを劇が終わり照明がお客様を送るかのよう  
に照らす太陽の光を感じながらアリサ・アウツテオは心の中で思った。

———因みにこの後逃げ切るまでサルバトーレ・ドニとのオース  
トリアを舞台にした鬼ごっこが始まり。

帰りの空港でアリサにこれからよろしくシエロとあだ名をつけた上に頬にキスをさ  
れるとんでもない魔女の悪戯をくらい周りから殺意を向けられ担任である女教師（29  
歳独身）に司郎はアイアンクローを喰らったのはまた別の話である。

## 38話

「——そんなこんなでやつと帰つてこれたんだ。満足したかエリカ!」

「……ええ、本当にお疲れ様リリイ」

「……何だその調子は」

「流石にそんな目に遭つていたなんて聞いたら私だつて労いの言葉をかけてあげたいわ  
よ」

「……そうか、分かつた気持ちだけ貰つておこう」

ヴオバン公爵によるまつろわぬジークフリート召喚事件から数日が経ち事件の後始末をさせられていたリリアナ・クラニチャールは肉体的にも精神的にも疲弊しておりやつと休暇を貰い。さあ、休もう!……と思つた矢先、幼馴染にしてライバルであるエリカ・ブランデツリから電話が来たことでリリアナは絶賛不機嫌だった。

「……それで件の6人目についてだけど」

「……ああ、残念だが私も特に言えることは無いさつき話したことが全てだ。ほんの一瞬间だったから人となり何て分からないし事後処理をしている最中にもう帰国したらしいからな」

「こつちも調査に向かった一人が監視のために近づいたらしいけど直ぐに撒かれたらしいわ」

「理由は予想つくがはつきり言ってやりすぎだ。あんな天気を作り出すなんて」

「最低でも公爵クラスの災害の権能を持っていてそれを躊躇なく使った。被害が少ないのが幸いね」

赤銅黒十字は高橋司郎を調査するために彼らのバスを尾行しようとした。

しかし、突然強風によって車を他の車・・同じく高橋司郎の動向を調査するために派遣された魔術師同士がぶつかり、さらには謎の雷が彼らの目の前に落ちてきた。

「あくまでも学生旅行の最中だったらしいからな邪魔されたく無いだろう。私からすれば不幸中の幸だ」

「善人ではある。されど邪魔をするなら容赦なく攻撃する。多分だけど比較的に話のわかりやすい人間かもしれないわ」

「．．．．．どうだろうな」

「どうしたの？」

「いきなり化け物になる権能がどうしても頭にこびりついてな、暫く夢に出そうだ」

「それは．．．愁傷様」

困り果てた幼馴染の声を聞いて流石のエリカもリアナを揶揄う気にはならなかつ

た。

「と、言うことがあったんです」

「———そうかあ、無事に生きて帰ってきてくれて嬉しいよ祐理」

日本に帰ってきた万里谷祐理は家族と再会出来た喜びを分かち合った翌日、一連の事を正史編纂委員会に報告し家に戻ってきた際に帰って来た事をしてやって来た幼馴染である清秋院恵那と居間で話をしていった。

恵那と祐理の話は祐理の体の調子や儀式で変化が起きていないかなどから件の6人目、高橋司郎について話をし始めた。

「———やっぱり祐理は怖いんだね恵那たちの国の王様」

「———はい。正直に言いますと・・・その、あの悍ましい姿を見てしまつて」

「———権能の暴走だつて言われても色んな意味で怖いだろうし祐理は悪く無いよ」

祐理の脳内に浮かぶのは二人の魔王。

多くの巫女魔女を犠牲にして神との戦いを望んでいるヴォバン公爵。

———そして、どのような経緯があれ暴走し異形の姿になり暴れ狂った高橋司

郎。



聞く限り凶暴な暴君では無い……だが、百の噂よりも一の事実は何よりも大きい。荒れ狂う高橋司郎の姿は恐ろしく非道にも自分を始めとした多くの少女達を生贄にして神との戦争を望んだヴオバン公爵と重ねてしまった。

どのような理由があれ今、万里谷祐理は高橋司郎に対して好意的に捉える事は出来なかつた。

「——っ!？」

「祐理!？」

突然霊視が来て目眩からかふらつく祐理を恵那は支える。

「……大丈夫?」

「——はい、ご迷惑おかけしました」

「これくらい気にしないでよ。……それで何が見えたの?」

「……よく分からないものでした」

「——そっか、まあ、色々あつたからそんなこともあるかもね」

「そうですね」

頷く祐理を見て恵那は台所へと足を運ぶ。

「——でもあれは」

それを見ながら祐理は先程見たものを思い出す。

真つ白い白馬が空から舞い降り次に黄金の剣を携えた少年に変わり自分に手を差し出すビジョン。

それが何を意味するのか万里谷祐理はまだ知る由もなかった。

【ヴォバン公爵が引き起こした魔王乱戦における高橋司郎について】

某日、ヴォバン公爵がまつろわぬジークフリートの召喚を試み多くの巫女と魔女を召集し召喚の儀式を行った。

結果、ファブニール、ブリュンヒルデ、クリームヒルトの三体のまつろわぬ神が現れ、顕現した神の神話を考えればニールンゲンの歌の悲劇が現代に再現されるのではないと考えてしまったのは言うまでも無い。

通常であれば都市一つ壊滅してもおかしくない事態。まつろわぬ神の招来の儀式もまたリスクのある儀式であり本来なら多くの巫女、魔女が犠牲になるであろう。

にも関わらず物的被害多数に比例して人的被害が少なかったのは6人目の神殺し、高橋司郎のお陰であろう。

偶然にもヴォバン公爵の儀式に巻き込まれたかの者は現地にいた魔術師と共に儀式に乗り込み犠牲者を出さずに降臨した三体のまつろわぬ神を相手どった手腕は正に神

業であろう。

かの王が持つ幾つもの権能。

まつろわぬ大国主の『古き神王の秘術』  
エルダーゴット・アーケン

まつろわぬタケミカヅチの『布都御魂』

まつろわぬカルナの『光輝く鎧』  
フロミン・ス・ロリカ

そして、今回のまつろわぬケツアルコアトルから篡奪した『狂い吠える恐竜』  
ベルセルク・レッツクス

特に古き神王の秘術は強力でありヴォバン公爵の疾風怒濤と同じく天候を操る力を持つっておりかなり現場の調査の結果他にも影響を及ぼす可能性が高く強力な権能であると思われる。

また、かの王は今回の一件で多くの魔術師に評価され現地で儀式のために拉致、強制された巫女魔女達を救助するために集まった魔術師達、および公爵派の魔術師でさえかの王の影響によって儀式が終了したのち神々と神殺し達の戦争の場所から安全な場所へと避難させるために協力し、現在、北欧の魔術結社。黄昏の十字結社は高橋司郎に対して騎士を派遣しており今回の一件を高く評価していると考えられる。

まつろわぬ神々、ヴォバン公爵を相手に一步も下がらず戦い。多くの人達に好かれた事もあり最近では高橋司郎に対して第一権能であり最初に倒した大国主の信仰の一つを借り「縁結びの魔王」と呼ばれるようになっていく。

——ペラ、．．．．．ペラ、．．．．．ペラ。

ある家にて一人の少女は束ねられたレポートを捲る。

「．．．．．」

レポートの内容は賢人議会が書いた高橋司郎に関するもの。

「——ワンワン！」

「?．．．お客様?」

部屋から出て外にいる2頭の愛犬の元へ向かう。

「——あつ、手紙かぁ。ありがとう」

「くうん〜」

誉められ嬉しがる愛犬の光景を見ながら少女は手紙の内容を確認する。

「やっぱりこうなるよね。君はまた僕を驚かせてくれるのかな——シロウ」

少女の言葉はアイルランドの風と共に肩に届かないぐらいに切られた銀髪を揺らす。

## 第五章過去と未来を繋ぐ妖精郷

## 39話

——さて、この物語を語るにあたって語る前日譚が一つある。それは高橋司郎15歳の夏。

彼がまだ神殺しになる少し前、彼がアイルランドで体験した一夏の冒険から物語が始まる——

「——やっと到着か。疲れた。」

日本から時間をかけアイルランド首都ダブリンに着いた司郎。  
ダブリン空港にて司郎は荷物検査などを終え空港から出ようとしていた。

「——済まない司郎！遅くなった！」

「いえいえ、お久しぶりです。叔父さん」

司郎の前にやって来た四十代ぐらいの男は司郎の母親の弟。つまり母方の叔父だ。仕事でやって来たアイルランドで良縁に恵まれ今年愛でたく長男をもうける事が出来たのだ。

「お爺さんとお婆さんは残念だったな」

「ええ、行きたかったと言っていましたか・・・」

本来、この旅行には司郎の母方の祖父母と共に訪れる予定だったが祖母が病気に罹り結局司郎一人叔父のいるアイルランドに行く事になったのだ。

「まあ、これ無いのは仕方ないさ。ようこそ、歓迎するよ」

「ええ、楽しませてもらいますよ」

こうして司郎のアイルランド旅行は始まった。

だが、この旅行が後に大変な事件に巻き込まれる事にあるのだがそれを司郎はまだ知らない。

「——それじゃあ、行ってきます」

「ああ、気をつけてな」

「?どうしたんです。そんなに含むような言い方で」

叔父邸で一夜を過ごし司郎はアイルランド首都、ダブリンの観光に行こうとしていた。

「昨日は楽しく奥さんと話していましたが言葉が通じない事は無いけど」

必要最低限の英語の知識は入っており日常程度の会話なら問題ないはずだ。

「……いやな、最近不審者の目撃や行方不明の話がよく出てるんだ」

「——マジですか」

「だからあまり一人で行かせたく無いんだ。何かあったら姉貴に申し訳ないからな  
頭をかきながら困った顔をする叔父。

「まあ、危ない場所には行かないようにしておきますよ」

「そうしておいてくれ」

「ええ、では」

「ああ、行ってらっしゃい」

「——行ってきます」

司郎がいるアイルランドの首都ダブリンはアイルランド島の東部に存在する。

地図で雑に見ると東京などと同じく東にはアイルリッシュ海に通じているリフィー川河口があり江戸川などの川が流れる地形になっている。

面積は大体318平方キロメートル、人口は約1173179人ぐらいである。

由来は古典アイルランド語で黒い水溜りを意味する言葉から由来らしい。

「意外と涼しいな」

北西ヨーロッパの多くの地域は海洋性気候に属し冬は温暖夏は涼しく2020年辺りでも八月の最高気温は30度程度。

クソ暑く30度を平気で超える日本の夏とは比べられない。

「——さて、次は」

現在司郎がいるのは1169年ノルマン人が侵攻してきた直後。1204年、イングランド王であつたあの欠地王ジョンが防衛、司法、財宝保護のために作られたダブリン城に居た。

異国のあまり見ない城を堪能し次に向かうとしていた。

「やはり、ここはトリニティ・カレッジの旧図書館かな」



ダブリン大学、トリニティ・カレッジの旧図書館には八世紀に作成された聖書の手写本ケルズの本が秘蔵されておりダブリンでは訪問者が多い場所の一つでもある。

「まあ、ゆつくり行けば良いさ」

飲み終えたコーラをゴミ箱に捨て人通りの多い大通りに向かって歩き出そうとする司郎。・・・だが。

「——ゴフツ」

横道からやって来た男にぶつかられ思わず倒れる司郎。

「——おい！ 濟まないぐらい言えよ！・・・テメエ!!」

逃げていく男に怒りを向けながらポケットに指を入れると。

「野郎スリか。相手が悪かったな」

スラれた財布には通貨とパスポート、・・・そして。

「オンイダテイタモコテイタソワカ！」

スリ対策のためのお守り。走る神として知られるが盗難除けの神としても知られる韋駄天のお守りが入っていた。

「ギャアアア!!」

「あつちか」

悲鳴を頼りに司郎は薄暗い路地裏へと足を運んだ。

「——見つけたぞこの野郎財布は返させてもらうぞ」

司郎はスリから財布をひったくり中身を確認しスリを見下ろす。

「やれやれ確かに叔父さんの言うとうりだな。さて、警察に……」  
 そう思い周りを見たその時。

「！何でこんなのが」

路地裏の地面にまだ乾ききつていない血が点々と残っており持ち主の足跡となっていた。

「一体何が——!?大丈夫ですか!?!」

「…….……うう」

路地裏の奥に二十代だろうか銀髪の女性がうずくまっていた。

片足を負傷しているようであまり痛くもなかった事で銀の長髪が少し血にかかり赤くなっていた。

「今手当を」

治療道具を術で日本から取り出し治療しようと思った司郎。

「arais!!」

「足以外にも何処か痛いんですか?何処ですか?」

女性の言葉が分からず何を言っているのかわからない司郎。

arads、アイルランド語の一つで日本語で後ろ。

そんな簡単な単語でさえ司郎は分からずにいた。

だが仕方がないと言えよう。目の前には怪我をした女性がいたため司郎は親切心と人助け精神で一杯一杯になっており取り敢えず目の前の女性を治療をしようと夢中になつていた。

女性が指を指したので何かあるのかと振り向こうとするが時遅し。

アイルランド語が分からなかった。女性が相手は日本人だと気付いて英語で話せばこんな事にはならなかっただろう。

——ガツン!!と金属で殴られた音が聞こえ司郎は星が舞う光景を最後に意識を落とした。

## 40話

「ッ！．．．寒つなんだよこれ．．．って縛られているじゃないか！」

目を覚ました司郎は腕の違和感と現在地に気づいた。

腕は重ねられて細い縄か何かで縛られてビルのオフィスか何かに連れてこられたのだらうか。

「起きたな日本人」

「ッ．．．は？」

声のする方に目を向けるとそこにはバケツを持ったカボチャを被った声からして男がいた。

他にも馬マスクやオオカミマスクを被った男がいた。

「ハロウィンにはまだ早かったはずだがな」

随分と愉快なテロリストだなと内心思っていた所をカボチャ男が近づいて来た。

「余計な口を開くな神経が苛立つ！」

怒鳴り声を浴びせながら司郎を叩くカボチャ男。

「悪かったな．．．それで何の用だよかぼちや男」

「生意気な奴だ。……日本人、お前何しにあの路地裏に居た」  
カボチャ男が英語で聞いてくる。

「別に大した事じゃない。スリから財布を取られたから取り返そうと追いかけたただだ」

司郎もゆつくり分かるように英語で言う。

「————チツ、ただの観光客か」

「だろ？ なさつき尋問した男もただのスリだったからな」

「まあ、良い。生贄には数が多い方がいい」

可笑しなテロリスト達は次々と物騒な事を言ってくる。

「その日本人共々纏めて放り込んでおけ。ブツさえあればこちらのものだ」

近くで気絶していたスリ共々司郎は男たちに連行されどこかの部屋に投げ捨てられた。

「————んグウツ!!」

あのカボチャ絶対叩きのめしてやると心の中で誓った司郎。

後ろ手に縄で縛られ猿轡もされている。

そのせいで押し倒された痛みの悲鳴がくぐもったのだ。

——悪趣味な

見ると捕まっているのは司郎だけでは無い。

一緒に入れられたスリと気絶する際にいた女性。

他に男女3人ぐらいだろうか部屋には6人の人間が監禁されていた。

(さっさと逃げないとまずいな)

生贄なんて言われた日には何をされるか分かったものでは無い。アイルランドである以上あのテロリストが悪魔崇拜、またはドルイドの知識のある術師集団なのかもしれない。

——まあ、素人だがな

と、司郎 二流術師 は不敵に微笑む。何故なら。

(こっ、来い)

ポツケに入れてある別の札を取り出し火の術を発動させ縄を焼く。

「ふう、大丈夫ですか」

小声で女性の縄と猿轡を外す。

「—————こほっ、こほっ、あ、ありがとうね。迷惑をかけたのに」

女性は今度は小声の英語で返して来た。

「それはまあ、後で今は脱出を．．．．」

「ソングウウツ!!グウウツツ!!」

「グウウウツ、ウツウウツ!!」

希望を感じたのか他の囚われていた人たちが騒ぎ始める。

「あわわわ。お、落ち着いて、シー、シー」

必死に諫める司郎．．．だが。

「おい、五月蠅いぞ!」

罵声が聞こえ足音が近づいてくる。

「．．．．チツ、すみませんちよつと捕まっているふりしてください」

「あつ、はい。分かりました」

女性も何をしようとしているのか察し動く。

「うるさいぞ!!．．．日本人は何処に行った?．．．ゲホアツ!」

「．．．．ここだよ馬鹿頭」

ドアの視覚に隠れて馬の覆面をかぶった男に投函で家から取り出した木刀で殴り飛ばした。

「皆さん安全は俺が確保します。後からついていってください」

木刀から刀に獲物を変えて司郎は先を急ぐ。

気配を探り安全かどうか確認してから後続の人にハンドサインで○を描いて来ても良いと合図する。

(……何だ?)

騒ぎ声が聞こえてくる声。

—— 糞、何て奴だ!

—— この畜生! 何でこんな場所に!

—— そもそもここが割れているんだ逃げるぞ!

聞き耳を立てていた司郎は想像していた展開とは別の展開になっている。

儀式の話や脱走した自分達を探している様子は無い。

むしろ、警官や敵対組織にバレて突撃されている最中のようだ。

「はあ、……はあ、……」

女性が足を引きずりながらこっちに近づいてくる。

「大丈夫ですか?」

「大丈夫ですよそろそろ薬が効いてきたようなので。もしかしたら私の仲間が追ってきたかもしれない」

「どうやら彼女は司郎と同じ術師のようだ。部屋を出る時女性は何処からか塗り薬を取り出して足を治療したようだ。」



「……………そうですか。なら、俺が見てきます。皆さんはその部屋でバリケードを作って待っていてください」

司郎は空き部屋に捕まっていた人たちを誘導する。

「……………これを恐らくこの状況は私の行方を調べてやってきた、白枝騎士団の誰かです。これと同じバッチを胸元に付けています。これを見せれば保護してもらえるかもしれません」

女性は白い枝が渦巻きに描かれているバッチを渡してくる。

「ありがとうございます……では」

「……………しかし、こんな修羅場初めてだ」

囚われた人たちと別れ恐る恐る建物を歩く司郎。

「……………あれは」

オオカミマスクの男が倒れている。武器であろう鉄棒を落としビクンビクンと倒れ伏している。

「……………こりゃあ一体？」

思わず男に近づくと司郎……………だが。

「うおっ!?!」

向かい角から青色の犬が飛び出してきた。

「.....ッ」

「グルルルル」

司郎を見るなり威嚇する犬。

青の毛並み。折れ耳・サーベル形のたれ尾。シカなどの大型哺乳類の狩猟に使われていたイギリス、スコットランド原産の大型の視覚ハウンド、スコットエイツシュ・ディアハウンドだ。

「.....」

「グルルルル」

スリムでやせ型のスコットエイツシュ・ディアハウンドだが体高は70cmより上であり足も速く力もあり鹿を仕留めれる猟犬である。

温厚な性格だが元々古くはアイルランド、スコットランドでオオカミ狩りに連れられた犬なのだ。

「ガフッ!」

「うおっ!?!」

とびかかった猟犬に即座に司郎は刀を振ってけん制する。

「くっ……くそ、こりゃあ騒ぎになるわ」

急いで服を脱いで片腕に巻き付ける。

「ガフツ！」

だが、この猟犬は鹿や猪だけではなく人間、それも魔術師を狩るために教育されたマンハンター、一般的な犬の対処法は意味をなさない。

「うおっ！」

刀を飛ばされ抑え込まれた。

「くっ、くそおっ……離れない」

「ガフツ、ハフツ」

のしかかった犬に人。見方によっては仲の良い犬と主人の戯れにも見えるだろう。

……もつとも、今の司郎は狩られる寸前の獲物なのだ。

「だが、……イー！」

帝釈天、インドラの種子を唱える。

瞬間、服にくるまれている腕が電撃を放ち猟犬に向かう。

「キャイン！」

猟犬は思わず司郎から飛び跳ね距離をとる。

「はあはあ、……この糞犬！」

司郎は刀を握り切りかかろうと距離を詰めようとした。

「そこまでだよ」

「!?」

凜とした声と共に司郎の背中に尖った何かを突き付けられる触感がした。

## 41話

「……ここだね。よくやったね偉いよマウニ」

「ワン！」

ダブリンの裏町にある一つのビル。

ここアイルランドで近頃暴れている邪術師の本拠地がここだった。

通勤用か逃走用か駐車場には幾つかの車とバイクが置いてあった。

そこに銀のショートヘヤーを翻し薄緑のハンティングジャケットを着た一人の少女が青毛と赤毛の二匹のスコツティッシュ・ディアハウンドを引き連れてやって来た。

「確かに……なのだなウイン」

ウインと呼ばれた少女の背後から屈強な男達が現れ先頭に居る男がウインに問いかける。

「……当然さ。僕の愛犬が間違うはずなんかない」

自信たっぷりなウインは平たい胸を張る。

「……まあ、ドルイダスであるお前が言うなら間違いない。それに……」

男はコンパスを見ながらビルを見定める。

「事前に用意したマーキングも一緒だ。少なくともここに調べない理由はない」  
 「そのとうりだね」

少女達のジャケットの胸に光る白い枝が渦巻きに描かれているパッチがキラリと光る。

カツンカツンとブーツの音が裏町に響く。

「——へえ、結界張れるんだ。下級の邪術師がトップの素人集団だと思つてたよ」

僅かな違和感からビルに貼られた侵入者察知のための結界に気づきウインはジャケットから一本の伸びたヤドリギを取り出しオガム文字を空に描き無効化する。

「えっ、なっ!?!・・・ど、どちら様でしょうか!?!」

外に貼られた侵入者防止の結界に反応が無かったからか受付の人は突然やって来る。大多数の存在にあっけにとられる。

「貴方がどのような立場で此処にいるかは知らないけど・・・眠ってね」

再びウインはヤドリギでオガム文字を書き眠りの魔術を使えばたりと受付は倒れる。

「何だ!・・・お前たちは!・・・まずい!見つかつたのか!?!」

「ボスを呼べ! 応援を呼べ!」

慌てるビルの人間達は混乱しているが。

「お前たちは無関係な市民を拉致し生贄を捧げる禁術を扱った疑いがある大人しく我々白枝騎士団に投降しろ！」

男は投降を要求した。……だが。

「ふざけるな！ 貴様ら魔術結社の介入は分かっていたそれでもなお我々は目的を達成する！ 者共やれ！」

ぞろぞろと武器を持った者たちがやって来る。

「総員突撃！ 一人残らず捕縛せよ!!」

白枝騎士団のリーダー格の号令の元、員達もまた邪術師の集団に立ち向かう。

「このつ、コノオツ！」

「素人に負けるかよ！」

当然ながら軍配は白枝騎士団にあった。

邪術師集団は殆ど魔術の『ま』ぐらいつしか知らない素人と一部のはみ出し者の中堅ぐらいつしか居ない。

幼い頃から魔術に触れ様々な動乱に揉まれた魔術結社相手では比べる事は出来なかった。

「ヒギヤアアアツ!!」

「畜生！ このイヌツコロが！ ……ガアッ！」

そして、この制圧戦に最も輝いていた術師こそ銀髪のドライダス、ウインだ。

少女、ウイン・マクガヴァンは白枝騎士団の大騎士である。

ケルト由来のドルイド魔術を使うウインにとつて彼女が育てた獵犬は彼女の使い魔としてドルイド魔術の恩恵を最大限に活用できる。

ケルトの大英雄フィン・マックールが二頭の獵犬を従えていたようにウインの二匹も獵犬もまたそれに迫る力を持っている。

「あのガギをやれ！あの犬はあのガギの使い魔だ。供給源を断てば弱体化するぞ！」

それを見抜く邪術師の一人が武器を構えてウインに突撃する。

同様に何人かの邪術師集団がウインに迫る。

「そー！ー」

迫る集団にウインはドルイドに珍重したオークの木とヤドリギで出来た杖を呼び出し杖術で打ち負かしていく。

棍棒や剣をバトンのように回しながら受け流し、隙を作り打ちのめしていく。

「マウニ！アイネ！上へ行くよついて来て」

「ワン！」

青毛のマウニ、赤毛のアイネを引き連れてウインは奥へと足を進め、歩きながら遠距離に対応するために片手で扱えるボウガンを取り付けた。



「・・・マウニ、プリン従姉の匂いを辿って。アイネは僕と随伴して」  
ウインはこの場所の発見に貢献し、行方不明の従姉妹であるプリンを探しながら邪術師達を倒していった。

「・・・持っている刀を僕に渡すんだ」

そして、時は戻る。

謎の魔術テロ集団から囚われた人たちと共に脱出するために動いていた司郎。

時を同じくして白枝騎士団もまたこの地に潜んでいた邪術師の一団を一掃し、彼らに捕らえられた人たち、および邪術師達が密かに取り寄せた呪具とそれを追って行方不明になった仲間の回収を目的に攻め入った。

そのため司郎はテロリストと戦う術師集団がいるのは知っていたがまさかホールドアップされるとは夢にも思わなかった。

（——— なんでさ）

背に腹は変えられないと諦め、司郎は刀を遠くに転がし誤解を解くために女性から貰ったバッチを後ろでポウガンを構えている術師、ウインに見せる。

「!?それを何処で拾ったんだ!」

ウインは矢尻を司郎に突きつけ脅す。

「危ないな、仲間が助けに入っているかもしれないからこれを見せて保護してもらえと言われて貸してもらったんだ。その3部屋奥に隠れているよ他にも捕まった人たちがいるからつてな」

「——分かった。アイネ、その東洋人見張つといて変な動きしたら噛みついて良  
いよ」

司郎の刀を拾いウインは言われた部屋へ急ぐ。

「はあ、高いんだがなあアレ、・・・お前のご主人ちよつと乱暴じゃ無いか?」

「ワフン」

その愚痴は赤毛の犬アイネにはどうでも良かったらしいのかそっぽ向いた。

「——ごめんなさいねうちの従妹が迷惑をかけて」

「いえ、俺も待つてれば良かったので気にしないでください」

ウインは直ぐに戻ってきた。後ろからは銀の長髪をした女性もといブリンや他の捕らえられた人たちもついて来た。

「確かに君は違つたようだね、・・・これ返すよ」



術師がウインの質問に答えたと同時に化け物がやって来る。

燃えるような赤い目をした黒い大きな犬。ブラックドッグだ。

「従姉さんと君たちは下がってマウニ、アイネ!! 獲物だ!」

「ああ、分かった!」

ボウガンのボルトを回しいつでも発射できるようにして愛犬達と共に司郎達の前に立つウイン。

『オオオーーン!!』

雄叫びを上げブラックドッグが迫る。

「そっ!」

動きを読みながらウインはボウガンから呪力で出来た矢を放つ。

『ガフツ!』

素早く矢を避けブラックドッグはウインの喉笛を噛みちぎろうと迫る。

「ツ——!」

止めようと動こうとしても今の司郎では間に合わない。

「オオオーーン!!」

だが、それは司郎の出番では無い。ウインを守るのは彼女が育てた二匹の使い魔だ。

アイネがブラックドッグにタックルをかましマウニがガラ空きのブラックドッグの

胴体に嘔み付く。

「援護する！」

白枝騎士団の仲間がブラックドッグに撃ち込む。

『ギャイン!?!』

「バロールの瞳を穿つが如く敵を穿てタスラム！」

怯むブラックドッグを見てウインは必殺の魔弾を撃ち込む。

『オオオ~~~~~ン!!』

断末魔を上げながらブラックドッグの呪力は風へと流されていった。

「よし、後は頭を撃ちぬけば……」

ウインがそう言った瞬間。

『ドオオオオオン!!』下から炸裂音が響く。

「なっ!?!……下で何があったの!?!」

「周りをしつかり見ながら早く降りろ! 崩れるかもしれない!」

司郎とウイン達は慌てて下に降りる。

一階には混乱している白枝騎士団がいた。

「何があった!?!」

ウインは周りに尋ねる。

「奴ら自爆しやがった！上のお前らのために結界を張ったんだよ」

「くっ．．．まだ外にいるのか!?!」

外に出るウイン。だが、時すでに遅し邪術師のトップとかぼちや男達は車に乗り込み  
終え走り出している。

「くっ．．．マウニ！追うんだ！」

ウインは愛犬に追跡させる。

「．．．．．後は」

自分はどうかと考えていた瞬間。

「おい！あいつら追うぞ乗れ！」

邪術師の拠点にあった鍵を奪い取りバイクに乗った司郎がウインを誘う。

「良いけど運転出来るの!?!」

「ハワイで親父にな．．．．．走るぞ掴まれ！」

「う、．．．うん」

けたたましいエンジン音が響き少年少女は走る。

## 4 2 話

「咄嗟について来たけどよかったのこれ以上君が首を突つ込む必要ないと思うけどな  
!？」

「あー、何でだろうな、昔から馬鹿騒ぎに首を突つ込みたがるタチなんだ」

アイルランドの夕道を走るバイクに駆る司郎。

真面目に考えたら彼についてくる必要無かったようなことに気づいたウインは頭を抱えながら話を続ける。

「君なに人？東洋人なのは分かるけど・・・と言うか名前も聞いてなかったね」

「高橋司郎、日本人だよろしく。お前は？」

「僕はウイン、ウイン・マクガヴァンだよ。・・・しかし、日本人は謙虚って聞いていたけど君は違うんだね」

「日本人にも色々というさ、・・・不味いな。距離がどんどん遠のいていく」

司郎が追いかけている邪術師集団の車はどんどん遠のいていく。このままじゃあ見失ってしまう。そう思った司郎だが。

「問題ないよ。僕の愛犬達の嗅覚を共有して奴らの呪具に施されたマーキングを追って

いけば目的地にたどり着く」

「そんな術を使えるのか。・・・上手く追っているなアイツら」

ふと、後ろを振り向けば少し離れた後方にウインの愛犬達が周りの人から見えにくい場所から司郎達のバイクを追っている。

「ふふっ、アイネもマウニも僕の両翼とも言うべき使い魔だからね。アレぐらい動作もないよ。・・・それよりアイツらはあの呪具を使って何をしようとしているんだろうかね？」

「どういう事だ？」

「——奴らの始まりは五ヶ月前ぐらいだとされているんだ。このアイルランドの各地で人を集めて細々と始めたらしい」

道中ウインは邪術師集団の話をし始めた。

「奴らのボスはアメリカから逃げて来た僕達白枝騎士団と同じドルイドの系譜の邪術師で妖精と死霊魔術に精通しているらしい。各地の儀式の場所は墓地などが多かったらしい」

「奴さんの仲間が言っていたが俺たちを生贄にしようと言っていたな。イギリスにドルイドに捧げられた身分の高い遺体が発見されたのかなんとか」

「・・・確かに僕達ドルイドにも生贄の文化がなかったかと言えば嘘じゃない。・・・で



も命をましては人の命を奪って使う術は

禁術。知っているだけならいざ知らず使ったとなったら許されない」

「ああ、全くだこの二十一世紀に逝かれています」

「でも、奴らから見ればどうでも良いんだろうね、徐々にエスカレートしていつて怪我や誘拐事件が発覚していつていよいよ僕たちが動く事になったんだ」

進んでいった果てに邪術師集団の車は人通りの少ない森深い道へと入っていった。

「そして、二週間前。奴らはアメリカの邪術師組織と手を組んで大航海時代にアメリカに持ち込まれたケルト由来の神具を密輸すると言う情報が手に入って探りを入れて2日前にここダブリンに持ち込まれたのをブリン従姉さんが奪取して合流する前に奴らに追われたところを君が見つけたわけ」

「なるほどね。・・・だが、何でそこまで？」

「さあ？ 頭は見え透いた虚栄心だと思っただけで下にいる奴らは術をロクに知らない素人が多いらしいか——」

バイクを走らす司郎一向から少し離れた所から突然オーロラが出現した。

「何だよアレは!?!」

「なっ、あそこは!?!」

啞然とする司郎だが、ウインには心当たりがあった。

「知っているのか？」

「半年ぐらい前に発見されたケルトの遺跡だよ。妖精との交信に使われたとか何とか」

「——交信、まさか」

「行ってみよう！」

「ああ！」

バイクを降り二人は遺跡に近づく。

「——これは」

ウインは絶句する。

かつてのケルトの人々の宗教、政治の重要なタラの丘にも似た石柱の遺跡から光が漏れだしオーロラを形成している。

石柱の直ぐそばに黒いローブを被った邪術師のボスが、周りには司郎を殴ったカボチャの覆面を被った男などを含め3人ほど集まっている。

「白枝騎士団だ！今すぐこの馬鹿騒ぎを辞めてお縄につけ！」

武器構え邪術師集団に投降を促す二人。

「——ハハハ、言うじやないか善の術師共が邪魔をするな」

邪術師のボスがメイスを二人に向ける。

「これより私はティル・ナ・ノーグの扉を開き。そこにいる妖精を捕らえ使い魔へとす

る。この世とあの世にある妖精圏を支配しこの地を牛耳る魔術結社の第一歩なのだ!!」

「——何て?」

呆然とした顔でウインは邪術師のボスを見る。

「事の危険性を分かっているの!?!この世とあの世の境目に手を出す何て下手すれば神々が舞い降りる!狂った神を相手に僕たちが出来事なんて逃げるしか出来ない。タダの自殺行為だ!!」

「挑戦をしない臆病者に私の野望の邪魔はさせない」

「儀式を止めるよシロウ!こんな儀式どう転んでも災厄を呼ぶだけだ!」

「分かった!」

武器を構える両者。アイルランドの命運を賭けた今回の事件の人と人の最後のぶつかり合いが始まった。

## 43話

「僕がボスを潰す。シロウは取り巻きをお願い。行くよアイネ、マウニ!!」

「ワン!!」

「させるか!」

「へへへ、柔らかい肉!」

儀式場へ走り込むウインを阻むためにカボチャ男達が襲い掛かるが。

「させるか!」

司郎は虚空から札を取り出しカボチャ男達に投擲する。

「なっ!?!」

「イー!」

驚く邪術師の一人を帝釈天の札で気絶させる。

「待てえ柔らかい肉う!」

「待てはテメエだこの野郎!」

頭のネジが別の場所に刺さっているだろう狂人な邪術師を呪力の籠った拳で殴る。

「ヒグウ!」

後頭部に突き刺さり脳を揺らし後遺症をも引き起こすラビットパンチが成立したはずなのに若干ふらつくぐらいいしかダメージがない様子だ。

「邪魔をするなよオ！俺は人の肉を切る触感が堪らなく好きでここにいるんだよオ！」

狂人は解体用の大振り刃物を持って司郎に襲い掛かるが、司郎は刃物を刀で受け止め罅迫り合いになる。

「セイー！」

刀と技術を駆使して刃物を持つ力の勢いを使って狂人の姿勢を崩し蹴り飛ばす。

「行かせるかよー！」

ボスの援護に向かおうとするカボチャ男に鋭利を強化する術を込めた万年筆を投擲する。

「痛っ、……くっ、おのれ」

カボチャ男は思わず腕でガードするが鋭利な筆先が突き刺さり激痛に悶える。

「さっさと投降しろ！こんなの人生の無駄だ!!」

「お前のようなガキに言われても響かないんだよ！」

だが、闘志は十分だからだろうかカボチャ男は持っていたメイスを血管が浮き出るぐらいに握りしめて司郎に襲い掛かる。

「行け。マウニ、アイネ！」

「オオオーン」

主人の命令を聞き受け、獵犬達は獲物へと殺到する。

「チツ、この畜生共が！」

邪術師のボスはメイスを払い、獵犬達を払おうとする。

呪力の籠った一撃はまともな生き物なら重症を負うだろうが、優秀な獵犬である二匹は容易く避ける。

「亡者の亡骸から冥府の犬が這い出でる！」

犬の形をとった呪詛がウインに迫る。

「聖なる言霊を持つて悪意を退けらん！」

ウインもまた防壁を貼って塞ぐ。

「ふうつ、戦を司るヴァハ、バズヴ、ネヴァンよ。モリガンの三位一体の女神よ、我に勝利を。——はあああつ！」

軍神の秘術を体につけ、オークで出来た杖を握りしめてボスに棒術を繰り出す。固い材質で杖も腕も呪力で強化された一撃が頭部に落ちる。

「チイツー！」

ボスも負けていない。身体強化の術を目に集中させウインの一撃を交わし返し刃でメイスを振るう。

「くうっ！」

ウインは杖でメイスを受け止める。木製の杖と金属製のメイスが衝突する。

丈夫なオークで出来ていても木製の杖と金属製のメイス。細さ、材質、共に本来であれば勝つのは金属だろうと多くの者は思うだろう。

———されどそれは表社会の話。若くしてケルト魔術の最高峰であるドルイドになったウインの呪力操作と杖術はその常識を打ち砕く。

「せいー！」

衝撃を外へ流しボスの腹に膝を打ち込む。

「チイツ！・・・何故だ。何故こうなる！多くの秘術を学び。多くの命を喰らってしてもこんな小娘に!!」

膝をつくボスは己の呪力を全力で引き出し術を行使しようとする。

「冥府と常世、二つの世界を彷徨う者たちよ。冬の始まりを告げにくる者たちよ。邪なる霊達よ捧げ物と引き換えに我が敵を殲滅せよ！」

呪文を唱えボスの周りには数々のドクロが漂い始める。

この儀式を行う前に殺してきて奪ったのだろうか膨大な呪力を束ねて巨大なジャツ

クオランタンを呼び寄せ眼前の敵にぶつける。

「——マウニ、アイネ、行くよ！」

ウインもまた敵の反撃の一撃を迎え撃つために愛犬二匹を側に遣わせオークの杖にヤドリギの杖を構える。

「偉大なる牡鹿を携えた狩猟神よ、我が愛犬たちを庇護したまえ！」

使い魔を強化する呪文を唱え終え眼前の一撃に若きドルイダスは次なる陣を敷く。

「知恵の魚を喰らい得た知恵をもってファイアナ騎士を導いた騎士団長よ、その英知を持ってあらゆる脅威を打ち消したまえ!!」

愛犬二匹を後ろにウインは前に立ち三角陣形を作り渦巻き模様の結界を貼りボスの術に向かい打つ。

敵対者を焼き尽くさんと迫るジャックオランタンを阻む渦巻き模様の結界が打ち迎える。

ボスの執念かそれとも協力的な術だからかウインは徐々に押され始める。

「負けるか！」

結界を維持しながら更に強化の術を施す。

「グッ、貴様ア！」

底が尽きて来たのかジャックオランタンは徐々に形を崩し始める。



それを見てウインは術で利き手にボウガンを装着する。

「何故だ。何故貴様のような青二才如——」

一発の魔力弾がジャックオランタンを貫いて恨み言を吐き捨てているボスの額に叩き込まれる。

「ガハッ」

大魔術の疲労もあつて魔力弾に込められた一撃によつてボスは夢叶わず意識を失つた。

「——奪つて強くなるような事をしたくないからここまで強くなつたんだよ。僕達白枝騎士団を舐めないで」

現代を生きる若きドルイドは邪術師にそう言った。

「——チツ、面倒いな！」

ところ変わつてカボチャ男と頭のおかしい狂人と戦っている司郎。

大振りの刃物とメイスを相手にうまく立ち回っているが流石に体力を大きく消耗する。

——故に馬鹿正直に相手取る必要は無い。

「はあ、はあ、はあ」

「ひひひ、これで終わりだ」

狂人とカボチャ男に挟まれた司郎。

「死ね日本人！」

メイスが司郎に振り下ろされる。

「ここだっ！」

司郎は懐から新たな札を取り出し発動させ狂人の背後をとる。

「なあ！ガハツ……」

反応遅れてカボチャ男のメイスが狂人の頭に振り下ろされ狂人は頭から血を流して倒れた。

「残りはアンタだけだぞ諦めろ」

「お断りだ日本人」

「何でそんなに馬鹿げた事に手を染めるんだどう見ても失敗する未来しか見えないだろうが！」

「悪いかこれも娘のためなんだ」

そうカボチャ男は吐露する。

「娘？」

「そうだ。5年前交通事故で死んだ俺の娘。あの子が居ながら男を作って逃げていった

ロクデナシのアイツとの子、娘をあの世から連れて帰るんだ。死んだ娘はきつと妖精になつて今も俺ご迎えに来るのを待っているんだ」

「死んだ子供は妖精になるか」

妖精界は死の世界の一種でありアーサー王の最後に辿り着く理想郷など様々だ。妖精伝説の多いブリテンやアイルランドらしい黄泉の世界それが男の目的なのだろう。気持ちは分かるが……呆れてものも言えない。

「オルフェウスの真似事かよ死人は蘇りたくないんだよ!!!」

刀を払いカボチャ男を追い詰める。

「何だと！俺の娘をどんな気持ちで死んでいったか」

「知るかよ！こっちは赤の他人だ。けどな、考えてみるよ」

カボチャ男はメイスで刀を払いのけるが司郎は怒涛の面を打ち込み続ける。

「蘇りは確かに魅力的だよ。俺にだつて会いたい人たちがいる。けどよ生き返るつて事はもう一度死ぬつて事だろうが！」

「なっ！」

「死ぬつてどんな風か分かるかよ、あの体の感覚が無くなつて自分自身が溶けて消えていくような感覚を！あれを2度も味わうんだぞ、死は一度だから良いんだ何度も死ぬ苦しみなんで味わいたくなくないだろうがあああッ!!」

かつて理不尽に人生を終えさせられた司郎だからこそその叫び。叫んだ思いそのままに刀を振るう。

「ガキが偉そうな事をほざくな！俺には俺には！……ガフツ——」

司郎を打ちのめそうとカボチャ男はメイスを振るうが司郎はメイスを受け流し力の勢いを制御出来ず隙だらけの所に峰打ちを叩き込む。

「——悪いけど会えない人に会いたいと思う気持ちはともかくそのやり方は理解できないよ」

チンと刀を鞘に納め司郎はカボチャ男に悪態をつく。

「——終わったようだね」

ウインが話しかける。

「まったくだ。とんだ旅行になっちまった」

「あははは、旅行を台無しさせた埋め合わせしたいけど、生憎僕達も忙しいからね」

見るとヤドリギでグルグルになっているボスが転がっていた。

「まあ、こういういった事件が今後無ければ叔父夫婦が元気に生活してまた会いに行きたいと思えば良いかな」

「あははは、確かにね。さてと」

ワインは携帯で何処かに向け司郎に向く。

「もう直ぐ僕の仲間がやって来る邪術師達を引き渡したら事件解——」

——ブウウン。そんな音が遺跡から響く。

「なっ!?!」

「嘘でしょ!?!さっきの儀式で既に起動していたの!」

遺跡から光が溢れて二人を飲み込もうとする。

「急いで!この光は——」

ワインの叫びは意味を成さず二人は光に飲み込まれた。

## 4 4 話

「——つ、ここは？」

光に慣れて見えてきた司郎の目に映る光景。

草木の生い茂る草原だが幻想的でのどかさを感じるその光景は文字どうり妖精郷にでも迷い込んだのかと感じさせる。

「大丈夫？」

隣にいたウインが声をかけて来る。

「ああ、大丈夫だ。お前は？」

「僕も大丈夫。時間は立っていないと思うけど」

「それよりここは何処だ？」

「恐らくここはアストラル界と人間界の狭間？みたいなところだと思う」

「あくあ、聞いたことはあるな。つまりこの世界は普通は繋がらない二つの世界の橋みたいなものか」

当時の司郎にとってファンタジーなどで出る別世界の狭間のようなものと認識する。・・・神殺しとしての司郎ならこの危うさを十分理解できたのだがそれはまた別。

「そのようなものかな。あの遺跡は太古の昔にケルトの神や妖精達への儀式をしていた儀式上だったはずだ。奴らが開拓時代にアメリカに渡ったらしい呪物を使って儀式をした結果こうなったんだと思う」

事前に得た情報を元に現状を説明しながら空間を維持している核を調べているウィン。

「うーん、取り敢えず元の世界に戻るにはどうすれば良いんだ？」

「……ちよつと待って、どうも遺跡に霊脈が繋がってこの世界を形成しているようだから今流れを調べてヤドリギで流れを堰き止めて一回この空間を止めさせて後で霊脈と遺跡の繋がりを断つ。」

ウインは術式を展開させてヤドリギを何本か用意している。

「——分かったが急いだ方が良いぞ」

「え？何で？」

司郎の言葉にウインは振り向く。

「——嘘」

二人からかなり離れた場所には大量の古のケルトの装いの軍隊がゆつくりと二人の所へと進軍している。

「おいおいヤバイぞ早く何とかしろ!!」

「待ってくれ！今何とかする」

「急げ！こつち来たら命がない．．．!?」

ウインを急かす司郎の近くに槍を持った今まさに司郎のいる場所に進行しようとするケルトの装いをした人の形をした異形の兵士が降りたつ。

「目には表情が感じられず冷酷に司郎を見つめるその兵士はまるで冷酷な殺人ロボットだ。」

「嘘、あの呪力量、神獣クラスだよ」

「どうやら逃がしてはくれそうも無いな．．．やるしかないか」

肌を刺すほどに尖った呪力をその身に味わいながら刀を構え司郎は眼前の敵に合い対する。

「つ、マウニ！アイネ！シロウを援護してあげて！」

ウインは敵が下級とは言え神獣クラスと判断し自身の愛犬を援護に向かわせる。

「ツ！」

「」

「グルルル」

4者ともに睨み合いが始まる。



「——マジかよコイツ、隙が全然無い」

呆然とそこに立ち司郎達を見つめる異形の兵士ははゆっくりどのように調理してやろうかと思つめていた。

ゆっくりと兵士は司郎に近き槍を振るう。

「——ッ！……うおっ！あつ、重いイ！」

目にも止まらないスピードで振るわれた一撃を咄嗟に刀で受けその衝撃を受け流す事に成功した。……だが振るわれた一撃の重さは衝撃により痺れる司郎の腕を見れば明らかだった。

「気をつけろワンコロども！あれの怪力は洒落にならんぞ!!」

司郎の助言を聞き優秀な猟犬達は動き出す。

「ガフウツ！」

「——！」

「ウオオオオ——ン!!」

「——！」

「ガフツ！」

マウニが飛びかかるように振る舞い兵士に槍が振るいたがるように誘い兵士が槍を叩きつけた瞬間後方に飛びる。

アイネはマウニのフェイントに兵士の後ろに周り遠吠する。

誘われたと思った兵士は叩きつけた槍をそのまま力任せに横薙ぎで振るう。

その隙にマウニが本当に飛びかかる。

飼い主が居なくても巧みなチームワークでマウニとアイネは兵士を翻弄する。

「――！」

マウニの力と呪力で強化された狩猟具で噛みつくが兵士はさしたダメージは無い。司郎もウインも知る由もないが兵士は女王に呼ばれた際一つに纏められた兄弟達を28に分解させられた個々となったがそれでも克蘭の猛犬に一步も引かなかった怪物。術師から離れた猟犬など蚊に刺されたほどにも感じない。

「キャインー！」

振り回されて地面に叩きつけられたマウニが悲鳴を上げる。

「――！」

「――させるか！」

兵士は槍をマウニに突き立てようとするが司郎が間に入って八相の構えで受け止める。

「くうっ……」

受け流す事に成功したが司郎の右肩を槍の先端が割く。

「まだまだアツ！」

頭を振り切り兵士に刀を向けようとする司郎。

「あ、・・・あれ？」

司郎の体に異常が発生する。

「んっ、ガハッ、なっ何なんだこれは？」

頭痛、眩暈、吐き気になり司郎は気分が悪くなる。

——伝承においてクランカラティンの槍には毒があると知られている。

故に、少しでも人である司郎には戦闘困難になる程の猛毒になる。

「はあ、はあはあ」

必死に手持ちの札と術で必死に毒を除去しようとするがそんなのをクランカラティンは見逃さない。

（やべ）

槍が迫る。弱った体では避けられない。

（ここまでかよ）

避けられない死が司郎を襲う。

ガキイン!! 鉄と鉄のぶつかる音が響く。

「なっ！」

死神の槍が大剣に塞がれる。

「くっ、何で馬鹿力だ！これだけ身体強化の術をかけたのに腕が痺れやがる」

巨漢の大男が不貞腐れながら克蘭カラティンに大剣を向ける。

「大丈夫ですか？」

ケルト十字架を首にかけたシスターが司郎を支える。

「やるじゃねえか日本人。後は俺たち白枝騎士団が時間を稼ぐ」

続々と現れる白枝騎士団のメンバー。

「いいけどよ、あの槍は気をつけろよ」

シスターの癒しの術を受け司郎の体は活力を取り戻す。

「安心しろ！俺たちの目的はあの怪物を倒す事じゃない！」

「———そう、司郎達の目的は動いている遺跡を止めてアストラル界と人間界の繋がりを断つこと。」

妖精の軍隊が迫る中、司郎と白枝騎士団は邪術師団体が引き起こした大惨事を『一旦』  
終結するための最後の防衛戦が始まった。

## 45話

「流石に足手纏いか」

司郎がそう呟く。体の毒は治癒魔術で解毒され体も動く。

「うおおおおっ!!」

白枝騎士団の一人が克蘭カラティンに大剣を振りおろす。

「

克蘭カラティンは呪力を高め腕と装甲で剣を受け止める。

「セイツ!」

また別の者が槍で克蘭カラティンを突き刺そうとする。

「ガハッ・・・」

「大丈夫か!？」

「取り敢えず大丈夫だ。回復を頼む」

「任せろ!」

弾き飛ばされ怪我を負った男に仲間が回復をかける。

次から次へと克蘭カラティンに白枝騎士団の魔術師達は挑み続ける。

外部者である司郎の出番はもう終わり。名残惜しいが彼らの息を乱してはいけない。後出来ることは彼らの邪魔にならないことだけだ。

「後少しだ！それまでそいつを抑えてくれ」

ウイン達の作業ももう終わる。それに合わせてしつかり脱出するだけだ。

「準備よし、皆下がって！」

準備が終わったのかウインが皆んなに声をかけてくる。

「どうすれば良い!?!」

「植え付けたヤドリギがあと少しで大地の力を吸い取り始めるからそしたら呪具によって繋がっていたこの世界は繋がりを失って崩壊するから脱出するよ」

司郎に聞かれてウインは答える。更にボウガンで大量のヤドリギの矢を克蘭カラティーンに撃ち込む。

「——よし、逃げるよ」

力の供給が無くなり崩壊し始めたのを確認し司郎達は出口まで走り出した。

「——急げ!!崩壊が予想より早いぞ!!」

呪具の呪力が無くなり世界と世界の繋がりの紐が途切れこの世界が崩壊していく。

「くっ、足場が悪くなっている」

崩壊していく世界のためか定期的に地面が揺れ司郎達の行くての邪魔をする。

「あの橋が境界線だ急げ！」

現世の入り口になっているらしい橋を白枝騎士団の騎士達が先頭で司郎達は後方の順で渡り出す。

もう少しだ。これを渡り終えたらもう危険は無くなる。そんな期待と不安が入り混ざる状況では自然と動きに焦りが出る。

「しまっ」

もう2歩で岸に着くと言うタイミングで最後尾にいたウインの足元が崩れてウインは崖へと落ちていく。

「届けー！」

すぐさまボウガンにヤドリギの種を装填してツタを飛ばす。

「嘘」

そのツタが岸に届くかに思えたが僅かに届かなかった。

「ああ」

重力に従いウインの体は下へと落ちていく。彼女の目に見える岸から離れていく光景はそれがスローモーションのよう見えた。

死ぬ。術師である以上予想外の存在に出会い理不尽な死や死んだ方がましの理不尽を受ける可能性があるかと幼い頃から教えられていた。それでも死ぬかも

しれないと思うと絶望感が頭を覆う。

「——ッ！」

「シロウ!？」

伸び切り後は落下するだけのヤドリギのツタを司郎は手を伸ばして掴み取る。

「はっ、離して! 君も落ちちやう!」

「やかましい!! 目覚めが悪いんだよ!! 困らせたく無ければ早く上がってこい!!」

ツタを腕に巻きながらウインに上がってくるように言い放つ。

「ごめん、ありがとう」

「どういたしまして」

登り終えてからウインは司郎に感謝を伝えた。

——そこからの話は必要以上に語るべきことでは無かった。

危機から脱した僕達はそのまま領域の外へと脱出することができた。

出口の光を潜り外の空気を吸って初めて生きて帰って来れた達成感を感じたのち僕達白枝騎士団は外部者であるシロウと共に安全な場所へ移動し拿捕した邪術師のアジトな関係者から得たその情報をまとめた。



その後僕は問題無しになったシロウを宿である叔父夫婦の家に送り届けた。・・・届けてたんだ。

「何、この気持ち？」

もう少し彼と話をしてみたい。もつと彼を知りたい。喪失感が心の中に広がるような、心の中にぽっかりと穴が空いたようなそんな気持ち。

もう一度会おうと思ってもシロウは次の日にはもう帰国してしまっていた。

——ハートを撃ち抜かれた。そう心の中でウインは思った。あの時崖に落ちた自分を助けた日本人の彼の事を好きになってしまったと。

気づいたその日は真つ赤な顔を抱えてベッドで唸っていた。

——狩人なのに、森の賢者と呼ばれたドルイダスなのに！ああ、一目惚れなんて、カッコがつかない。

そんなシロウは僕と別れて暫くして魔術師達の王カンピオーネに至ったことを知って更に僕を白枝騎士団を驚かせた。

その後幾つもの神を討ち果たし欧州で知らぬものはいない大魔王ヴォバン公爵と競り勝ったと伝えられていますます距離が遠のいたと思った。

「——だからこそなのかな」

広げた報告書、そして指令を胸にウイン・マクガヴァンはあの日の思い出を胸に高橋  
司郎のいる日本へと向かったのであった。

## 46話

ヴオバン公爵との激戦から数ヶ月季節は秋から冬へと向かう10月の終わりになっていた。

「んっんんんんはあ、終わった」

10月の終わりのこの時期テスト期間が終わった後、司郎たち生徒に与えられるご褒美、彼らの通う学校創立記念日を合わせた三連休。丁度タイミング良くハロウインの時期と重なることも相まって多くの生徒はこの休みを存分に満喫するのだろう。

「休みどうする?」

「俺はゆっくり寝ているよ」

「俺は溜まっていたゲームを進めるよ」

周りにいるクラスメイトに予定を尋ねる司郎。

「そう言うお前は『彼女達』と過ごすのか?」

「うっ」

藪蛇を突いた。と認識した司郎、だがもう遅い。

「彼女が3人もいると大変だなあ。この恋愛ブルジョワ野郎!!」

「うわ止めろ組みつくな関節技かけようとするな！」

クラスメイトの一人が司郎に組みつき技をかけようとするとする。

「ぜってえ背中刺されるぞ。何でうまくやっていけるんだよ司郎」

「こ、こつちにも色々あるんだよ」

「可愛い幼馴染にスタイルのいい大和撫子と金髪美人とか teme はラノベ主人公か」

「あだだだだ、ま、まあ、3日あるんだ。一人1日付き合えば何とかいけるはずだ」

「お前ほんと刺されるぞ」

「そうならないためにも甲斐性を磨かないとな。まあ、槍で刺されてもそう簡単に死なないぞ」

「それはお前ぐらいだ。普通はいい船に乗っているぞ」

関節技から脱した司郎の言葉に裏の関係を持つクラスメイトは呆れるしか無かった。

「ようアリサ、テストどうだった？」

ヴォバンとの激戦から暫くして司郎達の学校に転校してきたアリサに声をかける。

「そんなに大したものじゃあ無かったわ。黄昏の十字結社の幹部候補として勉強はしっかりしているから。強いて言えば国語かしらやっぱり言語が違うと大変ね」

「あー、まあ、そうだな漢字とかもそうだがちよつと日本人でもキツイんだよな」

「そう。所で次の休みは三連休よね1日でいいから付き合ってくれないかしら？」

「構わないが1日でもいいのかよ？」

「あら、Ms東屋やMs清水にも相手する時間が欲しいくは無いと？」

「うぐっ」

黄金の髪を弄びながら現代の戦乙女は司郎をからかう男女の関係は司郎よりも社交界に出ているアリサの方が上なのだ。

「お〜い司郎。テスト明け祝いに遊びに行くけどお前は？」

クラスメイトの一人が声をかける。

「悪い、今日親が帰ってくるから辞めとくわ」

「ご両親は出張しているの？」

疑問に思ったアリサが聞いてくる。

「ああ、二人とも俺が手にかからないから海外への長期出張で家をよく開けるんだよ」

「寂しくはないの？」

「いや特にそんな訳だから帰ってくる日ぐらいはなってる」

「そう。ならデートプラン楽しみにさせてもらおうわ期待しているわよ神殺し様」

「……………」

その言葉を聞いて司郎は頭を抱えた。

「まあ、時間はあるからスケジュールを立てればいいか」

学校からの帰り道にそう呟く司郎。彼の考えている事を知った人間がいれば捨てられるか、再び刺されるぞというのだろう。最も神殺しは腹に槍を刺されても死なないの  
で気にするべきではない。

「ただいまー」

両親がいるので玄関を開けるのに鍵は要らなかつた。

「……ん？」

司郎の目に映る玄関の光景。見覚えのある両親の靴そして。

「客がいるな」

カラフルなカラーリングで女性用なのは見てとれるが妙にデカイ山歩き用の靴なのが司郎には疑問だつた。

山歩きが趣味な知り合いがうちの親を訪ねたのかと最初は考えたが司郎はふと思ひ出した。

山ではないが荒道を歩くような人物を司郎の知り合いが一人いたことに。

「いやいや、あいつが来る訳がつうか住所……分かるか」

今や司郎は国一つやすやす滅ぼせるカンピオーネの一人、その上少し前にヴォバンとドニとの大激戦を繰り広げれば名のある魔術結社で情報社会である現代なら簡単に司郎の住所を調べることなど動作もないだろう。

「いやまさか」

両親のいる居間に足を運ぶ。

「母さん……マジかよ」

「あら司郎お帰りなさい貴方こんなに可愛い子が訪ねてくるなんてほんと罪な男ね」  
父親は別の部屋にいるのだろう居間に母親と。

「———やあ、シロウ2年ぶりかな久しぶり僕的事覚えてくれてるかな？」

ボーイツシユな銀髪のショートヘヤーの少女が微笑みながら問う。

「……流石にあの一件を忘れてなんかいないよ。久しぶりだなウイン」

白枝騎士団の大騎士にして今を生きる現代のドルイダス、ウイン・マクガヴァンが2年の時を超えて司郎の前に現れたのだ。

「何の用だよ？」

上手いこと母親からの質問から逃げ切りウインと2人つきりで話す司郎。

神殺しになったから会いにきたならもつと早く会いに来るはずだなら何故？と疑問に思う司郎。

「どんな用かだつて？うん、それはそうだね。顔は知れているとは言え今更カンピオーネになったからって会いに来るのはどうかしているよ。———でもね」

付き合いやすく親しい女友達のような空気を纏っていたウインの空気が変わる。

「2年前君と一時的に機能停止させたドルイドの遺跡が動き出そうとしているんだ事と状況を考えて一緒にきて欲しいんだシロウ」

その真っ直ぐに思いを告げるウインのその瞳を見ながら司郎は思った。――――  
――とんだハロウインになりそうだと。



## 47話

「——2年ぶりか」

ウイン達白枝騎士団から依頼を受けた司郎は仲間達を連れ2年以來のアイランド、ダブリン空港にいた。

「司郎！こつちこつち!!」

「ああ、分かった。今——おっと、すみません」

亜衣に呼ばれ動こうとした司郎だが偶然通りかかった女の人にぶつかってしまった。  
「いいえ、こちらこそ人を探していて周りを見ていなかったから」

ぶつかったスーツを着た女性に司郎は英語で謝るが対する女性は流暢な日本語で返す。

「・・・日本語お上手ですね。つれを待たせているのでそれでは」  
何とも言えない表情をしながら司郎は亜衣達のほうに向かう。

「いい旅の後輩君」

「そう女性は眩く。」

「これで良いですか教授?」

女性は買ってきた飲み物を教授と呼ばれた老齡の黒人に渡す。

「ありがとう。・・・どうやら呼ばれたのは我々だけでは無いようだ」

「ええ、教授。くだんの遺跡が起動したのがアメリカからもたらされた呪物らしいからケルトとアメリカどちらの歴史にも名高い教授をアドバイザーとして・・・そして彼をもしものための戦力として」

二人は司郎達について考察する。

「随分と彼らは交流が広いようだ。だが、皮肉なものだと私は思うよ。間違いなくロクな事にならないと私は思うがどうかね——アニー？」

幻想文学の研究者ジョー・ベストがアメリカのカンピオーネ、アニー・チャールトンに問う。

「さあ？6人目次第じゃない」

あつけらかんに答えるアニー。経験でわかっているのだカンピオーネとは上手くやっていけるか終生の敵となるかのその時にならないと分からない。日米の魔王の会合は一体どうなるかそれは正直神のみぞ知るなのだろうと。

「これから行くところは司郎は一度行ったことがあるんだよね」

遺跡へ向かう車の中で亜衣は行き先の事について司郎に尋ねた。

「ああ、2年前まだ神殺しにもなっていない頃にな」

「……ウインちゃんと会ったのもその時？」

「そうだが」

「何かあった？」

ウインを見ながら亜衣は聞く。

「色々その後ろから二回も後ろを取られたり神獣と戦ったりな」

「……どうしたの？」

司郎の口調が少し低くなったのを亜衣が指摘する。

「いや、まだ三流魔術師だった頃を思い出してな」

二年前の戦いで傷つけられた場所を撫でる司郎。

「三流って……」

「三流さ。特にいい家でも無くそこまで目立つような仕事なんてこなかったしな。そもそも、俺は地元で周りの奴らと小さな仕事をやって青春やっているはずだったんだがなあ……」

どこで間違ったのやらと黄昏る司郎。

「——ふうん、分かっていたけど3人ともシロウの事好き？」

話し込んでいる司郎達を見ていたウインがそんな事を呟く。

「うえ!?!」

「っ!」

「えっ、そつそのお・・・」

その言葉を聞いて亜衣、アリサ、早苗の顔が真っ赤になる。

「あははっ、人たらしだねシロウ。皆まとめて娶るの?」

「ブツ!・・・そつ、その事は・・・」

おいおいやめろよと司郎は頭を抱える。

「あはは、ごめんね。でも、そう見えちゃうのはシロウも解っているんじゃないの?」

「へ?どういう事?」

ウインの言葉に思わず聞いてくる亜衣。

「カンピオーネは魔術師達の王誰も勝つことが出来ない存在でありまつろわぬ神を倒せる。表と裏の法に縛られないただ一つの存在。だから魔王の命令は絶対なんだ」

「———そう、そのとうりなのよね。過去に引き起こされたカンピオーネによる虐殺は欧州では有名よそれこそヴォバン侯爵とかね」

ヴォバン侯爵の引き起こしたまつろわぬジークフリート招来の事を思いだすアリサ。

「そっか、だから危険な儀式に大勢の人が巻き込まれたんだね」

「だから、カンピオーネに好ましい異性を近づけさせるんだよ。もし王の心を射抜き寵

愛を得ればその人の組織は大きな影響力を持つ」

「そう、そうなんだ」

亜衣は思わずうなづいた。自分の幼馴染がそんな遠い存在になつていたとはと。

「……もしかして日本つてそういうところの常識つてあまり認知されてない？」

「そうですね。亜衣さんはまだこちらの世界にきて日が浅いと言う事もありますが。その、日本ではカンピオーネは司郎さんが初めてで」

そう早苗が堪える。

「確か、お隣の中国にも王がいたわよね」

アリサが中国の王を話題に出す。

「羅濠教主ですね、名前は一応。ただ、その名前は聞いていますが教主本人が表舞台に出てくることはまずなくそもそも人物像が不明で」

「そうですね。確かに欧州で有名なカンピオーネと言えば……」

「ヴォバン侯爵……そして、黒王子。アレクサンドル・ガスコイン」

アリサの言葉を繋ぐようにウインが嫌な顔をしながら呟く。

「あ、えつと。その侯爵が悪い人なのは知っているけど……その王子つて人も結構悪い人なの？」

ばつが悪そうな表情で亜衣が聞く。

「まあ、あまりね。黒王子の本拠地はイギリスだから結構やられて」

「黒王子アレクサンドル・ガスコイン。イギリスの王であり魔術結社、王立工廠の若きリーダー。．．．でも、彼は人類の．．．いえ。イギリスの味方ですらない。彼の知的探究の為に幾つもの事件を起こしそれによつて様々な魔術結社が被害を受けたのは言うまでもない」

いやな顔をするウインの代わりにアリサがアレクの話をする。

「そう。特にかの黒王子が一番熱をあげているのはかのアーサー王さえ求めた聖杯。そのため聖杯伝説の基盤の一つであるケルトの遺物が多く持っている私たち白枝騎士団もかの黒王子の被害は少なくない」

「．．．．神様を倒したような人たちが迷惑な人たちばかりなんだね」  
ウインが嫌な顔をしているわけを知つて亜衣もそう言うしかなかった。

「それだからシロウが王になつたのは驚愕したし納得はしたよ。神獣に真正面からぶつかる人間はそんなにいない上に生き残れる強運を持つ人間なら不思議ではないかなつて」

「．．．．ふん」

「まあまあ、そんなに嫌な顔をしなくてよ司郎」

ウインの話に不機嫌になつた司郎を亜衣がなだめる。

「間もなく現場に着きます王、お願いできますでしょうか？」

車を運転していた運転手が司郎に聞いてくる。

「ああ、良いぜ。流石に昔痛い目にあつたからそれを他人も味わつてほしいなんて思わねえよ」

司郎は運転手の言葉を二つ返事で答える。

「えつと別世界を繋ぐ装置を止めるんだよね出来るの？」

亜衣が司郎に聞く。

「ああ、あの遺跡は大地の龍脈を吸い取つて稼働する。だつたら俺の大国主の権能と布津御霊で龍脈を断ち切つて遺跡の呪力を吸い取つて完全に封印する」

「……出来るの？」

司郎の軽い言葉にウインが思わず聞いてしまう。レポートを見ているもそれを目で見てないからこそ司郎の実力を見極め切れていなかった。

「出来る。俺の大国主の権能。ああとなんだつたつけ。……エルダーゴット、アーケイン古き神王の秘術だつたな賢人議会が作つた大国主の権能の名前。そいつで大地の龍脈を操作できるんだ。流石に大地の神様が本気で操作されたら力負けするんだがな」

「司郎の権能のスケールのデカさに困惑するウイン。」

「ふっ、心配するなよウイン。あの頃は違う。俺に全部任せろよ」  
笑いながら司郎はバスを降りる。

「——ホント2年ぶりだな」

遺跡の道のりを歩く司郎一行。

「二応アメリカから来たものが元凶だから向こうの著名な教授を招いたんだけど余計だったかな」

「——さあな。問題ないんじゃないか」

アメリカの王が来ている理由を理解した司郎。スミスはめんどくさいカンピオーネであるが必要以上に関わらなければ言動が変わっているだけでカンピオーネではか나의良識人だから問題ないと司郎は思った。

そうして、件の遺跡に到着した司郎一行……だが。

「——え？」

ウインの目には遺跡を調べていた白枝騎士団の団員が皆倒れていた。

「どっ……どうしたの皆!!」

遺跡の前で倒れている団員に声をかけるウイン。



「ツ！お前ら俺の周りに集——」

此処にいる者たち全員を眠らせた者たちがすぐ近くにいると考えた司郎はウインの傍に近寄り早苗達をこちらに來させようとする。

「——さあ、再び開くがいい妖精郷の扉よ!!」

だが遅い。声のする方向に司郎は振り向く。そして目の先にいる紫の髪の少女に気づく。

「糞っ!!」

この事件の主犯格が誰か察した司郎は古き神王の秘術を使い倒れている団員達を可能な限り遠くへ飛ばそうとする。

そして、司郎とウインは再びあの世界にやって來てしまった。

## 48話

再び人界とアストラル界を繋ぐ狭間の世界にやってきた司郎とウイン。

「——ッ！一人残ったか」

「残ったつもりかして一人で動く気だったの!？」

周囲に探知魔法をかけて二人だけと理解する司郎とその言葉の意味が何をさしていたのかを気づいたウインは問い詰める。

「前と同じなら前と同じように遺跡と地脈の流れを断ち切ってしまったえば良い。その後はこの世界に穴を開けて脱出するだけの簡単な作業だまつろわぬ神が出てきても俺が相手をすればいいウインは自分の身さえ守っていれば良いんだ」

「——何を言っているの?」

ウインには司郎の言葉が一体何を言っているのか理解が追い付かなかった。2年前のウインの知る司郎の実力は上級騎士相手にあっさりと背中を取られた。お世辞にも幸運で神獣相手に生き延びれたとしか言えない。

だが、今の彼はどうか?ウイン自身は心の奥底では今まさに恐怖を感じていた。

状況が前回と同じなら再びまつろわぬ神が軍勢を率いてやって来るのではないのか

と。ここにいたのが高位の大騎士ふたりであつてもこの状況に孤立無援のような恐怖を覚え足がすくんでもしようがないと言わざるを得ない。

だが、この男は、高橋司郎はどうだ？これからなすすべなく一瞬で、または一方的に殺されるのかもしれないかもしれない状況にまるで害虫を駆除するためにトラップを仕掛けてもし害虫が出てきたら叩き落す。としか考えていないのだ。

「それが君なの？怖くないのシロウまつろわぬ神に？」

そう問いかけるウイン。・・・だが。

「——そんな事よりお前や亜衣たちが心配だよ逃げるだけなら幾らでもやりようがあるんだ」

「——」  
絶句した。そしてああ、理解した。ウイン・マクガヴァンは高橋司郎の言葉の意味を理解した。

この男の手は伸びる。そこらの魔術師を比較したらとんでもなく遠くまで。出来る事が幾らでも出来るのだ。だからこそ自分の身の心配は二の次なのだ。

「——」  
「どうやらお客さんが団体さんでお出ました」

眼前には二年前に戦った二足歩行の神獣が群れをなしてやって来る。

「前に出るな援護に徹してくれ」

護られている。偉大なるドルイダスは森の賢者だからこそそれが良く分かったのだ。その手のおかげで自分の命は助かったのだから。

「—— 司郎は！」

不思議な現象が終わり視界が安定した亜衣が周りを見る。

「分かりません。ですが司郎さんなら心配無いはずです」

行方知れずの状況。されど、神殺しがそう簡単に死なない。そう信じる亜衣を鼓舞する早苗。

「ええ、誰よりも勇ましく強い勇士ですからね。——むしろ、心配するべきは私たちの方よ！」

アリサもまた状況をしっかりと見極め眼前の敵を見定める。

「——ほう、良い反応だ。妾の実力を見極めて動かないだけ誉めてやろう」

背丈の短く幼い顔つきと発達をしていた幼子のような風貌をしている紫の長髪をした少女が亜衣たちを見下ろす。

「だが、即死ね人間ども」

その表情は何処までも人を見下す支配者の表情をしていた」

「——アーシエラ!!」

亜衣たちの背後から声が聞こえ振り向くと白枝騎士団の団員と黒人の老人、赤毛の女性がそこにいた。

「——貴方は？」

何処かの資料で見たようなと記憶を巡らせるアリサ。それに老人は答える。

「ジョー・ベストだ。今回の遺跡の為にアメリカから来たのだが遅かったようだがね」  
老年の眼力が眼前の少女に向けられる。

「彼女を……存じなのですか？ Mr. ベスト」

団員がジョーにアーシエラの事を質問する。

「ああ、奴は我々アメリカを長年荒らす邪術師《蠅の王》のトップそして、これまで私たちが戦って出来た強大な敵だ!! 何より奴は神祖だ。並大抵な相手はどうにもならない相手だ」

「しん……そぞ？」

「零落した地母神の末路とされている不死の魔女。まつろわぬ神程では無いけれど神獣よりも強大な存在よ!!」

ジョーの言葉の意味が分からない亜衣に補足するアリサ。

「それならー！」

亜衣の脳内に浮かぶ以前に司郎と神について話をしていた事を。

—— まつろわぬ神って以外にも相性とかあるんだよ色々例外だらけだけど例えば太陽神ってポケモンとかで言うドラゴンとドラゴンみたいな感じで自分よりもステータスが高い方が上をいくみたいな。後スサノオとかペルセウスとかの鋼の軍神、英雄神は文字道理はがねタイプだからほのおタイプに結構弱いんだよ。・・・たまにはがね／ほのおみたいな軍神いるけど。

司郎が以前に話していた事を思い出し相性を突こうと特攻武器を亜衣は布津御霊を呼びとせようとする

(地母神なら鋼が弱点!!)

そう心で思っていた・・・しかし。

「——え？」

その手に鋼の神剣が現れなかった困惑する亜衣にアーシエラは答える。

「驚愕するかそれもそうだな神殺しの走狗。何やら神殺しとのつながりを持っていそうだから妾が断って見せたのだ」

「—— そんな、神祖とは言え神殺しの権能も混じったモノをこんなにもあつさりと」

亜衣達と司郎の大国主の権能による繋がりを断ったことにアリサは驚愕する。

「確かに妾の陣地とかでなければ多少の準備は要るだろう。だが、お前たちの神殺しは今が異界に居る。世界と世界の壁があれば妾達であれば容易い」

と、答えるアーシエラ。・・・そして、再び口を開く。

「彼奴との用も済んだ。後は遺跡を解放したことで溢れる大地の精を回収しながらお前たちを塵殺してやろう」

幼く華奢であるはずのアーシエラの体から溢れる莫大なプレツシャーが亜衣達を襲う。

「———ッ!!皆ここを耐えるんだ私も出来るだけのサポートはする。・・・行けアニー!!」

魔法陣を展開しながら殺害宣言をするアーシエラを前にジョーは周りにいる者たちに指示を飛ばす。

「ええ、気を付けて!!」

そう言いながらアニーは外へと走り出す。

「あ、ちよつと」

此処までアニー達を案内していたのだろう白枝騎士団の団員は勝手に動くアニーを見て困惑する。

「問題ないアニーに任せてくれないか彼女なら素晴らしい・・・助けを呼んでくれるはず

だ。それよりも」

「——」

槍を構えるアリサ、弓を構える早苗、周りの倒れている団員の剣を拾う亜衣。

「この化け物相手に我々が生き延びる事だけを考えるんだ」

帽子を深めにかぶりなおしてジヨーは呟いた。

「——ふむ、中々の状況ですな果たしてどうなるのでしょうか」

遺跡から約一キロ離れた場所にて今回の黒幕神祖グイネヴィアとその騎士ランスロットは混雑とされている現場を見ていた。

「ふむ、しかし愛し子よ、これに一体どのような意味があるのだ？」

戦の申し子である鋼の軍神であるランスロットだが、ランスロットの戦い方、在り方は莫大な呪力とその強大な権能で異だろうが策だろうが何もかも踏み潰す嵐のような純粋な暴力の化身のため謀略策略にはうとい。

「……はあ、少しは叔父様も魔術に詳しくければ余計な説明をしなくても良かったのですが。……今回の始まりはちよつとした天啓から始まりました」

「天啓？何か信託でもあったのか？」



「ええ、信託によつてあの遺跡の事を知りをの時期に起動させる事で様々な事が起きるのではないかと」

「ふむ、これはいわば試しか？」

「ええ、この一件であの方にふさわしき従者が増えればそれでよしそうでなくても遠い大陸の同胞に恩を売るだけでも私達にとつてお釣りのくる成果が出られますわ」

美しき神祖は妖しく笑う。

「——ああ、もう始まつてしまつたのですね」

遠方から遠見の術で参事を確認した賢人議会の重鎮アリス・ルイズ・オブ・ナヴァールは霊体による飛行術のスピードを早めた

「どうせあの方もこの状況を何処かで見物して割り込むタイミングを伺っているのでしょうね」

そう長年の付き合いで運命の赤い糸・・・よりも手錠で繋がれた腐れ縁の魔王の事を考えていたアリスであつた。

——一方司郎達は迫りくる神獣の軍勢に挑んでいた。

「ウオオオオオ!!」

生太刀に莫大な呪力を風に変えた竜巻を纏わせて兵隊達を吹き飛ばしていった。

「——すいい」

その光景を見てウインは息を?んでいた。

カンピオーネ高橋司郎。その戦闘の基本はまつろわぬ大国主から篡奪した『古エルダーゴットアーケインき神王の秘術』を主軸に剣術で進めていく。

軍神、英雄神、そして神殺し強者と戦いその剣の冴えは磨かれ劔に纏う風はかまいたちとなり離れたモノも切り裂く。魔術を組み合わせた剣術だけなら他の大騎士クラスの基本である。

だが、それを神獣。それも一体どころではなく複数、それも統率された動きでだ。人を遙かに超えた神獣の軍隊相手に大騎士であれば一目散に逃走するのが常識だ。

それを行える技術と勝利を嗅ぎ分ける野生の勘を常人では疎むほどの綱渡りを平然と行える度胸が高橋司郎にはあった。

そしてその実力を神獣を薙ぎ払う事でウイン・マクガヴァンに彼が神殺しなのだと改めて知らしめたのだ。

——そして、神獣達の主もまた目の前の障害の脅威を理解した。

「——はあ、また邪魔がいるの。それも神殺しなんて」

凜としているが艶のある声が二人の耳に届く。

「——とうとう本命か」

生太刀にへばりついた神獣の血を飛ばし司郎は眼前の神に視線を向ける。

「ええ、何処かで見ることがあるような気がするけど……まあ、いいや。人間なんてどうでもいいわ。もし私に覚えてもらいたかったらその剣で私の記憶に刻み付けてみなさい」

艶のあるピンク髪を翻し古のケルトの戦衣装を着込んだ美しい妖精のような美貌を持つ美女が二人の前に戦車で迫っていく。

「——シロウ彼女は」

ウインは何となくだが自分達に迫っていく神の名を導き出していった。

「……ああ、恐らくだがな。毒の槍を持つ人型の神獣を呼び出す神。そんなのっしか知らねえよ」

毒槍を持つ人型の怪物ケルトには有名な怪物が一つある。

——克蘭・カラティンとある女王に使える怪物でありとある英雄と戦う際27人いた子供を一つにまとめその腕と槍を持つ怪物。

故にその怪物を従える女など一つしかない。多くの英雄を愛し愛され、権威、悪、狂気の三位一体を持つ古き地母神にして後の世に妖精女王テイターニアのモデルとなる

コノートの女王。

「女王メイブ」

「へえ、戦いしか興味のない猪と違っていたけど私の名前に気づくだけやるじゃない」

自分の名に気づいたことにメイブは笑う。酩酊の意味を持つだけにその柔らかな笑みは多くの男だけではなく女性でさえも惹かれてしまうほどであった。

「悪いがここは通さない二年前と同じだ。今度はあの世に叩き返してやるよ女王様」

武器を構える司郎とウイン。

「良いわよ。打ち壊してあげるわ神殺し!!」

呪力を漲らせ戦車の前にいる牛に突撃するように命じる戦いの幕が上がったのだ。

——そして、アイルランドのとある大麦畑にて。

「よつと。久しぶりの現世だな」

麦が生い茂った畑にて一つポツンと立っていた3メートルはある巨石の前に光が集まり一人の男を形作った。

「一体どんな縁で俺が降臨できたか知らねえが……」

時代錯誤の獣の毛皮が縫い込まれた軽鎧を着込んだ青みが勝った黒髪の男が手を上げると幾つもの古代文字が浮かび上がり周りから土地の精霊が男の周りに集まる。

「——へえ、そんな遺跡があるのかで、その中に神殺しがね……悪くねえじゃねえか」  
土地の精霊との話を終えた男は己の死に場所とされる巨石から出て広々とした道路に移動し自分の愛用の戦車を呼び出す。

「今世の神殺しがどれだけ楽しめるかなマハ！サンングレン！出陣だ行くぞ!!」

灰色の馬と黒毛の馬が走り猛犬を乗せた戦車は司郎達のいる遺跡の方角へと走っていった。

## 49話

「来たれアシエラトの眷属達よ愚かな者たちに静寂なる死を」

無数の蛇が亜衣達に殺到し初手を取ったのはアシエラだ。

「お爺ちゃん下がって!!」

迫りくる蛇に亜衣が剣を振るい対応する。アシエラが呼び出した蛇は通常の蛇を越える速度で襲い掛かり数もさるところながらその牙は強力な呪いと猛毒が仕込まれている恐ろしいものでありその格の高い使い魔はまともな術師であれば2〜3匹出せればすごいと呼ばれる程に高い召喚術であった。

遠い祖先からホモサピエンスの天敵として存在してきた原始の恐怖と脱皮をして新しく生まれ変わるかのようなその様によって古来より蛇は死と再生の象徴であった。故に多くの神話に置いて地母神の象徴であり水と大地の化身として扱われた蛇にまつわる呪文は沢山ある。

だからこそ神祖であるアシエラの蛇使いとしてのレベルはまつろわぬ神を除けば世界トップクラス。人が立ち入る隙が無かった。

「ツ~~~~~!!」

だが、怯まない死の恐怖を握りしめ果敢に亜衣は捌き切る。

「やるわねアイ！」

「アリサさん援護します攻めて!!」

賞賛するアリサに頷きながら早苗も反撃に移る。弓を弦楽器のように弾きながら呪力を高め祝詞を唱える。毒蛇から身を守る術を唱えたのだ。古今東西呪いの原初は豊穰と無病息災を願うものなのだから。

「掛けまくも畏き大神の大前に恐み恐みも白さく——」

早苗の口から奏であられる大国主命の祝詞大国主命もまた蛇に縁深い神性なのだ。

「聖者ゲオルギウスよ民衆を苦しめる悪竜を打ち倒す力を我らに与えたえ」

蛇、竜に対して強い特攻を持つ呪文を唱え竜殺しの呪詛が纏われていた槍を構えてアリサは飛び込む。

「女神フレイヤよ戦少女に白鳥の羽衣を与えたたまえ！」

白い翼を羽ばたかせ迫る蛇を切り抜きながらアリサはアーシエラに向けて魔槍で刺突する。

「アシエラトの夫たるイルよ妻の巫女に守護の力を!!」

呪文を唱えたアーシエラの前にセム語派でエロヒムと書かれた魔法陣がアリサの魔槍を阻む。

「ニンリルの熱風よ」

「ッー」

攻めの魔術と護りの魔術、相対するその術式に拮抗するかに思っていたがそこは人と神祖。相性の悪い術式で相手でもアーシエラは守りながらも攻めの術式を発動しようとしていた。

即座に距離を取るアリサ。その直後に高温の竜巻が現れる。

「何て呪力」

通常の魔術師数人レベルの高等魔術に戦慄するアリサ。目の前にいるのは司郎達神殺しを除けば最高峰の化け物なのだと改めて理解したのだ。

「——古い魔術。中東、地中海をベースとした古き神をベースとした魔女ですね」  
 霊視でアーシエラの魔術を見通す早苗。

————神祖アーシエラ。原作カンピオーネ！において蠅の王のトップにしてジョン・プルートー・スミスの宿敵として長年戦ってきたが死闘の末スミスのアルテミスの弾丸を打ち抜かれ死に体となり齊天大聖の解放のためにレヴィアタンとなりその身を文字道理食い物にされた邪術師のトップとしては中々に壮絶な最後であった。

さて、そんな蛇神レヴィアタンはアーシエラが神であった頃の名女神アシエラトがキリスト教によって化け物として貶められた姿。バアル、アテナ、ミトラ、アフラ・マズ



ダー——そして、大君主。古今東西巨大な神が他の神話によってそのあり方を変質されるのは良くある話である。

ではレヴィアタンに墮とされたアシエラトとは如何なる神か。ウガリット神話に置いて最高神の妻であり神々の母とされる神々の生みの親にして海を行く貴婦人と呼ばれた、他にもアラビアの月を意味するアツラートを起源を同じくするイラトとも呼ばれる。

そんなアシエラトは紐解くと哀れな事にキリスト教において大きな因縁があったりする。——そう、アシエラトの夫イルにあたりする。

イルはエールとも呼ばれその複数形である神々をエヒロムと呼ぶ。

——そう、キリストの父にして旧約聖書においてただ一人の神とされるヤハウエの尊称として扱われる名。

強くあるのへブライ語であるエールは後々ミカエル達熾天使の名前に使われるほどの存在であった。

だがそんな彼らも時代には勝てず後の一神教を始めとするあり方を定めたユダヤ教、そしてキリスト教によって追いやられ神々の母であったアシエラトはそのあり方を否定されて母という立場を消され醜悪な蛇の化け物レヴィアタンへと墮とされたのだ。

「アシエラの祭儀達よ乱れ狂え豊穡のために華の蜜を溢れさせるのだ!!」

「！！！！」

紡がれる神祖の魔術。恐ろしく早く回り一帯にまき散らされ一同は一体何の効果があるのかと警戒する一同・・・だが。

「・・・何も起こらない？」

亜衣が思わず呟く。超越者による戯れか？そう考えたが。

「再び行けアシエラトの眷属達よ！！」

再び迫る毒蛇に一同は対応を急がせる

「はあッ！・・・せいッ！・・・」

迫る蛇を次々に捌いていく一同防御に徹していれば決して部の悪い賭けでは無かった。

「はあっ・・・ツ・・・セエツ！！・・・あ・・・熱い・・・お腹が・・・熱い」

少女達の体に熱が帯びる。その場所人体の下半身女性において生命を産むための揺籠子宮。

「———こんな気色の悪い術を！！」

イラつくアリサ。まさか相手の集中力を奪うために発情を促す魔術など表と裏社会の秩序を保とうとする真つ当な魔術師であれば到底戦闘で使おうとは思えない魔術だ。

「そういうではない妾と戦い死ぬのだからせめて気持ちよく殺してやろうという妾の慈悲

だ」

体の熱に苦しむ亜衣達を見て笑うアシーエラ。バビロニアでのアシエラトは官能的快楽の女主人とも呼ばれ旧約聖書にてアシーエラの名で呼ばれた。アシーエラはカナンという地で豊穡の女神として崇められた。が、その豊穡祈願にかこつけ売春が盛んになってしまいそこに住まうへブライ人には受け入れられるまでそれなりの敵対関係だったらしい。

「・・・いけない熱くて頭が」

熱が頭にまで回ってきたのか剣を持つ亜衣の手には力が抜けていつていた。

「しっかりとしてください亜衣さん！落ち着いて穢れを吐き出すイメージをしながら呼吸してください!!」

体の熱に苦しむ亜衣に早苗は丹田呼吸法の一つ息吹長世の法を進める。

「そろそろ苦しいだろう？楽にしてやろう」

苦しむ亜衣達を笑いながらアシーエラは特大の水魔法の魔法陣を展開する。

「幸いの運を以て、我に祝福を授けた給え!!それはさせないぞアシーエラ!」

ジョーもまた妖精の幸運の加護を発動させその魔法陣の発動を潰す。

「この老耄が良いだろう因縁のついでに先に殺してやろう!!」

「——主の名において悪魔の誘惑を退かん!!消えなさい!!」

ジョーに迫る毒蛇に早苗とは別の手段を使って魔術を取り除いたアリサが槍で串刺しにする。

「私を忘れないでくれませんか。忘れないようにこれを差し上げますわ!!」

煽りを含んだお嬢様口調でアリサは強力な戦闘魔術が刻まれた手斧をアーシエラに投擲する。

「くっ、人間風情が!!」

再び防壁で手斧を塞いだアーシエラだが、神祖である自分がここまで人間風情を倒すことに時間をかけている事にプライドの高いアーシエラはもう我慢が出来ないのだ。

「皆殺しだ!!一切合切薙ぎ払ってくれるわ!!」

再び特大の水の魔法陣を展開する。しかもその規模は先よりも断然に大きい。

「お爺ちゃんもう一度あの魔法を使って!!」

ジョーに向かって叫ぶ亜衣。・・・だがジョーは。

「・・・すまない。もう手持ちのものは無いんだ」

「そ、そんなあ」

項垂れる亜衣、それに対してアリサと早苗は落ち着いて二人の前に立つ。

「日本の魔術はあまり見たことはないけどこういうのを対象出来るの?」

「あのレベルは自信がありません。・・・ですが日本は水災害が多いんですよそれ相應の

術式はあります」

「そう、私達北歐のバイキング達も荒れ狂う海を生きるために編み出した秘術が沢山あるの」

「それは頼もしいですね」

呪力を高める二人その目には覚悟があつた。

「これに生き残つたらシエロにご褒美を強請つても良いんじゃないかしら？」

「へえッ!? え、えつと。・・・そうですね」

「遺言は済んだか人間ども」

アーシエラが魔法陣を展開し終え今か今かと魔法陣からは水が溢れていた。

「では殺すとしてよう蠅の王のトップにして神祖である妾にここまで耐え抜いた事を光栄に思いながら死ぬが良い!!」

魔術を発動させようと指を鳴らそうとするアーシエラ。

「——おつと、それは無しだアーシエラ。主役が出ないでヒロイン達が退場するのは観客にダメ出しされるからね」

バン!! 乾いた銃声が何処かから響きアーシエラの腕を吹き飛ばす。

## 50話

「きつ、貴様は!!」

アーシエラは銃撃でボロボロになった片腕を必死に回復魔術をかけながら銃声の先にいる存在に声をかける。

「ふふふつ、まさか合衆国から離れたこの地で君を追い詰められるとは夢にも思わなかったよアーシエラ」

ゆつくりとザツ、ザツ、ザツ、靴で地面を刻むように歩きながら狙撃者の正体が顕になる。

複眼の昆虫をベースにしたバイザーに青い衣装の上に羽織った黒いカープ。片手には先ほどアーシエラを撃ち抜いたものだろう銀色の大口径リボルバーが握られていた。

「遅かったじゃ無いかスミス」

目の前に現れた存在にジョーは肩をすくめる。何故なら彼女……否彼こそがジョー・ベストが待ち望んだ援軍。アメリカのカンピオーネ、アニー・チャールトンのもう一つの名自己演出過多のキザな貴公子ジョン・プルート・スミスなのだ。

「待たせたなジョー。そして、私の友人を助けてくれた勇ましき乙女たちよ感謝す

る。・・・では」

スミスはリボルバーをアーシエラの頭に向ける。

「これで幕引きだ。アーシエラこのイルランドの地で君と私のワルツのフィナーレとしようか!!」

「ふざけるな!!妾はまだ終わらない!!」

リボルバーの引き金を引こうとするスミスに対してアーシエラは防壁代わりに霧を撒いて逃げようとする。

スミスのリボルバーが乾いた音を響かせる。アストラル界にあるまつろわぬオベロンの領域に住む妖精によって作られたリボルバーは弾丸が入ってない空砲でさえもそこらのバズーカを凌駕する衝撃を放ち霧を吹き飛ばす。

「——ふむ、逃したか相変わらず逃げ足だけは一流だな」

霧が晴れるとアーシエラの姿は無く気配も感じなかった。

「逃したか。仕方ないかありがとうスミス」

アーシエラを追い払った事にスミスにジヨーは感謝を伝える。

「大したことは無いさジヨー。そして勇敢な少女達私の友人を助けてくれてありがとう」

亜衣達にスミスは礼をのべる。

「あ、ありがとうございます。にっ、日本語お上手ですね」

レベルの高い魔術師なら直ぐに言語を覚えれる事を聞いていたがまだそう言った魔術師の常識に疎い亜衣はおどおどしている。

「Mrスミス今回は助けて頂きありがとうございます」

亜衣と早苗の前に立ち改めてスミスに礼をのべるアリサ。

「ふっ、気にする事は無いさこれは君達の実力で勝ち取った命さ・・・さて」

話を切り替えスミスは稼働している遺跡を見る。

「・・・見た所異界への門それも神話やアストラル界に繋がっているものだな」  
「分かるものなのですか？」

スミスの言葉にアリサは問う。

「これでも妖精王の権能を持つていてねこう言ったものには感覚で何となくだが分かるものだ。・・・で、これはどうするべきかね？」

「この遺跡は土地の龍脈を通して稼働しているようだ。資料によれば異界に消えていったあの遺跡の中央に制御装置のような場所があるらしいが・・・」

「————それに適した魔術師が必要になると」

「そうなのだよ」

「この遺跡どうする？そう一同は頭を抱えていると。」



「——伏せろ!!」

スミスが叫び全員がその言葉に従う。

「——ちっ、まだ追いかけるかならば」

スミス達の目の前に稲妻が現れ稲妻は青年へと姿を変える。

「おや、アレクじゃないか。相変わらずコソコソと動いているようだが」

目の前に現れたのがイギリスのカンピオーネ、アレクサンドル・ガスコインだと気づくスミス。

「貴様が悪いが面倒なのに追われていてな失礼する」

そう言いアレクは再び稲妻になり異界の中に入り込んでいった。

「ツ！・・・面倒なのを連れて来たんだから君はダメな男なんだアレク!!」

ドドドドドドドド!! 砂毛煙をまき散らしながらF1クラスの速度でチャリオットがこちらに迫って来る。

「下がれ!! 狙いは私たちだ!!」

スミスはアリサたちに大声で叫びアレクの後を追う。

「今度は一体何が起こっているのよ～～!!」

目まぐるしく事態が動く事に対応できなくなってきた亜衣が叫ぶ。

「待ちやがれ神殺し共!!」

異界へと逃げていったアレクとスミスを追いかけるようにチャリオットもまた異界の中へと消えていった

「——古き時代から交信に使われていた遺跡」

「……サナエ？」

遺跡に向けてブツブツと何かを呟く早苗その目にはガラス細工のごとき玻璃の色になっていた。

「長きの交信によつて神域に繋がりそれによつて神が降りそのせいでこの遺跡は廃れた」

早苗の靈視によつてこの遺跡の歴史が暴かれていく。

「再び動き出した扉を妖精の女王が見つけ出し遠征に動き出そうとした」

遺跡の先にいる女王メイブの気配も探知したのか呟く。

「……そして今、サヴィン祭であるこの時期に遺跡が動いたことによつて歴史はふたたび……」

長時間の靈視にとうとう耐え切れなくなったのか早苗はばたりと倒れてしまった。

「え？え？ちよつと早苗ちゃん！大丈夫!？」

「長時間の靈視で脳に疲れが溜まってしまっただけよ休ませてあげれば大丈夫よ」

疲れ切った早苗を同じ靈視を使えるアリサが優しく休ませる。

「……どうしようこれじゃあ司郎の応援に行けない」

倒れているのは早苗だけではない。アーシエラの大規模魔術なのだろうか遺跡を起動させるために大きく衰弱した白枝騎士団の団員達が遺跡のあちらこちらにいるのだ。

「安心なさいお嬢さん」

ジョーは司郎の無事を心配している亜衣に優しく声をかける。

「彼らカンピオーネは不滅の魔王何度倒れても不死鳥のように蘇り最後には勝利を掴む彼らはそんな人種だ」

スミスの戦いを通してカンピオーネはそういう存在だとジョーはいう。

——一方異界にいる司郎とウインは未だにまつろわぬメイブとの戦闘の真っ最中だった。

「雷よ!!」

雷の禁厭を使いメイブに稲妻を当てようとする司郎。

「はっ、遅いわよ神殺し!!」

迫りくる稲妻にメイブはチャリオットに呪力を注ぎ込み速度を上げて避けきる。

「今度はこちらの番よ行きなさい私の兵隊!!」

メイブは呪力を込めて自分の兵隊を式神として呼び出し司郎とウインに迫りくる。

「っ……」

殺到する兵隊にウインは杖を振る兵隊のレベルは下級の魔獣程で一体一体ならウインの実力でも十分対処できる。

「しまっー！」

だが相手は神小手調べであつてもその数は高位の大魔術師でも対処できないレベルの数で攻め込まれウインは隙を突かれ槍が迫る。

「竜巻よ剣に纏え!!」

やられる！迫りくる死に恐怖していたウインを司郎は暴風の禁厭で兵隊を消し飛ばして助ける。

「——ごめんシロウ」

「気にする——ッ」

対処を終えたと思つた司郎とウインだが莫大な呪力の気配を感じて呪力の場所に顔を向ける。

「私の英雄フェルグス、貴方の剣を私に貸して頂戴」

そこにはメイブが莫大な呪力が蓄えられた剣を虚空から呼び出していた。

「やばい！シロウー」

逃げてと叫ぶウインだが。

「穿ちなさい——カラドボルグ!!」

エクスカリバーのモチーフの一つである魔剣はメイブの呪力を蓄え司郎とウインのいた場所を巨大な斬撃で穿ちぬいた。

「……ツ……あれ?……死んで……無い?」

砂煙の中でウインは思考を回していた。大魔術師数十人でも出せないような呪力で破壊の魔術を行えば如何なる魔術師であっても死は免れない。

ならばどうして自分は生きているんだ?砂煙が晴れていきウインの疑問は氷解した。

「黄金の盾?」

ウインの前に巨大な黄金の盾がありその莫大な呪力量は確かにあの衝撃を受け止めるのだろうかとうと理解した。

「咄嗟だが何とかなつたな」

迫りくるカラドボルグの一撃にカンピオーネならともかく普通の魔術師であるウインが近くにいるから回避は出来ない。だからこそ自分の権能で一番の防御力を誇るカルナの黄金の鎧を盾に改造して対抗したのだ。

本来の神格ではなせない行為しかし、司郎には本来背中が弱点であるジークフリートの権能を全体防御に変えて見せたサルバトーレ・ドニを知っていた。神話を捻じ曲げ自らの新たな力に変えるそれこそが神に勝った王者カシオネの権利だ。

「随分と堅い防御ねそれだけ消費も少なくていいでしょう？」

メイブもまた自分の最大火力を防いだカルナの権能を誉めた。

「はっ、自分で俺を殺せなかつたからダーリンからおねだりするようなロイヤルビッチにそんな心配をアンタにされたらお終いだな」

「可笑しいかしら？ 私が愛して彼らは王になつただから私の為にその力を貸してくれるのは当然じゃない」

古き地母神の末柄であるメイブ。時代が下りサキユバスのモデルの一つになつた彼女はそれでいて古い母権制社会のとある文化を強く受け継いでいた。

それは、王の襲名性。古き母権制社会は自然の営みであり円環的に回っていった。そして、その象徴となつたの大地の女神を軸とする地母神信仰土地の女主人である地母神に指名され王は決められ王として過ごしそして次の繁栄の為に王の命は生贄に捧げられる。エジプトのオシリス神が豊穰神として扱われるのもこれが理由だ。

だからこそ多くの英雄は彼女を愛し愛されそして、誰よりも英雄を殺す事を得意とするのだ。

——けれど、時代と共に母蛇から父鋼に移り行く神秘と大地の時代から鋼と炎の時代へと移り行くのだ。

「その盾が何時までもつか知らないけど何度でも放つてあげる私は英雄に愛された女王私のお願いに皆は私に力を貸してくれるのよ」

再びカラドボルグがメイブに握られる莫大な呪力が注がれる再び司郎達にその斬撃を放つつもりなのだ!!

「やってみろよ。太陽の子に情けをかけられた尻軽女がよ!!」

この異界で太陽による消耗の補佐は出来ない。だが高橋司郎は引かない。

「この鎧は神々の王でさえ壊せぬ不滅の日輪。父の愛を見るがいい!!」

「私の愛するフェルグス貴方の剣を私にもう一度貸して頂戴!!」

メイブは剣を構える大きく天に向けて、魔剣の輝きが異界を照らす。

「シロウ私は!!」

「大丈夫だ。お前は何もしなくても良いお前は俺がを守る!!」

「——」

魔剣を振り下ろそうとするメイブを前に何かできないかと叫ぶウインを司郎は優しく諭す。

「穿ちなさい。カラド——」

魔剣を振り下ろし司郎達を消し飛ばそうとするメイブ。

「——ガハッ」

だが、メイブは魔剣を振り下ろせず胸を何処からかに飛んできた槍で貫かれていた  
「うそ、でしょ——」

神殺しを消し飛ばそうとしたその魔剣は担い手の手を離れドサリと地面に突き刺さった。



## 51話

「ガハッ、……こっ、この槍は……」

メイブの腹に貫かれた一本の槍、動物の骨を元に鋭利に作り上げたのだろうか時代背景を考えなくても良い程の名槍なのは見て取れた。

「……わりいなメイブ。見届けてやつても良かったが余りにも魅力的でな手を出しちゃったよ」

背後から男が現れメイブの背中に刺されていた槍を引き抜いた。

「相変わらず酷い男ね……。いいわよ。今回は戦士として貴方に殺されたんだからそれでお相子にしてあげる」

急所を貫かれ消えゆくメイブは男に手を伸ばす。

「ああ、悪いなじゃあなメイブ」

「ええ、さようならクー・フリーリン」

偉大な女王メイブは消え去り彼女の輝きは異界の風と共に飛んで行った。

「……まっろわぬメイブは消えたけど」

ウインは後ずさりする。強大なまっろわぬ神は消えた……。しかし。

「よう、悪いな神殺してめえの獲物を横取りしちまつてすまねえな」

「そこは気にしてないさ……. . . だけだよ」

司郎は男を見る。

男の見た目は青みかかった黒髪のワイルドな伊達男だ。時代錯誤な毛皮を素材にして作られた軽鎧を自然と着こなしているのを見てもその異常性を見て取る程に明らかだ。

「——アンタとは万全の状態で戦ったよクー・フリーン」

生太刀を構える司郎。

「ハハッ、そいつは悪かったな。実はな、こつちに来てすぐにお前とは違う神殺しと会つてな喧嘩を振つてみたら逃げやがつてよ。お預けくらつて苛立つているんだよ」

クー・フリーンは槍を消して槍にも並ぶ名剣を呼び出す。

「はっ、下がりのついた犬かよアンタは。 . . . いや犬だったなアンタ」

「言つてくれるじゃねえか坊主甘く見ないでくれよ俺に喉笛を噛みつかれたくなかつたらな——!!」

あつという間に距離を詰め名剣を上段にかざし司郎向けて振りかざすクー・フリーン。

「——ッ！」

生太刀で名剣を受け止める。

「ハツ、良い剣を持つているじゃないか。俺のクルージーンを受け止めるなんてな。……そんなじゃあ、その獲物を操れる程の実力を持つてくれよ神殺し!!」

クー・フリーンはクルージーンを司郎の首元に向けて振り下ろされる。

「上等だア! 切られても知らねえぞクー・フリーン!!」

生太刀でクルージーンを受け止め返し刀でクー・フリーンの胴体に生太刀で突きを放つ。

それに対しクー・フリーンもまたクルージーンで生太刀を受け止めそのまま司郎の足にローキックをし姿勢を崩された司郎の胴体にクルージーンを振り下ろす。

「——ッ!」

司郎も負けていない。生太刀でクルージーンを受け流し生太刀の柄でクー・フリーンの胸をどつきそのままヤクザキックを打ち込みキックの衝撃で距離を取る。

「ハツ、やるじゃねえか小僧。これぐらいはやってもらえなきや楽しめねえからな」

クー・フリーンは鎧の埃を軽く払い司郎の腕前を誉める。

「アンタもな流石は音に聞くアイルランド最強の英雄の名は伊達じゃないってことか」  
司郎もまたクー・フリーンの剣技を誉める。

「——早い」

一方離れた距離で二人の戦いをウインは見ていた。

「割り込めない……でもこのままじゃあだめだ。幾らシロウが強くても疲弊した状態であのクー・フリーンを相手どれない」

——クー・フリーン、アイルランドを始めとするケルト神話に記される光の御子の異名を持つ太陽神ルグとコンホヴァル王の妹デヒティネの間に出来た子供。

クー・フリーンの名は克蘭の猛犬と言う意味であり。まだ幼くセタンタと呼ばれていたところに鍛冶師の克蘭の番犬を殺してしまいその責をとり番犬の子供を育てることと自分が今後犬の肉を食べない制約ゲツシュを誓った。

そして女神スカアハがいる影の国へと武者修行に行き多くの武芸を磨き魔槍ゲイ・ボルグを手に入れた。

その後フォルガルの娘エメルと結婚した。

——しかし、若くして英雄となるが早死にすると予言されていたクー・フリーンはクーリーの牛争いにて修業時代の親友フェルディア、影の国での修業時代スカアハの妹オイフェとの間にもうけた子コンラをその魔槍で殺してしまい数々のゲツシュを破られ激戦の末に石柱に自分の体を縛り付けて絶命したとされている。

そんなクー・フリーンは『鋼』の英雄神であり『鋼』の軍神は司郎達カンピオーネとは因縁の宿敵として他の神よりも敵意を向けている。

では、そもそも『鋼』とはどういった神々のカテゴリーなのか彼らの神話に置いて『劍の製造』『竜殺し』『征服』などが主な『鋼』の分類にされるものだろう。

『劍の製造』とは文字道理その神の神話に劍の製造工程をモチーフとした逸話が描かれている事だ。有名なものと言えばナルト叙事詩の英雄バトラスだろう。彼は鋼鉄の体を鍛冶神クルダレゴンによつて更に鍛えられ降臨する際は灼熱するその体を巨大な水で冷やして霧を上げながら降り立つとされる。鍛冶を司る神に鍛えられたは劍を鍛えることであり灼熱の体を水で冷やして地上に降り立つは熱した劍を水で冷ます過程を描いているとされる。

『竜殺し』は言わずもがなジークフリートやペルセウスが有名だろう。彼らは邪竜フアブニールや蛇神ゴルゴンを倒し鋼の体やペガサス、石化の魔眼の首などを手に入れ彼らの戦いを支えていた。古来より竜や蛇は地母神の化身であり古代に置いて地母神とその巫女は祝福を与える存在であった。竜殺しの神話は地母神を打ち倒す神話であり子が成長し母離れの神話もあるのだ。

そして『征服』これは力の象徴である武器のメタファーである。大地に突き立てる劍それは騎馬の民スキタイが崇める原始的な軍神アーレスの祭壇。流れ者の流浪の民の文化は世界に広がるアーサー王のエクスカリバー、シグルドのグラム・・・そして高橋司郎が神殺しとして最初に倒した神、武御雷もまた国つ神との会合にて劍を突き立てそ

の上に座っていた。数多の敵を倒す英雄や軍神はスキタイの流れを組むものも多いのだ。

——そしてクー・フリーンは初戦にて勝利に浮かれ熱を冷まさないままアルスターに戻ったがその熱を冷ますために多くの女性の裸を見せて動揺したところで水をかけて正気に戻すと言うやり方で『鋼』の条件の一つ『剣の製造』を達成しクーリーの牛争いの間に彼に言い寄った三位一体の女神モリガンを返り討ちにしたことで『竜殺し』を成したのだ。

ウイン達アイランド人にとってクー・フリーンの名はシャレにならないクー・フリーンはアイランドに置いて象徴として慕われフィン・マックールと共に彼らの物語はアイランドの小学校で学ぶほどに知られているのだ。

アイランドに根付く魔術結社白枝騎士団のウイン・マクガヴァンにとってクー・フリーンは偉大な英雄なのだ。そんな英雄に命の恩人である高橋司郎は戦っているのだ。

——助きたい。……だが、その圧倒的な神話の如き戦いにただの魔術師であるウインは祈るしかないのである。

「——クルージーンよ光を放て!!」

クー・フリーンはクルージーンに呪力を込め光の斬撃を司郎に放っていく。

「——ッ！お返しだ。水よ集え全てを飲み込む濁流になれ!!」

飛んでくる光の斬撃を躲しながら司郎は大気中の水分を集めて一点に集中した鉄砲水を放つ。

「ハッ遅いぞ神殺し!!」

当たればビルも貫く権能を利用した一撃をクー・フリーンは軽々と躲して見せる。

「そんな生温いものじゃないぞ!!」

鉄砲水を撃ち続けてクー・フリーンの足元を抉り足場を崩す。

「うおっと!!」

「雷よ!!」

態勢を崩したクー・フリーンに司郎は大国主の禁厭で渾身の雷をぶつけた。莫大な呪力が籠った雷はクー・フリーンにぶつかり巨大な土煙を上げていた。

「——倒した?」

砂毛煙に思わずウインは呟いた司郎が放った雷はウイン達魔術師が数十人で放つような威力を放っていた。

「——悪くはねえな」

「——!!」

砂毛煙が晴れクー・フリーンはゆっくりとこちらに歩いて来た。

「流石にこの程度じゃあ死なないよな」

強力な雷の禁厭を放つてもまつろわぬ神を倒せないと司郎は分かっていた。

「おう、魔術はそれなりに出来るんでなお前もそうだろう？」

虚空に古代文字を浮かばせてクー・フリーンは笑う。

「だよなあ、アンタキャスターにもなれるらしいからな」

生太刀を禁厭で作り上げた雨雲に向ける司郎。

「じゃあ、権能を使うしかないよな。数多の命を繋ぐ水を捧げ、此処に来たれ、翼を持つ

蛇よ！」

空を覆う雨雲が消えていき空に翼を持つ巨大な大蛇が現れた。

「――」

啞然とするウイン。それもそうだ。巨大な空を飛ぶ蛇神獣を呼び出す魔術師などあり得ない。だが司郎はやつてのけた。巨大な神獣を従えて司郎はクー・フリーンに迫る。

「ハッ、面白くなってきたじゃないか!! 来いロイグ!! 怪物退治だ!!」

クー・フリーンはチャリオットの御者を呼び出し高速戦闘を仕掛けて来た。

「行くぞやれ羽ミサイルだ!!」

大蛇に飛び乗り司郎もまたクー・フリーンが仕掛けた高速戦闘にノリノリだ。大蛇の



翼から百はゆうに超える一般的な剣の大きさはある羽がクー・フリーリンに迫る。

「ハッ、上等だ」

クー・フリーリンは盾を取り出し羽のファンクを防ぐ。

「突つ走るマハ、サングレン!!真つ向勝負だぶち抜くぞ!!」

ヒヒイイインン!!獰猛な二頭の愛馬は雄たけびを上げ神速の突撃をしていく。

「薙ぎ払えハイドロポンプだ!!」

莫大な呪力を注ぎ込み大蛇は津波の勢いを一点に集中したような水砲を突撃してくるクー・フリーリンのチャリオットに放つ。

異界の空で異形の大蛇と空を飛ぶチャリオットが激突する。大蛇の水泡は街に放たば壊滅するほどの殲滅力を持つのに対してチャリオットの突撃もまた街に落ちればクレーターを作る程の破壊力を持っているのだ。

「今だ喰らいな!!」

クー・フリーリンは戦車から飛び降り大蛇の頭にクルージーンを投擲する。

「ッ——!」

頭に宝剣を突き立てられては神獣であっても耐え切れない。戦車の突撃を食い止める健闘をして大蛇は消えていく。

——だが、これで終わらない。宝剣を手放す事はクー・フリーリンの最大の宝具

で倒す気なのだ」と司郎は理解していた。

「——私が槍を見るがいい。恐るべき海獣より作られし魔の槍を!!」

クー・フリーンの手にメイブを貫いた槍が現れる。

「我が父の愛を見るがいい。如何なる矢も如何なる剣も我が命に届くことあらず!!」  
司郎もまたカルナの鎧を呼び出し魔槍に挑む。

——落ちていく。落ちていく。異界の空で太陽の子の権能による矛盾が始まる。

「——その命、もらい受ける。ゲイ・ボルグ!!」

高橋司郎に向けてクー・フリーンは防具殺しの魔槍で突き刺した。

「~~~~~ッ!!」

太陽の鎧は魔槍を受け止める恐るべき防御力を持つ鎧と同じく恐ろしい程の貫通能力を持った槍のぶつかり合いはその材質に似合わない程の不協和音を異界に響かせる。

「まだだ!! ナウ マク サ マンダ ボダナン・アニ チャ ヤ ソワカ!!」

日天の真言を唱え防御力を高め高温の光をクー・フリーンに放つ司郎。

「——いいや、勝つのは俺だ神殺し! 我が父百芸に通じた長腕のルーよ!! 我に太陽の輝きを与えたまえ!!」

クー・フリーンが聖句を唱えるとカルナの鎧はゆつくりと消えていった。

「なッ!？」

驚愕する司郎だが対処する時間はもう無い。

「光はより強い光によつて掻き消える守りに入ったのが間違いなつたな神殺し!!」

カルナの守りを突破しその恐るべき魔槍が司郎の体に突き刺さる。

クー・フリーリンの槍ゲイ・ボルグにはこんな記述がある投げれば30の鎌となり稲妻のような速さで敵を纏めて貫き。突けば30の棘となり枝分かれして刺さり傷が治らない毒を持つと言う。

「——」

そうなればハッキリ言つてどうしようもない回復殺しの魔槍を受けて司郎は落ちていく。

「あ、．．．ああ、ああアアアツツ!!シロウ——ツ!!」

高橋司郎を思うウイン・マクガヴァンの叫びが異界に消えていった。

「——巻いたか」

現世とアストラル界の狭間の地である異界に一人歩く若き青年。イギリスのカンピオーネ、アレクサンドル・ガスコインその人である。

「厄介な奴だ。いきなり殺しに来て全く英雄神と言うのは面倒なのが多い」

その言葉がそっくりそのまゝ帰つて来るブルーメラン芸を見せるがそれを指摘してくる人は今アレクの前にはいなかった。

「だが、おちおちしてはいれないさつきと・・・ん？」

自分が巻いたまつろわぬクー・フリーンが来ない間に準備をしようとしていたアレクは野生の勘で気づく。

「——あれは」

アレクの視線の先には大量の亡者がアレク、より正確には人間界の入口である遺跡付近へと歩みを進めていた。

「——なるほど正にワイルドハントと言うわけか」

そして、亡者たちの後ろ彼らの王は40メートルはある巨体に巨大な二本の雄鹿を生やしたまつろわぬ神が今まさにサヴィン祭に向けて亡霊たちを率いていたのだ。

## 52話

「——シロウ!!」

ゲイ・ボルグに刺され空から落ちていく司郎にウインは叫ぶ。

高所から受け身も取れないままに叩きつけられた司郎は頑丈なカンピオーネだから常人なら死は免れないようなダメージが体に現れなかった。

「あ、・・・ああ、シロウ・・・シロウツッ!」

だが、司郎の体には魔槍が突き刺さり見るからに手遅れだとウインは理解した。

「ちよいとあっけなかったな」

「ツッ!」

司郎の体に突き刺さったゲイ・ボルグを引き抜きクー・フリーンは寂しげに言い放つた。

「——お前!」

ボウガンを呼び出しウインが習得する中で最も強い戦闘魔術をヤドリギの矢にこめようとする。

「ほう、やるか。いいぞ挑むなら戦士として殺してやろう」

ワインに殺意をぶつけながらクルージーンを引き抜くクー・フリーリン。

「—— ツ……な、舐めないで……」

並外れたその殺意にワインは足がすくみそうになるが必死に勇気を振り絞りながら矢をボウガンに装填しようとした……が。

「えっ!?!」

巨大な呪力の流れを感じたワインは呪力の先、魔槍に刺されて死んだ司郎の遺体が発火して燃えていた。

「なっ、……何で!?!」

困惑するワインの疑問に答えたのは意外な人だった。

「—— なるほどな、復活の権能か」

そう言いクー・フリーリンは司郎の発火現象の意図を理解した。

「……復活」

そう言われてワインも落ち着く。高橋司郎は生きている。まだ彼は完全に死んでいないのだ! 不死鳥のように炎の中から蘇るのだ!!

「止めを刺しても良いが……止めだ。そもそもコイツの喧嘩に横やりを入れたのは俺だ貸しとして返してやるよ」

クルージーンを仕舞ってクー・フリーリンは立ち去ろうとする。

「おい嬢ちゃん、そいつが起きたら伝える。．．．もう一戦やろうとな」

クー・フリーンは虚空に古代文字．．．否オガム文字を描きワインに向けて飛ばした。

「——これは？」

オガム文字がワインの体にぶつかり消える。するとワインの体は少しだけ温かくなっていた。

「ちよつとしたゲツシユだ。俺に対してあそこまで食い下がろうとする根性は気に入った伝言役としてちよつとした代金だ。ちゃんと伝えるよちよつとしたものでもゲツシユなんてな忘れたらただじゃ済まないぞ」

「——忘れないよ」

司郎を見ながらワインは誓う。

「ハハッ、そりゃよかつた。じゃあな嬢ちゃんそいつ次第ではまた会おうぜ」

そう言つてクー・フリーンは戦車を呼び出し空へと去つて行つた。

「——くつ、．．．何とか間に合つたつてことで良いんだよなパンドラ」

真つ白い空間の中で司郎は神殺し達の母パンドラに再開する。

「もくく相変わらずシロウは他人行儀！名前じゃなくてママつて呼んでも良いのよ？」

「……………いや、これ以上母親は要らない」

「……………そう、そろそろシロウも起きるだろうし最後に一つあの遺跡を早く何とかした方がいいわ。あの遺跡は私達のいる場所と現世を繋ぐ橋ましてやこの時期○○○○○○様だけじゃあー……」

最後の名前らしき言葉が聞こえないまま司郎は夢の世界から目を覚ます。

「——うっ……………か、体が痛い……………」

ゆらゆらと消えゆく炎の中から司郎は新しい服を取り寄せる。

「……………シロウ?」

声がある方向に司郎が振り向くとワインが涙目でそちらに向いていた。

「……………わりい、心配かけたな」

あつけらかんとした態度を見せる司郎だが。

「良かった……………良かったあつ……………」

ワインは司郎に抱きつく。

「あ……………ああ、そ、そうだな……………言っではないいな……………お前には……………」

柔らかい少女の体に未だに童貞な司郎はドキドキしてしまう。



「ごめん。．．．でも、僕、シロウが．．．シロウが死んだって思っていたからクー・フリーンが復活の権能を使つたって言つてなかつたら．．．」

「．．．．．悪いな俺には二つの蘇生手段があるその一つがケツアルコアトルから篡奪した権能の能力の一つなんだ自分の体を犠牲にして新しい体を作り上げる能力なんだ出来れば他の人には話さないでくれ」

「．．．．．分かつた白枝騎士団大騎士ウイン・マクガヴァンは君が望む相手だけにこのことを伝えます．．．．．それとまつろわぬクー・フリーンから伝言が——『もう一戦やろう』と」

「．．．．．そうか、なら。アイツの元に」

まつろわぬクー・フリーンの伝言の意味を理解しそう言いながら司郎は移動しようとした。

「——済まないが待つてもらわないか？」

カツンカツンと靴を鳴らす音がして司郎質の前にジョン・プルート・スミスが現れた。

「．．．．．確かアンタはアメリカの」  
 「そうだ。実は私の知り合いが厄介なものを見つけてしまつてね。話すよりも見た方が早いついてきてはくれないか？」

そう言いスミスは司郎達を誘う。

「どうする?」

「ついて行くスミスなら問題ないだろう」

ついて行くこうとする司郎。

「……ほう、これでも客観視は出来るつもりだこんな変人にあつきりについて行くこうするのは感心しないがね」

そうスミスは言う。

「……これは個人的な勘だが俺達の中で一番信用できるのはアンタだ。……一つ聞きたい。ここに来る間に三人の少女を見てないか?二人は黒髪と茶髪の日本人でもう一人は金髪のフィンランド人なんだがアンタの知り合いと一緒に居たんだが……」

スミスにアリサ達の事を尋ねる。司郎は知っているスミスIIアニーだと言う事をだとすれば直前に会っているはずだと。

「見たともわが友と共に恐るべき魔女アーシエラを相手に奮闘していた奴は私が追い払った安全は保障しよう」

「……そうかなら良いんだ感謝するよスミス」

「ふふ、礼を言うのはこちらの方さ良い女性達と巡り会っているようで少し嫉妬してしまふな」

「……」

その言葉に若干ウインは何とも言えない表情を見せた。

「——来たか」

高い丘に司郎達を連れて来たスマスを迎える人影が一人。

「……アンタは」

顔を見れば嫌でも察せるイギリスのカンピオーネ。

「アレクサンドル・ガスコイン!!」

その顔を見たウインは思わず嫌な顔を見せる。

「アレクでいい。書くのも読むのも面倒な名で呼ぶよりも良いだろう」

「……シロウ言いたくないけど離れよう。コイツと関わるとこの辺りの魔術結社からは白い目で見られるよ」

「……アンタ会って間もないけどどれだけアイルランドの魔術師に嫌われているんだよ」

原作でアレクと関わるのは同類のスマスや護堂、恋愛は戦なラブコメやっているアリスぐらいだ。一般魔術結社からすればアレクサンドル・ガスコインがどれだけ嫌われ恨まれているのが良く分かった。

「恨まれる事は俺達ではよくある事だ気にするな」

「否定がしないがアンタよりも嫌われるとは思わないが！」

（どいつもこいつも会うたびに俺がツツコミ役になるんだが大丈夫!? 護堂はまだ戦闘じゃなければ良いカンピオーネーのヤベー奴と言われたアイーシャ夫人と会ったら俺どうなる!?!）

困惑する司郎を相手にスミスが話を進めようとする。

「それはさておきだ。見たまえ二人ともあの軍勢を」

その手の先に強化魔術で強化した目で見える司郎とウイン。

「——嘘、こんな事って」

嘗て司郎とウインが辿り着いた遺跡の中央部境界を閉じる門の制御装置に大量の悪霊が渦巻いていた。

「——不味いな。これが外に漏れだしたら大変な事になるぞ」

とてもじゃないが人が相手をするような数じゃない事に司郎は呆れる。亡霊の軍勢は後方から幾らでも現れる。

「それだけじゃないこれを見ろ」

そう言いアレクは携帯にある写真を見せる。

「——これは」

「鹿の角を持つ神……ケルヌンノス」

「そうだ。奴がこのワイルドハントの総大将なのだろうあれを撃破するか再び閉じないとうなるか分かるはずだ」

「少なくとも人間社会に重大な損害が起きるだろう。だが、問題はまつろわぬケルヌンノスだけではない。私やアレクを追ってきたまつろわぬ神がいた」

「……クー・フリーンか。それは俺が相手をする奴には借りがある」

「ほう、既にあれと接触……いや、戦闘したな。良いだろうあの英雄神はお前が相手をしろ」

「……いいき。やってやるよどの道こんな真似をしてくれたのはあのかませ神祖だからなアンタに当たってもしょうがない」

「決まりのようだな……では我々はまつろわぬケルヌンノスとその配下のワイルドハントを」

「俺はまつろわぬクー・フリーンを相手にするちゃんとなんとかしてくれよ先輩方」

「もちろんだとも安心してくれ君が主役を譲ったんだしつかりと私が演じきろうじやないか」

「おいまで、それは——」

その提案に意を唱えようとするアレクを尻目に司郎とワインはまつろわぬクー・フリー

リンを相手にするために別の場所へと移動した。

「……………どうしたんだよ嫌な顔をして」

禁厭を持つてまつろわぬクー・フーリンの居場所を調べていた司郎をウインは見ている。  
た。

「ちよつとね……………君は僕に……………どうして欲しい？」

「……………ああ、なるほどね。分かってているよついで行くか来ないか」

「……………うん。正直あの化け物相手に正直怖い。命がけの仕事なんて良くあるのにそれでも今回ばかりは怖くて足の震えが止まらない……………でも、このままでは大量の悪霊が現世に解き放たれてしまう。それは白枝騎士団として見過ごせない」

「それならお前は外に行つて皆にこれを伝えるに行く選択肢もある。俺達が負ける事は別に不思議じゃないましてやあの百鬼夜行は少なくとも外に漏れた時の対策できる余裕を作る役割は大事だよ」

「そうかもしれない……………それでも、僕は今回だけは何故か……………その選択肢がとれない」

「何でだ？」

「……………君を置いてけない。ゲイ・ボルグで貫かれて大分消耗しているはずだ」

「……………そうだな。だが、アイツらが無事なら短い間で呪力の当てを用意する事が出来る……………おつ」

移動している二人の前にまつろわぬメイブが残した軍勢の防具が置いてあった。

「これ、残ったんだ。あの後ずつと準備していたのかな」

「有り得なくは無いなアイツらは神だ。どれだけ長い時間経とうと平気でいること自体は不思議じゃない時間間隔が違うんだろうさ。」

甲冑に剣、槍……………そして。

「チャリオットと軍馬か魔獣のようだが禁厭をかければ操れるか」

軍馬に動物を操る禁厭をかけて操る。

「……………御者必要?」

思わず司郎に問うウイン。

「……………さあな、だが。アイツは乗って来る。俺はそう思っている」

「……………シロウ。君の戦いをサポートしたいって言ったら迷惑?」

ウインは手を司郎の腰に当てる。

「……………ウイン。それで良いのか?」

ウインの顎に手を当ててクイツと上げる。

「うん……………こう、言うのは……………その……………恥ずかしいけど……………あの日……………君に

助けられたあの日。君に夢中なんだ。だから——ンツ」

うだうだ言っているウインの口を口で塞いでやる。

「ありがとうなこんな俺なんかを好きでいてくれて。．．．だから俺はその思いに答えるのが男の仕事だ。だからお前に俺が隣に立てる力を俺が与える」

ウインの口の中に舌を入れて舌と舌を絡ませてウインの中に大国主の禁厭を流し込んでいく。

「．．．．シロウ．．君刺されるよ．．他の神殺しは侍らせたりするような人はいないのに」

「いや、今世はそうだけど昔の神殺しはそう言った連中がいただろうし前時代な奴が居ても良いじゃないか」

「あ、はは。そうだね、むしろ組織としてはそっちの方がいいからね」

ウインの体に禁厭が順応していくそうする事でウインの魔術を大きく強化する。

「——この戦い勝つぞウイン俺とお前で」

「——うん。勝とうシロウ二人で」

異界の空の下で二人の男女の舌が絡み合う。次の戦いに勝つための儀式が今終わろうとしていた。



## 53話

「——おつ、来たな坊主元気そうで何よりだ」

異界に構成された森林地帯。木が幾つも生え枝に雑草が生い茂るその地にまつろわぬクー・フリーンはチャリオットに乗ってやって来た司郎に軽く声をかけた。

「ようリベンジしに来たぜクー・フリーン」

「そうか。それは何よりだ。嬢ちゃんも混ざるんだな？」

クー・フリーンはチャリオットの御者をしていたウインに声をかける。

「そうだよ。女が戦場に出ちやったらいけないクー・フリーン？」

恐怖を勇気で飲み込んだその目をクー・フリーンはしっかりと見る。

「良い目だ。その目は恐怖を飲み込んだ戦士の目だ。……そう言えばお前らの名前を聞いていなかっただなせつかくだ。結末はどうにせよ戦士として名を聞かないのは礼儀が無い。俺達の宿敵神殺しよ勇氣あるドルイダスよ。汝名は？」

そうクー・フリーンは二人に名前を訪ねて来る。

「——司郎。高橋司郎だ」

「——ウイン。ウイン・マクガヴァン。白枝騎士団の大騎士にして偉大なるドル

イダスだ！」

名乗り上げる司郎とウイン片方は短く。もう一人は堂々と昔ながらの騎士のように名乗り上げる。

「シロウにウインね。良いだろう偉大なる太陽神ルীগとコンホヴァル王の妹デヒティネの子クー・フリーンの名に置いて戦場に立つお前達を今一度戦士として認めよう。……さあ、立派な戦車にも乗っているようだし。いっちょ騎馬戦と行こうじゃないか!!」

クー・フリーンは戦車を呼び出し乗り込む。

「行くぞロイグ!! 相手をするに相応しい相手だ楽しい戦いにしやれ込もうぜ!!」

そう言うのとチャリオットの御者ロイグはチャリオットを走り出した。

「俺達も行くぞウイン!! ……我が禁厭は全ての秘術を高める言葉なり!!」

「うん、行くよシロウ!! 豊穰にして馬たちの女神であるエポナよ! 我らの馬に汝の加護を!!」

ウインの口から動物強化の呪文が唱えられ二頭の馬は大きく叫びチャリオットを鳴らす。

「しっかりと捕まっついてねシロウ!!」

「応! 運転頼むぞ相棒」

ガラガラガラ!!まるで地を這う雷のような音を鳴り響かせ異界の森にて人と神殺し、そしてまつろわぬ神の戦車戦が始まった。

「——さて、どう料理しようかね…」

蹄と車輪が大地に轍を作らせながらクー・フリーンは思考を巡らせる。

「……アイツはさっきの戦いで俺のゲイ・ボルグを喰らった回復殺しの呪いを前にただの蛇の再生の権能では死ぬ。それなのにゲイ・ボルグを受けて死ななかった。詰まる所アイツが蘇生に使った権能はただの蛇じゃない。死と再生の逸話を持ち前の体を捨てて新しい体を構築し魂を入れる権能を持っているはずだ。体力がどれだけ残っているのかね……」

そう司郎の呪力の総量を考察していたら。

「おっと」

強力な雷撃の権能が飛んできたのでチャリオットを操作し意図も簡単に避けてしま  
う。

「……なるほどな。遠慮はするなか。全く病み上がりのくせに」

クスリとクー・フリーンは笑った。

「……決まった？」

一方チャリオットを走らせるウインは布津御霊で雷を発射した司郎に思わず問う。

「……決まるわけないだろう。あれでさえ俺達の戦いはジャブでしかない」

「ええ……普通の術師なら神具を扱っても出せるか分からないのに」

それに困惑するウインに司郎はクスリと笑う。

「そいつが俺達の戦いってわけだ。……来るぞ！速度を緩めろ!!」

司郎の指示を聞いてウインは馬達を操りブレーキをかける。その直後一筋の光が横切り幾つもの木々をなぎ倒す。

「……うそ。ただの石!?!」

魔術で光の正体を確認したウインはそれが投擲された石ころだと理解した。それと同時に驚愕した呪力を宿していたのだからとしてみんな威力を持つのだろうかと。

「良い操縦だ嬢ちゃん。今ので馬を落とすつもりだったが少なくとも俺と騎馬戦をするだけの技量があるってことだ!!」

続けてクー・フリーンは投石器に石を詰めて投げる。呪力を帯びた石は魔弾となり司

郎達を狙う。

「ッ!!」

どれだけ呪力を魔術を馬に注ぎ込んで操ってもその魔弾は正確に二人を射抜かんと迫る。

「シッ!」

司郎は神剣を振るいその魔弾を切り裂く。切り裂かれた魔弾はただの石ころとして地面に落ちていく。

「戦車の上での剣の腕も上場。・・・それじゃあ、先ずは一太刀と行こうか!!」

クー・フリーンはクルージーンを引き抜き司郎達に近づく。

「ウイン!手綱を離すな集中しろ俺が守る。走らせるだけに集中するんだ!!」

「う、うん!」

迫るクー・フリーンのチャリオットに恐怖するウインを司郎は発破をかける。その発破が染み渡りウインは握る手綱を強く握る。

「おりやあ!!」

「——セイッ!」

飛び移るクー・フリーンの剣を前に司郎も神剣を振るい対応する。

短いチャリオット同士の間場を上手く工夫しながら宝剣と神剣をぶつけ合い火花と

その音が鳴り響く。

「そこだ!」

「ちっ、そこ返すよ!」

一合、二合、三合。神殺しと英雄神が剣と剣で打ち合うオーケストラ。重なる度に火花と鉄がぶつかる音が響く。

クー・フリーンが宝剣で突きを放てば司郎はそれを神剣で受け流しながら距離を詰めてその胴体に一撃を打ち込もうとする。それに対処するために体をひねらせ斬撃は虚空を切る。

「よっ」と

流石にやり過ぎたと思いきー・フリーンは自分のチャリオットに戻る。

「お返しだ喰らっておけ!!」

呪力をひねり出し布津御霊から特大の雷撃がクー・フリーンに迫る。

「チイツ!」

防御魔法を使ったのだろうか常人であれば黒炭となしているだろうにかすり傷で済ませている。

「それでこそだ。それでこそ、俺達の宿敵だ神殺し!!」

まるで獲物を見つけた狼の如き鋭い顔に恐ろしく濃厚な殺意にウインは鳥肌が立つ

た。

「——離さない。この手綱だけは！」

それでもウインは戦うのを諦めない彼女を駆り立てるのは司郎への敬愛と戦士としての誇り。焦がれた少年への憧れと共に戦場に立てているならば、白枝騎士団の大騎士として預けられたこの手綱は決して離さない——。

「——さて、いっちょ仕込みをしますか」

ゲイ・ボルグを刺され瀕死の中ケツアルコアトルの再構築の分けられた権能『金星の鳥』とでも言うのかを発動させていた最中ぼんやりと浮かんだ四つの風とその真ん中に太陽のイメージを神殺しの直観を元に発動条件を整えるための準備をする。

「死よ腐れ、次の命を育むための苗床となれ」

司郎の手に現れる古語がばら撒かれ空を舞う。

「——へっ、熱くさせてくれるじゃないか」

魔術で司郎達を探索していたクー・フリーンは司郎から飛んでくる攻撃に対処していた。司郎が放ったのだろうか斬撃が空を舞い。司郎とクー・フリーンが走らせるチャリ

オットの間にある木々が倒されそれらは一同にクー・フリーンの馬車に迫る。

「ロイグ！戦車を倒すんじゃないぞ!!」

呪力を注ぎ込みチャリオットの御者であるロイグの能力を上げ迫りくる倒木を躲していき飛んでくる斬撃を同じくクルージーンの斬撃で相殺する。

「ハハッ、熱くさせてくれたんだお返しだ。ちゃんと生き延びろよ!!」

投石器に弾丸を込めて魔術で特定した移動している司郎達に向けて魔弾が放たれる。

「——ッ来るぞ!!」

「う、うん!!」

チャリオットを走らせている司郎達に剛速球で飛んでくる魔弾。一度避けられたからと言って油断は出来ない。槍や剣の逸話が多いだけで元より古代ケルトに置いて投石器は一般的な武器ましてや逸話ではクー・フリーンの父は魔眼の神であるバロールをタスラムと呼ばれる投石器で撃ち殺している。当然クー・フリーンとてその狙撃術は一流である。

「——ッ……お願い……」

馬達を迫りくる魔弾の恐怖をなだめながら自分もまた迫る死の恐怖を勇気で抑え込



んで技術、魔術自分のすべてを使い迫りくる魔弾を避けようとするワイン。

「——ほう。うまいじゃないか嬢ちゃん。その年で俺の投擲を避けるとは大した腕だ。誉めてやる」

次々と放たれる魔弾を必死に躲かっていくワインを魔術で見ていたクー・フリーンは素直に誉めていた。

「……だが、今度のはそこらの連中が投げるようなものと一緒にするなよ。……もつとも、この程度で死んだら魂をとつ捕まえてあそこにいる亡霊共の餌にしてやりたくなるからな」

クー・フリーンの父太陽神ルージュは別名サウイルダーナハ日本語にして百芸に通じた。その名のとうり魔術、武術、工芸、医術、古史などなど多芸に通じかのカエサルが書いたガリア戦記に置いてヘルメスと同一視される水星の神メルクリウスと同一視される神とされる。

そして、その子であるクー・フリーンもまた幾つもの武術と魔術を習得していた。これはそのほんの一つ回避した魔弾は跳弾し再度司郎達を襲う。

「うそー！跳弾するなんて!？」

跳弾する魔弾にワインは絶句する。異界とはいえただの樹木の耐久力など大したものでないはずだ。それなのに木々に当たって落ちる。勢いが残って埋め込まれると

かではなく。発射されたその勢いのまま司郎達が乗るチャリオットに迫って来るのだ。  
「それだけじゃないな。あらかじめ跳弾を前提にして到達するように計算を入れて死角から狙う一撃が幾つも来ている」

木々を弾きながら司郎達に迫る死の魔弾その数約50あらゆる場所に投擲し跳弾して司郎達を打ち抜こうとする。

「ど、どうしようシロウ!!」

「———対処するさ。風よ嵐となれ!!」

一度に全方位で迫る死の弾丸を相手に嵐の禁厭で嵐の防壁を張り対処する。

ギリリリリイイイイ!!! 暴風と魔弾という材質のはずなのに明らかに鉄を切断するよなおかしな音が鳴り響く。

「そらよつと!!」

更に呪力を防壁に注ぎ込んで一気に周囲を吹き飛ばす!!!

「よし、魔弾は対処した!!」

嬉しそうに笑うウイン。強烈な呪力が籠った魔弾が四方から飛んで来て恐怖していたウインからすればそれを対処できたことは素直に喜ぶべきなのだろう。

「———いいやこれからさ」

御者の先端にある馬達の連結を切り馬達を自由にさせて禁厭でチャリオットを動か

す司郎。

「ちよつ、何を言っているの!? つか戦車が!？」

困惑するウインだが直後に莫大な呪力を感じ取ってその方向に振り向く。

「残念だったな楽しかったが遊びは幕引きだ」

クー・フリーリンはウイン達を追い越し莫大な呪力を宝剣に込めながらウイン達が乗っているチャリオットに突撃してきた。

「そういう事さ。ウイン！ 着地は任せるぞ!!」

「分かった!!」

司郎の指示を聞いて杖とヤドリギを持ちながらウインはその時を待つ。

「真つ向勝負だ」

布津御霊を蜻蛉の構えを取り神剣に呪力を注ぎ込む。

「輝けクルージーン!! 夜の闇を照らす輝く光となれ!!!」

「鳴り響け布津御霊!! 天津の神威をもって敵を撃て!!!」

「2つの輝きがぶつかり異界を照らす。」

## 5 4 話

「——まったく面倒な相手を押し付けたな」

グチグチと愚痴を言いながら仕込みをしているアレク。アレクと司郎お互い常識人のふりをした歩く火薬庫良くも悪くも歪んだ合わせ鏡。同族嫌悪に近い感情がアレクに渦巻いていた。

「そうかね？彼は元からこの事件に大分前から関わっていたそんな彼はここから現世に迫るワイルドハントから人々を守る役割を私達に明け渡した詰まる所『主役』の座を渡してくれたんだ。ならばこそ私はその主役の座を存分に踊らせてもらうさ」

対するスマスは上機嫌だ。事前にこの遺跡の事は聞いていた。そして神殺しになる前の司郎がこの遺跡に関わっていた事もだ。アニーの第二人格であるスマスは舞台上がる役者のような振る舞いを好む。現世からこの異界に神殺しを追いかけて来たまつろわぬクー・フリーンを迎撃するか。それとも異界から現世：人間界に迫る危機ワイルドハントとその首魁まつろわぬケルヌノスを迎撃するか舞台上に置いてもつとも盛り上がる場所はどちらか言わずもがな後者である。

「ではケルヌノスは私が相手をする君はワイルドハントの足止めを頼む」

そう言つてケルヌンノスに挑もうとするスミス。

「おい待てなせそうな・・・」

勝手な行動をするアレクだが逆に勝手な行動をされる事が一番いやなためアレクに思わず文句を問うが…実の所アレクサンドル・ガスコインとジョン・プルートー・スミスは実は一度殺し合いに発展したほどの中の悪きであった!!

『冥王の名にのちに命ず。天を落とす黒き翼を捧げよ。空よ、我がために胸襟を開け』

権能を発動させる聖句が紡がれジョン・プルートー・スミスの権能煙を吐く鏡・魔神まつろわぬテスカトリポカの権能『超変身』から分かれた化身の一つ黒き魔鳥が発動しワイルドハントのいる場所にその条件である地震が発動する！揺れ動く大地に多くの亡霊たちの動きを奪う！

「ちっ、勝手な真似を…まあいい。俺は仕込みをして奴の戦いを見ていればいい」

アレクも墮天使レミエルから篡奪した最初の権能『電光石火』を発動し神速で混乱している亡霊たちの中に飛び込み聖句を唱える。

「戸惑いの館を前にして——旅人よ、希望を捨てよ！」

展開されるのは入り込んだ人間を迷わす迷宮。大地と迷宮の神まつろわぬミノスから篡奪した『大迷宮』が悪霊たちを誘う。

「——ちっ、全くどいつもこいつも。少なくとも奴らはこれで問題無いだらう。念の

ために呼んでおくか」

迷宮の奥地に移動したアレクは使い魔を呼び出す権能妖蛇の魔女まつろわぬメリユジーヌから篡奪した『無貌の女王』を発動した。

「この迷宮にいる亡霊たちの相手をしてやれ必要以上に相手をしてやらなくてもいい」

半人半蛇の女神の使い魔はコクリと頷きアレクの視界から消える。

—— 一方その頃スミスは。

「これはまた巨大な神だ。まるでキングゴングだ。これはやりがいがある」

黒き魔鳥に変身しまつろわぬケルヌノスに接敵するスミス。まつろわぬケルヌノスは全身を毛で多い古代の狩人のような装いを着込んだ見るからに異形と呼びたいほどの巨神だ。スミスのホームグラウンドであるアメリカの怪獣キングゴングを連想するのも仕方ないのだろう。

『……………』

迫りくるスミスを見てケルヌノスは何かを口走った。こちらに気づいたのだろうケルヌノスはスミスを打ち落とすためにその体毛から無数の鳥に変身しスミスに向

けて突撃してきた。

「これは中々ジャブとしてはそれなりにだな」

スミスは魔鳥の巨大な翼を羽ばたかせそれに発生するその暴風はただの鳥であればあつさりと吹き飛ばすだろう。．．．しかし、ケルヌノスによって生み出された鳥型の神獣は暴風を相手に留まるだけにとどまり風が止んだ瞬間。スミス向けて一直線に突撃していく！

「——むっ」

迫りくる鳥たちの突撃にスミスは魔鳥の体を呪力で更に強化して迫りくる鳥ミサイルを耐える。

「問題は無いな。．．．では行こうか」

魔鳥の体を強化したままケルヌノスに迫るスミス。スピードが乗ったかぎ爪がケルヌノスの体を傷つける。

「——」

そこらのビルを余裕で破壊するような一撃だが相手は動物の王にして生と死の神スミスの一撃を喰らってそこまでダメージを追っておらず切り裂かれた傷は直ぐに元通りに治っていく。

「——」

お返しと言わんばかりにケルヌンノスはその巨大な腕でスミスに殴りかかった。

「……………うおっ!!…これはまた厄介な『狩り』の技術だ。私が狩られてしまふな」

40メートルの巨体の割には恐ろしい程の拳がスミスに迫る。通常であればそのような巨体の拳そこらのへりならいざ知らず神殺しであるスミスを捉える事は出来ないはずだ。しかし、ケルヌンノスはケルト神話にて狩猟神にして獣王と呼ばれる。獣の知識を知りつくし周りを飛び回るスミスを正確に殴ってくる。当たればただでは済まない威力を持つ降りかかる拳にスミスは冷や汗をかきながら避けきっていく。

「……………やれやれ流石はまつろわぬ神か」

スミスはケルヌンノスに遠矢撃つ月女神まつろわぬアルテミスから篡奪した『魔弾の射手』月六発しか発射できない魔弾を放つ。

「!!!」

この魔弾は効いたのかぐらつくケルヌンノス。そして、ケルヌンノスのその目には明確に眼前の神殺しに対して明確な敵意を抱き始めたのだらうケルヌンノスの周囲から見るからに危うい黒い瘴気があふれ出している。

「煙履く鏡、テスカトリポカの徴よ!」

言霊を唱え魔鳥の口から魔性の毒霧を放つスミス。だが、ケルヌンノスは周囲の瘴気



を操作して毒霧を相殺する。

「——むう、この程度では大したダメージにすらならないのか」

喰らえば神とてただでは済まないはずそう思っていたスミスはケルヌノスは睨みつけて呪力を昂らせて死の瘴気を操作して攻撃を仕掛けてくる。

「これを喰らったらシャレにならない!!」

何かに手を伸ばすように鞭を振るうかのように首を切り落とす横なぎのように獲物を打ち落とす矢のように死の瘴気は形を変えてスミスの命を刈り取るために迫る。

常人であれば当たるところか瘴気的一端が触れば死を免れない濃密な死をスミスは上手く躲していく。

(——さて、このままの状態であれを倒すにはあまりにも手札が少なすぎる)

スミスの権能はテスカトリポカの『超変身』、アルテミスの『魔弾の射手』、妖精王オベローンの『妖精王の帝冠』、地獄の伯爵ピフロンスの『形なきもの』シユメールの竜神ティアマトの『深き底の使途』の計5つ。そしてスミスにとって攻撃手段になる権能は『超変身』『魔弾の射手』『深き底の使途』の三つ。

『深き底の使途』は水底や地底に異形の魔神を呼び出し大量の水がある場所を荒らし氾濫や地震を引き起こす。大量の水があれば敵を水の中に落とすことも出来るが眼前の巨神相手にするような水量は無い。よってこの権能でケルヌノスに使うなら地震

を引き起こし地割れで地下に落とすしかないだろうがそんな悠長な時間は無いだろう。

では、残り二つは？それも少ない『超変身』は5つの姿があるがその発動には生贄が必要だ第一の姿は『人が土より造りだし巨大な建造物』第二の姿は『人口の光』第三の姿は『雨と自分自身』第五の姿は『自分以外の者が殺した生き物の屍』…そして第四の姿現在スミスがなっている魔鳥の姿の生贄は『大地』である。

——だがしかし、他の姿を使おうにも周りには生贄に使えるような人口の光はおろか巨大な土を使った人工物すら無い。生き物の屍も無く事前に司郎が倒したまつろわぬメイブの軍勢は生贄になるか怪しいものだ。

そして、『魔弾の射手』の弾丸は先ほどアーシエラに撃った一発、続けてケルヌンノスに放ったのを含めて残り四発弾丸が補充されるのは次の新月どう使うかジョン・ブルー・トロー・スミスは決断に迫られていた。

「——このまま仕掛ける！」

決断したスミスはこのままの姿のまま呪力を高めケルヌンノスの周囲に湧いている死の瘴気に耐えきる程の状態にして突撃を決行したのだ。

「——」

その意気やよしと言わんばかりにケルヌンノスは己の全てを駆使して全力で眼前の神殺しの獣を狩るべく死を振るう。

「つ！」  
迫りくる鞭のように振るう死を躲す。

「二つ！」  
続けて敵を一度に薙ぎ払うように横なぎに振るわれる死を高く飛ぶことで回避する。

「三つ！」  
回避した先に放たれた矢のような死を直感で見抜き回避した。

「四つ！これで！」  
地中から伸びてくる手のような形をした死を回避しケルヌンノスに肉薄したスミス

「だが。」  
『ガアアアツツ!!!』  
咆哮しケルヌンノスの腹から獣の口が生えてスミスを喰らおうとする。

「五つだ！喰らいたまえ!!」  
魔鳥の姿を解除して怪人の姿になったスミスは愛銃をケルヌンノスの口に向けてアルテミスの弾丸を全て叩き込む!!!

「オオオオオオツツツツツ」

六発全て放てば国一つは滅ぼせる!!?!? ダメージを与え巨神の巨体は大地に倒れる。

「これは効いただろう・・・む?」

倒しきっていないのかスミスは体は未だにケルヌンノスの気配を感じて体が昂っている。だが、それとは別にスミスの心にはまた別のざわめきを感じていた。

「———テスカトリポカの権能が反応している。何故だ?」

自分の最初の権能テスカトリポカの権能が何かに反応している。そんな奇妙な感覚がスミスは感じ取った。

## 55話

「ツ、ヤドリギよ大地を包むものとなれ！」

神剣と宝剣のぶつかり合いの衝撃がウインを振り飛ばした落下し大地に叩きつけられる前にウインはヤドリギを魔術でクッションにして落下による衝撃を無くす。

「・・・酷い」

二つの神の剣の威力は凄まじく周囲一体の木々を薙ぎ払った。更に雷で木々が燃えその上腐敗の術がかけられた事で燃えやすくなっていた木が更に辺りの木を燃えやすくさせる。四葉のクローバーなどの希少植物を崇拜している神木文化などを重視するドルイドからすれば思うことは多い。

「シロウは・・・」

彼は何処なんだ無事だと良いのだがとウインは周りを見て司郎を発見する。

「——へっ、炎か悪くは無いな・・・だがこのレベルじゃあ俺達『鋼』は殺せないぞ神殺し」

一方クー・フリーンは炎の中でも平気だった。彼の父は太陽神ルীগ幾ら鋼の弱点である鉄を溶かす高温はまだ届かない。

「分かつているさ。これは呼び水だ」

司郎もまた炎の中虚空に手を伸ばし権能を扱う聖なる聖句を唱えた。

「満天を照らす我を見よ！第一の太陽が遣わした火を奪い我は四つの熱風と共に輝ける焰の龍とならん!!」

唱えた瞬間辺り一面を燃やしていた業火が大蛇に飲み込まれたがごとく消え去り司郎は炎の繭に包まれていた。

「させるかよ!!」

如何なる手を使うかなど気にしないと云わんばかりにクー・フリーンは宝剣を司郎を包んでいた繭に叩きつけようとしたが。

『おせえ!!』

宝剣が迫る前に熱風がクー・フリーンを吹き飛ばす。

「あれってシロウ?」

ウインが驚愕するのもしようがない。何故なら繭から出てきたのは恐竜のような顔をした赤金色のドラゴンが現れたのだ。

——これこそが高橋司郎のケツアルコアトルの権能『ベルセルク・レツックス狂い吠える恐竜』の炎

を生贄にした四つ目の能力嘗ての暴走とは違う。完全に制御した竜化を果たしたのだ。

「こいつは人の事を言えねえが随分と化したじやないか神殺し!!」

変貌した司郎を見てクー・フリーンは笑う。

『臆してなんかいないよなクー・フリーン!!』

クー・フリーンに向けて司郎は火炎放射をした。

「ハッ、化け物退治こそ英雄の譽だ。叩きのめしてやるよ神殺し!!」

呪力を強め更に魔術で業火を防御してやり過ぎたクー・フリーンは宝剣の斬撃を司郎に放った。

『古き太陽を蹴落とし我は真なる太陽とならん!!』

輝けるその斬撃を司郎はそれを超える輝きで打ち消す。炎を生贄にしたケツアルコアトルの権能はアステカの5つの太陽の神話。神々が自分こそは太陽だと輝きそして他の神によつて蹴落とされた。この姿は正しく天に羽ばたき太陽となるケツアルコアトルそのものなのだろう。

「俺達の輝きを打ち消す気か!!」

故にその効果は太陽神の輝きを弱体化させる。何故ならケツアルコアトルはテスカトリポカ、トラロックなどなどの太陽神から太陽の座を奪い取ったのだから。

『ああそうさ!!そしてこの太陽の炎を喰らいやがれクー・フリーン!!』

司郎は火の矢をクー・フリーンに放つ。

「くっ……うおおおおつツツ!!」

先ほどの火災など比べ物のならない業火がクー・フリーンを襲う。

「ガアアアアツツ!! なっ……舐めるんじやねええ!!」

業火に燃えながらクー・フリーンはクルージーンを司郎に投擲する。

『うがっ!』

宝剣は命中し司郎の竜体に宝剣が突き刺さって地に落ちる。

「シロウ!!」

ウインが叫ぶ。だがウインの叫びは辺り一帯に広がるドスンと質量のある巨大な竜体が地面に落ちその身に相応しい程の重みが大地に伝わり衝撃音と土煙によつてかき消される。

「……あいてて……流石に宝剣はきついわ」

砂煙の中から司郎はウインの元へと歩いてくる。

「——シロウ、その怪我大丈夫!? 僕が作った傷薬使う!」

司郎の元へと駆け寄るウインだがよく見ると司郎の体には切り傷が見え隠れしていた。

「ああ、このぐらいなら大して問題ないさ。…それよりもうちよつと下がっていき



れ

「え？」

ウインが作ったのだろうドルイドの傷薬を塗りながら司郎はクー・フリーンの方へ視線を向ける。

「まさか……生きているっていうあの業火の中を……」

燃え盛る業火それはまるで全てを焼き尽くす核兵器のように燃え盛っていた。まともな術師はおろか神獣でさえこの業火を前になすすべもなく燃え死んでいるだろう。

『あ———つたく、死ぬかと思つたよ』

「ひっ!？」

燃え盛る業火の中から巨大な人狼のようなものが現れる。あの如何なるものであれ死に絶える業火を相手にして疲れたとあつけらかに言うその化け物に思わず悲鳴を上げるウイン。

「よう、中々の面構えじゃないかクー・フリーン。好みのバケメンだよ」

『なんだよそりゃ何処の言葉だよ。生憎とこの姿は趣味じゃないんだよ』

———曰くクー・フリーンは戦に興奮すると恐ろしい怪物に変貌するというらし

い。それは彼の血筋である怪物と評されたフォモール族たちの王であるバロール故なのだろうか。

「だがまあ、中々の火だったぜ神殺し。この姿にさせた上に耐えるために大分消耗させられたよ。少なくとも下劣な謀略をしないでここまで追い込まれたのは久しいな」

怪物の姿から人の姿に戻ったクー・フリーンは司郎に称賛の声をかける。

「——だからこそだ。神殺し……ああ、いや、確か高橋司郎だったか？ここまで来たら最後まで出し切ろうじゃねえか!!」

クー・フリーンが魔法陣を展開する。クー・フリーンの足元に照らされる四つの古代文字から莫大な呪力がクー・フリーンを包もうとしていた。

「友よ、神々よ、我は此処に宣言する。眼前にいる宿敵に全てをにかけて打ち倒さんと!!」  
 クー・フリーンの口から紡がれる誓約の言霊その意味は誰もが察していた。

「——まさに四<sup>ア</sup>枝<sup>ト</sup>の浅<sup>ゴ</sup>瀬<sup>ウ</sup>かあんた全てをこれまでの全てをかけるつもりだな!!」  
 「——応とも!逃げるなんて情けない事は考えないよな我が今世の好敵手高橋司郎!!」

クー・フリーンの手に握られる一本の槍その槍が何なのか司郎はウインは理解しているのだ。

「——是非もなし。リベンジだ!全身全霊でアンタを打ち抜いてやるよ!!」

司郎も負けてはいないカルナの鎧を召喚する。

「——天に輝く我が父の愛を知るがいい!!」

「否、司郎の口から紡がれる聖句によってまつろわぬカルナから篡奪した権能  
光輝く鎧は形を変える。  
プロミネンス・ロリカ

「我が師スカアハの絶技を見るがいい!!魔獣より造りしこの槍はあらゆる敵を貫き通す  
!!」

クー・フリーンもまた聖句を唱えながら魔槍を振りまわしながら眼前の宿敵を睨みつ  
ける。

「嗚呼、我が父よ。天より全てを照らすその不滅の輝きを持ってわが身を守護したその  
輝きを持って我は夷狄を討ち果たさん!!」

表すは弓と一体化した金色の矢。弦を指で掴み司郎は呪力を流し込みながら弦を引  
き絞る。

——現世とアストラル界の狭間の地に流れる風が二人の戦士の間流れる。  
両者決着をつけるがごとく全てを用いて眼前の好敵手を睨みつける。

「——この一撃手向けと知れ牙を剥けゲイ・ボルグ!!!」



## 56話

まつろわぬクー・フリーンとの激戦に勝利した僕たちは急いで二つの世界を繋ぐ遺跡の停止に向かった。

遺跡近くではスミスさんがまつろわぬケルヌノスと激闘をしていたからこそ僕たちは大急ぎで遺跡を停止させようと動いた。

クー・フリーンとの闘いで疲弊していたからかシロウはあまり乗り気じゃなかったけどもしあのワイルドハントが一体でも外に漏れたら大変な事になる。そう考えると気がなくてしようがなかった。

だからそのためなら僕はシロウに全てを捧げても……いや、捧げたいのは元からだっただのかもしれない。どちらにせよシロウは疲労したその体に鞭を打って遺跡から大地の精を龍脈に流出させて更に遺跡が簡単に大地の精を吸収しないように蓋をして少なくとも人間が手出しできる事はまず無いだろうと僕は思う。

「……これで問題は無いかな」

異界から脱出しウインは司郎達を白枝騎士団が運営しているホテルに案内して自分はその近くにあるセーブハウスでノートパソコンを打っていた。

「……はあ、やっちゃったな」

あの異界で司郎はウイン・マクガヴァンに権能の加護を与えた。一時的なものであれそれは裏を返せば高橋司郎はウイン・マクガヴァンを白枝騎士団を傘下に入れても良いと言う事でもある。

……それは良い白枝騎士団からすれば神殺しのカンピオーネに關係を持つことは悪い事ではない。王の傘下に入る事は王の庇護下を得られる事にもなるそうすれば他のアイルランドの魔術結社から一目を置かれるようになり尚且つアイルランドを始めとする欧州でのまつろわぬ神や他の神殺しの王との問題が起きたときに問題を解決してもらえるかもしれない。メリットは大きいだろう。

だが、逆にデメリットもまた大きい。傘下に入ると言う事は同じ傘下の組織と水面下で権力闘争をしてしまう事がある事だ。王の庇護をより大きく得たいがために他の魔術結社を追い落とすような事も起こるのかもしれない。

高橋司郎の傘下にある組織は彼の母国日本のを正史編纂委員会。北欧でその名を知れている黄昏の十字結社の二つ中々格式の高い組織だ。

高橋司郎は元々はフリーの魔術師……いや、魔術使いが正解なのかもしれない。どちらにせよ元は日本に住んでいるノラの術師なのだろう。そして神殺しになった瞬間彼の国は彼に接触した当たり前だ。神殺しの二つ名の一つは魔王まつろわぬ神々同様

手を間違えたらその力は自分達に向く。

「……何も無いと良いな」

冷めたホットミルクを飲みながらワインは呷く。各組織の主な活動拠点は日本、北歐、欧州それなりに距離もそれなりに離れて丁度良いと思っているがそれを果たして他の組織がどう思うのだろうか。

「——いらつしやい」

カランカランとドアにあるベルが客の少なく静かに伝統的なアイルランド音楽が流れるアイリッシュパブに新しい客がやって来たと言図を鳴らしたのだ。

「隣良いかい？」

バーに入つて来た客こと司郎はバーで酒を飲んでいた客ことアレクに話しかける。

「……」

「あ、良いのね。じゃあよいしょつと」

「いや、何故そうなる」

沈黙を了承と受け取り隣に座る司郎にアレクは文句を垂れる。

「空いているんだから別の席に座れば良いだろうが」

「別に良いだろう俺が何処に座ろうとあ、すみませんポテトフライ一つ後ジンジャーエール」

店員が司郎の注文を聞き受け奥に入っていく。

「何の用だ。こんな所までやって来て」

アイリッシュウイスキーを飲んでいた手を空にしてアレクは司郎に聞いた。だす。

「別に。あの場に居たのも大方情報が漏れたか俺達が来日するから何かあるって足を運んだって所だろうか？」

「……そうだ。おかげで面倒に巻き込まれた」

舌打ちをしながらアレクは残ったウイスキーを飲み干す。

「好奇心は猫をも殺す。確かこのことわざの語源はイギリスだっけ？」

「そうだ。Curiosity killed the cat 猫は九つの命を持っているとされ容易に死なない猫が容易に死ぬのが好奇心とされる過剰な好奇心は身を滅ぼすという戒めの言葉だが貴様に言われるのは癪で仕方ない」

「そりゃ悪いが俺からすればアンタ見事にババ掴まされたからなそりゃそうなるかしかな言えないよ」

出来上がったのかことりと置かれたフライドポテトとジンジャーエールに司郎は視線を移す。



「ふん。濟まないがサイダーとソーセージを」

これ以上話したくはないとアレクは次の注文をする。

「サイダー？何だよウイスキーがきつくてジューズに逃げたのか」

フライドポテトを食べながら司郎はアレクに問う。

「違う。サイダーの意味は」

アレクがサイダーの意味を言おうとすると。

「アイリッシュパブなどで置かれているサイダーとはりんごや洋梨を使って作るフルーティーだが度数の高い炭酸飲料だ。私も夏の夜にアイリッシュの酒場でよく飲んだものだ」

再びベルが鳴りスミスが入って来て司郎の隣に座る。

「貴様まで何しに来たんだ」

更に面倒な奴がやって来たとアレクは若干苛立っていた。

「大した事は無い新しいチャンピオンに改めて話してみようとしたただけだ。濟まないがエールとナチョスを頼む」

「ナチョス？」

「チーズを溶かしてかけたトルティーヤ・チップスだよ」

スミスの注文の内容が分からなかった司郎にスミスは答える。

「メキシコ料理かそういうのもあるのか」

「お前たちの国がクロケットを魔改造してコロツケにしたりハツシユドビーフをハヤシライスにしたりするだろう。他の国が交流を持ちそこで得た料理が他の国に輸入されこうしてその国のパブで出されるようなものだ」

出来上がったソーセージの皿にフォークを刺しながらアレクは言う。

「……所で話を変えるがM r. シロウ君はアステカ神話の神を倒しているようだね」  
そうスマスは問う。

「ああ、アンタからすれば思う事があるだろうがケツアルコアトルだ」

「……そうか。やはりそうだったか。戦っている最中私のテスカトリポカの権能が疼いていてねそれで聞きたかった」

「まあ、自分の権能と宿敵の権能を持っている奴が居たら反応するよな」

「そう言う事だ……来たようだね」

出来上がったのだろうスマスの近くにエールとナチヨスが入った皿が置かれる。

「その仮面で食べられるのかよ」

「奇遇だな俺もそう思った」

考える事は同じだったのか意見が合った二人はそのところどうよ？とスマスに問う。

「ふ、それぐらい動作も無い事よ」

そう言つてスミスはあつきりとナチヨスを口に入れエールを飲む。

「いやはや、とんだマジックだ。一体どんなトリックを使っているのやら」

「生憎と答えるつもりは無いな」

三人の神殺しの会話は少しずつ減つていきもう良いと思つたアレクは部屋を出ようとする時に司郎に一言言つた。

「そう言えば貴様はクー・フリーンを倒したが権能は手に入ったのか？」

「クツ、それこそ答える必要があるかよアレクサンドル・ガスコイン？」

「フン、そうかじゃあな」

パブのドアのベルが鳴りアイルランドの夜に消えていく英国のカンピオーネその後姿を見てスミスは言つた。

「私もおさらばさせてもらうよ。さらばだニツポンのチャンピオン出来る事なら我がステイツには余り関わりたくないでもらいたいものだ。君は穩便なチャンピオンなのだろうがだからこそいざつて時が恐ろしいからね」

そう言いスミスもまたアイルランドの夜に消えていった。

「……おう、次も味方であるように祈つておくよ……祈る神がいるかはさておきな」

二人のカンピオーネに別れを告げた司郎はあの時の事を思い出していた。

「——あーこれで終わりか。ま、しゃあねえよなお前は生き延びて俺は死ぬしょうがねえものだ」

「……冗談よせよこの傷簡単に治らねえんだが」

胴体を切り落とされ横たわるクー・フリーンを見ながら司郎は必死で大国主の権能が帯びた薬を使って扱られた場所を直している。

「そりやそうさ。なんとたつて俺の槍には回復殺しの効果がある……て言ってももうじき俺が死ぬから効力が無くなっていくさ」

そう言つてクー・フリーンは引き抜かれたゲイ・ボルグに古代文字を描いた。  
「……何のつもりだ」

生太刀を掴み攻撃態勢に移ろうとしている司郎に対してクー・フリーンは言った。

「大したことじゃないさコイツは俺を正面から打ち倒したテメエへの祝福つて奴さ」

消えゆくクー・フリーンの体が呪力となり魔槍に集まつていく。

「誓え神殺しコイツはくれてやる。ついでに俺からのゲツシユもくれてやる。……俺と会うまで絶対に死ぬな。戦つて負けても必ず生き返つてそいつをぶつ倒して強くなれ。」

何十年でも何百年経つても俺はまたこの現世に舞い戻つてお前に挑んでやる」

「……負けるなじやなくて死ぬなか」

「おう、死ななければ良いんだ。お前から神殺しは戦つていく定めだどの道戦いからは避けられないのだ悪くわないゲツシユだろう？」

恐らくこんな誓いなど貰わなくても高橋司郎はまつろわぬクー・フリーンの権能を手に入れることが出来るのだろう。

「——『良いぜ』乗つてやる。玉座でアンタを待つてやるよ」

魔槍を引き抜く司郎莫大な呪力が司郎の体を覆いそして染み込んでいく。

「おう。良い覚悟だ。それこそ俺を倒した男。じゃあな坊主：ああ、確か高橋司郎だったか？それと嬢ちやんウイン・マクガヴァンだったか達者でな俺の親父光にして百芸の神ルーグの輝きがあらんことを」

「——あばよランサー兄貴遠い未来でまた会おう」

アイルランドの夜に消えていく司郎をパブのドアのベルが見送つていった。

## 第六章 高橋司郎の国造り

## 57話

「——揃ったな」

日本のとある場所に老年な声が響く。

「さて、議題は件のこの日ノ本に生まれた6人目の神殺し高橋司郎についてだ」

歴史のあるだろう木造建築には何人もの人たちが集まり話し合っていた。

「昨年あの若造は海外で大きく暴れているようだ。バルカン半島のヴォバン侯爵を負かし。アイルランドではまつろわぬ神を倒したそうだ。それは良い事だ。海外の魔術師達も我々の事を高く評価するだろしな……しかしだ。あの若造はここ最近の行いは余りにも行き過ぎてている」

「——然りですな。虚鉄殿。かの王は我々に忠を示そうとせず地元のカギ共と戯れているばかり」

「それだけではありません。かの王は他国の魔術師の娘たちと共に行動している護国の任を放置して他国の色婦と戯れて度し難い」

「東京の四家は何をしているのでしょうか!?今すぐにあの若造を罰せないのでしょうか」

!!

「ああ、全く何故あのような民の魔術師に我々『公家』を越える力など持っているのでしょうか!!」

1人の老人の言葉が建物にいる者たちの口々に司郎への罵倒が飛び交う。

「もはや一行の余地もありません裁くべきです我らに従わぬ平民など裁きを下すべきなのです!!」

「然り然り！我ら呪術界の正史編纂委員会の力を持つて魔王討伐を成すのです!!」

もしこの場に後の正史編纂委員会の重役を務める男装の麗人が居たら笑いを堪えきれないだろう蛮行。徳川幕府が倒れて100年以上権威を持った『公家』の『家柄』だけは良い者達の熱意は大いに燃え上がっていた。

「——随分と盛り上がっておりますが皆さん。御身らは本気でかの神殺しに戦を挑もうとしておられるのか？」

燃え上がる熱意に一つの水が投げ込まれる。

「何を・・・ああ、石護殿でしたか。そうでしたなア。御身の孫娘は確かかの王を制するために差し出されたのでしたな」

視線が石護と呼ばれた老人に集中する。大勢に囲まれていてもなお石護は表情一つ

変えずに説いた。

「あの子を通して件の神殺しの力は私が良く理解しております。大規模の魔術でさえ弾きそんじよ其処らの刃物は殺しきれない頑強な肉体。嵐を呼び神の劔を振るいしまいには殺しても回生する生命力そんな豪傑を一体どのように倒すおつもりで？下手をこけば東京の四家に家ごと切られこの京都の守りを『武家』の連中に塗り替えられてしまつても不思議ではありませんぞ？」

石護の言葉は審理であり孫娘である早苗が作成している司郎に関しての報告書を正史編纂委員会が閲覧していない正確な情報を知りえている男の言葉は周りの者達を黙らせた。

「——無論倒せる方法が無ければこのような場を設けてなどおらぬわ」

虚鉄が一つの嚴重に保管された箱を見せつける。

「これはとある寺院で発見された呪物でな靈視によつて鬼の腕だと分かつたそしてこれを正しい手順で儀式を行えばこの腕の持ち主が顕現する事が発覚した」

「おお、つまりは!!」

「然り、神殺しの羅刹には鬼をまつろわぬ茨木童子を呼びかの王にぶつける算段よ」

「素晴らしい！我ら呼び出した鬼は正に日ノ本を正す護国の鬼と言う訳ですな」

「ならばこそ然るべき時にてかの王の端女達を誅しあの若造を討つ狼煙にしましょうぞ」



!!

再び盛り上がる人々に石護は頭を抱える。

「正気か貴殿ら!! まつろわぬ鬼など御すことなど出来やしない。ましてや関係の無い娘らに害をなそうと言うのか!!」

もつともな意見、しかし栄光という狂気に囚われた者たちの耳に石護の言葉など届く訳が無かった。

「・・・ああ、安心なされよ石護殿御身の孫娘は手は出さない御身もまた我らの同士なのですからね」

「ええ、残念でしょうが彼女にも新たな縁が訪れるでしょう・・・もつとも、あの若造が最初に倒した神は縁結びの神良縁が残っておればよいでしょうが」

「・・・・・・・・・・はあ、愚かすぎるぞ貴様らは」

疲れ果て布団に横になっている石護の視線には自身の子供そして、孫たちの写真があった。

「——と言う訳で亜衣18歳誕生日おめでとう!!」

パン! パパンン!! クラツカーの音が部屋中に鳴り響いた。

「ありがとう皆!!」

紙吹雪に包まれて楽しそうに笑う亜衣。10月のワイルドハント未遂事件から7ヶ月経ち現在5月の中頃にて司郎達は清水亜衣の18歳の誕生日を祝っていた。

「アイおめでとう」

「アリサちゃんありがとう!」

「アイちゃんお誕生日おめでとう」

「ウインちゃんもありがとう!」

7ヶ月という長い時間は良くも悪くも変化を起こす。司郎達の通う学校に新しくウインが転校してきた。当然ながら新しい美少女がやって来た事に匿名希望のS氏は騒ぎの火中になってしまったの言うまでも無い。もつとも、本人はそれはそれで笑っていたが。

「……亜衣俺からのプレゼントだ。受け取ってくれ」

皆からのプレゼントを受け取っている亜衣にS氏もとい司郎もまたプレゼントを渡した。

「へえーちよつと、開けても良い?」

「勿論ちゃんと喜んでもらえるような物を選んだんだぜ」

「ふーん……これは……」

プレゼントの箱を開き中身を確認する。

「……！あ、これは可愛い！良い趣味してるよ司郎！」

プレゼントの中身は薄く青空のような水色のヘヤリボンだ。

「ふふつ、ねえ司郎。私にコレ結んでよ」

リボンを司郎に渡し亜衣は後ろを向いた。

「やれよー司郎！」

「シエロ！殿方なら女性の頼みを断るのはナンセンスよ」

「あー分かっているよ!!ちよつと待て結び方調べるから」

周りに揉まれながらも司郎は携帯で調べながらシヨートヘア用のリボンの結び方を  
検索する。

「皆さん。料理が全部できましたよ」

大きな皿を持ちながら早苗が最後の料理をテーブルに運んだ。

「あ、見てみて早苗ちゃん司郎からのプレゼントだけどうかな？」

亜衣は後ろを振り向き水色のリボンで結んだシヨートボブを早苗に見せる。

「あら、似合いますよ亜衣さん司郎さんも良いプレゼントを用意しましたね」

「ああ、当たり前だろうコイツとは長い付き合い何だからな」

楽しそうに笑う一同それを見て司郎はこれからもこのような関係が続けていきたい  
なと心の中で思った。

## 58話

——その日はこれから起こる事態に相応しい。どんよりとした灰色の空模様だった。

「じゃあ、皆また明日ねー」

「おう、部活頑張れよ」

剣道部のために学校に残っている亜衣が手を振って帰ろうとする司郎達を見送っていた。

「・・・部活か。僕たちも余裕があれば参加したかったけど流石にね」

ふと部活に向かう亜衣を見ながらウインはちよつと残念がっていた。

「ウインなら色々な部活の助っ人としてやっていけるだろうさ。アリサとかも時折色々な部活で楽しくやっっているぞ」

笑いながら司郎はウインに相槌を打つ。

「・・・・・・・・」

「ふくん。アリサってどんな部活に参加しているの?」

「テニスとかバスケとか色々な所に参加させてもらっているわ」

「……………」

何気ない日常、何時雨が降るか分からない空の中4人は開いていない傘を持ちながら学校生活について話しながら家への帰路についていた。

「そう言えばサナエは部活動に入っているのかしら?」

そうウインが一人だけ会話に入らず前を見ていた早苗に声をかけた。

「ふえつ!?……………え!?……………あ……………な、何か言いましたか?」

何か考え事で頭が一杯だったのだろうか早苗はただ声をかけたただけなのにかんりのオーバーリアクションをしていた。

「……………どうしたんだよ早苗。何かあったのか?」

明らかに様子のおかしい早苗に司郎は優しく問いかける。

「えつと……………実は今日、長野の本家のお爺様が家に尋ねにくると朝いきなり言われまして」

「えつと確か長野は……………こことは結構離れているよね少なくとも一日そこらで着くかな?」

「最近の新幹線は400kmを三時間から二時間で到着させるらしいから大丈夫なんじゃないか?……………で、家を離れて一人暮らしの孫娘を心配して来たって訳じゃなくてまた別の何か理由があつて来たってことか?」

「……分かりません。色々な記録を送らないといけませんから通話などでのやり取りはありますけど、直接会うのは随分と久しぶりです」

「……そっか、まあ、何かあったら俺が何とかするよ。最悪暴力で何とかするよ」

「え……そ、それは止めて下さいね。司郎さんが本気で暴れたらこの国が滅んじやいますからね」

「同意あのドラゴン形態になったシロウが暴れたらかのヴォバン侯爵の逸話を再現してしまおうよ」

「……出来ればあのドラゴン形態は使わないでくださる。……流星にちよつとトラウマが……」

暴走し怪物になってしまった司郎を思いだして思いもよらない流れ弾を喰らってしまったアリサは頭を抱える。

「あ、僕此処で」

そう言いウインが駅へと向かう道に足を進めようとする。ウインは自分の猟犬達のためにペット許可のマンションで住んでいるために司郎達が住むような区画とは少し距離があるため電車通学をしていた。

「おう、またな」

駅へと歩いていくウインに別れの声をかけて司郎達は再び帰路へと歩みを進める。

「……それじゃあ、私も此処でまた明日ねシエロ、サナエ」

拠点にしているマンシヨンの近くについたアリサもまた自分の家に戻るために二人とは別の方向へ足を向ける。

「……私も此処で」

そして、早苗もまた住んでいるマンシヨンの方向へ足を進めようとする。

「早苗」

2、3歩歩いた早苗の背中に司郎が声をかける。

「何ですか司郎さん？」

司郎に声をかけられて振り向く早苗。振り向いた為かお互いの目は合ってしまった。

「……何かあったら俺に相談してくれよ何があっても俺は早苗の味方だからよ」

「……どうしたんですか司郎さん。また変な事を」

そう言う早苗だがその表情は何処かぎこちなかった。

「……悪い。どうしてか胸騒ぎがしてな」

「……奇遇……ですね……私です……でもそう言うてくださるのは嬉し

いですよ……では司郎さんまた明日」

「ああ、また明日」

そう言うて二人は自分の帰路へと歩みを進めていた。



——そして、時計の針は半分へと動き灰色の空は雨雲となり帰路につく者達の視界には真つ暗で雨が降る歩きずらい帰路になるだろう。

——ピンポーン！インターホンのベルが早苗の耳に届く。

「……来ましたか」

準備を整えていた早苗は落ち着いて玄関へと足を進めた。

「……御久しゅうございます。お爺様、香取さん」

玄関を開けそこにいた小柄な老人と付き人を招き入れる。

「……うむ、こうして面と向かつて話すのは何年振りだったかね。いやはや、子供の成長は不思議なものだ。あんなに小さな子が今やここまで立派になるとはあの子も良い婿をつかまえたものだ」

「ありがとうございます。……えつと宿とかは……」

「……ああ、安心せいちゃんとホテルは取つてある……最も、泊る余裕があれば良いがの」

「えつと、……お爺様？」

老人こと石護の言葉に困惑する早苗に石護は話を続ける。

「早苗。どう取り作っても仕方ないからハッキリと言おう——京都の公家が反乱を起こした目的はあの神殺し高橋司郎とその取り巻きじゃ」

「——え？」

「ふんふん♪はいご飯だよ」

「ワンワン!!」

「あはは、今日は散歩出来なかったけど明日は散歩したいよね……ようし……良いよ食べて」

。パクパクとドッグフード食べる猟犬達を見て楽しそうに笑うウイン。

「……調味料が足りないわね。買ってくるわ」

「気を付けてね」

。そうしてマンションから離れていくアリサ。

「わー!!やばいやばい!!濡れちゃう!」

。部活が終わり大雨の中傘をさしながら大急ぎで帰ろうと走る亜衣。

——ありふれた日常、何時もの日々それは何処にでもあるありふれた夜。

「……あれ？」

走る亜衣の前に誰かが立ちふさがっている人がいた。  
「あ、……あの……すみませんけど退いてください」

「——」  
スーパリーの帰りに、ふと空模様を見るために窓を開けるアリサにウイン。……そして二人は気づいた。

「え、ちよつと何!? 武器を持って何を——」  
そして、亜衣もまた気づいた。

——自分達に敵意を持つ視線が向けられている事に。

「鷺、ガガイモ、常世の渡り船」

場所も状況も何もかも違うが三人は襲撃され同じ『禁厭』を受けこの世界から消え去った。

## 59話

「——何これ？周りが変つていく？」

周囲の地形が變つていくありふれた通学路の周りにこの辺りでは見ないような手入れがされていない場所であれば生えていないような植物が生えてきた。

「ちよつと！貴方を考えているの！？こんな大通りで魔術なんて」

亜衣の足は突然の出来事に後ろに下がり肩にかけられていた竹刀袋に力が入る。

「気にせんで良いで、この術式な人払い所かこの場所は隔離されるんやどれだけ暴れようとお外にはなくんの影響が起こらないんやで」

正体不明の閉じこめる結界の禁厭を使った術師は状況に飲み込めない亜衣に関西混じりの口調で簡単にこの状況を説明し始める。

「本来ならこんな大規模の術を使わなくても良かったけど。自分らあの神殺しに施してもらっているんやろ？まともに神具や神様の加護みたいなものと相手をするは骨が折れるんでな封じるための効力もあるつてことや」

「うっ……嘘……」

またしても大国主の禁厭による加護を封じられる事に驚愕する亜衣。

「——あり得ない。あり得ませんわ!!あれは神の権能その一かけら。神祖ならいざ知らずここまで強固で封印。いえ、供給を断つほどの効果があるなんて」

同じように大国主の禁厭による加護を封じる結界に閉じ込められたアリサもまたこの御業に驚愕する。

「確かにな拙僧もまた驚いた。このような大規模な秘術などそうそう無い。故に我らもまたかの神殺しと敵対するにあたり用意は十全にしたつもりだ」

アリサの元に現れた刺客は大振りな薙刀を持ちながら渡された術式について感想を述べていた。

「・・・それだけじゃない。この世界は世界とアストラル界を繋ぐ大規模な結界術。人間技じゃない——」

霊視による信託が来たのか怪訝な顔を見せながらもアリサは広がりきる直前に呼び出した槍と斧を刺客の前に構え戦闘準備を整えた。

『——へえ、やるじゃないか何で分かったのさ』

一方ウインがいるマンションにもまた大国主の禁厭による加護を封じる結界・・・否

異界構築と呼ぶほどの結界内に閉じ込められたこの異界でウインに放たれた刺客は式神を通してアリサとは異なる経験による推理でこの結界を看破したウインを褒めたたえる。

「——ついこの間にも似たような状況に遭遇したんだよ。……だからこそ聞きたい。どうやってこんなあり得ない術を作り上げたんだ!!」

二匹の猟犬を引き連れて胸元にはヤドリギの枝が沢山刺さったポーチとオークの杖を握ったウインは式神の向こうにいる刺客に問いた。

『さあ、僕らは爺様達から渡されただけさ。……さあ、始めようか狩人狩りだ！人を殺すのは久しぶりなんだ楽しんでませてくれよ!!』

その言葉が聞こえた瞬間にウインの目の前に一本の矢が飛んできた。

「正気!!……僕たちを襲うどころか殺したらシロウだけじゃない僕たちの組織にも敵に回す事になるんだよ!!国際問題だ!!日本の立場がタダでは済まないよ!!」

またもに当たれば肉が抉れるほどの鋭利な鍔を見て明確な殺意の籠った一撃と判断し猶更困惑するウイン。ウイン達は言わば他国の大企業が他の国に送った役人。行動次第では組織にとつて引いてはその国、民族の立場が危うくなるものだ。

『……知らないよ。老人たちからすれば僕たちの意に従わない化け物と化け物に尻尾をふる犬なんかなんて必要ないってことさ』

ワインに襲撃している刺客は再び弓に新しく矢をつがえワインに向けて発射した。

「——ッ！」

再び迫る強矢をワインは杖で弾くが先ほどとは異なりその速度、一撃は先の矢とは比べるものでは無く弾いたワインの手は痺れた。

（——本気だ。本気で僕を）

明確に殺意を向けている刺客に冷や汗を流しながら部屋の中に逃げ込み位置を把握しにくいようにカーテンを閉めて部屋の奥へと避難する。

（・・・それにしてもなんて術式だ。僕が住んでいるマンションは3階建ての低層マンション、高さ12メートルだぞ。その上相手が狙撃した場所はこのマンションとそんな変わらない高さ。そう考えるとこの術式の効果範囲はざっと100〜200m以上学校一つを包めるほどの効果範囲の上この場所をアストラル界と変わらないレベルの異界化させて僕たちがシロウから受けている権能の加護を封じるなんてとてもじゃないが人間技じゃない！明らかに神祖クラスの何者か作った術だ）

異界となつた自室を腰の低い姿勢で慎重に足を進めるワインと猟犬達。

「部屋の中に隠れちゃつたな。・・・まあ、良いやどうせ炙り出せば良いし」

姿が見える窓際から部屋の奥へと移動したワインに大弓を担いだ刺客は舌打ちを打ちながら大弓をまるで弦楽器を引くかのように弾きながら何かを口ずさむ。

「みなかたの、かみのみちから、さずかれば……」

紡がれるのは司郎が倒した大国主と武御雷にとつて因縁のある神タケミナカタの祝詞、元寇を二度も撃退したとされる『神風』はこの神の加護であるとして有名であるがかの神は戦と狩猟の神格も持ち合わせるアテナ等と近い『蛇』の神なのだ。

「かむながら、たまちはえませ、いやさかましませ……いざ夷敵を打ち抜かん!!」  
祝詞を唱え終えその効力を宿らせた矢を放つ。

——ツ!?

手持ちの手札では長距離で狙撃している敵を倒す事は出来ないからこそ先ずは近づかないといけない。そう考えたウインの目の先にはウインを射殺せんと矢が飛翔して来た。

「ツ!!」

先ほどの弾いて手が痺れる程の一撃とは異なりこの矢は追尾性を重視したいのかウインがはたき落してもウインの手にはそこまでの反動は無かった。

「……アイネごめんけど先頭任せていい?」

「……わん」

刺客の指を捌きながら玄関前に着いたウインは二匹の猟犬達に顔を合わせてそつと扉を開けてアイネに先行させる。



問題無いと判断したウインは玄関から階段へと走り出そうとしたが――。

「はい、お終い」

そんなありきたりな考えは刺客には見抜かれており初手の矢を射た後にウインが住む部屋の玄関を狙撃できる場所へと先回りされており刺客の目の先には胸を一本の矢で射抜かれて血を流していたウインの姿があつた。

「――何を言っているんですかお爺様。一体何の理由があつて司郎さんを害そうとするなんて、それだけじゃありません一般人だつた亜衣や他の魔術結社の関係者であるアリスさんやウインさんを害そうとするなんて正気じゃありません！こんな事表沙汰になればタダでは済みません！各国の魔術結社の非難もシャレじゃないですし……こんな事何で四家が動いていないんですか!？」

石護に詰め寄る早苗、その剣幕は大人しい淑女のそれでは無い。むしろ、好きな人をして共に高橋司郎の寵愛を受け神殺しと神々の戦場に挑む仲間を殺害しようとしていると知らされて普段の調子を保てる人間は少ないだろう。

「……早苗、随分と好いているんだな。儂を相手にそのような顔を見せるとはな」

怒れる孫娘相手であつても日本魔術会の政治に生きていた老人は落ち着いた様子、……むしろ自分を相手に感情を露わにさせた孫娘の変化に嬉しさを覚えていた。

「お爺様!!」

何も言わない祖父に更に詰め寄る早苗。それに対して石護は相も変わらず澄ました顔で早苗を見ていた。

「……濟まぬのお前からすれば怒り心頭だろう。……だが、儂でさえ所詮『公家』の一家に過ぎん儂よりも影響力があり求心力のある平家の人間達相手ではどうしようもないんだ」

「しかし、それはあくまでも京都、近畿地方であれば影響力は絶大でしょうが中枢である東京、四家の影響力に比べれば比べられるものではありません。……なのになぜ？」

そう、『公家』は正史編纂委員会に置いて重要な立場を持つ家系は多いがそれでも一方の重役の家と組織の上層部である四家の影響力の方が強く尚且つ影響力を持ち始めた個人を討つなどと集まる事などあり得ないだろうと予想出来るだろう。

「……それなのだが、何故か四家の連中はだんまりを決めている。草の者を通して調べてもまるで何者かに介入するなど釘を刺されているのではないかと思うほどにだ」

「——何ですかそれ、まるで四家には司郎さんと神殺しと戦争になつても問題無い理由があるって言うんですか……」

組織はもう役に立たない。そう判断した早苗は大急ぎで司郎に連絡を取らなければと電話のある部屋に走りこんだ。

「……乙女は恋を知って女になるかの……果たして我らはどうなるか……いや、それは既に決まっておるか結末がどうなるかだけだ」

一皮むけた孫娘の後ろ姿を見届け石護は雨降る外に視線を向けてそう言った。